死にたがりな男の娘が転生

ディアボロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
死にたがりな男の娘が転生

【Ｎコード】
Ｎ０８１４Ｘ

【作者名】
ディアボロ

【あらすじ】
何か首吊って死んだら、いきなり神だとか抜かす頭が可愛そうなおっさんが居た。うまい棒買ってやるから頑張れコノヤロー。
この小説は、死にたがりな男の娘がチートを駆使して、事件や儀式をこなしていくと言うお話です。
どうやらみなさん、キャラを何処かに置き去りにしてしまった模様……かわいそうに……。

第一話　死にたがり、神に会う前編（前書き）

……あぁ、すいません

どうやら私は、これを無意識のうちに書いてしまっていたようです

……

どうか、許してほしい……

最近、忙しい毎日からやっと抜け出せたのがうれしくて、つい箍が外れてしまったのです……

反省も後悔もしています……

……首を吊ろう……

第一話　死にたがり、神に会う前編

「……あれ、ここ何処……」

俺は目を覚ますと、何か凄い白くて広い場所に来てしまっていた。
確か俺って、首吊って死んだはずだよね？

「おぉ、目が覚めたかの？」

「……おっさん誰やねん……」

「ほぉ！？驚かなかった……だと……」

「いや、だからおっさん誰やねんて……何で俺、見ず知らずのおっさんの目の前で寝てんねんって、起こせや、見てたなら起こせや。もしくは毛布持ってこいや、後ついでに枕も」

「何でいきなり関西弁になったかはどうでも良い……。お主は何故いきなり目が覚めてこんな所に居るのか、疑問に思ってるじゃろ？」

「おぉ～、すげぇ。ここ何も置いてねぇや。おっさん、こんな所で一人で住んでるとか悲しいな。なんかのキノコと百円やるから泣く

なコノヤロー」

「お願いだからわしに話させて!?わしにターンをおくれ!」

うるさいおっさんだな～、全く。やっと自殺が上手く行ったかと思えば、これだよ……あぁ、めんどくさいね……。

「なぁなぁおっさん、俺死んだなのに何でこんな所に居んの?」

「今まさにその事を説明しようとしてたんじゃがの!!」

「はいはい～、お口にチャックしときますよ」

「ふぅ、やっとこれで落ち着いて話せる。して、何故自殺して死んだ筈のお主がこんな所に居るのかと言うとじゃの。お主は異端なんじゃ、だからわしが殺した」

……ちょっと待ってくれ……わしが殺した?俺は自分で首を吊って死んだ筈だぞ?
なのに、こいつは、さも自分が殺したように言いやがった……。

「俺が異端?何処がさ?俺は至って普通、至極普通の高校生だぞ?」

「お主は……生前凄い死にたがりじゃったな？」

「……まぁ、そうだな」

「まさにそれじゃよ。お主は小さいころから自分の体を傷つける事に何も感じなかった。じゃからお主は毎日の様に自殺をしては失敗するの繰り返しじゃったはず」

「……何だこのおっさん……気持ち悪い……ストーカーおっさんだ……警察呼ばなきゃ……」

「いや、わしどこもおかしくないから！！これまでの流れで大体察せないかの！？わしは神じゃ！！」

「……駄目だこのおっさん……今度は自分の事を神とか抜かし始めたぞ……精神科医紹介してやるから落ちぶれるなコノヤロー」

「いい加減にせぇぇぇぇぇぇぇぇい！！」

「……これが現代では見られない雷おやじか……可愛そうに、もはや現代遅れだから、こうやって誰かを誘拐してまで叱りたかったん

だね……。素直に怒られてやるから元気出せコノヤロー」

「お願いだから話をさせてください！（土下座」

おぉ、雷おやじかと思えば、今度はいきなり土下座し始めたぞ……プライド無いんか……こいつ……。

「分かった分かった、聞いてやるから土下座するな。ほら、今度うまい棒奢ってやるから頑張れコノヤロー」

「あぁ、やっと話聞いてくれる気になったか……」

～割愛～

「ふぅむ、してっと……俺には神のご加護がついていて、自殺しても死なない体質だった……だがその死にたがりはあまりにも異端、異質な物だから。おっさんがその神のパゥワー（笑）で打ち砕いて、俺が自殺させて成功させるようにわざわざ死亡率も上げた……と……」

「うむ、やっと話し終えたわい。ふぅ、すっきりすっきり……ちと聞きづてならないものがあったがの……」

「……あい分かった……おっさん、アンタ疲れてんだよ。今度五円チョコ奢ってやるから気をしっかりしろコノヤロー」

「お主は……はぁ、もう良いわい……もうめんどくさくなったから、後は大まかな事を言うぞ」

「はいよー」

「お主にはこれから転生してもらおうと思う」

「転生？何で？」

「お主には生前、神のご加護がついていた。人間が生まれつき神のご加護を受けれるのは、ごく稀なのじゃ。じゃから神達は、その人間の一生を見て、その人間の死後、神としてこちらに引き込むか。それとも悪と定めて、地獄に送るかを決めるんじゃ」

「へぇ、厨二乙」

「じゃがお主は神のご加護に加え、悪魔のご加護も受けてる様じゃ」

「何それ怖い」

「じゃからお主は死にたがりじゃし、幾ら死のうとしても、神のご加護で守られてるから死なない……じゃから、お主には転生してもらうのじゃ」

「……何の為に？」

「そこで悪魔のご加護を払う儀式を行う……じゃから、お主には力を授ける」

「……おぉ、おっさん……何か神々しいな……拝んでやるから喜べコノヤロー」

すっげぇ、おっさんのバックが光ってるよ。
これが神々しいオーラ（笑）って奴か……すっぐぇな……。

「じゃが困ったことに……のぅ。その儀式が終わったとしても……お主の死にたがりは無くならんかもしれん……」

「儀式の意味ねーｗｗｗｗつか何で？」

「もはやお主のそれは癖みたいなものじゃ。じゃからお主はきっと、息をする様に死のとするじゃろう……」

「マジで？うわーい、また自殺できる～」

「喜ぶな！！さて、転生させる前に力を授ける。何でも良いぞ、バンバン言ってくれ」

「このままで転生させて」

「……お主人の話聞いてた？」

「うん」

「力授けないと、儀式出来ないんじゃよ？」

「それで死ねるかもしれないから、そのままで良いかなと」

「……何なのこいつ（泣）」

後編へ続く

第一話　死にたがり、神に会う前編（後書き）

何か書いてる内に意味分からんくなったお

一応前後編に分けてみた……長くなりそうだったから（笑）

今回はもしかしたら短め更新がデフォになっかも……

まぁ、頑張るお

第一話　死にたがり、神に会う後編

「駄目なものは駄目なのじゃ！お主に力を与えんと、わしがお主をここまで連れてきた意味がないじゃろ！？」

「え～、マジかよ～」

めんどくさ……まぁ、何かこいついい感じに頭逝かれてるし、ちょっと話合わせときゃ良いか。

「じゃから頭は正常じゃ！さっきからお主は心の中で毒を吐きすぎじゃ！いい加減スルーにも限界があるわい！」

「なっ……俺の心を読んだ……だと……まさか、本当に神様……なのか？」

すげぇ……読唇術使える奴初めて見た……すげぇ……神様マジすげぇ……感動的だー。
これが神様かーすげぇ……マジパネェ……すげぇ……。

「どうじゃ！すげぇじゃろ！だからさっさと何の力が欲しいか言ってくれ！！」

「じゃあ、魔法。魔法が良い、空飛びたい。綺麗まっさらな空を飛びたい！」

「変なところで純粋じゃの……まぁ、それはお主が良く世界では必要な物なので、意味がない。ほれ、次行ってみよー」

「じゃあ斬魄刀！斬魄刀が欲しい！氷輪丸とか使いたい！」

「斬魄刀か～、じゃが鏡花水月は無しじゃぞ？後虚化も」

「うっしゃ！」

あれ？何その言い方、鏡花水月は無し？……っつうことは……だ……。

「では、鏡花水月以外の斬魄刀を使えるようにしとこう。して、次は？」

やっぱかぁぁぁぁぁ！
すげぇ、神様マジ太っ腹や……じゃあ……死神とかになれんのかな？かな？

「んじゃ次は、アンク欲しい！アンク！」

「アンク？あのオーズに出てきたメダルの怪物かの？」

「おっさん！アンク舐めんな！あいつカッケェんだぞ！マジカッケェんだぞ！！」

アンク〜、もう最終回で消えたのマジ悲しかった……アンクマジカッコエェ！

アンクをパートナーにしたい！

「だから！アンクも強くな！」

「良し分かった。さぁ、どんどん来い！まだ行けるぞ！」

「どんだけよ！？神様……アンタマジ神様だ……」

それからしばらく……俺は神様に願いを言いまくった……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ふむ、これで全部か？」

「あぁ、これで全部だ！」

「……この、容姿が……めちゃんこ可愛い男の娘ってのが気になるのじゃが……しかも身長低くって言うのがの……」

「いや、生前も結構童顔だったしさ、どうせなら男の娘になってみようかなと……気にするな」

いやぁ、でもまさか……こんな事もあるもんだなー。
死んだと思ったら神様が居て、転生しろって言われて。挙句の果てにはチート能力貰って……。
何これ幸せ……。

「あ、所でさ。俺、何処の世界に転生するの？」

「あぁ、まだ言ってなかったな。場所は『リリカルなのは』の世界じゃ」

「……リリカル……なのは……だと？」

「そうじゃが、どうした？」

「……いや、何でもない……」

う～む……これはどうしたものかな……、リリカルなのはか……。

「なぁ、原作に介入しないといけないって事ある？」

「いや、特に無いの～。これはお主の儀式を行う為に転生させ、それからの生活を見るのが前提の事じゃ。じゃから、儀式を無事行いさえすれば、オーケーじゃ」

「……じゃあ、原作をぶち壊しても？」

「むろん、許される」

「……分かった……んじゃ、デバイスくれや」

「そう来ると思っとったわい。それ、受け取れ！」

そう言って、神様は俺にデバイスを投げ渡す……。
俺はそれをキャッチして、その手の中にあるデバイスを見る……。

「……何故二つだ？」

「一つはお主のデバイス、もう一つは、お主のパートナーにでも上げるんじゃな」

「……アンクの分か……ありがとう！神様！」

「よし！ここまで来れば最後の仕上げじゃ！！お主に魔力を捧げよう！」

まだあったんかい……そかー、魔力か……何か……体が熱いんですけど……。
熱い熱い！死ぬ！体の内部が熱いって！熱い！

「いててて！」

「我慢せい、今リンカーコアを作ってる最中じゃ……もう数秒で出来る……よし、できたぞ」

「うぅ～、痛い～……想像を絶する痛みだった～……」

「うむ、これでお主に授ける物は授けた……では、もう送るぞ？」

そう言うや否や……いきなり俺の足元が開き、俺は真っ逆さまに落ちていく……。

「うわぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「達者でな！お主の事は見守らせてもらうぞ！！」

そして……穴は塞がり……また、神様一人だけの空間となる……。

第一話　死にたがり、神に会う後編（後書き）

……gdgdや……まぁ、頑張るよ

最初はオリジナルかな？

そこでアンクも出すし、どんな能力をもらったかはその都度その都度出そうかと

では、また次回！

第二話　始まりと欲望の鳥とキング・クリムゾン！！（前書き）

はい、アンク登場

まぁ、パートナーにしたのは……この男の娘の主人公にデレッデレ！

親よりも親ばかになったアンク書いてみてーとか思って出しました

まぁ、キャラ崩壊しちまうけど、アンク好きは寄ってらっしゃいな

では、始まります

第二話　始まりと欲望の鳥とキング・クリムゾン！！

～？？？～

あれ？ここは……何処だ？
暗い……暗い、闇の中……でも……怖くは無い……とても安心する……。
まるで、母親に抱きあげられて、抱きしめられているかのように……安心する……。

だが、その暖かさが、すぐになくなった……。

「もう少しよ！頑張って！！」

「んぅ～ん！！はぁはぁ……！」

「頑張れ！もう少しだ！！もう少しで生まれるぞ！」

何かが聞こえる……誰か新しい生が、目の前で生まれ出時みたいに……切羽詰まっていた……。
そして、この体が動く間隔……。

「んぅ～ん！！」

「頑張れ！頑張るんだ！！」

「んぅ～ん！あぁぁぁ！！」

「……オギャア！オギャア！（うぉっ、眩しっ！）」

俺はいきなりの光にびっくりし、目を閉じ……って、あれ？何も見えない……。
既に目を閉じている状態なのか？

「産まれたぞ！とうとう産まれた！」

「えぇ！貴方！」

「オギャアオギャア！（俺、まさか最初から！？リスタート！？）」

とにかく……俺は産まれてしまったらしい……。

～それから三年後～

……ふぅ、まさか、あんな羞恥プレイがあったとわな……。
あ、どうも……どうやらキンクリしてしまったようだね……ここはすでに三年後の世界……。
早いね……この三年間はとても恥ずかしかったっと言えよう。

あぁ、言い忘れていたね、俺の名は……あぁ、転生前の名は忘れてしまったんでね、何て言ったら良いか……そう、今の名前は……アニス・クロイツベル……そう、俺の名前は厨二になってしまったんだ……。

「アニス～！どこに居るの～！」

「あっ、お母さん！こっちやこっち！！」

前方に、俺を捜してるお母さんを呼ぶ。
お母さんの名前は、アリス・クロイツベル……うむ……何処かの某幻想郷のアリスさんみたいな人だ……。

「もう、勝手に居なくなっちゃ駄目っていつも言ってるでしょ？」

「えへへ、ごめんなさーい。でもでも！アンクが居るからだいじょーぶ！ね！アンク！」

「あぁ、そうだな。大丈夫だ、俺がしっかり見ていた」

「アンク！もぅ、しっかり見てる位なら、ちゃんと注意しなくちゃ駄目よ！」

「ふん……」

アンク……そう、彼はアンク……下の名は無い……。
彼がどう言う経緯で今ここに居るのかって？……何かね、この人、俺と同じ神様に会って、使命を受けたらしいんだ。
俺のパートナーになれって言う……まぁ、その対価に神様がアンクに人間の体とコアを全部（タカ・コア三枚クジャク・コア三枚コンドル・コア三枚）をくれてやったらしい……。
神様、アンクも強くって事、覚えていたんだね！

で、どうやってここに来たか？だよね？
アンクは……そうだね……神様に送られてから、何かこの家で働きたいと言ったらしい……。
何でも俺の家は金持ちらしく……それで、俺が産まれたから専属の執事兼ボディーガードを欲していたらしい。
それを利用して、アンクは俺の専属の執事兼ボディーガード！

最初は乗り気じゃなかったらしい……いきなり神とやらに会って、俺のパートナーになれとか言われて……まぁ、アンクのキャラじゃないしね。

でも、そこは神様……どうやらアンクに五感の他に、情も入れていくれたらしい……。

だから、俺の執事をしている内に、情が移り、今では仲良しこよし！ってわけ。

因みに、俺が転生者だって事はアンクは知ってる。

「それより、ここで何していたの？」

「アンクと遊んでた！」

「そう……もぅ、アニスはアンクにすごく懐いてるわねぇ。羨ましいわぁ～」

「当然だ、産まれてからすぐに一緒で、付っきりだったんだ。それで懐かないんだったら俺が困る」

「あらあら、アンクも言うようになったわね～。それじゃ、おやつにしましょうか！」

「やった～！！」

「今日はクッキーを焼いてみたの！」

「……何……だと……」

「……おい……逃げるぞアニス」

アンクの声で我に返り、俺はアンクと共に逃げる。
ヤバい！やばいヤバいヤバいヤバいヤバイ！母さんの料理は駄目なんだ！
核以上に危険なんだ！やばいやばい！まだ死にたくなぁぁぁぁい！！

「あ、何で逃げるのよっ！？アンクも！」

……だって……お母さんの料理は、洒落にならない位……まずいん

ですもん……ねぇ。
一回、神様に再び顔見せに飛んで行ったんだ……魂が……。

こんなのが、今の俺の日常！

あ、あともう一つ……。

死にたがりは何とか自分で抑えれてますぜ……まぁ、アンクも居るから、そうそう首吊ろうとか、手首切ろうとか考えなくても良いんだけど。

時々、無意識に何だけど……剣とかで訓練してる時に、自分に切っ先を向けちゃう時があるんだ……。
一回は未遂、二回目はアンクが何とか防いでくれた。三回目は少し首に先が刺さった程度……。

やっぱあれだね、死がこびり付いて取れないや……。

お父さんやお母さんは、何かの病気なんじゃないかって思って、何回も検査をしてもらった。
でも結果は正常……でも、こんな俺でも気持ち悪がらずに接してくれてるから、頑張って抑えている。

「アニス～、今日も可愛いな～」

「えへへ～」

今の声の正体はお父さん……名は、クラウド・クロイツベル。
富豪息子だったらしく、家業を継いで、今に至るらしい……。
そして、親ばかだ……気持ち悪い位に親ばかだ……でも、嫌いじゃないわ！！

「今日もご苦労だったね、アンク君」

「アニスの専属の執事だからな、これ位は当たり前だ」

まぁ、やっぱアンク。雇い主に敬意を払おうとしないし、敬語も一切使わない。
だがお父さんはそこが気に入った！とかで、アンクを雇うことにしたらしい……。

「さて、皆もそろったし、夕飯にしましょうか！」

「じゃあ、俺はそこらの周囲を見ている」

そう言って、つかつかと移動し、他のメイドや執事達の所で立っている。
……こうして見ると、やっぱアンクって執事の中でかなり浮いてるな～。

「さ、頂きましょうか」

「「「この世の全ての食材に感謝を込めて、いただきます」」」

何故トリコ風の挨拶なのかって？
……まぁ、俺もそこには突っ込んだよ……何でっ？ってな……まぁ、気にしないことにしたよ……。

第二話　始まりと欲望の鳥とキング・クリムゾン！！（後書き）

あぁ、男の娘可愛い……

アニスは猫を被ってます

本当だったら親にも

「～～～～～やるから元気出せコノヤロー」とか

「……頭が弱いんだね……頑張れコノヤロー」

とか、毒吐きます

さて、ガンバろ

読んでくださりありがとうございます

第三話　どうやらこの世界では、斬魄刀は……（前書き）

はい、斬魄刀の回です

ぶっちゃけ、無理やり感が否めません

まぁ、そこは目をつぶってくだされば な～と

それでは、始まります

第三話　どうやらこの世界では、斬魄刀は……

アニスサイド

やぁ、アニスだよ。
そうそうキングクリムゾンは発動しないから安心したまえ。
それにしても、ホントこれってチートボディーだなーって思うよ。

術式やら、勉強やら、剣術やら、体術やら、魔法やら……全部すぐに覚えられる。
そして、この家では代々、ベルカ式やミッド式は使わないらしい。
もちろん使えるが、俺達の血筋が使える魔法がある……。

それが、クロイツ式って奴らしい……まぁ、あれだね、何の捻りもないね……。
それで、そのクロイツ式何だけど……何の事のない、斬魄刀を媒介にして魔法を放ったりするんだ。

一度お父さんに見せてもらったけど……凄かった……。

「喰らえ！牙王炎！」

とか言って、いきなり始解しちゃったからもうびっくり！
まさか原作設定に無理やり入れてくるとか……マジありえねぇよ神様……。

しかも、お父さんの斬魄刀は、相手を喰らいより鋭く、より強く、より軽く、より重くなるらしい……そして、火を纏って相手を攻撃したり、そのまま斬撃にして出せたりする……。

……あんたの家業一体何なんだ……。

そして、今日俺は……その契約をしてる真っ最中です！

「良いかアニス、自分が使える斬魄刀を呼び起こすんだ……」

「でもお父さん、俺まだ子供だよ？それに、何でこんな早い内からなの？」

「それはね、アニス。斬魄刀は扱いが難しいんだ……。私も、クロイツベル家の中では優秀だった方だ……私がアニス位の時には、既に魔法も全て一通り終わらせ、勉学やら何やらも学び終えた……そんな私でも、始解に至るまで五年。何も言わないで始解が出来るようになったのが三年。ちゃんと斬魄刀を屈服させるので六年年。そして、最後の秘術……卍解を会得できたのが……更にその十年後何だ……」

マジかよ……俺と同じ位の年から始めて……大体27歳位で卍解に至ったとか……。

まぁ、死神と人間の時間を合わせたり較べたりしたらあれか。それでも、凄い方なのだとか……。

「アニス、お前は私よりも強くなる。それに、私より才能豊かだ……だから、私はお前に早く契約して、斬魄刀を使いこなしてもらいたい……」

「……分かったよお父さん！俺、頑張る！！」

「うん！その意気だ！さぁ、その魔方陣に入るんだ」

俺はお父さんが書いたお手製の魔方陣の中に座り込む。

「さてアニス、さっき私が教えたとおりに唱えるんだ。分かったかい？」

「うん！分かった！」

俺はお父さんに笑顔を見せて、魔力を集中する……。

「……我の剣となる者よ、この問いに答え姿を現せ。導の道は既にある、我が身に集え！契約、執行！！」

その瞬間、魔方陣が光だし、俺はその光に包まれる……。

何だろう……俺の体に何かが入ってくる感覚は……暖かい……すっげぇ心地いいわ……。

そしてしばらくするとその光は収まり、俺を浮かせていた風は無くなった……。

「どうやら成功したようだね。さぁ、斬魄刀を出して、私に見せてくれないか？」

「分かった！」

俺は手に魔力を込めて、斬魄刀を取り出す……。
握られていたのは、何の変哲もない日本刀……まぁ、まだ始解できてないし、当たり前か。

「……これは……何と……凄いのを呼び出したな……」

「？お父さん、何の斬魄刀か分かるの？」

「あぁ、名前は言えないが……氷結系最強の斬魄刀と言っても良いだろう……」

……オーケーおとん、今ので分かったから……氷輪丸だわこれ…

…。

まぁ、嬉しいわ。氷輪丸を一発で引き当ててれてよかった！

でも、おかしくね？あの神様、鏡花水月以外の斬魄刀なら全部使える言うてたやん……。

まさか……ね？

俺は試しに、空いている左の手に魔力を集中する……。

カチャ……。

「なっ！？」

「……あはは……」

ビンゴ……どうやら俺は、ほとんどの斬魄刀を、体の中に所有してるらしい……。

しかも……何か、どんどんまだまだ増えてってる気さえするのだが

……。

「何故斬魄刀が二本も!?……まさか、二本一変に、所有者と認められたのか!?」

いや、二本どころか……ほとんどだよおとん……。
でも、これは口が裂けても言えないな……流石に気落ち悪がられるだろうし……。
でもま、これで斬魄刀を手に入れた訳だし……良かった良かった。

「しかもこれは千本桜!?……アニス……やはりお前は、私以上に才能がある子らしい!」

「ホント?アニス、嬉しい!!」

お父さんは喜びのあまり、俺を抱きしめる。
おぉう……流石クロイツベル家の家業を継ぐ者……腕力パネェ……
出る、出ちゃいけない物が出る……。

「お父さん、苦しいよぅ……」

「おっと、すまんすまん。嬉しさのあまり、つい強く抱きしめすぎた様だ。わははは！」

そう言いながらガシガシと俺の頭を撫でる。

いやぁ！一時間も掛けてセットした俺の髪！？……まぁ良いか、後でアンクに結ってもらおう。

「お父さん、これでもうお終い？」

「あぁ、これで無事契約は完了。もう戻っても良いよ」

「うん！分かった！」

〜〜

「それで、何をやってたんだ？」

「えへへ〜、クロイツベル家に伝わる契約をやって来ました」

「そうか。それで、何と契約したんだ？」

「斬魄刀」

「斬魄刀？何だそれわ」

「俺の居た世界では漫画の話に出てきた、死神が使う武器何だ。でも、あの神様がどうやらこの世界の設定に無理やり入れたらしい」

「あの馬鹿は……そんな事したら世界が崩壊すんぞ……」

「まぁまぁ、神様だから何とかなるんじゃない（笑）」

「まぁ、今の俺にはどうでも良いけどな。お前さえいれば俺は生きていけるし」

「あらあら、欲望の鳥とまで言われたアンクが、まさかこの三年で丸くなるとは」

「人間の感情、五感、全てを手に入れ。こうして人間と向かい合ってみると、中々どうして。人間も捨てたもんじゃないと思えてくるから不思議だ。人間何ぞ、欲望の塊でしか思ってなかったあの頃が懐かしい」

「……映司に会いたくないの？」

「……あいつが掴む手は、もう俺じゃない。それに、勘違いするな。俺とあいつは、利害が一致した者同士だ。あいつは力が欲しかった、俺は命が欲しかった……だからあいつをオーズに選んだし、俺はあぁして、ただのメダルの塊が死ねるとこまで来た……」

「ふふふ……アンクも素直じゃないね」

「ふん……ほら、出来たぞ」

お、結い終わったか……どらどら。
俺は手鏡で、今の自分の髪型をチェックする。

「……うん、ありがとうアンク！いやぁ、アンクも上手くなったもんだね。最初の頃は戦うだけしか能がなかったのに」

「うるさい。ったく、誰のせいでこんな事をしなきゃならなくなってるか分かってんか？」

「はいはーい、アンクは最高のパートナーでーす♪あははは！」

「……ったく、こりゃ重症だな……」

もぅ、重症とか言わないでほしいな！

「それじゃあ、僕はちょっと庭に行くね？」

「？何かやるのか」

「うん、斬魄刀と、ちょっとO★HA★NA★SI、じゃなかった、お話してくる」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「とは言ったものの……斬魄刀とどう話したら良いのやら……」

つうか、ブリーチとかもううろ覚え何だが……まぁ、斬魄刀だけで、

鬼道や縛道は使えるようにはなってないし……それはそれでいいか。

あんな長い詠唱、覚えられんから……。

「まぁ、とにかく氷輪丸だけでも使える様にしたいな～」

出来るだけ自力で頑張ろう！

んで、出来なかったら、少しお父さんに助言もらおう。……教えてくれるかな？

「さて……精神を集中させてっと……」

一応、月並みだけど、座禅をして精神を集中させよう……。

あ、ちなみにちゃんと結界は貼ってあるよ？まぁ、怪しまれないでしょ。

一応俺、全部魔法覚えてるし、結界貼ってたって、魔法の練習でもしてるだろう程度にしか思われないだろう……。

「……来た……」

……案外早かったな……俺は、そのまま精神世界に入っていく……。

「……はっ……」

「……やっほー」

「……あるぇ～」

「久しぶりじゃの」

「……何で神様が居んの？」

精神世界に行ったと思ったら、神様の所に来てた……。
……やべぇ、今軽くポルナレフ状態なんだが……。

「どうしたじじい、寂しくなったのか？俺をこんな所に連れてきて。何かの魚と一円やるから帰せコノヤロー」

「いや、お主が自分で来たんじゃろうが！！」

「……何……だと……」

「まぁ、大方斬魄刀と意思疎通してみようと試みたんじゃろうけどな……」

「……やっぱじいさんがしでかした事か……」

「お主、言ったじゃろ？斬魄刀が使いたいと。その願いが既に叶っているのじゃから、初めから使えるのじゃぞ？」

「……それを早く言えよ！！」

座禅して損したわ！
時間損したわ！全く、何なんだこいつは……。

「じゃあ、さっさと体に戻してくれ」

「自分から来たくせに……それじゃ、もう来るんじゃないぞ？」

そうじじいが言った瞬間、懐かしい浮遊感に襲われる……。

「また落ちるのかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「……はっ！？」

……何だったんだ今の……。
とにかく……まぁ、斬魄刀はもう使える状態なのは分かった。
でも、これお父さんに見せたら驚くだろうな～。始解も年数掛かっ

て漸く出来るようになったって言ってたし……。
まぁ、見せるのはもっと先の話かな。

「それよりも……やってみますか」

俺は座禅を止めて、斬魄刀を持つ。
……んじゃ、行っきまーす！！

「霜天に坐せ！氷輪丸！！」

そう唱えた瞬間……この周りの温度が一気に下がるのを感じた……。
だが、寒いとは思わない……、このままでも動きに支障は無い。

「……すげぇ……これが氷輪丸……」

そして、後ろを向く……そこには水と氷で出来た龍が宙を舞っていた。

「……卍解は……たぶん出来るんだろうが……」

やったら結界壊れそうだし、それに、下手に膨大な魔力を使うって

お父さんやお母さんに気づかれるのも嫌だから、よしとこう。

さて……次はどんな事が待っているのやら……。

第三話　どうやらこの世界では、斬魄刀は……（後書き）

結局ｇｄｇｄ

流石ディアボロクオリティー

でも、リリカルなのはの小説は、実際初めてではないんですが……

無印から書くのは初めてという……

今まで二期と三期、もしくは全くオリジナルの話で書いたりしてましたから

無印か……でも、今回は……はやてと絡ませたいな～

アンクが、闇の書起動まで子煩悩みたいなキャラになったの書きたいし

……よし、やっぱ今回も無印は書かない！

読んでくださりありがとうございます

第四話　アニスの訓練風景（前書き）

やぁ

……やぁ……

……特に話すことは無い！

本編始まります

第四話　アニスの訓練風景

「おはよ～……」

「おはよう。ほら、さっさと顔洗って来い」

「……む～……」

どうも、朝にめっぽう弱いアニスです……ふぁ～。

「……アンク～……眠い～……」

「俺に寄りかかって来るな！さっさと顔洗って目ぇ覚ませ！」

そう言いながら、アンクは俺を洗面所まで運ぶ。
優しっさすぃ～……ふぁ～……あれだね……肉体に精神が引っ張られるってのは本当にあるんだね。

「て言うかいい加減その恰好で寝るのは止めろ！」

「……いや……裸ワイシャツは……眠りやすい……んだよ……」

裸ワイシャツこそジャスティス……他にはスパッツとか……。

「……グー……」

「寝るなぁぁぁぁ！！」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「……超スッキリ！」

「俺は朝から疲れた……」

「どうしたアンク？まだ朝だよ？モナカ買ってやるから元気出せコノヤロー」

「………はぁ……」

ありゃ、ため息されちった……。

「ごめんごめん、ちょっと調子に乗っちゃった。謝るから許して？ごめんね」

「……まぁ、アイスで手を打ってやらん事もない」

「あはは、やっぱアンクと言ったらアイスだよね」

ヴィータやスバルと良い勝負出来そうだよね。
大食いとか？いや、でもアンクも今は普通の人間の体だし……いや、行けるか。

「それよりも、朝食に遅れるぞ？」

「あ、そうだった」

そう言われれば、もうそんな時間か……。
俺は一回自分の部屋に戻り、私服に着替える。一回寝ぼけたまま朝食食べに来たんだけどさ。
ワイシャツとパンツだったから、驚かれたよ。
まぁ、まだ三歳だし、ワイシャツはサイズぶかぶかだから、見えなかったけどさ……何だろう……アルカナのアンジェみたいな感じ？

まぁ、そんな格好で来たから怒られるかもとか思ったけど……。
怒られなかった、むしろ可愛いとまで言われた……だから俺は、もうお母さんやお父さんの前で、裸ワイシャツは見せないと誓ったんだ。
アンクには見せるよ？だってアンク、特に反応もしないから。

「おはようございます、お父さん、お母さん」

「おはよう、アニス。今日は少し遅かったね？何をしていたんだい？」

「少しアンクとお話をしていました。すみません」

「お父さんは怒ってる訳じゃないから、謝る必要なんてないのよ？アニス。さ、皆そろったことだし、頂きましょうか」

俺はいつもの席に着き、手を合わせる。

「「「この世の全ての食材に感謝を込めて、いただきます」」」

だから、何でトリコやねんって……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「さて、今日は何をするかな……」

朝ごはんを食べてから、一時間。
これからお父さんと訓練をします。まぁ、自分としては斬魄刀で戦いたいんだけど……。
始解を見せたら驚かれるかもと思って、それは避けてるよ。
たまに秘密裡で結界貼って、始解をして訓練はしてるけどね。

因みに、俺が結構使いやすいと思った斬魄刀がこちら。

氷輪丸、双魚の理、灰猫、千本桜、雀蜂位かな。
氷輪丸は長いけど、その分触れたらなんでも凍らせれるから良いんだ。
次に双魚の理、双剣でその分短くなるから良いね。灰猫と千本桜は、刀身が消えるから、持ちやすい。
雀蜂は指に着けて暗殺をする時には有利だね。
後は刀身が長くて重いから、振るのがキツイ。

斬月なんて始解状態のまま出てくるから持てない。卍解すればまだましになるんだろうけど……。
後は……多すぎてまだ使ってないんだ……。

「それじゃあ、魔法と剣の訓練でもしようか」

おっと、地の文で話してたら、いつの間にかお父さんが今日の訓練を決めれたようだ。

「分かった！」

「一つ言っとくが、あのオリジナル魔法は禁止だぞ？」

「分かってるよ。デバイスしか使わないから」

オリジナル魔法……デバイスを使わなくても、詠唱で使える魔法……。
まぁ、オリジナルじゃなくて、ネギまの何だけどね。
俺の始動キーはエヴァのをパクリました。
闇の魔法（マギア・エレベア）は使えないよ？流石に雷速瞬動とかは使いたくないよ。
人間で居たいのさ……後は、ガッシュ達の呪文が使えます。

まぁ、流石に口から雷は出さないよ？そこはゼオンを模して手から

出すよ。

因みに、これが管理局にバレたら間違いなく研究対象に指定されると、お父さんに言われました……。目がマジだったとです……。

「それじゃあ、始めようか。アイギス、セットアップ！」

《スタンバイレディー、セットアップ》

「クイーン、セットアップ！」

《セットアップ》

俺とお父さんは、二人同時にバリアジャケットを纏う。
お父さんのバリアジャケットは、騎士甲冑の様だ……あれ、シグナムみたいな固っ苦しい奴。
俺は……まぁ、最初どんなバリアジャケットにしようかなって考えて、ブリジットの格好にしてみた。
どうやらバリアジャケットのデザインは選べるらしい。そして下はスパッツ。

「相変わらずのバリアジャケットだね……アニス……」

「修道服っぽくて可愛くない？」

「時々、本当にアニスは男の子なのか、心配になってきたよ……」

まぁ男の子じゃなくて男の娘ですけどな。
心配するなお父さん、ちゃんと俺にも息子はついてるから安心しろ
コノヤロー。
等と、心の中で言ってみる。

「それじゃあ、先ずは剣からだ」

「うん！」

「ハァッ！」

お父さんが俺に剣を振るってくる。
俺はそれを避けて、反撃に回る。だがお父さんはそれを読んでいた
かのように回避し、再び斬りかかってくる。

「プロテクション！」

ガキン！

「おぉ、だいぶプロテクションを瞬時に出せるようになってきたね。
でも、まだまだだ！」

ギギギ！ピキ！ピシ！

うっそぉん！？ヒビ入って来てますやん！
完全に割れる前に、後ろに後退っと……。
俺はプロテクションを消したと同時に、後ろに下がる。

「ハァッ！」

ガキン！

「そら、下ががら空きだ」

ガッ！

足を払われ、俺はそのまま地面に転ぶ。
それを好機とと言わんばかりに、お父さんは追撃をしてくる。

「ハァ！」

「爆ぜろ！」

ドガァン！！

俺は故意に魔力を暴走させ、空間を爆発させる。
そして煙を利用して、お父さんとの間合いを取る。
……よし、これぐらいで良いだろう……。俺は魔力を剣に流し、構える。

「いっけぇ！！」

ズバン！！

おっし！直撃コースｋｔｋｒ！
やっとお父さんに一撃を入れれる時がキターーーーー！

「喰らえ！牙王炎！」

……あれ？今のって始解だよね？

……あれ、お父さんの魔力が上がったよ？何で何で？おかしいなぁ……何か大きい炎の龍が浮いてるよ？

……どーしよう……。まさか斬魄刀使われるとか……思ってもみなかったよ……。

「いやぁ、まさか私が斬魄刀を解放してしまうとは。ＨＡＨＡＨＡ！」

「せっけぇ！せっけぇぞお父さん！何だよそれせっけぇよ！せっかく一撃入れれたと思ったのに！柏餅やっから斬魄刀しまえコノヤロー！」

おっと、少し素が出てしまった様だ……。

つか、ＨＡＨＡＨＡＨＡじゃねーし！！ぜってぇ確信犯だ！ぜってぇそうだ！

「でも、これは私も少し大人げなかったと思う。反省はしている、だが後悔はしていない！」

「……もう良いよ……」

何かこのお父さん……威厳の欠片もねぇ気がしてきた……。

まぁ、これはこれで、有りなのかもしれないけども……さ、少しは何とか粘ってみようよ……むしろ安易に斬魄刀解放しちゃ駄目じゃ

ん……。
そこはプロテクション貼るとかさ、ブリッツアクションやソニックムーブで避けれたはずだよ？
まさか、子供の攻撃に、わざわざ斬魄刀って……ハァ……。

「そうか……じゃあ次は、魔法のの練習だ」

「はーい。クイーン、杖お願い」

《了解しました》

「アイギス、ガントレット」

《オーケー》

……うん、ガントレットって、近距離だといつも思うんだけど……
中々どうして……お父さんの砲撃や魔法弾は、手から出るんだ……
しかも正拳突きに乗せてくるからさ、威力マジキチ……。
アンタは何処の薬味坊主なんだと言いたい。

「行くよ！アップ！」

俺のその掛け声で、十数発の魔力弾が周りに発生する。
まぁ、なのはも結構掛け声使ってたし、違和感無いとは思う。

「ストップ！」

そして、周りに魔力弾を発生させたまま固定する。

「ホント、アニスは私以上に才能豊かだな。そんな使い方、一度も考えたこともなかったよ。ハァッ！」

そう言いながらちゃっかり魔力弾放っとるやないですか……。
まぁ、いいや……。結構数多いけど、先ずは回避を試みよう……それで、避けれない奴が出てきたら、一発ずつ使って落とそう。

「よっ！ほっ！はっ！おっと！危な！きゃっ！うわ！あらよっと！こなくそ！」

良し、計九発は避けれた……でも、後のはキツイな……。
お父さんの魔力弾は数にして約四十発……キツイ……子供の訓練になんちゅう数を……。

「これは無理だな、ゴー！」

俺は一発ずつ使いながら、的確に落としていく。
途中、魔力弾は切れたが、簡易砲撃で逃れた……いや、マジで危なかったよ……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「よし、これで今日の訓練はお終い！」

「ふにゃ〜………疲れたぁ〜……」

「よしよし、良く頑張った。さ、帰ろうか」

お父さんは俺の頭を撫でて、抱っこする。
お父さんの腕は暖かいのぅ……あ〜、今日も疲れた……今日は結構長い時間訓練したな〜。

「……お父さん……」

「何だい、アニス」

「……俺……強くなれるかな……」

「アニスならなれるさ。既にBクラスの魔導師には遅れを取らない程度には強くなってる。後三年くらいしたら斬魄刀も使える様になるかもしれないし、それに、その時は今よりもっと強くなってるさ。アニスは生まれつき魔力量が多いんだ、きっと、強くなれるよ」

「……ありがとう……お父さん……」

微睡の中……お父さんの優しい言葉を聞きながら……俺は静かに目を瞑った……。

第四話　アニスの訓練風景（後書き）

三歳の息子に斬魄刀を開放するお父さんマジリスペクトっす

まぁ、そんな感じの第五話、いかがだったでしょうか？

次回はもしかしたらキンクリするかもしれません……このまま三歳のころのアニスの話を書いていたら、いつになったらはやての所にたどり着けるか……

本編＆儀式開始編辺りで、アニスのプロフィールを書きますゆえ、しばしお待ちを

それでは、読んでくださりありがとうございます

第五話　鬼神の伝説と、別れと誓い（前書き）

まぁ、疲れた……

さて、今回は少しシリアス&卍解があります

ご注意を

では、本編始めます

第五話　鬼神の伝説と、別れと誓い

良くも悪くも無く、普通の幸せを実感しながら、早六年……あ、キンクリし過ぎだって？気にしないの♪

まぁ、そんな冗談も言ってられないんだけどね……。
特にこれと言って、知りたかったわけじゃない……。
俺としては、お父さんの仕事なんて、興味がなかった。
ただ、一族の家業を継いだ、程度にしか聞いてい適ったので、会社の社長かなんかでもしてるのだろう……そう思っていた。

「貴方……」

「あぁ、私としても、信じたくはなかったよ……」

「アニスは、やっぱり」

「あぁ……アリス……」

「……貴方……どうします？」

……さて、このシリアスな空気……どうしたら良いのやら……。

どうも、アニスです。
ちょっと寝る前にホットミルクを飲んで寝たので、少ししてから尿意に襲われたのでトイレに起きたら……こんな話に遭遇してしまいました……。

「こういう時……やはり我が子を守る手だけが一つや二つだけ……というのが……情けなくて、申し訳が立たないよ……」

「仕方ないわ……それほど、貴方が切羽詰まってるんですから……」

「……どうして……我が子が……我が子が……禁忌の子だとわ……」

禁忌の子？何だよ……それ……。

「少なくとも、後一～二年は大丈夫だと思っていた」

「でも、もう明日攻めてきそうな空気がありますね……」

「一応、隠蔽の魔法を使ってのだが……もう、無理か……だから、私の命に代えても、あの子と、君は守り抜く」

「何で……そこまでして」

「……何、私は十分幸せだ……君と恋仲になれて……アニスと言う……私とお前の、両方の血を受けてくれた子供が出来て……そして、その両方を、胸を張って守れる今の自分に……私はもう、何もいらない……」

「いらない……何て……悲しい事……言わないで……！」

「……アリス……明日、全てを話そう……」

「えぇ……分かってるわ……あの子が……鬼神の子と言う事を……」

鬼神の……子？

何だよそれ……鬼神の子って……。

「もはや、一刻の猶予もない……私の仲間も、もう騒ぎ立てている。鬼神の子が復活した……と。私は、今まで一緒に戦ってきた仲間と、殺し合うのが怖い……見ろ、今だって、考えただけで手が震える……。確かに、私は何百何千と、人間を殺してきた……それでも、犯罪者を裁くことに、何も感じなかった」

人間を闇討ち？それが仕事？……何なんだよ……一体全体……どうなってんだよ……クロイツベル家ってのは……！？

「だが、我が子がその対象になるとわ……思いもよらなかった……」

「貴方……」

なぁ……どういう事だよ……お父さん、お母さん……。
俺が、
鬼神の子？俺は、殺されるべき対象なのか？

「……私……決めたわ……貴方と共に、戦います」

「それは駄目だ……君には、アニスに着いていてもらいたい。戦闘は私に任せて、アニスと一緒に逃げてくれ！」

「私には……やはりどちらも選べないの。クラウド……アニス……どちらを取るべきか。私は……あの子を、幸せにしたい、貴方と一緒に。だから、共に戦いましょう……そして、生きて……アニスと一緒に、幸せに暮らしましょう……？」

「お前……まさか……」

「えぇ、あの子だけでも逃がします。そして、私達が勝って、自分

たちの足で……あの子を迎えに行きましょう……？」

「……転移させる場所は決まっているのか？」

「第９７管理外世界、地球。ここは魔法文化も無く、管理局も手が出せないし、ほとんど知らない地よ……」

「……分かった……あの子には辛い思いをさせてしまうな……」

「えぇ……そうね……」

……何なんだよ……何なんだよ、その話は……。
鬼神の子？戦う？……どうして……そんな話をしてるんだよ……。
俺はフラフラしながら、自分の部屋に戻り、そのまま……眠りについてしまった……。

〜〜

次の日の朝……何故か今日の空気は、いつもと違っていた……。
アンク以外の使用人は皆居なく……この部屋には、俺とお父さんとお母さん……そしてアンクのみとなっている。

「……お父さん……話とは何でしょうか？」

「……あぁ、何だ……その……な……」

煮え切らないお父さん……それを見て泣きだしそうになっているお母さん……。

俺は、不意に、昨日の事を口にする。

「……鬼神の子……」

「！……アニス……」

「昨日、二人で話してたよね？俺が鬼神の子だって……」

「……聞いていたのか……」

「盗み聞きするつもりはなかったんです……たまたま、トイレに起きて、部屋に戻ろうとした時に……偶然……」

俺の話を聞き、お父さんは神妙な顔をするが……すぐに観念したような顔になる。

「すまない……アニス……」

「何故、謝るんです？」

「自分の息子を救う手だてが、もう一つしか思いつかなくて……本当にすまない！」

「貴方……」

「……それより、話してくれますか？何故、僕が鬼神の子と呼ばれなくちゃいけないのか……」

「あぁ……説明しよう……いきなり、そんな事を言われても……理解できないだろう……」

そう言うや否や……すぐに、お父さんは鬼神の子について、語りだした……。

ベルカ時代……まだクロイツベル一族が、そんなに栄えていない時代の時の話……。
斬魄刀を使う我ら一族の中に、アイリスと言う、クロイツベル一族の天才が居た……。
彼はクロイツベル家の中でも異質の存在で、僅か一年未満で始解を習得、そして翌年で斬魄刀を屈服させ、二年で卍解に至った者だった……。
そして、そんな彼には、更なる異質があったのだ……

そう、彼は斬魄刀を複数所持する者だったのだ……。
確かに、二本使える物は、１０年に2～3人、居るか居ないかの話だったのだが……。
彼はその数３０以上の斬魄刀が使えたのだ……。

そして、そのものの戦い方は……狂気に満ちていた……。
ある者はばらばらに、殺して解して晒して並べてあり……ある者は、氷漬けにされ、ある者は、火達磨になり……ある者は、雷に撃たれ……ある者は、毒で殺され……まるで、自分の斬魄刀の能力を試したいが為に、剣を振るっている存在だった……。

そして、ある事件が起きた……。
彼は何を思ったのか……他のクロイツベル一族の者の斬魄刀を奪い取り、契約権を奪ったのだ……それも、斬魄刀の能力で……。

そして彼は、裕に６０本は超える斬魄刀と契約を結び……狂気に飲み込まれた……。
その者は、鬼神と言われ……彼を殺すのに……クロイツベル一族が総力を挙げて……倒したのだと言う……。

だが最後に、鬼神は死に際にこう言い放った……。

「いつの日か……俺と同じ……複数斬魄刀を所持出来る……子が……生まれるだろう……ククク……それは、俺の生まれ変わりだと思……え……」っと

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「そして、お前が生まれたわけだ、アニス……」

……そう言う事だったのか……だが、確かに俺は、お父さんとの斬魄刀の訓練で、二本試したが……何故、俺が他にも所持しているってのが分かったんだ？

「でも、お父さん……俺は斬魄刀を二本しか使ってませんよ？」

「……アニスが、時々結界を貼って、斬魄刀を開放してるのは知っている……。斬魄刀を解放したら、多かれ少なかれ、使用者の魔力の質が変わるんだ……だがアニスは……その移り変わりが凄く激しく……斬魄刀解放時の魔力量が、いつも違ってたりしたのが分かった……」

……そう……だったのか……。
……調子に乗った……俺の落ち度だ……。

「だけど……他の人に知られるような事はしていないんだけど……」

「クロイツベル一族の中には、予言が出来る斬魄刀所持者が居る。仕事で集まる時に……取集が掛けられたんだ……そして……疑われたのが私だ……ここ九年間の中で、クロイツベル一族で生まれた子供が、お前しかいなかったからだ……」

「……………………」

もう、何も考えられなくなった………。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

～～～

お前を転移させるのは……明後日……。
魔力がまだ十分に溜まっていないから、もう少し時間が掛かる……。
それまでに、荷物の整理をしておきなさい……。

そう言われて、家族会議的な物は終わった……。

「……どうするんだ、お前」

「……出来るなら、一緒に戦いたい……」

「……死ぬかもしれないんだぞ」

「それでもだよ。大事な家族見捨てて、俺だけ一人おめおめと逃げられる訳がない……」

「お前を狙ってくる連中だぞ？お前が前に出てしまえば、たちまちそいつらの格好の的になるだけだ……たぶん、お前の親父も、母も、他の奴に足止めされて終わりだ」

「……なら……どうすれば良いんだよ！！それしか他に手がないん

だ！！俺に、もうそれ以外に考えられないんだ！！」

「……はぁ……」

アンクはため息をつきながら、俺の頭を撫でる……。

「少し落ち着け……」

「……アンク……」

「お前が逃げれば、後はあの二人が安心してその場から離脱出来るだろう。それ位の腕はある筈だ……俺が何で、お前の親父に、お前を守ってくれって言われたと思ってんだ……」

「アンク……」

少し落ち着きを取り戻した俺。
取り敢えず、荷物は言われたとおり整理しとこう……そう思ってベッドから立った瞬間！

ドガァァァァン！！

何処からか爆発音が聞こえた……。

「アンク！」

「あぁ！」

俺とアンクは、急いで部屋から出た……。

ゴァァ！ドガァ！

移動する度に、爆発音が激しくなる……。

もう……攻めてきたのか？

こんなタイミングで……攻めてこなくても……。

何で……このタイミングなんだよ！！

俺は音がより一層激しく聞こえる部屋のドアを思いきり蹴破る。

「お父さん！お母さん！」

そこには、何人かの敵と対峙してるお父さんとお母さんの姿が目に

映った……。
相手は黒い服に身を包み、顔を見えないように隠してある……。

「アニス！何故来たんだ！？」

「いきなり爆発音が聞こえたから！」

「早く貴方は逃げなさい！！」

「ほぅ……こいつが、鬼神の子か……」

一人の黒服の男が、俺を見るなり、襲い掛かってくる。
ヤバい、反応が遅れっ……。

ガキン！！

「クッ！」

「アンク！」

「はぁ！！」

バキッ！！

アンクは右手だけどグリード化して、敵の攻撃を受け止める。
だが、そこは斬魄刀……幾ら異形の腕と言えど、受け止めただけでダメージを与えられる力はある。

「アンク君！早くアニスを連れて逃げるんだ！！」

「私達がここを抑えてる内に！」

二人がそう言い放つが……お母さんの結界が、その一瞬の隙に破られる……。

「きゃあ！」

「アリス！」

「お母さん！」

「……飛ばせ、飛び魚」

シュン！！

敵が斬魄刀を開放して、お母さんを斬った瞬間……お母さんの姿がいきなり消えた……。

「そん……な……」

「アリス！グァッ！」

バキッ！ドガァッ！

そして、お父さんもお母さんが消えたことで隙が生じ、蹴り飛ばされる。

「貴方方は殺しませんよ？貴方達はクロイツベル一族の中でも、優秀な部類に入りますから……ただ飛ばすだけにします……」

ザシュッ！シュン！！

そして……お父さんも斬られ……飛ばされた……。

「お父……さん……？……お母さん……？」

その瞬間、俺は崩れ落ちた……。

俺が……俺が……出て来たせいだ……俺のせいで……お父さんとお母さんは……。

「安心すると良い、君の両親は、安全な所に飛ばしました……まぁ、今から死ぬ君には、関係ない事だと思いますけどね？」

「お父さん……お母さん……」

バキッ！！

「アニス！逃げるぞ！！」

アンクが俺に近づいてくる敵を殴り飛ばして、俺の所に近寄る。

……アンク……。

「化け物は化け物を呼ぶ……ですか……良くこんな化け物と一緒に住めましたね、あの人達は……殺れ……」

男の言葉で、何十と言う黒づくめの男達が俺とアンクを囲む……。

「ちぃっ……囲まれたか……おいアニス！早く立て！！」

「………せ……」

「どうしたアニス！早く立て！」

「………えせ……か……せ……俺の……お父さんと………お母さんを………返せぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！！！」

俺は斬魄刀を取り出して、構える……。

「ふん、始解しか出来ない餓鬼が、意気がるなよ……」

「……霜天に坐せ……氷輪丸！！」

ゴォォォォォォォ！！！

俺は氷輪丸を開放して、魔力を高める。

俺の後ろには氷と水で出来た龍が現れ、黒づくめの男達を驚愕させる。だが、中にも余裕だと言わんばかりに、斬魄刀を構える者も居る。

「ほぅ、氷雪系最強の斬魄刀……美しい……僅か九歳で、その完成度……流石は鬼神の子だ……やはり、君は危険な存在だ！」

「だ……まれ……黙れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！卍解！！！」

「何！？」

今まで貯めていた魔力を、全て氷輪丸に送り、開放する。
もう……俺は……止まれずにはいられなかった……。

「大紅蓮氷輪丸！！」

俺は完璧な死覇装を来て、背中に氷の翼が生え、尻尾も生える。
そして、体から放出されている魔力は、全て冷気に変わり、白く煙となって出ている……。
後ろには十二枚の花弁が出ている。

「そんな……何で……九歳の……ガキ如きが……卍解を……」

「……群鳥氷柱……」

俺は敵に向けて、大量の氷柱を放つ……氷輪丸、しかも卍解の状態の攻撃をかわしたり、相殺したりする術も無く、ほとんどの者が、巨大な氷柱によって絶命した。

「う……そだろ……そんな……馬鹿な……」

いや、一人だけいた……斬った物を何処にでも飛ばす能力でもあるのだろう……お父さんとお母さんと飛ばした張本人は……所々血が噴き出ていた。

「……」

「ま、待ってくれ！止めてくれ！」

「……黙れ……竜霰架」

ザシュ！ピキピキ！！

「うぁぁ！凍る！嫌だ！！嫌だぁぁぁ！！」

ピキピキ……。

男は完全に氷に成り果てた……俺はその氷を殴り砕く……。
それを終えた瞬間、卍解は解けて、俺は倒れこんだ……。

「アニス！」

「アン……ク……」

「しっかりしろ！ただの魔力切れだ！」

「……アン……ク……お父……さんと……お母……さんが……」

「あの二人は生きてる！あの男が言っただろ！！」

「……なら……探さないと……」

俺はそう呟き、魔力切れで動かない体を、無理やり動かす……。
だが、指一本とも、動こうとしない……言う事を聞かない……。

「今はまだ駄目だ！お前は既に、狙われる存在だ！ここに居ては、満足に動けない！ここは一回、身を隠すべきだ！」

「……でも……そうしたら……お父さんと……お母さんが……あいつらに……何をされるか……」

「あいつらなら大丈夫だ！約束したんだろ！？生きて、元気で、また再開するって！転移させる時点で、あの二人は言ってただろ！！」

「……アンクゥ……」

俺は、自分の愚かさ、不甲斐なさのせいで涙した……。
悔しい……自分のせいで……両親を危険な目に晒してしまったことに……。

「……アニス……」

アンクは俺の名前を呼びながら、俺をギュッと抱きしめる……。
強く、強く……俺が潰れるんじゃないかと思うほど、強く……。

「……安心しろ……俺が……お前を守る……。そして、お前の両親

も、見つけ出してやる……」

「……アンク……」

「俺はお前のパートナーだ！！何があっても、守ってやる！！だから、俺の手を掴め！！お前は、ここで終わるべき人間じゃないだろ！！アニス！！」

「……そうだね……」

俺は……覚悟を決めた……。
必ず、お父さんとお母さんを見つけ出してみせる……絶対に……。

「……お願い……アンク……俺を……連れて逃げて……計画通り……に……」

「分かった……行くぞ……」

そう言って、アンクは俺を抱きかかえ、お父さんとお母さんが考えた計画を実行することにした……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

～～～～～～

「ここか……」

「……うん……」

地下室……ここにはお父さんの所有物であふれかえっている。
その一つに、転移装置が置いてある……俺とアンクはその中に入り、スイッチを押す。
だが、まだ魔力が十分に溜まってないのだろう……起動しない……。

「やっぱり……駄目……か……」

「……アニス、これって、他者の魔力を込める事って出来るのか？」

「……分からない……やった事……ないし……聞いた事も……無いから……」

「……だったら、試してみる価値はありそうだな」

数秒悩んでから、すぐにアンクは口を開く。

そして出た答えが、とりあえず魔力を装置に流すと言う事だった……。

「ハァッ！」

アンクは完全グリード化をし、魔力を転移装置に思いきり流す……。

……すげぇ……これがアンクの全力か……。

「グッ！まだか！」

「……もう……少し……」

ゲージがもう少しで満タンになる……後５０……４０……３０……２０……１０……。

「よし……溜まった！」

「クッ！ハァ、ハァ……俺も、魔力切れ起こしそうだ……」

そう言って、アンクはすぐに人間の状態に戻る。

まぁ、一日二日掛けて魔力を貯める必要がある装置だしね……アンクは頑張った……。

「もう設定はしてあるんだな？」

「……うん……大丈夫だよ……」

「それじゃあ、今度こそ……」

アンクは装置のスイッチを押す。
魔力が十分になったので、さっきと変わって、中の明かりがつく。
そして、装置が作動した……。

《転移を開始します……場所は、第９７管理外世界。ただちに転移します……》

機械音が鳴る響く……。
あぁ……意識が……瞼が重くなってきた……。

その瞬間……俺とアンクは、姿を消した……。

第五話　鬼神の伝説と、別れと誓い（後書き）

結局ｇｄｇｄ

いやぁ、長い長い……疲れた……

アンク×アニス……ありだと思います……

次回は……はやて視点からのスタートとなります

やっと原作キャラでるお！！

そして、近況報告！

何と！

リトバスのラジオ、ナツブラで！

私めの投稿メールが！

あの、私の憧れの！アイドル的存在の民安さんに！

読まれたぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

……あぁ、今日、月曜日に配信されたのを聞いて、トークランキングの一発目で読まれたので吹いたｗｗｗｗ

いやぁ、うれしいな……

そんなわけで、近況報告でした

では、読んでくださりありがとうございます

第六話　アニス、はやてと出会うの事（前書き）

いやぁ

今日は学校のプロジェクトでチーズ作ってたお

朝の六時半から学校に行って、そこから夜の六時半辺りまでずっと
作業

きつかった……眠かった……足が痛かった……そして明日もあると
言う恐怖

……泣きてぇ……

つうわけで、本編始まります

第六話　アニス、はやてと出会うの事

はやてサイド

「んっ……ふぁ～……」

いつもと変わらない朝。いつも通りの時間に起きて、ウチはベッドから降りて、車いすに乗る。

せやけど……何やろうか……いつもと感じが違う朝になりそうなのは……ウチの気のせいやろか……。

そう思いながら、リビングのカーテンを開けて、外を見る……。

「……はぁ？」

いつもと変わらない風景……の筈が……二人の人が……男女が倒れとるのが分かった……。

男の人は、女の子を庇う形で気を失っており、女の子は……さながら騎士に守られる姫の様に綺麗やった……。

「……アカン……神話の読み過ぎや……」

ウチは自分の目を擦り、もう一度外を見る。

「……やっぱり人が倒れとる〜！？」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「………んっ……」

「あぁ、どないしようどないしよう！やっぱ警察！？それとも救急車！？あぁ、どないしよう！！」

……何だこいつは……人の周りを車いすでグルグル回りやがって……。

そういや……アニスは！？……良かった、俺の腕の中か……。

「よいっしょ……」

くっ……転移装置に魔力を流し過ぎた……体が重い。

俺はアニスを起こさないように起き上がり、そのまま抱きかかえる。

「あ、起きたんか！？」

「少し静かにしろ。こいつが起きるだろうが」

「あ、……すいません……」

「……それより、ここは……」

見渡す限り、家があり……ここもどうやら、人様の敷地ならしい。
もしここが魔法文化の無い世界なのだとしたら……なぜ、この家の中に魔力反応を感じるんだ？

「あの、大丈夫ですか？」

「……」

少し訛りの入っている子供が声を掛けてくる……。
そいつは足が不自由なのか、車いすに乗って、こちらを見上げている。

「あぁ、少なくとも俺は大丈夫だが……こいつはどうだかな……」

アニスは昨日の戦闘で、魔力を根こそぎ斬魄刀に持って行かれた。
普通の奴なら半日は寝込むだろうが、こいつなら何時間かで目を覚ますだろう……。

「あの……」

「何だ？」

「急ぎじゃないんでしたら、ウチの家で休んでいきませんか？」

「……」

願っても無い提案だ……だが……。
こいつの家の中の魔力反応が気になるな……、一体、何を企んでる、こいつ……。
だが、欲望があるわけでもないし……その目には、悪意の欠片も移ってない……ただの善意か？
だとしたら、一刻も早く、こいつを休ませてやりたい……。
ここは、背に腹を変えられないか……。

「あぁ、迷惑を掛けるな」

「なら、こっちから入ってください」

ガキが指を差す方には玄関があった。
俺はアニスを抱えながら、その玄関へと向かい、中に入る。
そして、外から戻ってきたガキがこちらにに手招きをしたので、俺はそちらの方へ向かう。

「ウチの部屋で申し訳ないんやけど、寝かすならここの方がええぇ。他の部屋やと、少し準備に手間取ってしまうさかい」

「すまんな」

「いえいえ、これも何かの縁ですし！」

「そうか……」

俺は部屋に入り、ベッドにアニスを寝かせ、掛布団を掛ける。
……これで先ずは一安心か……。
そう思いながらふと振り返ると……鎖で縛られて置いてある黒い本に目が映る。
これか……魔力の元は……こいつ、魔導師か？いや、だったら俺達の魔力を感知できるだろう……。

「あの、どないしたんですか？その本をじっと見つめて」

「っ！いや、何でもない……」

「そうですか。あ、ここで話をしてたら起こしまうな……聞きたい事もあるんで、リビングに来てください」

確かに、いきなり人ん家の庭で気を失っていたんだ……聞きたい事なんぞ山ほどあるだろうな。
さて、何処まで話せるか……。

〜〜

「うっ……くっ……！」

体が重たい……まるで、自分の体じゃない様だ……。
そんな体に、自分は鞭を打ち体を起こす……。

「知らない部屋だ……」

先ず第一声がこれ……。
何処だここ……つうか、見覚えがあるんだが……。

「それよりも……俺は一体、何でこんな所の……あっ！」

思い出した！

昨日の夜、襲撃されてお父さんとお母さんが飛ばされたのを見て激情し、卍解を使って魔力切れを起こしたんだ。

そして、そのままアンクに抱きかかえられて、転移装置に乗って……地球に……。

「……そう言えば……アンクは？」

俺の近くには居ない……。

まさか……転移の時に離れ離れになっちゃったとか！？

そんなぁ……アンク……。

「……ぐすっ……アンクッ……ぐずっ……アンク……」

寂しい……お父さんもお母さんも何処かに行ってしまい、今度はアンクまで……。

お父さん、お母さん、アンク！

「アンク……。アンク……。……うわぁぁぁぁ！！」

寂しい……あれほど近くに居た人達が、一日で一気に居なくなってしまった……。

「お父さん！お母さん！アンク！うぁっ……アンクゥ……さみっしいよっ……」

胸が苦しい……俺は、こんなに依存してたんだ……。
お父さんやお母さん以上に……アンクに……。

「アン……ク……！うぁっ……！」

その時、この部屋のドアが開かれる。
俺は泣きながら、ドアのとこを向いた……そして、顔を出したのは……。

「おい、どうしたアニス」

居なくなったと思っていた……俺のパートナーの、アンクの顔だった……。
俺は無意識の内にベッドから出て、アンクに抱き着いた。

「アンクッ！」

「おっと！……どうした、いきなり」

「アンク！アンク！アンク！」

「あぁ、俺だ！だから何回も俺の名前を連呼すんな！！」

「アンクぅ～……グスッ……アンクも、何処かに居なくなっちゃったと思った……よ……怖かったよ……！うぁっ……」

「……泣いてんのか？」

「声の……感じで……分からないかな……？普通……グス……」

「何で泣いてんだよ」

「だって！だって……お父さんも、お母さんも……居なくなっちゃって……一緒に逃げ来たアンクまで、居なくなっちゃったかと思って！」

「……はぁ、俺がお前を置いて何処かへ行くと思ってんのか？バー

カ」

そう言いながら、アンクは俺を抱きしめ返す……。

「お前を置いて何処かに行くわけないだろ。誓ったろ？お前を守るって、必ず両親を見つけ出してやるって」

「……アンク……」

……うし、少し落ち着いた……。
これで何とか持ちこたえれそうだ……主に精神的な意味で……。
それより、ホントにここ何処なんだろうか？

「なぁ、アンク……ここ何処か分かる？」

「俺が知るわけないだろ。俺も気が付いたらここに居たんだ。詳しい話を聞きたいなら、リビングにここに住んでるガキに話を聞くと良い」

「ここに住んでるガキ？」

アンクサイド

取り敢えず、一旦こいつから話を聞かないと下手に動けないな……。
アニスの事もあるし……。

「粗茶ですが、どうぞ」

「どうも」

ガキが出したお茶をすすり、俺は本題を切り出す。

「……何でお前の家の敷地で気を失っていたか、だろ？聞きたいのは」

「えぇ、そうです」

「話せば長くなるが……俺達は少し、遠い所か逃げて来た……そういう解釈で話を進めるが、良いか？」

「……何や？駆け落ちでもしたんか？」

ブーッ！

俺は飲んでいたお茶を吹き出す……。
何言ってんだこいつ！ガキが益せた台詞言いやがって！

「なわけねぇだろ！」

「だって、あんな小っこい可愛らしい子を抱きかかえて気を失ってたんやで？まるで姫を庇った騎士みたいにな。でも、あんな小っこい子と駆け落ちって……犯罪やで？」

「だから違うって言ってんだろ！人の話を聞きやがれ！！」

「あはは！冗談やて冗談。それで、何で倒れてたん？」

「あぁ、実はな……さっき寝かした奴居ただろ」

「あの可愛い子やな？その子がどないしたん？」

「あいつ、良い所のお坊ちゃんなんだよ。それで、そいつの家がつい昨日襲撃されてな。俺はあいつと、命からがら逃げて、ここで気を失っていたんだ」

「……ちょっと待ちいな……」

やっぱ……信じられるわけねぇか……。
まぁ、いきなり突拍子過ぎて、着いていけるわけもないしな。

「あの可愛らしい子が坊ちゃん!?お嬢様や無く坊ちゃん!?あの子男の子やったんか!?」

「気にするとこそこか!!」

「当たり前や!女のウチよか女の子らしいで!?世の中不公平やわ!!」

「まぁ、お前よりは可愛いと俺は思うが……って、俺は何言ってんだ!」

ヤバい……あいつのせいで狂って来たな俺……。

「それで、その子が命を狙われとる事やけど」

「サラッと本題に入りやがったな……」

「行く宛とか無いんやったら家に住まへんか？一時身を潜めるつもりで」

「……それを俺に言われても、決めるのはあいつだし。それに従うのが俺だ」

「結構な忠義心やな」

「はっ、あいつしか仕える奴が居ないんだよ。さて、少しあいつの様子を見に行ってくる」

「分かったで」

俺はそう言って、さっきガキに案内された寝室に向かう。
向かったのだが……。

「お父さん！お母さん！アンク！うぁっ……アンクゥ……さみっしいよっ……」

……あぁ、明らかにあいつ引きずってんなこれ……はぁ、相変わらず、戦闘は強いが、精神的に駄目な奴だ。
俺は内心でため息をつきながら、ドアを開ける。

「おい、どうしたアニス」

部屋に入り、アニスに声を掛けた。
その瞬間、アニスはベッドから飛び出て、俺に抱き着いてくる。

「アンクッ！」

「おっと！……どうした、いきなり」

「アンク！アンク！アンク！」

「あぁ、俺だ！だから何回も俺の名前を連呼すんな！！」

「アンクぅ～……グスッ……アンクも、何処かに居なくなっちゃったと思った……よ……怖かったよ……！うぁっ……」

何でこいつ……こんなに泣いてんだ？
まさか、いきなり俺が居なくなったせいか？……はぁ。

「……泣いてんのか？」

「声の……感じで……分からないかな……？普通……グス……」

「何で泣いてんだよ」

「だって！だって……お父さんも、お母さんも……居なくなっちゃって……一緒に逃げ来たアンクまで、居なくなっちゃったかと思って！」

案の定だ……こいつは……。

「……はぁ、俺がお前を置いて何処かへ行くと思ってんのか？バーカ」

そう言いながら、俺はアニスを抱き返す……。

全く、俺は男だぞ？簡単に抱き着きやがって……っと、こいつも男だったな。

「お前を置いて何処かに行くわけないだろ。誓ったろ？お前を守るって、必ず両親を見つけ出してやるって」

「……アンク……」

何であんな恥ずかしい事を言ったと思ってんだこいつは。
もう絶対、お願いされても言いたくない台詞だ……。
はぁ、やれやれ……さて、どうしたものかな……。

「なぁ、アンク……ここ何処か分かる？」

「俺が知るわけないだろ。俺も気が付いたらここに居たんだ。詳しい話を聞きたいなら、リビングにここに住んでるガキに話を聞くと良い」

「ここに住んでるガキ？」

「あぁ、行くぞ」

俺はそう言って、アニスを抱きかかえる。

「ちょっ！？何で抱きかかえるのさ！？」

「うるさい、昨日魔力切れ起こした奴が何言ってんだ！良いから黙って大人しくしてろ！」

「……あーうー……」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「どうも……アニス・クロイツベルと申します……」

「これはご丁寧に、八神はやて言います〜。宜しゅうお願いします」

……結論、ここは地球で海鳴市であり八神家でした……。

まぁ、何という確率……俺に幸運ＥＸでも付いてるんだろうか？

「あの、アンクと何処まで話しましたか？」

「アンク？　あぁ、この人の事やな。まぁ、君がお金持ちの坊ちゃんって事と、命を狙われてるって事までや」

「ま、まぁ……大まかに説明するとそうかな……あはは……」

アンクめ……。

俺はアンクをキッ！と睨むが、顔を背かれてしまった……。

「それで、その、アンクさんにも話したんやけど。身を潜めるって事で、しばらく家に住まへんって言ったんやけど。アンクさんには決定権が無いって言われてもうて、決めるのはアニス君だって」

「まぁ、そうだろうね……」

う～ん……。

まぁ、命を狙われてる事は間違いないけど、あの次元世界内の事だけだし……ここには被害はそう起きないだろう。

それに、住むところは愚か、お金もないし……家なき子だしね……。

「……本当にここに泊めてもらっても良いのでしょうか？」

「えぇ、ウチは構いませんよ。どうせウチだけしか住んでへんしな」

「あっ……ごめんなさい……」

「ううん、気にせんといてアニス君。もうウチは気にしてないさかいに……それで、どや？」

「……あの……不束者ですが……よろしくお願いします……」

「……使い方間違うとるよ……アニス君……」

「えっ!?あれ?違うの!?……はぅ……」

～はやてサイド～

何やねんこの子!可愛すぎやろ!
間違い指摘されて、恥ずかしくて顔赤うしとる……アカン……可愛すぎる……。
こんな子が男の子や何て信じられへん!どっからどうみても女の子やん!

「あ、あの……八神さん?」

「はっ!ど、どないしたん?アニス君」

「いや、いきなり俺の顔をじっと見て固まってたから……気になっちゃって……」

「あ、あはは……な、何でもあらへんよ?気にせんといて?」

「う、うん……分かったよ八神さん」

「それ」

「へっ？」

「その八神さんっての、何か他人行儀で、ウチは好かんねん。ウチの事ははやてでええよ？ウチはアニス君って呼ばせてもらっとるから。それと、敬語も無し！今日から一緒に住む家族やからな！」

「八神さん……」

「アニス君……？」

「あ……は、はやて……ちゃん」

そう言って、アニス君は恥ずかしそうに頬を染めながらウチの名前を呼ぶ。

っ～～～～～～！可愛い！何やねんこの子！？ホンマにかわえぇ！

それに、ウチより年下やのに、こんなに行儀がええとわ……偉いな

あ……。

「あの、はやてちゃんって……何歳かな？」

「あ、あぁ。ウチは今年で九歳やで」

「あ、そうなんだ。俺はもう誕生日来ちゃったから……はやてちゃんより一歩リード。えへへへ。俺も九歳なんだ」

……な、ななな……何やってぇぇぇぇぇぇぇ！？
この子、ウチと同い年やとぉぉぉぉぉぉぉ！？
身長ウチより結構差があるで！？ホンマに九歳！？おかしい！神様は不公平やっぱ！！
そしてそのハニカミ！……もぅ……何て言うか……！

可愛すぎやろおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！

第六話　アニス、はやてと出会うの事（後書き）

最後ははやての心の叫びで終了

やっぱはやては二期の頃が一番可愛かった！！

何故だろう？三期のはやてには一向に萌えられなかったんだ……

それにしても、明らかに腐臭が……まぁ、アンクは落としますよ？

つうか、絶賛無意識攻略中ですアニス君

この中で攻略が難しいのは明らかアンクです

つうかしょっぱなから八神節が……

でもはやては可愛いので良いのだ！！

さて、ここから守護騎士達が出てくるまで日常&儀式編かな？

では、ここまで読んでくださり、ありがとうございました

第七話　意外な所で過去との決着（前書き）

はい、今日もチーズを作っておりました

やっぱしっかりしたものを作るには、大変な工程を踏むんですね……

しかも、コストも掛かる……

牛乳４０?を使って出来るチーズは大体４？

１０分の１です

そして、価格を計算すると

大体牛乳の値段が？３５円だとすると

４０×３５は１４００円

価格だけ聞くと、あんまりコスト掛かってないじゃんとか思いますが

酪農家にとっては、結構な額です

だから、家の牛乳を使って作ったので……１４００円もらったと言う事になります

それに、光熱費、水道代なども含まれる、加工食品は……すっげぇ金使う……もうパネェは位な感じですねはい

さて、あんまし為にならない話をしてしまいましたが

本編始まります

第七話　意外な所で過去との決着

「ほな、買い物行こうか！」

唐突に、はやてが言い出す。

「買い物？」

「そや、ここに住むんやったら、ある大抵の物は必要になるやろ？」

確かにそうだ……。
俺らは荷物を整理する前に逃げて来たから、持ち物はデバイスと、魔法で空間にしまってある魔具位の物だろう。
それに、今着てる服も、ここ日本ではかなり浮いている。

「あ、でもアニス君……命狙われとるんやったな……」

「あ、それなんだけどさ。それはただアンクが大げさに言ってるだけで、実際は家でして来ただけなんだ、それで、ボディーガード達が捕まえに来る、とかそんなだからさ、気にしないで」

「そ、そやったんか？もぉ、アンクさんあんま大げさに話すからつ

いつい信じてもうたわ」

「あはは、ごめんね。それで、買い物何だけど。行くよ、僕も逃げて来たから、必需品持って来てなくて」

「やろうなぁ。ほな！ご飯食べたら行こうか！アンクさんも、それでえぇな？」

「あぁ、俺は別に構わない」

あ、でもお金無いんだっけ……あったとしても、あっちのお金だから使えないんだけどね。
さて、どうしたものか……。

「あ、アニス君今、お金の事心配したやろ？」

「なっ！？読まれた！？読心術か！？すげぇ！はやてすげぇ！おっさんの次にすげぇ！」

ドゴッ！

「むきゅっ！」

「キャラ崩れてるぞ、いい加減その癖直せ」

「……あ……あぁ～……し、身長が縮む……」

「あ、あはは……アンクさん、あんまりアニス君を殴らんとって、暴力は禁止やで？」

「……あ、今０，５ｍ縮んだ……」

アンクに頭を殴られたせいで身長が少し縮んだ……解せぬ！
それにしても、良い拳骨だった、まさかこの年で拳骨されるとわ……いや、普通か。

「お金の事は気にせんでええぇ、ウチの親戚の人が、結構な金額のお金を送ってくれるんや。でも、こんな体やから、そんなにお金使わんねん。せやから貯まる一方でな、ウチ一人やと使い切れんのや」

親戚……ギル・グレアムか……。
あいつ、俺嫌いなんだよね～、多くの犠牲より小さい犠牲ってのは良いけど……ただの復讐心に駆られてる奴のは、どんなに言葉を並べても復讐にしかならない。
しかも、はやては関係無いだろ。はやても被害者だろ……。

「ん～……でも……」

「気にせんでえぇって。無一文なんやろ？せやったら頼ってぇな」

「……取り敢えず、返す手立てがないので体で払います……」

バキッ！

「ガキが益せたこと言ってんじゃねぇ！」

またもやアンクの拳骨……。
だから背が縮むから止めろと……また縮んだじゃねーか……。

「じ、冗談だよぉ～……一々殴らなくても……」

「あっははは……さ、朝ご飯にしよか」

そう言って、はやては車いすで移動してキッチンに向かう。
やっぱり、車いすだと不便だろうな～……。

「はやてちゃん、手伝うよ」

「あ、ありがとうな、アニス君」

「ほら、アンクも手伝って」

「はぁ……」

そんなこんなで、居候始めました……。
はい……体で払う云々は、一応バイトして稼ごうと思ったんだけど……このナリと年齢じゃあ無理だわ……翠屋は……客寄せパンダになりゃ行けんじゃね？
男の娘がウェイトレス！とかさ。
へ？女装っ気？無いですけど何か？

「あ、アンクお皿出して」

「この戸棚で良いのか？」

「あ、大丈夫ですよ」

「アンク、箸出して」

「この引き出しに入ってるか？」

「はい、合ってますよ」

「アンｋ「お前も何か手伝え！」えへへ～、バレちった」

まぁ、当たり前だよね～。
それにしても、やっぱはやては料理上手いな～。

「さて、盛り付け盛り付け」

「あ、それ俺がやるよ」

「そか？ならお願いするわ」

盛るぜぇ～、超盛るぜぇ～！
とは、流石にいかないよね……限度って物があるし。

「さて、運びますか」

お盆におかずやご飯を乗っけて運ぶ。
後は色々と用意をして、席に着く。

「ほな、いただきます」

「「……いただきます」」

あれだ、いつも家ではトリコ風の挨拶をしていたから。
俺とアンクは少し戸惑ってしまったんや……。

「……もぐもぐ……」

「あ、あの……どや？」

「……うん、美味しいよはやてちゃん」

「そっかー、安心したで」

うん、マジで旨い……あぁ、何年振りだろうか……日本食を食べるのは……。

アニス感動……うめぇうめぇ……味噌汁うめぇ……。

「またそうやって汁物ばかり……野菜食え野菜」

「うるさい、年がら年中アイス食ってる奴に言われたくないよ」

実を言うと、俺は汁物系の物が好きなのである。
味噌汁、スープ、ラーメンやうどんやそば……まぁ、汁入ってりゃ何でも行ける。

「ホンマに二人は仲良しさんやなぁ～」

「まぁな。こいつとはもう九年の付き合いになる」

「へぇ、産まれた時から一緒何か～」

「そうなるな」

「アンクったらこう見えてすっごいお節介焼き何だよ?この前何て、俺がちょっと擦りむいただけ何に、いそいそと消毒液と絆創膏片手に走って来たんだよ」

「あはは、アンクさんもアニス君が大好きなんやね」

「ふん……」

あ、顔背けた……もぅ、照れちゃって。
この九年間で見つけたアンクの癖。それは照れたり嬉しい事があったりすると、こうやって顔を背けるのだ。

「あらら、嫌われてもうた」

「違うよはやてちゃん。顔を背ける仕草をする時は、決まって照れてる時だから」

「アニス～！」

「うわっ、こわっ！めちゃくちゃ怖い！いや、くちゃくちゃだ！くちゃくちゃ怖い！あはははー！」

「ったく……」

「冗談だよ冗談。怒らないでよ～アンク～」

「ふん……」

まぁ、これは怒ってると言うより、少し呆れてる感じかな？
でもいつもの事なので、気にしなーい。

「ごちそう様」

「あれ？アニス君もうえぇの？」

「うん、もうお腹一杯」

「ったく、そうやって汁物ばかり飲むから入らないんだよ。今度からちゃんとした物を食え」

「いや、汁物もあるけど、食が小さいから仕方ないじゃん」

それに、この体結構燃費良いしね。
あんましカロリー使わないし、良いね、低燃費……今はやりの低燃費……略してＴＮＰ。

「だから背が伸びないんだ」

「まぁ、背についてはどーでも良いけどね」

だって、大きくなっちゃったらアンクに抱っこしてもらえなくなるもん！
人間は、いつまで経っても甘えたいものなんだよ……。
それに、神様に頼んで背はあまり伸びないようにしてもらってるし。

「でも男の子なんやから、やっぱり背ぇは大切やで？」

「まぁ、そうだけどさ～」

「八神の言うとおりだな」

うるせーアンク……。

「んじゃ、ちょっと腹ごなしに動いてくる～」

「あんま激しく動いたら腹痛くすんぞ」

「分かってるよ。あ、はやてちゃん、庭借りても良いかな？」

「何をするのか分からへんけど、まぁえぇよ」

もう何かいつもののが体に染み込んでるんだね。
訓練とかしてたし、仕方ないか……。
そう思いながら、俺は庭に出る。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ハッ！フッ！」

一応軽くシャドーをしてるお。
とは言っても……決まった型とかは持ってないんだけどね。
強いて言うなら、自分の魔力を爆発させて相手に流すとか、ぶつけるくらいしか出来ない。
あれ、ソウルイーターの魂威みたいな感じかな？

「ふぅ……良い汗掻いた〜」

パチパチ！

拍手が聞こえたので、俺は家の窓の方を向く。
そこにははやてが顔を出して拍手をしていた。

「ありゃ、見てたの」

「まぁ、居間の前でやられてれば、見えてまうで」

「確かに」

「はい、タオル」

「ありがとう」

俺ははやてからタオルを受け取って、汗を拭う。
うむ、我ながら惚れ惚れするのぅ……この髪の毛……。

「それにしても、アニス君髪の毛結構長いな～。切らんの？」

「いや、短くしようと何度も試みたけど。その度にお母さんに止められるんだ。勿体ないって」

「あはは、ウチもよう分かるわ。アニス君の髪、綺麗やもん」

「ありがとう。結構大変なんだよ?手入れとかさ」

「せやろな～。流石にウチもそこまで伸ばした事無いから、実際は分からへんけど」

「因みにアンクも今の髪型が良いって言って止めてくるんだ」

「ほんま、アンクさんはアニス君の事好きなんやな～。でも……流石に犯罪やで……」

「あはは、犯罪って。そもそも俺は男だし、アンクにしてみても、対象外でしょ」

「そやね」

俺とはやては話しながら笑う。

今日出会ったばかりなのに、何でこんなに話が弾むんだろうか?

「さて、運動が済んだなら、買い物行くで?」

「うん、分かった」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「すんまんなぁ、押してもろうて」

「ガキが何遠慮してんだ、少しは大人にも頼れ」

「あはは、ウチも言われてもうた」

「あれは嫌な事件だったね……」

まさか車いすを押そうと思ったら、車いすと少ししか身長が変わらなくて、押せなかったとか……。

車いすの長さは、大体９０~１００？が一般……まぁ、はやてのも一般の車いすなんだけど……。

まさか俺、１００？位しかないとか……。

まぁ、身長何て無くても良いし、戦闘に有利だから良いんだけどね！

「まさか車いすも押せないほど小さいとは、俺も思わなかったぞ…

…」

「うん、俺も……」

あっちの世界では背を測るだのの概念があまり無い。
故に、俺は今の今まで自分の身長を知らなかった……。

「ウチでも１３０?程度やねんけど……」

「３０?の差とか……アンク……マジデカイ」

アンクは大体１７０強ってところかな?
７０?さか……まぁ、嫌いじゃないわ!!

「さて、先ずは服買おか」

「いきなり高く付きそうな物を選んだね……」

「大丈夫や、安く手に入る場所があんねん」

「へぇ〜、どんな店なの?」

「しま○ら」

……あのやっすくて、大きい服も取り扱ってる店か……。
あそこ、結構良い感じの服とか売ってるから好きだわ。
某水原薫さんって人も大好きなしま○ら……。

「あ、ここやここ」

そこにはマジでしま○らと書いてある店があった……。
だが、平日だから、そこまで人が居ない。
つか、はやては常連だから大丈夫だろうけど、俺とアンクは何て言われるだろうか……。
今の時間は学校の時間だし……って、アンクより俺じゃん。
アンクは大人だし、良いのか。

「ほな入ろうか」

そう言って、はやてはアンクと一緒に店の中に入って行く。
あ、置いてかないでよぉ～！
俺はすぐさま二人を追いかけるために走りだす。そして、店の中にｉｎ。

「うわぁ～、凄いいっぱい売ってるんだね」

「せやろ～？」

「あ、ワイシャツ発見。おっ！スパッツもある！寝間着確保！！」

「ちょい待ち！」

「ん？どうしたのはやてちゃん」

「それが寝間着何か！？ボケやろ！それは関西出身のウチの対してのボケやろ！！」

「いや、ボケじゃないし、ふざけてもいないよ？これが俺の寝間着」

「……ホンマに？」

「諦めろ八神、こいつはここに来る前もそうだった……」

あぁ、アンクが遠い目をしてる……何か辛い事でもあったんだね。
それにしても……ここのし○むらは凄いね……。

何かコスプレの服も扱ってるよ……。
あ、今某腋巫女の巫女装束があった……。すげぇなここ……。

「……アニス……まさかあれ着たいとか思ってないだろうな？」

「そんなわけないでしょアンク。第一、俺に女装っ気は無いし、サイズがないでしょうに」

「あ、１００？の超絶ロリ使用って書いてる奴がある……」

「はやてちゃん、それをすぐこっちに持ってくるんだ……」

「言ってる事がさっきと違うじゃねぇか！！」

「あはは、冗談だよ冗談。ほら、はやてちゃんも冗談で言ったんだしさ」

「いや、ホントにあるねんけど……」

「なん……だと……」

どうやら俺の知ってるしまむ○は……死んだようだ……。
何でこんなこんな物を売り出そうとしたし……。

「あ、あれは……」

少し遠めの所に、キチッとした服が、一式飾られてある。

「ほぉ……懐かしいな」

アンクは俺の視線に気づき、その服の所まで行き、それを見る。
そう、その服とは……オーズ本編でアンクがいつも着ていた服があったのだ。

「……懐かしい、ね」

「何だアニス、悪いか？俺が懐かしいと思っちゃ」

「べっつに～」

少しムフフとなっただけやねん……。
まぁ、気にせんといて……。

「アンクさん、その服がええんか？」

「……」

アンクはその服をじっと見る……昔を懐かしがっているのか……その目は今を見ていない。
過去を見ている……そう言う目だ……。
そして、アンクは一回視線を逸らし、フッと、自嘲気味に笑い。

「いや、他のを探す」

そう言って、アンクは他の所に行ってしまう……。
……過去と、決着付けたのかな？

アンクサイド

「はぁ……」

こんな所で、まさか……昔の事を思い出すとは……。
映司……比奈……伊達や後藤……今思うと……あれはあれで、結構面白い奴らだったと、そう思えてくる。
特に、映司……。

（楽して助かる命が無いのは、何処も一緒だな……）

（人の命より、メダルを優先させるな！）

（ありがとう……アンク……）

「っ！……あぁ、そうか……」

俺は、まだ捨てきれなかったんだな……。
あいつに、掴む腕は俺じゃないと言っておきながら、俺はあいつの腕を、まだ掴んでいたいらしい……。

「アンクー！」

「……」

ふと物思いに耽っていると、いつもの声が聞こえた……。
俺は後ろを振り返り、そいつを見る。

「もう、どうしたのさ？」

「何がだ？」

俺のパートナー、アニスが、そこに居た……。

「捨てきれないんでしょ？」

「……まぁな」

「……俺じゃ、頼りないかな？」

「……」

「別に、俺の為に、その思いを捨ててくれとは言わないよ。そんなのは、ただのエゴだ。確かに、俺は映司みたいに、強くは無いよ……精神面で、アンクには凄い迷惑を掛ける……戦闘も、アンクのお荷物になっちゃうけど……その……俺も頼ってよ？」

「……」

「アンクは俺を守ってくれるって言った……俺、すっごい嬉しかっ

たんだ。あのアンクが、俺の事を思って言ってくれたんだって……」

……思い出したくもない事を……。
だが、確かに俺は言った……その事実は揺るぎない。

「だから……こう言う事位しか言えないけど……俺にも頼ってよ？
俺ばっかり、アンクに守ってもらってばっかじゃ、嫌なんだ」

その言葉一つ一つ、俺は聞き漏らさずに聞く。

「だから……頼ってよ。俺が迷惑かけちゃう分、俺にも迷惑掛けてよ。ね？だから……うわっ……」

全く……俺より小さくて、頼り甲斐が無くて、馬鹿ばっかする奴だけど……。
言葉だけは一人前な奴だ。

「アン……ク……？」

「バーカ、誰がお前に迷惑掛けるかってんだ。もう少し、大きくなってから言え」

俺はそう言いながら、ワシャワシャとアニスの頭を撫でる。

「身長は関係ないでしょっ！」

「大ありだ。そんな小さい奴に、頼ってくれって言われても、困るだけだ」

「酷くね！？」

「……気にすんなよ」

「え……？」

「お前は今のままで良いんだよ。俺に迷惑掛けるとか、掛けれとか……そんなのはどうでも良い。俺はお前さえ居れば、それで良い……それが俺の生きて行く理由になる……」

「……アンク……」

全く、調子狂うな……。

いつもこの調子だ、こいつは……何か突拍子もない事やるくせに……何でこう言う時だけこう何だか……。

「えへへ、アンクに頼られちゃった」

「？俺は頼った覚えは無いが？」

「だって、アンクは俺が生きてるだけで、生きる理由になるんでしょ？だったら、俺がずっと生きてなきゃ。ほら、俺を頼ってる！えへへ……嬉しいな」

「……ふん」

ドガッ！

「った……！」

アニスの頭に置いていた手を、手刀に変えて振り下ろす。

「お前を守るのが俺だって事、忘れんじゃねぇ」

「……だ、だからって……チョップしなくても……」

「ふん……それじゃ、俺は服を選びに戻る」

まぁ、精々頑張って守るとするか。
小さい小さい……大事な欲望(アニス)を……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～

アニスサイド

「いやぁ、いっぱい買ったなぁ！」

あれから俺達は、日常品やら何やらを買い。
さっきまで今日の夕飯の材料を買っていた。

「はやてちゃん、何作るの？」

「ん～、今日は家族が出来たお祝いって事で、色々や！」

「そっか、色々か。楽しみだなぁ～」

「あぁ、そうだな」

「……」

「どうしたアニス。鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をしてるぞ？」

「……アンクがそんな事を言うようになったとは……俺聞いてない……」

一体どうしたんだアンク……お前が楽しみって言うの……初めて聞いたぞ……。
いや、実際は言ってないが、同意をしたのは初めてだ……。

「何だ？俺が夕飯を楽しみにしちゃいけないのか？」

「えへへ、いや、嬉しくて。やっとアンクが素直になったんだなって」

「俺は素直だが？」

「どーだか」

「はいはい、そこの二人。イチャイチャ禁止やで禁止」

「イチャイチャ何てしてねぇ！」

「アンク……酷い……」

「お前も乗ってんじゃねぇ！」

ドスッ！

「あふん！！」

アンク　は　チョップ　を　し　た。

アニス　に　１００　の　ダメージ　を　喰らわせた。

……今何か頭の中にモニターらしきものが……気のせいだろうか……。

じゃっかんドラクエ風だった気が……。

「変な声出すな！」

「……やっぱアニス君……女の子やないんか？どやったらそんな高い声出んねん……」

俺もそれは知らない……もしかして俺、変声期にスルーされたりすんのかな？

まぁ、こんなナリで若本みたいな声とか、小杉さんみたいな声は嫌だし……それはそれで良いのかなぁ……。

「良いもん！はやてちゃんとイチャイチャするし！！」

「へっ？ウチ！？」

「ｏｈ……まさか、はやてちゃんに嫌がられるとは……」

まぁ、当たり前だろうね。会ってたかだか数十時間。まだ一日すら経ってないと言う……。

でも少しショックだね……原作キャラにはなるべく嫌われたくないお……。

「いや、嫌と言うか……そこでウチに振られた事に驚いただけや」

「何だ、そうだったのか。なら安心したよ」

「……やっぱ、アニス君は可愛ぇなぁ……頭撫でたる」

「えへへ～、何か知らんが褒められた」

「……はぁ、男が可愛いとか言われて喜ぶなよ……」

あら、俺はカッコよさより可愛さを追求してます故。
だってこんなナリの奴がどう足掻こうと、可愛いに変換されるに決まってんじゃん。
まぁ、そんな容姿を選んだのは、紛れもない自分自身何だけどね。

「ほな、さっさと帰って料理作ろうか！」

「賛成！」

「まぁ、もう少しで陽が暮れそうだしな」

そう言って、アンクははやての車いすを押し始める。
くそぅ……先ず一番の問題は……どうやってはやての車いすを押す

かだ……。
これは……手ごわい相手になりそうだ！

第七話　意外な所で過去との決着（後書き）

声優、水原さんも御用達のしま○ら

俺も結構重宝させてもらってます

あそこ、結構大き目なサイズあるから好きやねん

……あ、ピザじゃないよ？

ちょっと、小学生の時に、水泳、野球、空手、サッカーなど、色んな少年団に入り、野球は部活で入り

平日の月・木、野球、水泳、空手をやり

他の平日、火・水・金では野球とサッカーをやり

休日は土曜に野球と空手、日曜日は野球と……何か小学生がやるにしちゃ、マジで体を壊しかねない様な事をやってたら、筋肉がヤバい事になりました

腹筋割れてます……ふくらはぎの筋肉もマジありえねぇって感じになってます……

しかも筋肉質な為余計に……

っと、また話が……

それにしても、はやて可愛いな～

あ。感想とかで、アニスにしてほしいコスプレを受け付けます

二期が終わった後の日常編で、腋巫女のコスさせてぇ～な～

たぶん東方とかが多いと思います

だから、どしどし他のコスを送ってください！

では、今日はこの辺で

読んでくださりありがとうございました

第八話　アニス、魔王と出会う（前書き）

いや～、疲れた

今日は町のイベントで着ぐるみ着てガキどもの相手をしてました

駄目だ、子供嫌いだわ俺

二次なら許せるが、リアルだと無理あるね

はい、本編始まります

第八話　アニス、魔王と出会う

アニスサイド

～朝～

「……ん……ふぁ～……」

やぁ、おはよう……どうやら朝の様です……。
朝はあれだ、嫌いだ。朝が苦手なのだ……口調も定まらないし、思考も変な方に行くし……。

「……顔……洗お……」

とりあえず、目を覚まさせたいので、予めはやてに聞いていた洗面所の場所を目指す。
確か、リビング通って行かないとなかったはずだ……。
俺は何の躊躇いも無く、リビングのドアを開けた。

「あ、アニス君おはよ……」

入った瞬間、挨拶をしようとしたはやてが固まった……。

固まんなし……俺の顔に何か付いてるのかな？

「……なな……何やねんその恰好は！！」

「……ふぇ……？」

格好？……あぁ、この寝間着か……これはワイシャツ、継ぎ目すら無い綺麗なフォルムだろ？
いや、継ぎ目はあるんだけどね……あぁ、変な事しか考え付かん。

「誘っとんのか！！」

「……誘う？……何に……？」

「……ウチ……やってけるかな……」

なんかはやてが遠い目をしだしたよ？何か辛い事でもあったんだね。
今度和菓子買ってやるから元気出せコノヤロー。

「……顔洗ってこよ……」

はやてが何か悩んでるみたいだからそっとしといてあげよう。
あァ、俺って何て気遣いが上手いんだろうか！流石俺！自画自賛してやんよ！

「……ふぁ、アンクおふぁよ……」

「……取り敢えず一発殴らせろ」

「え……何で……」

ドゴッ！！

「っつぅ～……何すんだよ！？これ以上俺の脳細胞を死滅させないで！俺の脳細胞のライフはとっくに０よ！」

「何でそんな恰好でうろついてんだ！普通の服着てから起きて来い！」

「……もしかして、アンク以外の人に肌を見せたから怒っｔ……オーケー、冗談だよアンク。だからその手に持っている包丁を降ろそうか……ゆっくりとだ……」

あぶねぇ、何で包丁持ってんのか不思議だけど。包丁を握ってるアンクにだけは、冗談は言わんとこ。
たぶん本気で切り刻まれるから……。

「取り敢えずアンクの拳骨で目が覚めたので、顔を洗う必要性が無くなったわけだ。んじゃ朝ご飯の用意でも……」

「だから服着て来い！目の毒だ！」

「酷い！アンクはこの恰好がお気に召さないのね！？だったら下のスパッツを脱ぐわ！……オーケーアンク……その両手に持ってる出刃包丁と良く熱されたフライパンを降ろそうか……ゆっくりとだ……」

ヤバいヤバイ、ついネタに走ってしまった。
さっき包丁持ってるアンクにネタを振るのは駄目だと学習したはずだぞ俺。
次やったらたぶん命は無いぞ俺……少し落ち着こうか……。

「つう訳で昨日買った服に着替えてきまーす」

仕方ないよね、アンクが止めろって言うんだし。
それよりもさっきからはやてがうんうん悩んでるのは、俺のせいではない筈……。

さて、服でも着ようかね。

～割愛～

「アンク～、服着て来たよ～。似合う似合う～？」

「あぁ、似合ってる似合ってる……」

ちょっ、明らか棒読みやんけ……。
アニス悲しい。それよりも、まだはやては何か悩んでるわけ？
さっきからぶつぶつ言ってるけど……時折変な言葉も聞こえて来るけど。

「……アカン……ここは鋼の精神や……間違い起こしたらアカンでウチ……まだ会って二日目……」

……これってスルーしてもオーケーな感じだよね。
そして、誰かツッコンでよ！今の俺の格好、スパッツに上半袖だよ！？ツッコンでよ！
仕方ないのでパーカーを着る……ちぇっ、誰かツッコンでよ……。

「おいアニス、皿出してくれ」

「あ、分かった～」

取り敢えず俺も気にしない方向で行く事にした。
カオスな八神家だねこれ……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「んじゃ、俺この町探索して来るわ！」

「お前一人でか？」

「うん！」

「……何か心配になってきた……」

とりま朝ご飯食べて少し経った辺りどす。
少しこの町の事を知っとこう……特に翠屋行きたい。それに、大体今原作に入ってるのか入ってないのか知りたいしね。

「まぁまぁアンクさん。アニス君なら何とかなるから大丈夫ちゃうか？」

「いや……こいつだったらフラッと誰かについて行きそうだから怖いんだ……」

「んな訳ないっしょｗｗｗ。今日は休日だから、怪しまれずに行動できる！こんな日を逃してなるものか！という訳で、行ってきます」

俺はスタッと立ち上がり、そのまま玄関の方に駆けて行こうと思った瞬間。
アンクに腕を掴まれて動きを止められる。

「キャッ！？な、何だよアンク！びっくりするじゃんか！」

「まてアニス。お前、まさかその恰好で行く気じゃないだろうな？」

「……へ？駄目？」

「当たり前だ！スパッツ脱いで普通のズボン穿け！」

え～、お気に入りなのにスパッツ……。
こんなに動きやすい物は二つとない！……いや、ブルマも動きやすかったな……確か。
よし、今度はそれで行こうか。採用。

「良いじゃんか別に～。こんなチンマリした九歳の男の娘に欲情する変態ロリショタコン野郎がこんな真昼間から出るわけないじゃん」

「そんな事心配してねぇ！俺は世間体を考えて言ってるんだよ！」

「……あぁ、確かに。このまま出てけば近所の人に目が付き、尚且つアンクが外に出れば……アンクがこんな格好させてるのかと、有らぬ誤解を生み、そのままアンクは刑務所行きか……それは避けたい」

「何で俺のせいになるんだよ！！」

「だって、アンクしか大人の人いないじゃん。あ、そうだ！いっその事はやても履かない？スパッツ」

「いや、ウチはどっちかって言うとブルマの方が……」

「八神も真面目に答えてんじゃねぇ！！」

一々うるさいねぇ。人の格好にとやかく言わないの！めっ！だよ！
まぁ、仕方ないので、そこは譲ってやったよ。
真面目にズボンを穿いたぜ……ちくしょう……。

「スースーするの……」

「普段スパッツばっか穿いてるからだ！」

「……ズボンの中に穿いちゃ駄目？」

「駄目だ」

「ブーブー。分かりましたよ！んじゃ、行ってきまーす」

少し不機嫌モードなアニスたんのお通りですよー。

「……アンクさん、良く耐えられますね？」

「何がだ？」

「ぶっちゃけ、アニス君に欲情したりせぇへんのですか？」

「ブーーッ！！……するわけないだろうが！あいつは男だぞ！？お・と・こ！分かってるのかお前は！」

「いや、アニス君可愛いし。たまに何かの手違いで欲情せぇへんかな～と」

「ガキがそんな事言うんじゃねぇ！」

アニスが出て行ってから、直後の語らい。
二人とも危ない話をしてますね～、ツッコミが来い。

アニスサイド

「ふんふふ～ん♪」

良いねぇ、こうアスファルトの上を歩くと、日本なんだな～と感じるよ。
まぁ外国もアスファルトだけどね……。

「ここが海鳴市かぁ～、すげぇな～」

自然は少ない物の、それを補う海があり。
公園にはそれに見合う自然がある……っつくしー、調和だ。まさにハーモニーだ！

「らんらら～ん♪」

いや～、ついつい鼻歌を歌いたくなっちゃうねこれ。
こんなに気持ちの良い朝は初めてだよ。さて、先ずは何処に行こうかな～。

「あ、ぬこだぬこ。おいで～」

「にゃ～」

おっ、寄って来た！何だこいつ！甘えるぞ！？
可愛い、むっちゃ可愛い！あっ！指ぺろぺろした！あぁ～、可愛いな～。

「えへへ～、何だコノヤロー。可愛いなコノヤロー」

飼いたいな～。でも、八神家にはもう少ししたら犬が来るしな～。
あ、犬じゃなかった、狼だっけ？まぁ、変わりは無い。

「んじゃなぬこ～」

「にゃ～」

俺は名残惜しいが、ぬこと別れを告げた。
くそっ、可愛いぬこだったぜ……お持ち帰りしたい！っが！たぶん
アンク辺りに、元の場所に反してこい！って突っぱねられそう。
アンクのバーカバーカ。

「さて、目的地を絞ろう」

まぁ、翠屋位しか行く所ないだろうな～。
まだなのはと会ってないし、フェイトも今居るか分からないし。
それに、原作も始まってるのか始まってないのか……それが今一番
気になってる事。

「しょうがないし、もう翠屋行っちゃうか」

友達がはやてしか居ないし、ちょうど良いか。
なのはとも友達になろうかね……あぁ、本当はすっごくなりたくな

いねんけどな……。
魔王だし……怖いし……砲撃魔だし……トリガーハッピーだし……
魔王だし。

「ま、まぁ……臆せずに行こう！　おー！」

俺は一人で意気込みながら歩いて行く。
あ～、この身長で歩幅小さいから、あんまし歩きたくないなー。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～

「ここ……何処？」

何か行き辺りばったりな感じで進んでたら、迷ってしまった。
っかしいな～、ここら辺じゃなかったっけ？まぁ、知らんけど。

「さて、困ったな……」

「何が困ったなの？」

「あぁ、聞いてくれよ～。それがさ～……って……誰だお前は……」

何か一人で喋ってたら、誰かが入って来たよ。
やぁね～、独り言に入って来ちゃって……アニス君、そう言うの感心しないな～。
へ？独り言して痛い子みたいに見られるよりましだろって？ですよねー。

「私？私は高町なのは！」

「……へっ？」

魔王様が降臨なさいました……。

第八話　アニス、魔王と出会う（後書き）

ちょっｗｗｗｗ終わり方ｗｗｗｗｗ

まぁ、続きは今日の夜にでも書きますよ

さて、気づいた方居ましたか？

アニスのツッコンでほしかった格好……

……その恰好のモデルは……

能美・クドリャフカ！そう！彼女の格好なのです！

まぁ、リトバス本編ではドロワーズとかアオザイだったりなんですが

これは抱き枕の奴の格好なのです！

いやぁ、やはりスパッツはジャスティス！あのムッチリ感……正直たまりません

そして、感想でアニスとアンクがバカップルに見えると頂いたのですが

……見返すと砂糖吐きそうなほど甘々なシーンが所々……

でもアニスのえへへ～が書きたいので止めません！

だから、言っただろ？

アニスは受け何だって！！

第九話　アニス、魔王と仲良くなる（前書き）

はい、昼ごろにあげた続きです

とりまアニスは可愛い……

そう思う作者なのでした

本編始まります

第九話　アニス、魔王と仲良くなる

前回のあらすじ

俺、死ぬかもしんない……

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「……こ、こんにちは」

一応、挨拶はしておこう。それが礼儀だ……魔王にとっての礼儀だ。

「こんにちは。どうしたの？何か困った事でもあった？」

……うむ、何だろうか、このお姉さん口調は……。

まさか、この私が君より年下に見えるかね？……あ、見えますか。ですよねー。

「えっと……少し道に迷いまして」

「そうなの？じゃあ何処に行くのかな？お姉さんが連れてってあげるよ」

おぅ、案の定そうでした。この子、俺を同い年と見てませんねこれ。あぁ、こう言ったデメリットや不祥事が起きるのか。なるほど把握。

「えっと、翠屋って分かりますか？」

「……にゃはは……それ、家の店だね」

「おぉ、マジか！っと……あの、お店まで案内してくれませんか？」

「にゃはは、お安い御用だよ。それじゃあ行こうか」

そう言って、俺の手を取り繋ぐなのは……。

いや、恥ずかしいのでやめてください……俺は一応、手を握られるのを回避する。

「あ、嫌だった？」

「あの、俺一応九歳なので、子ども扱いは止めてください……」

「……」

あ、なのはが固まった。
最近俺の周りの人は良く固まる～、そんなに固まるのが流行ってるのだろうか？

「えぇぇぇぇぇぇぇ！！」

「っ～……はぅ～……み、耳が……」

お前はトリコに出てくるゼブラか！
サウンドバズーカか！？それともサウンドミサイルなのか！？どちらにしろゼロ距離で放つな！鼓膜破けるだろうが！

「わ、私と同い年！？こんなに小さいのに！？で、でも、女の子だったら少しくらい成長が遅れてる子も……」

「だが男だ」

「……」

おっと、オカリンの台詞を使ってしまった……。

「えぇぇぇぇぇぇぇぇ！！！」

今度は事前に耳を塞いでいたので、耳がキーンってなる事は無かった。
まぁ、それよりも……。

「あの、お店案内してくれないんですか？」

「あ、ごめんごめん。それじゃあ行こうか」

なのははまだ引きつった顔をしてるけど、それでも何とか案内しようと体を動かす。
こうなったのは俺のせいではあるまい……。

なのはサイド

こ、こんなに可愛い子が同い年で男の子な筈がないの！
ありえないよ……絶対に！

「……どうしたの、高町さん？」

「あ、ううん！何でもない何でもない」

やっぱり、見れば見るほど、女の子にしか見えない……。
やっぱり嘘をついてる？でも、そんな嘘をついても特なんて何もないし、第一私達は会ったばかり。
じ、じゃあ本当に……。

「……高町さん？」

「は、はい！？」

「どうしたんです？本当に。さっきから顔が愉快なオブジェに変わってますよ？」

「そ、それってどう言う事かな？」

「……いや、変な顔をしていたので……」

そう言って、無表情に戻る彼（？）
その顔は整っていて、髪も私より長く、良く手入れが行き届いているのが分かる。

そして、何より圧倒的なのは……その身長！私とかなりの差があるの。

……やっぱり、信じられない……。

「……あの、さっきからコロコロと顔が変わるのは、何かの癖なのでしょうか？」

「ふぇっ！？」

「俺の顔をじろじろ見て、悩みだしたかと思えば、いきなり否定的な顔になり。でもやっぱり的な顔になったかと思えば、やっぱり否定的な顔に戻ったり」

うっ、全部読まれてるの……。

「まぁ、大方。俺が男だと信じ切れてないだけだと思いますけど」

「……ごめんなさい……」

「謝らないでくださいよ、もう慣れてますから。こんなの許容の範囲内です」

「で、でも……それでも……君を傷つけちゃった……かもしれないし……」

「……アニスです……」

「えっ……？」

「名前ですよ。そう言えば、高町さんは名乗ったのに、俺は名乗ってなかったじゃないですか。アニス・クロイツベルです。以後お見知りおきお」

そう言って……彼はニコッと笑った……。

あぁ、もう男の子か女の子かなんてどうでも良いの……取り敢えず……この子は可愛い、それで良いの！

アニスサイド

何やらなのはから嫌な視線が送られて来たが、スルーの方向で。

それにしても、こいつコロコロ顔変えてたな。全く、人の話は素直に信じてほしいわ。

まぁ確かに、自業自得ではあるけども。それでも、ねぇ？

「あ、ここが翠屋だよ」

「おぉ、ここが……」

喫茶翠屋……またの名を、魔王の巣窟。
ここに入ったパーティは最後……骨の髄までしゃぶり尽くされると言う恐怖の館……。
おぅ、考えただけで寒気が。怖い怖い。

「ありがとうございます」

「あ、ううん！全然良いよ！どうせ帰る途中だったんだし」

「そうですか……では、これで」

俺はなのはにそう言って、翠屋の中に入る。

「いらっしゃいませ～。喫茶翠屋へようこそ」

そこは……魔王の巣窟何かじゃなかった……。
フワリと甘い匂い漂う店内……だけど、ただ甘いだけじゃない……
コーヒーの苦みや紅茶の渋みの匂いも飛び込んでくる。
更には店内の雰囲気とマッチしており……それは凄く、美しく映っ

た……。
っつくしー……これぞ調和！ハーモニーだよ！！

「あ、あの。どうしたのかな？」

「はっ！すいません、つい呆けてしまいました」

ヤバいヤバい……凄く遠い所に行ってしまった。
流石人気店。やはり伊達じゃない……よもやこの俺が魅了されるとは……侮りがたし、喫茶翠屋……。

「あら、小さいのに礼儀正しいのね。お母さんとかは来てないの？」

「あ、自分一人で来ました」

「お使いかしら？偉いわね～」

そう言いながら、俺の頭を撫でてくる。
えっと……誰だっけこの人？確か高町……。

「桃子、どうしたんだ？」

そう！桃子さんだ！思い出した思い出した！
いやぁ、頭ん中のモヤモヤが綺麗に晴れた！これでスッキリだわ！

「あぁ、士郎さん。ちょっと、小さいお客さんと、ね」

桃子さんは士郎さんに向けてウィンクをする。
けっ！リア充爆発しろ！イチャイチャすんな！砂糖吐きそうなほど甘ったるいぜ。

「おや？本当だね。お母さんのお手伝いかい？」

「あ……その……」

ついつい押し黙る。さっきは然程気にしなかったか……もう一回改めて言われると、キツイ物が……。
あぁ、鬱だ、死のう……つうか首吊らせて死なせてくださいお願いします……。

「お母さん、買って来たよ～。あ、アニス君、まだ選んでなかったんだ」

「あ、高町さん」

その時、厨房からなのはが出て来た。
どうやら裏口から入って着替えたのだろう……ウェイトレス姿でした。
羨ましい……俺も着てm……いやいや！俺に女装っ気は無いんだ！

「お帰りなのは。知り合い？」

「にゃはは、帰る途中に知り合って。どうやらここに来る途中に迷子になっちゃって。それで案内したの！」

「へぇ、そうなのか。偉いななのは」

士郎さんは笑いながらなのはの頭を撫でる。
そして、なのはは恥ずかしそうに笑いながら、それを受け入れる。
ふと、士郎さんの撫でる手が止まる。

「ん？アニス、君？」

あ、そこ気にしちゃう系ですか。
まぁ、そうですよね～。貴方の娘さんもそうでしたし。

「君、男の子なのかい？」

「あ、はい。それと、高町さ……なのはさんと同い年です」

ここには今高町の性が三人いるので、ごっちゃにならないように下の名前を呼んだ。

士郎さんは驚きで目が見開かれていたが、桃子さんはあらあらみたいな顔で士郎さんを見ていた。

何故驚かないし、桃子さん……。

～割愛～

「あの、ケーキ買いたいのですが。良いですか？」

「えぇ、どうぞ。好きなのを選んでくださいね」

……うむ、良い笑顔だ。これが俗に言う、接客笑顔なのだろう。

まぁ、桃子さんのは本当に笑ってるだけなんだろうけど。

さて、ケーキを買うにしても、何を買おうか……。

アンクはアイスしか食べないから、ケーキを買っても食わないかもしれん。

はやては食べるな、間違いなく。翠屋の名前くらいならはやても知ってるはずだ。
当然、その旨さも。

……ここはやはり、当店人気のシュークリームが無難だろうね。
後はショートケーキにやチョコケーキ。ショコラも置いてある。可愛いな～。

こう言った甘い物、ケーキとか作ってアンクに上げたら喜ぶかな？
それとも、食べてくれないのかな？アイスしか食べないアンクでも、俺の作った物なら！

「……えへへ～……」

自然と顔が綻ぶ。
そうだ、今度日頃の感謝も込めて、ケーキを作ろう。
幾ら不格好でも良い……必要なのは相手を思いやる気持ちだって、誰かが言ってたな。

「あ、あの……アニス君」

「？どうしたんです？高町さん」

「あ……あの……その……わ、私と友達になってください！」

……いきなり何言ってんだ、この砲撃魔は……。

んだァ、その思わせぶりな表情は……あ、思わせぶりじゃない、本気。

あややや、こんな俺と友達になりたいとか、凄い変わった子ですね

この子。

「あ、はぁ。良いですけど……」

「本当に！？ありがとう！」

「……何でそこまで喜ばれるのか分かりませんが、よろしくお願いします」

「あ、、こちらこそ……。そ、それとね」

「まだ何かあるんですか？」

「その、敬語……使わなくて良いよ？同い年何だし、それに、下の名前で呼んでほしいの！」

「……うん、分かった。よろしく、なのはちゃん」

ははは、キミの頼みは断れないです。
元ネタ知らん人は、某動画サイトでうろ覚えでエルシャダイって検索してみろ。
まぁ、エルシャダイはもう古いが。俺は好きだ！

「………わ～………」

……何かなのはが呆けちゃったけど、気にしない方向で行きます。
さて、何を買おうかな～。

～～

「ありがとうございました～」

はい、買い終わりました。それにしても、すっかり話し込んじゃったな～
あの後、ケーキを選んだのは良いけど、なのはがちょうど休憩に入ったんだ。
それで、なのはが俺を誘って、一緒にケーキ食べながらお話ししよう？って言われたんだ。

……背筋が凍るように冷たくなったのは……気のせいだと思いたい。

しかも話が弾み、桃子さんと士郎さんからお昼をごちそうになり。
お昼を食べたらまたなのはと喋り、美由紀さんとブラコンが帰って来て、美由紀さんに愛でられ。
ブラコンは俺が男だと分かるといきなり襲いかかってきたが、士郎さんが取り押さえお説教。

俺は最後に、獣と言って止めを刺した。
そんでもう夕方です。いやぁ、すっかり話し込んじまったよ！
アンク、怒ってないと良いな～……。

そんな事を思いながら、俺は何とか迷わないではやての家に着きました。
……玄関から異様な殺気を感じるのは……嘘だと思いたい……。

「た……ただいま……」

「随分遅かったな、アニス……」

「ひぃっ！！」

そこには腕を組み、仁王立ちで待ち構えていたアンクの姿が！！

「ア、アンク……」

「今までそこほっつき歩いてたんだ？怒らないから俺に話してみろ？なっ？」

あぁ、顔は笑ってるのに、どうして目だけ笑ってないのでしょうか？答えは単純明快！怒ってるからでーす！！
何それワロエナイ……。

「ア、アンク……」

「何だ？」

「……もし素直に話たとして、許してくれる？」

「……内容次第だ」

良い笑顔で突っぱねられました～。

でもやっぱり目が笑っていませんでした……。
そして、素直に話したら拳骨一発と、俺がどれだけ心配したか分かってんのか、と、くどくどお説教されました。
はやても同様です。
取り敢えず……ごめんなさい……。
あ、ちなみにだけど。まだ原作は始まってなかったお。ユーノもレイハさんも居なかったし無かったお。

オ・マ・ケ

「アンクアンク！」

「何だ？」

「ケーキ買って来たんだ。はやてちゃんの分もあるから、一緒に食べよ？」

「わぁ、ケーキ買って来たん！？やったでぇ！」

「ふん、俺は甘い物はあんまり好きじゃないんだ」

「何だよ～。せっかくこの町一番人気の喫茶店、翠屋のケーキとシュークリーム買って来たのに」

「マジかいな!?あの人気の!?はぁ、一度でえぇから食べてみたかったんや、そこのケーキ」

「喜んでくれて嬉しいよ。アンクも食べようよ?」

「だから、俺は!」

「じゃあ、さ……俺がアンクの為にケーキを作ったら……さ。その、食べてくれる?」

「……ふん……」

「……アンク?」

「……まぁ、食べてやらん事もない」

「「……ツンデレ乙」」

おぉう、はやても同じ事思って口に出したのか……。

アニスたんびっくり……。

第九話　アニス、魔王と仲良くなる（後書き）

現在のフラグパロメーター

アンク：ツンとデレの狭間辺り

はやて：ただ今理性と格闘中

なのは：まだまだだね、後百ゲームは行けるよ？

全くわけわかめ

アンクはツンとデレの狭間と言っても、城壁が五重位なので一筋縄じゃいかないです

その点、なのはとはやてはアンクほどでは無い

でもまだ落ちちゃいないよ

だって、まだ会って数日そこら

流石に落ちないよ

では、今日はここまで

次回は儀式の話を書きたいな～

読んでくださりありがとうございます

第十話　儀式と契約（前書き）

今日は一段と寒かったです

まさかジャンパーを家に忘れて、ジャンパー無しで部活に出るハメになるとは

まぁ、自業自得か

忘れた俺が悪い

本編始まります

第十話　儀式と契約

結構な日が過ぎた。

俺ははやてとどんどん仲良くなり、休日には翠屋に行き、なのはと話す。
そんな事をしてる内に、なのはとも仲良くなった。

そして、ふと思ったんだ……。

「儀式って、いつやんの？」

っと……。

〜〜〜

少し俺は、だらけ過ぎた様だ。
本来の目的を、少しばかり忘れていた……。

「と、言うわけでアンク。儀式っていつやんの？」

「……はぁ？」

アンクに聞いてみた所、何言ってんだこいつみたいな目で見られた。
いや、聞いてないんかい、神様に……俺もいつやるは聞いてないけどね。

「儀式？」

「あれ、やっぱり聞いてないの？」

「あぁ、初耳だな」

「ありゃりゃ……」

神様ェ……ちゃんと説明しようよ……。
俺は神様から聞いた事を全てアンクに話した。全く、神様もちゃんと話しておいてくれよ～。

「……大体分かった」

「そう、良かった……それで、儀式っていつやんのかな？」

「それは俺に聞かれても分からん。あいつに直接聞くしかないだろう」

「そうだよね～」

どうやって神様と話そうか……そう考えていた時、俺の首に掛けていたデバイス。クイーンがいきなり光りだす。
俺はびっくりして、少し短い悲鳴を上げてしまった。

「な、何でクイーンが光りだしたの!?」

「さぁな」

……ま、まさか……ね。
神様が通信してきた……何て事は無いよね？

《あー、あー……テステス……おぉ、元気か！アニスにアンクよ！》

「……予想通りだコノヤロー」

今この場にはやてが居なかった事を感謝するがいいおっさん。
はやてが居たら魔法バレする所だった……まぁ、しても良いんだけどね。
これから起こる事を事前に伝えおけば、心構えがまた違ってくるしね。

「あぁ、俺は元気だ」

「俺も元気だよ！」

《そうかそうか。それより、儀式の事で何か話があると聞こえたのじゃが》

おっさん、神様の癖に地獄耳かよ……すげぇなこのおっさん。
どんだけハイスペックよ……あぁ、神様だからか……。

「うん。それがさ、一体儀式って何をすれば良いの？それと、儀式っていつやるの？」

《まぁ、大方そんな所じゃろうと思ったわい》

「知ってるんだったら早く話してくれても良いだろう！」

《ははは、すまんすまん。それじゃあ、簡単に儀式の内容と、いつやるのかを決めよう》

そんな簡単に言って良いのか……？
それに、いつやるのかも決めれるのかよ……。

《先ず、何をするかじゃが。簡単じゃ、悪魔を倒せば良い》

「悪魔を？」

《そうじゃ。悪魔をじゃ》

「まぁ、悪魔の加護って言うし、やっぱり悪魔を倒したりすんのかなとは思ってたけど」

《それを、数回やるのじゃ》

「数回ねぇ。分かったよ、基本的に悪魔を倒せば良い。それも数回……ルールは？」

《倒しさえすればそれで良い。もちろん、アンクと協力するもよし、

斬魄刀をフルに使うもよしじゃ》

「分かった！それで、いつやるの？」

それが一番知りたい事だ。
自分自身、もう儀式何てやらねんじゃね？とか思ってたし……。

《そうじゃな～。お主はいつやりたい？》

「いや、俺に聞かれても。て言うか決めれるの！？」

《基本、悪魔は融通聞くぞ？》

えぇ！？あちら側結構アバウト！しかもあっちが協力してくれるのかよ！？
うわぁ……何か、悪魔さんごめんなさい……。

「それって、倒しちゃ可愛そうなんじゃ……。悪魔さん達が率先してやってくれるんでしょ？」

《いやまぁ、悪魔のご加護を人間に与えちゃったこちら側の不手際なので気にしないと申してたしのぅ……》

「……悪魔さん……ごめんなさい……」

貴方達は良い人だ！いや、良い悪魔だ！このおっさんより優しい！俺なんかの為に儀式してくれるなんて……。

「そ、それじゃあ……明日の夜、はやてが寝静まったころにでもお願いしようかな？」

《うむ、分かった。言っておくぞ。それと、死にたがりを抑えてる様じゃが、少し晴らしておかないと、いつか重くのしかかって来るぞ？それでは！》

そう言って、神様の声は聞こえなくなり、クイーンから発せられる光は消えた。

さて……どうしようかな～。

「アンクアンク～。悪魔さんに菓子折り持ってった方が良いかな？」

「俺に聞くな。て言うか、悪魔に菓子折り持って行く奴なんて初めて見るわ」

「いや、だってあっちの不手際とか言われても……実感湧かないんだもん……それに、さ。この死にたがりを治す為に儀式するのに……もしかしたら……消えないかもしれないって言われちゃったんだ」

そう、それは一番最初。神様に初めて会った時に言われた言葉。
別に、これが治らなくても、今の俺はちゃんと抑えられている……
でも、いつかはそれが出ちゃう事があるだろう……。
今は、アンクもそうだけど、はやてが居る……なのはも居る。
だから、これを克服したい……。

「あの……アンク……俺に力を貸してくれないかな？あ、嫌だったら良いんだよ？強要はしないよ、これは俺個人の問題なんだしさ……うん……アンクは関係……ない事だし……」

「……はぁ……」

ギュッ……。

「ふわぁ……」

不意に、俺はアンクに抱きしめられる……。
い、いきなり何だよ～、変な声出ちゃったじゃん！

「そんな今にも泣き出しそうな顔で言われても、説得力ねぇんだよ。バーカ」

「ふわぁ！やっ！ちょっ！耳元で喋んな！」

「……やらせろよ、俺にも……」

「ふぇ……？」

「手伝ってやる。それで文句無いだろ？」

「……アンクぅ～……ありがと～……」

やっぱアンクは優しいな！
良かった、嫌だって言われたら泣いちゃう所だったよ……ふぅ、助かった。

「あ、でも……あまり悪魔さんを痛めつけないでね？」

「はいはい、分かった分かった」

「うん！オッケー！」

よし！これで大丈夫だ！
あ、でも……悪魔さんの方が強いって事もあるかも……まぁ、斬魄刀を使って頑張ろう！
その時、この部屋のドアが開かれる。

「アニス君、アンクさん、ご飯やで～って……失礼しました……」

バタン……。
何故かはやては顔を真っ赤にしながらこの部屋を出て行った……。
そして、それを見た瞬間アンクは俺から離れると、すぐさまはやてを追いかけに行った……。
あれ？俺なんかした？……まぁ、分からないや。

「もう、アンク……」

やんちゃになっちゃって……アニスたん嬉しい！
あのアンクが、ここまで感情豊かになるなんて……素晴らしい！！

「はぁ……アンクぅ……」

……あぁ、やっぱ……もの凄く依存しちゃってるんだな俺……。

……いやいや！危ない方向じゃないよ！？俺とアンクは同じ男！いくら俺が女の子みたいな顔でも、アンクは嫌でしょうに！お、俺は……まぁ……来るものは拒まず？いや、でも……アンク限定かも……でも！俺はゲイじゃないし……普通に女の子が好きだし……。

「……結論、どっちでも良いや」

もう、この際どうでも良くなっちゃった。
だから、ご飯食べに行こ～っと。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

そしてあっちゅう間に次の日、はやてが寝静まった頃。

「さて、アンク行こうか」

「そうだな……所で……」

「ん？どうしたの？」

「……何処でその儀式はやるんだ？」

……時が止まった……。
あぁ、場所、決めてなかったっけ……どうしよう……。
そう思った時、昨日みたいにまたクイーンが光だし、いきなり喋りだした。

《場所について知りたいのじゃな？》

「あんた見てるだろ。絶対上から見てるだろ……」

《何の事じゃ？》

うわ、こいつ嘘下手だ……。
八橋やるからもう少し嘘磨いてこいコノヤロー。つうか、もしかしてこのおっさんに入浴シーンを見られてたり……。

《それで、場所じゃったな。この家の外に出れば、すぐにでも始め

られるぞい？》

「マジかよ……でも、音とかヤバくない？もし結界を貼るんだとしても、管理局にばれちゃうよ？」

《そこは抜かりない。ちゃんと魔力を感知されない様に貼ってある。それに、斬魄刀や他の魔法を使ってもばれないようになってるぞい》

「おぉ、流石神様だな。至れり尽くせり乙」

《それじゃあ、健闘を祈る。ではの》

そして、クイーンの発光は止んだ……さて、それじゃ行きますか！俺とアンクは靴を履き、玄関のドアを開けた……。

「……ほぅ」

先ず言葉を漏らしたのはアンク。
短い言葉ながらも、普段アンクが上げない声なので……十分アンクが驚いてるのが分かる。

「……あ、あれは……」

少し周りを見渡すと、少し遠めの所に、人影が見える。
たぶん、あれが悪魔さんなのだろう……。
俺はバリアジャケットを展開して、アンクは翼を展開して空を飛ぶ。

少し移動してから、悪魔さんも気づいたのだろう、俺達の所まで飛んで近づいてきた。
あぁ……何でそんなに優しいんですか？

「こんにちは」

「あ、こんにちは……」

「……ふん」

「今回はこちらの不手際で、悪魔の加護を授けてしまい申し訳ありませんでした。貴方様の事情は良く把握しています、差支えが無ければ、このまますぐにでも第一回の儀式を執り行いたいと思います」

うわぁ……めっちゃやり難い……凄く低姿勢何だけどこの悪魔さん……。
今、俺の中の悪魔のイメージが崩れ去り、目の前の悪魔さんのイメ

ージが築き上げられた。

「あ、あの……もし悪魔さん達が、僕に倒されちゃったら……消えちゃうの？」

「いえ、確かに消えますが。それは地獄に戻るのと同義なので、大丈夫ですよ。貴方はお優しい方なのですね……」

「あ、ありがとうございます……」

えへへ～、褒められちゃった……。

「それでは、始めましょう。私の名はザゼルと申します」

「あ、アニス・クロイツベルです。それで、こっちはアンクって言います！」

「分かりました。それでは、儀式を始めましょうかアニス君」

おぉ！一発で俺が男だって分かった！
すげぇ、悪魔さんすげぇ！

「手加減は一切不要です。2対1でもよし、いきなり全力で掛かってくるもよし。さぁ、掛かって来なさい！」

「分かりました！行きます！」

俺は先ず、デバイスの剣でザゼルさんと対峙する。
ザゼルさんは武器も何も持たず、自らの肉体で俺の剣を防いだ。そして、そのまま流れるように蹴りを加えられ、吹き飛ばされる。

「くっ！」

「まだまだですよ！」

「っ！？速い！」

「はぁ！！」

ドカッ！！

「かふっ！……ちぃっ！」

ブン！

追撃を加えられたけど、そのまま反撃に転じ、フック寄りのパンチを繰り出すが、簡単に避けられてしまう。

「ハァッ！」

ドンドンドン！

アンクが後ろで火炎弾を出して援護してくれる。
だけど、ザゼルさんはそれを全て素手で払い落す。

「そんな物！」

お返しとばかりに、ザゼルさんは大きな火の弾を作りだし、アンクに飛ばす。
アンクは旋回してそれを避けるが、ザゼルさんがその隙に一瞬で回り込み、アンクを殴り飛ばす。

「くっ……アニス！こいつ強いぞ！斬魄刀を使え！」

「分かってるよ！……こい！」

俺は一振りの斬魄刀を取り出す、そして、始解のキーワードを唱える。

「射殺せ、神槍！」

ビュン！

もの凄い速度で斬魄刀の刀身が、ザゼルさん目掛けて伸びる。
だけど、それをザゼルさんは紙一重で避け、こっちに突っ込んでくる。

「やっば！」

「まだまだですね！」

「ちぃっ！ラシルド！！」

障壁じゃ間に合わないので、ここはラシルドを使うことにする。

でも……強度が心配だなこれ……。

ドン！

「くっ！少し、固いですね……でも！」

ピシ、ピシピシ……バカン！！

「砕けないほどじゃない！！」

くっ！やっぱり突破された……何てね。

「月牙……」

「なっ！？」

俺はラシルドを視覚にし、瞬時に神槍から斬月に変え、魔力を込めて月牙の構えを取っていた。

いっけぇ！

「天衝！」

シュン！！

黒い月牙がザゼルさんに向かって行く。
ザゼルさんは防御の構えを取るが、月牙の勢いがあり過ぎて、吹っ飛んでしまう。

ドン！

「ぐっ……はっ……」

「バインド！！」

ガチン！！

これ以上俺は戦いたくなかったので、ザゼルさんをバインドで動けないようにする。
あぁ、体が痛い……でも、初めてだな、お父さんやアンク以外の人と戦うの。人じゃ無いけど……。

「はい、降参してくれるよね？」

俺は斬月の切っ先を向けて、魔力を込めながら言う。
ザゼルさんは観念した顔になり、苦笑する。

「えぇ、私の負けで良いです。いやぁ、お強い！こんなに強い人と戦うのは久しぶりでした！あぁ、出来るならもう少し戦いたかったですけど……それでは、これで第一回の儀式が終了しました」

ふぅ、これで第一儀式終了か……でも、ザゼルさん顔に似合わず戦闘狂なんですね……。
シグナムとやらしたらいつまでも戦ってそう……。

「それでは、最後に契約に移りたいと思います」

「へ？契約？」

「あれ？聞いてないんですか？アニス君が私に勝ったら、貴方の使い魔になって一生を守護するよう命じられたのですが？」

「……えぇぇぇ！？」

「何だと！？」

あ、アンクも流石に驚くよね。
て言うか俺聞いてないよ！あの馬鹿神様！また重要な事だけ言い忘れてやがったな！

「ち、ちなみに……俺が負けた場合って……どうなってたんですか？」

「アニス君が負けたら、私が貴方を食べてました、性的な意味で♪」

「……ふぇ！？」

「おい！アニスに何言ってんだ！」

た、たたたた……食べられるって……しかも性的な意味で！？
うわわわわわ！か、勝てて良かった……。

「あれ？もしかしてザゼルさんって……女性？」

「えぇ、性別的にはそれであってます。でも、私はまだ女性と言われるような年齢ではありません。まぁ、人間の年齢で言うなら、裕に１００歳は超えてますけど」

「そ、そうなんですか……」

さ、流石悪魔さん……規格外すぎるぜ……。

「それでは、契約に移りたいと思います」

「あ、はい……」

「それでは、頂きます♪」

「へっ？」

ザゼルさんはそう言うと、俺の所に近づいてきて、首筋に口を添える。

最初は軽い甘噛みから入ってきた。

「ふぁっ！」

「ぶーーーっ！！」

そして次に、そのまま一気に首筋を咬み。

チュー、チュー……ゴクン。

俺の血を吸って行った。
しかも、痛み何て一切感じない……あるのはただ、快楽のみ、だから俺は。

「ひやぁぁぁぁぁ！！」

終始喘いでました。
あぁ、顔から火が出るほど恥ずかしい……死にたいな……。

「……っく……はぁ、ご馳走様でした。これで契約は終了しました。それでは、私を呼びたい時は、使い魔召喚と唱え、最後に私の名前を呼んでください、そうしたら私が出てきますので。では」

「あ、おいまて！！」

アンクがザゼルさんに掴みかかろうとしたが、時すでに遅し。
ザゼルさんは既に何処かに消えてしまった……。

「おい、アニス！大丈夫か！」

「ハァ……ハァ……アン……ク……」

「どうした！？何処か痛むのか！？」

「ハァ……ハァ……違うの……か……体が……ハァ……ハァ……熱くって……ドキドキが止まらないのぉ……きゅう……」

そして、俺は意識を失った……。

次の日、あの後俺はどうしたのかアンクに聞いたら。
そのまま目を回して気を失ったらしい。たぶん、ザゼルさんが吸血した時に、痛みが生じないように、最初の甘噛みで媚薬効果のある何かを注入してたらしい。
それも、次の日に、ザゼルさんを呼んで聞きました。

いやぁ……俺、もう一生媚薬何て体に混入されたくない……そう思った俺なのでした……。

第十話　儀式と契約（後書き）

ザゼルの予想ＣＶは三瓶由布子さんです

ハガレンのプライドの声の人です

あの人の声は凄く好きなので、それの感じに合うように書いてしまいました

そして、やはりそこは受けなアニスたん

まさか人生初の媚薬を盛られるとは……

でも、私は媚薬はもう出さないかも……たぶん……

久々の戦闘が書けたので、取り敢えずは満足

まだ斬魄刀はいっぱいあるな～

さて、無印の話どうしようかな～やっぱ傍観かな

……うん、傍観で良いや

今度はアニスとはやての絡みを書ければなと思ってます

ここまで読んでくださりありがとうございます

第十一話　正直に話そう（前書き）

今日もさみー

だから布団に入っていたい今日この頃

あれだね、寒いと炬燵が欲しくなってくるね

ちょっと倉庫から引っ張り出してこようかな

さて、本編始まります

第十一話　正直に話そう

はやてサイド

も、もう我慢できひん……。
アニス君が悪いんや、アニス君が可愛いのが悪いんや！

「アニス君！」

「ん？どうしたの？はやてｔ、キャッ！？」

「アニス君かわえぇよ～」

何やろう……アニス君を見てるとこぉ……抱きしめたくなるんはどないしてなんかな？
母性本能がくすぐられると言うか、何と言うか。

「は、はやてちゃ～ん……恥ずかしいよ～」

「いっつもアンクさんに抱きしめられとるのに何言うとんねん！」

「あーうー、幾らアンクが居ないからって、些か大胆過ぎだよはやてちゃん……あうあう……」

そう、今アンクさんは絶賛就職活動中。
アニス君は年齢的に働けないので、必然的にアンクさんが仕事を探して働くと言う事になっている。
就職と言っても、アルバイトやねんけどな。
うちは別に気にしてへんのに。

「アニス君のその恰好、他の人に見せたらアカンよ？」

「寝間着は人に見せる物じゃないよ～、はやてちゃん離れてよ～。苦しぃ～」

「ホンマ、こう近くで見ると……どう見ても女の子にしか見えへんな～……胸揉んでみるか」

「ひゃっ！は、はやてちゃん！？だ、だめ！くっ、あははは！く、くすぐったいよ！あはははは！！」

「あぁ……幸せや……」

「こ、こんなことで幸せを感じないでよ！？あぁ、ワイシャツがシ

ワくちゃに……もぅ、はやてちゃんが僕を膝に乗っけたいなんて言い出すから……」

「あはは、すまんなぁ。アニス君が可愛すぎるから、どうしても歯止めが効かんくなってまうねん」

「ぶーぶー。結構恥ずかしんだよ？」

「……もうかわぇぇなぁ！」

顔を赤らめて上目づかいで言われても説得力の欠片もあらへん！もうアニス君は妹！ウチの妹に決まりや！性別？アニス君の前では塵にも等しいで！

「アニス君～、ウチホンマ幸せや～」

「……はやてちゃん」

「両親が亡くなってもうて……足が不自由になってもうて……ウチ、寂しかった……学校にも行けへんし、病院から帰って来ても、誰もお帰り何て言ってくれる人……おらんかったし……ご飯を作っても、美味しいって言って、笑ってくれる人がおらんかった……」

「……」

「ホンマ、アニス君とアンクさんには感謝やで……不謹慎やけど…
…アニス君がここに逃げてきてくれて、ホンマ良かった……」

「……はやてちゃん……」

「何や……？」

「……魔法って、信じる？」

アニスサイド

今までの事を思い出して泣いているはやてを見ているのが俺には出来なかった。
寂しいとはやての口から出るのを見ていられなかった。
そして、今がとても幸せだと言って笑うはやてを見ていられなかった。

これから始まる悲劇を、これから動き出す運命を……。
何も知らずに、今が幸せだと言って、俺に笑いかけてくれるはやての笑顔を見て……俺は俺を許せなくなった。

たぶん、俺が手を出さなくても……なのは達が終わらせる。
むしろ、俺が手を出さなければ、物語は改変されなくて済む……だけど……俺ははやてに嘘をつきたくなかったし、はやての笑顔を、守りたくなったんだ……。

「ま、ほう……？」

「そう、魔法」

「あはは、アニス君、夢見すぎやで。このご時世に魔法て……そんなんある訳ないやん」

「それが、あるとしたらどうする？」

「……せやな～、取り敢えず、見せてもらいたいわ」

「……だったら、見せてあげるよ」

「へっ……？」

俺ははやての膝から立ち上がり、はやての目の前に立つ。
そして、極限まで魔力を抑え、クイーンを起動させる。

「クイーン、セットアップ」

《了解しました》

バリアジャケットを纏い、ブリジットと同じ格好になる。
はやては目を丸くして、俺を見ている。

「まぁ、魔法と言っても……少し科学的だけどね」

「……か……かわぇぇなぁ！何やねんその修道女みたいな恰好は！？似合いすぎや！」

「い、いや、はやてちゃん……結構真面目な話なんだけど……」

「はっ！カメラ！カメラどこや！？アニス君のこんな可愛い格好、いつ見れるか分からへん！……いや、いつも見とるか」

「……お……お願いだから、俺の話を真面目に聞いてほしいんだけ

ど……」

「あ、あぁ……ごめんごめん。それで、それが魔法なんか？」

「うん、そうだよ。まぁ、これだけじゃ実感湧かないと思うけど……これだけで信じてくれたら嬉しいんだけど……」

「……まぁ、アニス君がこんなしょうも無い嘘を付く子やとは思えへんし……うん！信じたる！そ、それにしても……いつもはワイシャツで隠れとる足が見えとる……しかもスパッツやから……あ、アカン……鼻血が……」

「お、お願いだから、もっと落ち着いてくれると嬉しいんだけど」

「む……ムチムチ……」

「お願いだから落ち着いてぇぇぇぇぇぇ！！」

〰〰

「さて、落ち着いた？」

「ふぅ……それで、魔法の話やったな」

け、賢者タイム……だと……。
はやて、あの間奏の間に何してきたんだ……。
取り敢えず俺はバリアジャケットを解除して、話を続ける。

「はやて……実は俺、この世界とは違うから来たんだ……」

「違う世界？」

「うん……そこは……そうだね、魔法の世界って言っても間違いないかもね。俺はその世界から来たんだ」

「……ちょっと待ってぇな……せやったら、逃げてる云々は嘘やったんか？」

「ううん……それはホント……俺は逃げて来たんだ、あの世界から。俺の一族、クロイツベル一族の手から……」

「クロイツベル……一族……？」

「そう、俺の一族。……俺は、産まれちゃいけない存在だったんだ。その昔、俺の一族の一人が……それはもう、化け物の様に強かったんだ……だから、その人は皆に恐れられて、殺された。その生まれ変わりが、俺」

「……」

「だから、俺は……その一族から命を狙われる事になったんだ……その時、お父さんとお母さんが戦ったんだけど……連れて行かれちゃって……俺はアンクと逃げたんだ……この世界に……」

自分が力を使いすぎたせいで、あんな事が起きた。
俺が引き起こした悲劇……いや、自業自得なのかもしれない……。

「……いきなり、魔法だとか、世界だとか言われても困っちゃうよね……ごめん、はやてちゃん」

「……アニス君……」

「……何？」

「アニス君は、ズルいで……」

「……えっ？」

「そんな事、隠しとったんか……。しかも、命狙われてない言うてたのに、そっちが嘘やったんか……」

「は、はやてちゃん？」

「そこに座りぃ！！」

「は、はい！！」

いきなりはやてが大きな声を出したので、俺はびっくりしてはやての言う事を聞いてしまう。

「えぇか！ウチらは家族や！！隠し事はするなとは言わへん！！せやけどなぁ、産まれたらアカンだとか、困っちゃうよねとか！！そないな事言わんといて！少なくとも、アニス君が産まれてへんかったら、ウチは今も一人のままや！せやから……そないな事……言わんといて……」

そう言って、はやては泣き崩れてしまった……。

「は、はやてちゃん!?」

「うぅ……アニス君……グスッ……居なくなったり……せぇへんよな？」

「……うん、俺は絶対に居なくならないよ……」

「アニス君……」

「はやてちゃん……ありがとう」

「ふぇっ？」

「はやてちゃんのお蔭で、少し気が楽になったよ」

「……ふふ、そうか？……なぁ、アニス君」

「何？」

「……抱きしめてくれへんかな？」

「……はぅ……お、俺から？」

「乙女を泣かせた罰や、さぁ、覚悟決めぇ」

くっ……それを言われると……かなり痛い……。
……仕方ない……俺ははやてを車いすから抱き上げて、抱きしめる。

「ア、アニス君……大胆過ぎや……」

「う……うるさい……」

もう駄目……恥ずかしい……。
あうあうあうあうあうあうあうあう……。

「……すー……」

「うぇっ！？ちょっ、はやてちゃん！？」

ね、寝ちゃってる……。

でも、はやての寝顔可愛いな〜……俺ははやてを床に置き、すぐさま部屋から毛布を持ってきて、はやてに掛ける。

「泣き疲れちゃったのかな？」

悪い事しちゃったな……。

アンクにも言わないと、はやてに魔法バラしちゃったって。怒るかな？

……はぅ、それはそれでしょげるわ……。

あ……はやての寝顔見てたら……俺も眠くなってきちゃった……。

俺ははやての横で眠ってしまった。

〜〜〜

「ただいま〜」

はぁ、何とかバイト先を手に入れた。

まぁ、何とも魔力が高いガキが一人居たが、関係者ではないので害はないだろう……。

それにしても、静かすぎる……。

いつもならアニス辺りが走って来て抱き着いてくる筈だが……。

俺は靴を脱ぎ、居間に向かう。

「……あぁ、静かな理由が分かった」

八神が寝ている傍らで、アニスがはやての手を握って眠っている。
傍から見たら姉妹に見えるな……っと、アニスは男だったな……日に日に女っぽくなってくるから複雑だ……。

「……取り敢えず、グリード、撮っとけ」

《あいよ》

何となく写真にとっておこう。
……た、他意はねぇよ！ただたまにデバイス使ってやらないとあれだと思って使うだけだ！！

第十一話　正直に話そう（後書き）

キンクリと急展開にワロタｗｗｗｗ

どうしてこうなったｗｗｗｗ

さて、ここでフラグパロメーターを見ましょう

アンク：負けるものかぁぁぁぁぁ！！

はやて：アニス君……お持ち帰りしてもえぇか？

なのは：まだだ！まだ落ちんよ！

はやてぇぇぇぇぇぇ！！お前が一番目に落ちたのかぁぁぁぁ！

まぁ、俺の意図です、さーせんｗｗｗｗ

後ね

ナツブラがあと三回で終わるんだって……

……緑川さぁぁぁぁぁん！嘘だと言ってぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！！

いやぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！

はぁ、はぁ、すいません、取り乱しました

さて、また明日も頑張りますか

そろそろ死にたがりが顔を出すぜぃ

ここまで読んでくださりありがとうございます

第十二話　アニスの異常性（前書き）

今日はもうあれだね

修学旅行の話で盛り上がったね

来月の始め辺りに修学旅行行ってくるんで、その話合いしてました

みんな、自分勝手すぎやろ……

本編は始まります

第十二話　アニスの異常性

アニスサイド

「ハァ……ハァ……」

洒落になってねぇよ……これ……。
ヤバい……体が言う事を効かない……。

ガン！ガン！ガン！

「ハァ……ハァ……」

さっきから俺は、意識を保つため壁に頭を打ち付けている。
もう、何度ぶつけたか分からない……頭の皮膚は切れ、血が噴き出ている。
にも関わらず、俺は一向に止めることをしらない。

「ハァ……ハァ……」

まさか、こんな朝早くから出るとは思わなかったぞ……。

ガン！ガン！ガン！

「ハァ……ハァ……」

頼むから……収まってくれ……これ以上……は、俺も……意識を……。

持って行かれる……流される……。

その時、この部屋のドアが開かれる……。

「アニス、朝だ……ぞ……。おい！！お前何やってんだ！？」

「ハァ……ハァ……ははは……やっと……来てくれた……」

アンクがこの部屋にやって来たのに、俺は一向に頭を打ち付けるのを止めない。

そろそろ、本気でヤバいよ……。

「血が出てるぞ！もう止めろ！」

「ハァ……ハァ……簡単に言うなよ……結構、正気を保つので精一杯……何だよ……」

「……まさか……」

「ハァ……ハァ……そう……その……まさかだよ……もう、頭の中で、ガンガンうるさいんだ……」

殺して殺して殺して殺して殺して殺して殺して、死にたい死にたい死にたい死にたいって……。

「アン……ク……もう、無理……だから、俺を縛り上げて……。後、口も何か加えさせて縛って……何するか分からないし……下を咬んで死ぬかもしれない……」

「そ、そこまで……」

「早く！……もう……無理……手遅れに……なる前に……」

「ちぃっ！はやまんじゃねぇぞ！！」

「ははは……死なない……よ……」

そこで、俺は意識を失った……。

アンクサイド

くそ！何もこんな朝早くに出なくても良いだろうが！
俺は急いでアニスの部屋から出ていき、リビングに向かう。

「八神！」

「は、はい！？」

「何か縛るものとタオル無いか！？」

「あ、それやったらキッチンの戸棚の中に、ビニール紐と、洗面所にタオル干してありますよ」

「分かった！」

急いで持って行かないと、あいつが何を仕出かすか分かったもんじゃない！

部屋に戻ってきて、辺り一面血の海とかだったら絶対に嫌だぞ！！

「アンクさん、そないに急いでどうしたん？」

「今は構ってる時間はねぇ！！」

俺は八神を無視して、そのままアニスの部屋に走る。

「アニス！！」

「……アン……ク……」

部屋に戻ってみると、そこには目に光が無く、うつろになっているアニスが居た。
俺が部屋に入って来たのに気づき、俺の所に目線を向ける。

「……死に……たい……」

「ふざけんな！何が死にたいだ！まだ両親見つけてないだろう！」

「……もう……無理……」

震える声でアニスは良い、目をきょろきょろさせる。
そして、俺が持ってる紐に目が留まる。

「……アンク……その紐……ちょーだい……？」

「何……言ってんだよ……お前……」

「紐……ちょーだい……首……吊って死ぬから……」

「正気に戻れ！！自分が何言ってんのか分かってんのか！？」

「……死にたい……死にたい……死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい死にたい……！」

「ちぃっ！！」

俺はアニスの押さえつけ、手首と足首を縛り上げ。
口に猿轡の様にし、タオルで縛る。

「むーっ！　むーっ！」

「……何か、酷い絵図らに……」

アニスは頭から出血し、手足は縛られ口も塞がれている。

「むーっ！！　むーっ！！」

「しばらくそのままで、頭冷やしやがれ」

そう言って、俺はアニスの部屋のドアを閉める。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜

「……むぅっ……」

「……何だ？」

「アニス君、起きてけぇへんなぁ」

「……今日は、まだ寝かしといてやれ」

「……アンクさん、何か隠してへん？」

「……何でそう思う」

「アニス君は、隠し事……魔法の事や、自分の事を話してくれた。
でも、アンクさんからはまだ何にも聞いてない」

……あいつ、バラしたのか……。
ったく、お人好しも、ここまでくれば呆れて来るな。

「……まぁ、そこまであいつが話したんなら、そこまでお前を信頼
してる証拠か……」

「ふぇっ！？」

まぁ、こいつが原作キャラ……だったか？
その立ち位置に居るから話した可能性も高いけどな……。

「……八神、この話を聞いて、あいつを軽蔑したり、怖がったりし

ないか？」

「……いきなり何を言い出すんですか？ウチがアニス君を軽蔑するなんて……そないな事考えられへん」

「……そうか……だったら教えてやる……」

俺は、アニスの死にたがりについて、簡単に八神に説明した。昔は酷かったが、今は自分の意志で抑えている。だが、箍が外れるとすぐに自我を保てなくなり、目につく物全てで自分を傷つけ、自分を死に晒すような事を繰り返す。と。

「……それじゃ、アニス君は今……」

「あぁ、今日がちょうどその日にぶち当たっちまった。だけど、今さっき紐で縛り上げて来たから大丈夫だろ」

「ひ、紐とタオル持ってったんはその為か！？……マニアックやな～……」

「違う！勘違いすんな！！何がマニアックやだ！！」

「でも、九歳の子を縛り上げるなんて……少しやり過ぎとちゃいますか？」

「いや、そうでもしないと、本当に首を吊りかねなかったし、何かで自分を刺しかねなかった」

「……そんなに酷いん？」

「見に行くか？今頭から出血して酷い事になってるが」

「って！そないな事何でサラッと言うねん！せやったら血ぃ流し過ぎで今気を失っとんのちゃう！？」

「……おぉ、そういう事もあるのか……」

「何でそんなに落ち着いてるんですか！？はよぉ見に行きますよ！！」

俺は八神と一緒に急いでアニスの部屋に行く。
勢いよくドアを開け、そこに居るであろうアニスを見る。

「うわぁっ！？やっぱり気ぃ失っとる！？しかも血が止まってへん

！？」

「ア、アニス！！」

……とにかく、アニスは死にたがりを発動しても、気を失っても、
手が掛かる奴だと、今日身に染みた……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜

「いやぁ、恥ずかしい所を見せちゃったね」

おはよう、っと言っても、もう夕方何だけどね〜。
何か一回気を失って目が覚めたら死にたがり消えてたよ〜。

「全く、心配掛けやがって」

「えへへ〜、ごめんねアンク。ほらほら、抱きしめて良いよ〜？ご
褒美ご褒美〜、キャハハ！」

「じゃあお言葉に甘えて……」

「ちょっ！？はやてちゃんは禁止！胸揉んでくるから嫌だ！って、言ってる傍から！？あはははは！や、やめて！くすぐったいって！あははははは！」

いやぁ！はやて胸揉まないで！くすぐったいから！そして痛いから！……あぁ、やっと地獄から解放された……。

「それで、どうなんだ気分は」

「うん、少し腫物が引いた感じだよ。でも、まだ全部晴らした気分ではないよ」

「……そうか」

「いやぁ、それにしても、些かマニアック過ぎたねあれ。まさか人生初のＳＭ紛いな事をやるとは、しかも自分からアンクにやってって言うとか……あぁ、恥ずかしすぎて、過去の俺をぶん殴りたいよ」

「あはは、まぁ、頭から血を流しとったから、ウチは見る余裕無かったで」

「でも、もうあんな羞恥は嫌だよ……はぅ……」

「はぁ、もう俺もこりごりだ……あんな姿見たくないは……」

「でも……アンクがしたいんなら……良いよ？」

「えぇい！頬を赤らめて言うな！お前には羞恥は無いのか！いい加減俺をからかう癖を治せ！！」

「あははは！怒った怒った～、キャハハハハ！！」

「じゃあウチがしたる！！」

「……丁重にお断りします」

はやてにさせたら死にそうなのでやめとくよ……あぁ、今回は収集や纏まりがつかなかったけど……ま、これで良いっか！
それじゃ、また明日とか！

第十二話　アニスの異常性（後書き）

収集つかねー

後、ｇｄｇｄ

さて、今回は短めでしたね……

明日はなのはとの絡みを書きたいです、それと、アンクのバイトの話とかも……

ここまで読んでくださりありがとうございます

簡単なプロフィール

名前：アニス・クロイツベル

デバイス：クイーン

性別：アニス

バリアジャケット：ブリジットの格好、もしかしたら変わるかも

年齢（現時点）：九歳

魔力ランク：ＳＳ－

魔法の種類：ベルカ式、ミッド式、クロイツ式、ガッシュ達の呪文

スキル：死にたがり、魔具生成、？？？、？？？

容姿

男の娘で、髪は伸ばしっぱなし。
精神が肉体に引っ張られ、口調は少し大人びてるものの、恥ずかしかったり悲しかったり、嬉しかったりすると、幼くなる。

武器：剣、杖、斬魄刀、？？？、？？？

考察

アニスの前世は童顔な男です。
死因は首吊りで、極度の死にたがり。実はこの世界に来てからは、その制御も理解してきたが、たまに箍が外れ、死にたがりモードに。
性格は温厚、と言うか、基本デレデレ、余りツンツンしたりはしない。そんな事もあってか、男女問わず落とします。
ゲイじゃない男の人も、その道にずるずると引きずりこむ。アンクが良い例です（笑）
友好関係は今の所、はやて、なのはのみ。

アニスにハーレム思想があるのかと言われれば、無いです。でも、アニスのキラースマイルや、寝起のアニスで落ちる子も少なくないのです！

基本、服装はパーカーにジーンズ。寝間着は裸ワイシャツにスパッツ。
三度の飯よりスパッツが大好きな変わった子、本人曰く、あそこまで動きやすい物はない、だとか。

好きな物はアンクに甘える事、褒められること、頭を撫でられること、はやての料理。

好きな者は、アンク、はやて、なのは。

嫌いな物は管理局、胸を揉まれる事（はやてのみ）

嫌いな者はクロイツベル一族（クラウドとアリスは除く）

このプロフィールは、編集、改変、項目増殖があります

名前：アンク

デバイス：グリード

性別：男

バリアジャケット：まだ本編未使用

年齢：？？？

魔力ランク：ＡＡＡ＋

魔法の種類：ミッド式

スキル：完全グリード化

容姿：オーズに出てきたアンクそのもの

武器：己の体のみ

考察

アニスのパートナーにして守護騎士みたいな存在。
ツンデレだが、アニスを抱きしめるのが日課な、少し腐臭のする人。
完全作者が好きだったので、こういった立ち位置に……みんな、すまん……悪気はなかったんだ……。

好きな物：アイス

好きな者：アニス、はやて

嫌いな物：特になし

嫌いな者：クロイツベル一族（クラウドとアリスは除く）、アリスに害を成すもの

位ですかね。
短くてごめんなさい……まぁ、これからも更新しまくるんで、応援お願いします！
それじゃ、また明日とか！

第十三話　アンクのバイト先とアニス信者と歩く都市伝説（前書き）

いやぁ、今日は雨が降ったよ

雨は最高だね、大好きだ

本編始まります

第十三話　アンクのバイト先とアニス信者と歩く都市伝説

アニスサイド

今日ははやての診察の日……何だけど……。

「あーうー……ごめんねはやてちゃん、俺の背が小さすぎだから、車いす押せなくて……」

「あはは！そんな事気にしてへんで、アニス君。その心遣いだけで嬉しいで」

「……はぅ……」

「あぁもうかわぇぇな！！大丈夫やて、アニス君達が来る前は、自分一人で行って帰って来てたんやで？」

そう言われると……少し空気が重くなるよはやて……。
それにしても、アンク何処行っちゃったんだろう？朝起きたら既にいなかったし……。

「ねぇはやてちゃん。アンク何処に行ったか知ってる？」

「あれ？アンクさんならバイトに行ったけど……」

「……何それ初耳……」

アンクめ！俺に内緒でバイトを入れたんか！せっかくの休日、俺が朝から活動できる限られた時間、今日はアンクとイチャコラしてやろうかと思ってたのにぃ！！
とは思ってないですよ？流石に、俺にいバイトが決まった云々の所だけ本当だけど、後は嘘だよ？
だって、俺が無理言って働いてくれてるんだし、仕方ないよ。

でも、言ってくれよぉ～。気になるじゃんか～。

「はやてちゃん、アンクが何のバイト始めたか知ってる？」

「いや、知らへんな～。何も言ってへんかったし」

アンクぇ……お願いだから言わないってのは止めてください……。

「良し、探してみよう」

アンクの魔力を辿れば、何とか辿り着けると思うんだ。
でも……はやてがな～……。
俺は考え事をしてはやてをチラッと見、また考え事をしては、チラッとはやてを見……それを数度繰り返す。

「あぁもうかわぇぇなぁ！！そう何度もチラチラ見んといて！探して来れば良いやん。アニス君の事や、魔法かなんかで探ってみるんやろ？」

「あはは、まぁ、当たらずも遠からずだね。ただアンクの魔力を辿ってみようかなって考えてた所」

「行ってきてえぇよ？ウチは気にせぇへんから」

「……もぅ、何て言うか……はやてちゃん大好きだぁぁぁぁ！」

「ウチもやぁぁぁぁぁ！」

テンションたっか。
あ、俺もか。気にしない気にしない。さて、行きますか。

「ごめんねはやてちゃん、今度俺が付き添うから！それじゃっ！」

俺はダッシュで玄関に向かおうとしたら、はやてちゃんに手を引っ張られて止められる。

「キャッ！？……は、はやてちゃん……肘抜ける……痛い……」

「あ、すまへんな。でもアニス君、その恰好は駄目やって、アンクさんも言ってたやん。スパッツはえぇ、だけどその上！ワイシャツは脱ぎぃ！そしてちゃんと服着ぃ！」

「あ、そうだった。まだ寝間着のままだったっけ。えへへ、うっかりうっかり」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「さっ！行くか！」

「ほな、行ってらっしゃい」

「うん！」

あの後俺は速効で着替え、アンクを探すミッションに向かう。
え？今日の服装？ふっふーん、良くぞ聞いてくれた！今日の服装は上が普通のパーカー、下はスパッツにニーソックス！そこ！ロウきゅーぶとか言わない！！そして女装じゃねーよ？うん、違うから。

「あぁ、アニス君アニス君……ハァハァ……生足もえぇけど……あのチラッと除く太ももえぇ……」

後ろに居る変態（はやて）は気にしない。鼻血出し過ぎて倒れないでね？

「ふんふふーん♪」

うん、やっぱどうどうと青空の下を歩くのは、気分が清々しくなって気持ちいいな～。
学校、通ってみようかな？でもでも、アンクやはやてに迷惑や負担が掛かっちゃうし、諦めよう。

「……むぃ？」

目の前にぬこはけーん。さて、何をしようか？
先ずお腹をもふもふする……それから……っと、いかんいかん。今はアンクだ。
俺はぬこをスルーして歩き出す。

飼いたいな～、ぬこ飼いたいな～。にゃーにゃー。

「さて、真面目に探そう」

俺は少し集中し、アンクの魔力を探る……。
……うん、こっからもう少し行った所に魔力を感じるな……でも、反応が二つなのはな何故？
まさかなのはの？ははは－、まっさかー、アンクが喫茶翠屋でバイト何て、ありえないでしょ～。
そう思っていた時期が、俺にもありました……。

ドンっ！

「……あはは……」

着きましたのは喫茶翠屋……その中にアンクの魔力が感じられる……。

「あー、あの子可愛い」

「本当だー、お母さんのお使いかな？」

道行くお姉さん方、これでも男なんだぜ？こんなナリして、男なんだぜ？
まぁ、冗談はさて置き、中に入らん事には始まらない。

カランカラ～ン♪

相変わらず、良い香りがスッと鼻に入ってくる。
良いねぇ、やっぱ調和だよ調和。完全調和（パーフェクトハーモニー）！そう、それだ！

「いらっしゃ……」

「……ほぅ……」

そこには、いつも見慣れた奴が、見慣れない格好で、営業スマイルを浮かべていたアンクが居た。
が、俺だと分かるや否や、顔が引きつる。

「……アンク……」

「……何だ……」

「……グッジョブ！！」

「うるせぇ！だからお前達には教えたくなかったんだ！特にアニス！！て言うかスパッツ脱げっていっつも言ってんだろ！！」

「アンクのウェイター姿！いただきました！！だからスパッツは俺のジャスティス！！」

「帰れぇ！！そしてズボンを穿け！女みたいな格好してんじゃねぇ！」

いやはや、まさかアンクが喫茶翠屋でウェイターとしてバイトするとか……。

あぁ、アンクはどんな姿させてもカッコ良いなぁ……。て言うか、心外、これは女装じゃないんだよ？

「アンク君、どうしたの？そんな大きな声出して」

「あ……何でも……ない……」

「？あらー、アニス君じゃない。こんにちは」

「桃子さん、こんにちは！」

「今日はどうしたの？またお菓子買いに来てくれたの？」

「ううん！今日はアンクをからかいに来たの！」

「てめぇ！やっぱそれが目的か！」

「だって、アンクバイト入れたのに教えてくれないんだもん。だから探しちゃった♪テヘペロ☆」

「えぇい！帰れ！八神はどうした！？お前と病院行くとか言ってたぞ！？」

「もちろんはやてちゃんには無理を言っちゃいました☆アニスたんったら強引☆」

「八神ぃぃぃぃぃ！！」

「ア、アンク君、落ち着きましょう！？アニス君も煽らないの！」

「ハァ……ハァ……すいません……」

「ごめんなさい」

さて、若干俺も歯止めがきか無くなった気があったが、そんな事はなかったぜ！

「それで、アニス君とアンク君の関係は？」

「結婚を前提に付き合ってるんです」

「馬鹿か！」

ドスッ！

「っ！……っつ～、アンク～、冗談なんだから～……一々殴らないでよ～……」

「ふんっ。ただの兄弟だ……です」

「ぷっ、アンクったら、敬語下手だね」

「うるせぇ」

「兄弟にしては……似てないわねぇ」

「まぁ、気にするな……です」

嘘だから仕方ないんだよ桃子さん……。
でも、アンク金髪だから案外外人に見えるし……大丈夫かな？

「さて、お話はこれ位にして！アンク君、仕事仕事！」

「了解だ。それじゃ、俺は戻る」

「分かったよ～」

そう言うと、アンクは仕事に戻って行った……。
桃子さん？何で貴女は俺の隣に居るのですか？貴女も仕事あるんじゃないんですか？

「それにしても、アニス君は相変わらず可愛いわねぇ」

「あはは、褒め言葉として受け取っておきますよ」

「あ、そうだ。なのは呼んでみましょうか。アニス君も久々にお話ししたいんじゃない？」

桃子さん、それは要らんお節介なのですよ。
ってあぁ、なのはを呼ばないで！いやだ！止めて！

「はーい、どうしたのお母ｓ……」

「や、やっほー……」

なのはは何故かいきなり無言になり、数秒後、つかつかと俺の所に来る。
しかも無言でだ……。

「アニス君……」

「な……何……かな？」

「……お持ち帰りはしてますか？」

「当店のアニスは、テイクアウト禁止です☆」

「でも持ち帰るの！」

「いやぁ！止めて！？引っ張らないで！？桃子さん！貴女はあらあらみたいな顔で見ないで助けてください！！」

「もうアニス君可愛い！！そうだ！お母さん！ウェイトレスの服って確かあったよね？あ、でもサイズ無いんだっけ……」

「ふふふ、なのは、その点は抜かりないわ！ちゃんとアニス君用のウェイトレス服を用意しているわ！」

「ちょっ！いつ俺のサイズ測ったし！？」

「アニス君。身長は９５？、体重は１９キロ。それ位で大体は出来るわ！」

「俺ですら知らない身長と体重を知ってる……だと……つうか俺１００？も無かったんだ……ｏｒｚ」

せめて１００？は欲しかったな……もう伸びないだろうね。八歳辺りからもう成長止まって来てるし……神様、あんた極端だよ。

「さぁ、着替えるの！」

「……有無を言わさぬその言動……」

流石魔王となりうる器……ははは、君の願いは断れないです。

「はぁ……とうとう女装か……」

もう、何も思うまい……。

〜〜

「うわー、アニス君可愛い〜」

「あはは、ありがとう……」

着て来たお……スパッツが無かったら即死していた。
ははは、サンキュースパッツ！！

「うぉぉー！可愛いぞぉ！」

「あれが男……だと……」

「違う！第三の性別！アニスだ！」

「うぉー！アニスたーん！俺だ！けっｋ「言わせねぇよ！？」」

「……何ぞこれ……」

何か、いつの間にか翠屋がこんな事になってるお……。
つうか何で俺の名前知ってるし……。

「あれ？アニス君知らないの？」

「へっ？何が？」

「アニス君、海鳴市では都市伝説みたいになってるんだよ？九歳と

は思えない大人びた口調、それに見合わない身長に、凄く可愛い。
なのに男の子！って感じでね」

「なん……だと……」

この俺が、都市伝説化……だと。
某とあるの、超能力が効かない男、脱ぎ女みたいに……歩く都市伝説化しただと……。

「……てめぇら帰れ！」

「アニスたーん！」

「男勝り……ハァハァ……いや、男か」

「もう男でも女でもなんでも良い！けっｋ「だから言わせねぇよ！？」」

「……はぁ……どないせいッちゅうねん……」

「……」パシャッパシャッ！

何かバカテスのムッツリーニみたいな奴が、鼻血を出しながら写真撮ってるんだが……。

「なっ……あいつは！？」

「あぁ、間違いない……奴だ……」

「ゲンドウ乙」

「アニスたんに並んぶ、もう一人の歩く都市伝説……」

「……寡黙（ムッツリーニ）なる性識者」

「……」ブンブンブン！

「分かりやす過ぎなのに！頑なに否定してるぞ！？」

「流石はムッツリーニ！」

お前、この世界でもそう呼ばれてるんだな……バカテスに帰れ。

「ね、ねぇ、君名前は？」

「……土夜孝太（つちやこうた）……」

漢字が違うだけじゃねぇか！！

ありえねぇ……この世界、何でもありか……。

「よ、よろしく、土夜君」

「……できたら孝太と……」ブシャァァァ！

「こ、孝太君……？」

「……悔い……なし……」ガクッ

「ムッツリィィィニィィィィィ！！」

「な、なんて事だ……スカウターが壊れた……だと……」

「……ス、スカートの中……が……」ブッシャァァァァァ！！

「あぁ！？倒れたことで！傷口が悪化した！？ムッツリーニ！何色だ！？教えてくれぇぇぇぇ！！」

「……ス……スパッツ……ムチムチ……」ガクッ……

「ムッツリィィィィィィニィィィィィィィィィィ！！」

おいそこの変態共……いい加減にしろや……。
もう収集つかんぞこれ……まぁ、俺もやり過ぎた感は……無いな。
今回、俺は何もしてないし……。
その時。

「ホラっ」

パサッ……。

「……アンク？」

「着てろ……お前のその恰好見られんの、何か癪に障る」

アンクは何処からか大き目な上の服を持ってきて、俺に掛ける。
……えへへ……アンクは優しいな、まだバイト中なのに。

「……えへへ、アンクありがとう」

「……ふん……」

鼻を鳴らして、アンクはまたバイトに戻る……。

「アニスたんが……ハニカンだ……だと……」

「奴は誰だ!?」

「はっ!数日前からこの喫茶翠屋でバイトをしてる、アンクと言う男です!女性客に人気があるイケメンでございます!」

「異端会議だ!」

「戦争だ!!」

「アンク×アニス……ありだと思います……」

今度は日傘を差した子が現れたぞおい……今度は西園さんかコノヤロー。

髪の色、若干被ってるじゃねぇかコノヤロー。

「……アニスさんは、お好きですか？」

「……何が？」

「……男と男の、濡れ場ですよ」

「……あはは、ごめん、分からないよ」

「……そうですか……では、また今度、何処かでお会いしましょう。貴方は完全に、こっち側ですから」

そっち側ってどういう事さ!?怖い！この子怖い！

ヤバい、やっぱりこの子、あの某小さな破壊者に出てくるあの子だよ！

「あ、名前聞いても……良いかな？」

「……仁紫園澪（にしぞのみお）です」

この子も漢字が違うだけか！？本当に何でもありだな、この世界……。

まさか、バカテス、リトバスと来ましたか……。

何だか、今日は疲れたよ……。

「にゃはは、お疲れ様アニス君」

「張本人の癖に……ちゃっかり自分は安全地帯に居るなんて……酷いや、なのはちゃん」

「にゃはは、ごめんごめん。でも、まさか宣伝して数分で、あんなになるとは思わなかったんだよ」

「……宣伝したの？」

「うん！」

「……頭痛くなってきちゃった……取り敢えず、なのはちゃんは極刑ね」

「えぇ！？」

何となく、なのはちゃんは俺と同じ苦しみを味わってみればいいよ。
さっきの苦労が分かるよ？
いきなりたん付で呼ばれるわ、写真は撮られるわ、挙句の果てには求婚だよ？
もぅ、俺は疲れた……、帰って寝る。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～

取り敢えず、あれから着替えて帰りました。
あ、ちゃっかりムッツリーニと仁紫園さんとは仲良くなったよ？一応メルアド交換しました。

「あぁ、疲れた～」

「お帰りアニス君。それで、何でそんなに疲れとるん？」
「いやぁ、ちょっとね。アンクのバイト先に着いたんだけど……そこで着せ替え人形みたいにされちゃって……」

「……ほぅ、それは興味があるなぁ……」

「興味持たないでよ。それで、アンクは喫茶翠屋でバイトしてたんだ」

「……マジかいな……ウェイターとして？」

「うん、そうだよ」

「はーっ、さぞカッコえぇんやろうな～」

「うん！それはもうカッコ良かったよ！」

「うわっ、惚気や惚気」

「もぅ、からかわないでよ～」

「……ぷっ、あははは！冗談や冗談！さっ、夕飯の支度しよか」

「そうだね。俺もやる！」

「オーケーや」

そんなこんなで、今日はアンクが帰ってくるまではやてと一緒に料理を作りました。

いやぁ、もう何か……女装って怖いねぇ。

第十三話　アンクのバイト先とアニス信者と歩く都市伝説（後書き）

はいっ！やり過ぎました！

バカテスの土屋好きなんで、出しちゃいました！まぁ、漢字は変えてますけどね

後は西園さん……

リトバスの中ではキャラが好き、でも好みではない

まぁ、この子も漢字変えて出しました

ごめんなさい……でも、これからもちょくちょく絡んできます。でも魔法は使いませんよ？

お友達です、そう、ただのお友達ですよ……

て言うかムッツリーニの女装で、俺は落ちたんや……可愛い……何だあいつ……マジ可愛い……と

西園さんは、まぁ……キャラが好きなだけであってですね、好みで言ったら美鳥の方が好きです

つうか姉御やはるちん、クドやこまりんの方がえぇねん

後は理樹、あいつは可愛い

つう訳で、自重しきれなくなったんで、終わります

ここまで読んでくれてありがとうございます

第十四話　別荘と修行（前書き）

よっすー

いやぁ、来週は忙しいので、もしかしたら一旦更新が止まるかもしれません

まぁ、余裕があったら予約投稿してみようかなとか思ってます

でも、番外編です

来週の水、木は居ませんので、更新できるのは月、火、金です

そして、日曜日は何かウチのバカ先公が、牛を借りて何かに出品するので、お前ら泊りなって言われました

死ね、市ねじゃなくて死ね

お前らの勝手な行動で、困るのはうちら何だよ、勝手に変な予定入れんな屑教師

っと、キャラが変わっちゃいましたね、すんませーん

そんじゃ、本編始まります

第十四話　別荘と修行

アニスサイド

「アンク、少し別荘で鍛えてこようと思うんだ」

「……そうだな。次の儀式にも備えておきたいし。なら、俺も行こう」

「でも、そうなったらはやてが一人になっちゃうな……」

そうだな～。はやてはもう魔法の事は知ってるし、どうせなら連れて来る？
あ、でもまだ寝てるんだもんな～、て言うか、俺達が今日起きるの少し早過ぎた。

「ん～、じゃあザゼルさんでも呼んでさ。はやてが起きたら連れて来るように言う？」

「……俺はあんまり、というか凄くあいつの事は嫌いなんだが……」

「そう？俺は結構面白い悪魔さんだなって思うよ？」

「その前に、お前は少し貞操の危険を覚えろよ……」

「……アンクは俺の初めて……欲しいの？」

ドゴッ！！

「ひゃうっ！？」

「ガガガガガ、ガキが益せた事とととと、言ってんじゃねぇぇぇぇぇぇ！！」

「……あぅ……洒落になって無い位に……痛いよ……はぅっ……」

思いきり頭を殴られた……。

あうあう、過去最高の痛さだねコレ……アニスたん、痛さのあまり泣いちゃう……。

「あうあう……酷いよ～」

「うっ……す、すまん、少し強く殴り過ぎた」

そう言ってアンクはすぐに俺の頭を撫でてくれた。
うん！やっぱりアンクは優しいの！

「えへへ～、アンクの手は落ち着くから大好き！」

「……ふん……」

あらら照れちゃった照れちゃった。でも、ちゃっかり頭を撫でるのはやめないんですね……。
まぁ、ツンデレなアンクちゃん。

「さて、ザゼルさん呼んじゃおっと。使い魔召喚、ザゼル！……さん……」

一応考慮してさんを付けたよ……いや、何か付けなきゃ悪いかなって思ったんだけど……結構語呂悪くて驚いた。
まぁ、当然の結果か……。

そう思っていた時、急に床が光だし、魔方陣が浮き出る。そしてその中心から、ザゼルさんが現れる。

「……あっ、アニス君じゃありませんか。お久しぶりです。全く、あれ以来一度も呼んでくれなくて、結構寂しかったんですよ？もしかして焦らしですか？アニス君はそっちの趣味があるんですか？それならそうと早く言ってくれれば、私はどっちでも行けますよ？それと、食べても良いですか？」

「……アニス、やっぱ帰ってもらえ……」

「うん……そうだね……」

「あぁ、嘘です！嘘嘘！全く、冗談に決まってるじゃないですか」

ほ、ホントにそうなんだろうか？
少なくとも、目がマジだったんですけど……。

「それより、今日は何で呼び出されたんですか？」

「あ、そうだった。あのねザゼルさん、今日俺とアンクは別荘に行ってちょっと修行してくるから、はやて……この家の主人が起きたら、別荘に連れてきてほしいんだ」

「ふむ、別荘ですか……あれ？でも、ここは人間界ですよね？アニス君は違う世界出身……だったら別荘って、その世界にあるんでし

ょうか？だったら、私は長距離転移は出来ませんよ？」

「あぁ、違うよ。別荘ってのは、俺が作った魔法空間……みたいなものかな？今見せるよ」

パチン。

俺はザゼルさんにそう言った後、指を鳴らして空間を裂く。
これには魔力が必要ないから楽だな～。
何か適当にやったらたまたま出来たって感じなんだよね～。

「さて……ここらへんに～……うわっ、出てきちゃ駄目！あっ、お前も！あ、コラ！共食い禁止って言っただろ！……おっ、あったあった」

（（その中に、一体何が居るんだ（です））

アンクとザゼルは、互いにそう思ったとか思わなかったとか……。

「じゃじゃーん！ダイオラマ魔法球！」

「……ただのミニチュアの塔が入ったガラス球にしか見えないので

すが……」

「えっへん！説明しよう！これはダイオラマ魔法球と言い、外見はただのミニチュアが入ったガラス球にしか見えないけど。実はこれ、魔法で作った異空間何だ。これをセットして、中に入ると、こっちの世界が一時間経った時、こっちの中では２４時間経過してる事になるんだ」

「へぇ……アニス君は凄い物を作るんですね……それで、その中に入って修行すると」

「うん、そうだよ」

「……それ、女性が入ったら大変な事になりますね」

「あぁ、年齢でしょ？そこは大丈夫！歳を取らないようにしたから！これで女の人でも気兼ねなく使えちゃう！さて、これで説明終わるけど、任せても大丈夫？」

「はい、任せてください。では報酬は……もちろんアニス君の体で……」

スパン！

「お前は自重を知れ！」

「っツ～……何ですか？焼きもちですか？」

スパンスパン！！

「……次言ったら、お前の顔に火炎弾を放ってやる……」

「……すいませんでした……」

アンクが計三発、ザゼルさんの頭を殴ったお……。
しかも最後は顔に手をやり、脅すと言う暴挙……ザゼルさん、ごめんなさい……。

「そ、それじゃあ、俺とアンクは行くね？よろしく」

俺はそう言って、別荘の中に入る。アンクも続いて入る……さて、久々だな。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～～

ザザー！ザザー！

「……いやぁ、着いた着いた……さて、アンクが来るまで、軽く動いとくか」

最初に入った人の次に入った人がここに来るのに、何分かのタイムラグがある。
だから、数分は少し体を動かせる。

あ、因みに、本家のダイオラマと到着地点変えてるよ。
だから、いきなり目の前が海なんだ。

「さて……ラウザルク！」

ドゴォッ！！

雷が俺に降り注ぎ、俺の体は光だす。
……うし、身体強化は終わりっと……、俺のラウザルクの効果時間は一時間程度。本編のガッシュは３０秒くらいだっけ？
そう考えると、すげぇ長いな。まぁ、これ使ってると他の呪文が使えないのが難点だね。

まぁ、それでも斬魄刀と合わせれば、結構良い線まで行く。

「瞬歩！」

シュン！ザッ！

「……うん、まだ大丈夫そうだね。まだまだなまってはいないね」

これでも結構久々なんだど、瞬歩使うの。
しかもラウザルクを使いながらだから、制御難しいな……やっぱ定期的に使わないと駄目だね。

「ラウザルク解除っと……さて次は～っと……」

次にやる事を考えていたら、すぐ後ろで着地音が聞こえた。
振り返るとそこには、アンクが居た。

「やぁアンク、遅かったね」

「俺が入ったのは今さっきだ、それで遅いと言われても困る」

「だよねー。それじゃ、体を温めたいし、軽い戦闘やろうよ？」

「分かった。それじゃあ完全グリード化は後か……」

そう言いながらも、翼を生やし、右腕をグリード化させる。仕事はえぇっすアンクさん。
俺も、自分の身体能力だけでアンクと戦う。

「それじゃ……」

「……行くぞ！」

ドンっ！！

俺とアンクは同時に飛び出し、ぶつかり合う。
先ずアンクは右手で殴ってきたが、俺はそれを簡単に払い、蹴りを喰らわす。
だけどアンクは空いている左手で受け流し、再び右で殴ってくる。

「甘いよ！」

俺はスタントマン顔負けの避け方をし、そのままアンクの足を蹴る。

「ちぃっ！！ハァッ！」

「くっ！」

アンクは蹴りを食らいながらも攻撃をしてくる。
俺は意表を突かれたが、それを難なく受け止める。

「ったく、ただの身体能力だけで、この俺と互角……いや、少し上位か……」

「えへへ、アンクに褒められちった」

「隙あり！」

「キャッ！」

俺は足を払われ、尻餅を付く……痛い。下砂だけど、案外痛い……。

「も～、酷いじゃ～ん」

「油断したお前が悪い」

「ぶー……あぁ、スパッツが汚れちゃったよ……これ寝間着のなのに……」

結構砂着いちゃったな～。
まぁ、洗えばいいか。取れる取れる、大丈夫大丈夫。

「じゃあ脱いで普通のズボン履いてこいよ！」

「ですよねー。んじゃ、ちょっと変えてくるわ」

俺はアンクにそう言い、館の中に飛んでいく。
まぁ、この中には一応着替えも詰め込んでるし、住めるようにはしてる。

ただ今館の中の俺の部屋の中です……ややこしいな……。

「さてさて……何を穿いたら良いやら」

俺の目の前には、所狭しとスパッツが仕舞ってある。
アンクに見せたら全部燃やされそうだ……見せないでおこう。

「おっ、これは……」

半ズボン、それに半袖タイプのパーカーもある。
……うん、そうだね、今日は思い切って涼しい格好しよう。上は今長袖タイプのパーカーだからね。
じゃあ、半袖も脱いじゃお、ネギま本編でネギやコタローがしてた格好に俺は着替える。

まぁ、ちょっととあるの土御門みたいになってるのは……気にしない……。

「アンク～、お待たせ～」

「おぉ、そんなに待ってない。それと、もう来たぞ？」

「ん？……あぁ、はやてちゃんか。それで、今何処に？」

「……そこ……」

アンクが指を差した方向を俺は向く、そこには……。

「アニスくーん！ウチ、飛んでる～！」

何故かザゼルさんに背負われて空を飛んでるはやての姿が……どうしてこうなったし……。
まぁ、そこは置いといて。

「ザゼルさーん！！はやてちゃんをこっちに～！！」

「あ、分かりました～！」

何とか俺の声が聞こえたようだ。ザゼルさんは言葉を返してくれると、すぐにこちらに飛んできて、はやてを下ろしてくれる。
因みに、車いすはどうしたの？

「うわぁ……ここがアニス君の別荘なん？南国見たいやわ～。そしてアニス君！」

「ど、どうしたの？」

「生足サイコーや！！それに、上が半袖のパーカーのみって……も

う痴女にしか見えへんで？」

はやてが顔を赤くしながら言う。

いや、痴女って……俺は男だから、そこは間違えないでね……そこ、アンクも顔を赤くしない。後ザゼルさん、舌なめずりをしない。

「な、なぁ……アニス君……ハァハァ……胸揉ませてくれへん？ハァハァ」

「嫌だよ！？何で揉まれないといけないの！？というか車いすはどうしたの！？」

「あ、車いすなら、ここに」

ザゼルさんは懐に手を突っ込むと、いきなり車いすがニュッと出てくるってっえぇぇぇぇぇぇぇ！？

何で！？何で何で！？何で懐に車いすが入ってんの！？おかしいよ！？

「はい、八神さん」

「あ、ありがとうございますザゼルさん。それよりも！いきなりザゼルさんがウチが起きた時に現れたんはびっくりしたで！お願いだ

から、ウチに一声かけてからにしてな？」

「あはははは、ごめんねはやてちゃん。はやてちゃんまだ寝てたから、仕方なかったんだよ」

「まぁ、今日は許したるわ。こんな綺麗な所に来れたしな！」

「そう言ってくれると、作ったかいがあったよ。まぁ、修行用に作っただけなんだけどね」

「へぇ、アニス君は凄いんやな～。それで、今日は修行する為に入ったん？」

「そうだよ」

「じゃあ、ウチは必要ないんじゃ……」

「いや、黙って入ったらはやてちゃん心配するだろうから。どうせなら連れて来た方が良いかなって」

「……アニス君……」

はやては何故か熱視線を俺に向けてくる。
いや、俺普通に善意で言っただけなんだけど……そんな熱い視線を俺に向けないで……。

「さ、さて。それじゃあアンク、再開しようっか。あ、ザゼルさんははやてちゃんに着いてて？」

「分かりました」

俺ははやてをザゼルさんに任せて、アンクと一緒にはやてと少し離れる。
巻き込んじゃったらあれだしね。

「……それじゃあアンク、本気で来て。俺も本気で行くから……」

「分かった……ハァァァァ！！」

アンクは魔力を込めて、完全体のグリードのなる。アンクは自分の体を見て、こう言う。

「完全体のなるのは何年振りだ、最近じゃ、普通に翼と右腕だけで戦ってきたからな」

「あはは、ごめんね。アンクも定期的にその姿になれれば良いんだけど、そうもいかないしね。ごめんね」

「気にしてないから安心しろ。さて、サッサと構えろ」

「まぁ、待ってよ。斬魄刀出すから。……来い」

俺は、まだ始解をしてない斬魄刀を取り出す、え？今日は何の斬魄刀何だって？
まぁ、始解してからのお楽しみ。まぁ、もうするんだけどね。

「舞え、袖白雪！」

「ほぅ、それか……」

本当は氷輪丸を使いたかったんだけど、それじゃつまらないし、氷雪系だったらランク落ちてる奴が何本かあるから、今回はお休み。
だから袖白雪を使う事にした。うむ、相変わらず美しいなおい。

「それじゃ……」

「第二ラウンド……」

「「開始！！」」

俺とアンクはまた同時に駆け出し、ぶつかり合う……。

模擬戦……開始します。

第十四話　別荘と修行（後書き）

gd gd

gd gdやね

gd gd

もう、今回が一番駄作なんじゃないかと……

それにしても、アニスは可愛い

生足サイコーですね！俺、足フェチなんです……後は髪フェチと腋フェチです

髪は良いが、後はマニアックですね

まぁ、気にしない

次回はコレのはやてサイドから書きたいと思います

まぁ、短いと思いますから、明日は更新で来たら二つ更新します

では、ここまで読んでくださりありがとうございます

第十五話　はやて視点と模擬戦（前書き）

やぁ

これと言って、話すことは無いね

あ、そうそう、今日は水曜日にあげる番外編を書き終えたよ

明日は木曜日にあげる番外編を書き上げなきゃ

それじゃ、本編始まります

第十五話　はやて視点と模擬戦

はやてサイド

朝起きたら、知らん人がウチの顔除きこんどった時は凄く焦ったで。
不法侵入者かドロボーさんかと思って、心臓バクバクやったで。

まぁ、起きてすぐに、アニス君の使い魔言うてたから、落ち着いたんやけどもな。
それにしても、やっぱ魔法って凄いんやな～。

ザゼルさん……やったっけ？この人がいきなりウチの車いすを持ち上げて懐に入れたん見たけど、質量保存の法則無視やな、魔法って。

それからウチを抱えて、そのままアニス君の部屋に、入ってもうた。
中には誰も居なくて、ミニチュアの家が入ってるガラス球が置いてあるだけやった。

「行きますよ？八神さん」

「へっ？行くってどこにですか？」

「勿論、アニス君の所にですよ」

そう言って、ザゼルさんとウチは、何処かに飛んだ……。
それは一瞬の出来事やった。今まで見慣れた部屋におったのに、いきなり周りは南国みたいな所に……落ちとる？

「何でやぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「おっと、設定違いですかね？まぁ良いでしょう。よっと」

軽い口調でこの状況を物ともしていない様子。

「どうしてそんなに落ち着いとるんですかぁぁぁぁ！！」

「え？いや、落ちてるんなら飛べばいいじゃないですか」

ザゼルさんがそう言うと、ウチらに掛かってた重力が無くなり、そのまま空中で止まる。
……あぁ、そうやった、そう言えば……空飛べばえぇんやったな…
…ウチは飛べへんけど。

「おっ、どうやらちょうど、アニス君が戻って来たようですね。何

処に行っていたのやら……」

「何か……いつものアニス君と違う気が……どないしたんやろ……」

「まぁとりあえず、こっちに気づいた様なので、声を掛けてあげてください」

「はいな」

ウチはザゼルさんに言われたとおりに、アニス君に声を掛ける。

「アニスくーん！ウチ、飛んでる～！」

ウチが飛んどる訳じゃないけどな。
でも、空を飛ぶのって気持ちええなぁ。

「ザゼルさーん！！はやてちゃんをこっちに～！！」

「あ、分かりました～！」

アニス君は大声でザゼルさんをこっちに呼ぶ。

ザゼルさんはアニス君の言葉に従い、下に居るアニス君の所まで下りてくれた。
そして、ウチはアニス君に率直な感想を述べる。

「うわぁ……ここがアニス君の別荘なん？南国見たいやわ～。そしてアニス君！」

「ど、どうしたの？」

「生足サイコーや！！それに、上が半袖のパーカーのみって……もう痴女にしか見えへんで？」

そうか！これが感じった違和感や！
いつもアニス君はスパッツを穿いとったのに、今日はスパッツやのうて半ズボン！しかも上半身はパーカーのみで、半袖すら来ていない。それに、前も開けとるので、上半身は実質裸や……。

「な、なぁ……アニス君……ハァハァ……胸揉ませてくれへん？ハァハァ」

「嫌だよ！？何で揉まれないといけないの！？というか車いすはどうしたの！？」

「あ、車いすなら、ここに」

っと、ついつい暴走してもうた。
アニス君は男の子やのに、どうしても胸揉んじゃうねん。なんでやろ？反応が面白いからかな？
でも……胸揉まれてる時のアニス君の可愛さときたら……ハァハァ……っと、いつの間にかザゼルさんが車いすを出してくれた様や。

「はい、八神さん」

「あ、ありがとうございますザゼルさん。それよりも！いきなりザゼルさんがウチが起きた時に現れたんはびっくりしたで！お願いだから、ウチに一声かけてからにしてな？」

「あははは、ごめんねはやてちゃん。はやてちゃんまだ寝てたから、仕方なかったんだよ」

そうねん、一言くらい声かけぇ！
幾らウチが寝とっても、起こすなりなんなりすればえぇんや。でもまぁ、今日はこんな綺麗な景色も見れたし、チャラやな。

「まぁ、今日は許したるわ。こんな綺麗な所に来れたしな！」

「そう言ってくれると、作ったかいがあったよ。まぁ、修行用に作っただけなんだけどね」

「へぇ、アニス君は凄いんやな～。それで、今日は修行する為に入ったん？」

「そうだよ」

「じゃあ、ウチは必要ないんじゃ……」

「いや、黙って入ったらはやてちゃん心配するだろうから。どうせなら連れて来た方が良いかなって」

「……アニス君……」

ヤバい、ウチ今顔絶対赤い……全くアニス君は、天然のジゴロやで……。

ちっちゃくて、可愛くて……もう非の打ちどころがないわ！！

「さ、さて。それじゃあアンク、再開しようっか。あ、ザゼルさんははやてちゃんに着いてて？」

「分かりました」

どうやら今から訓練を始めるらしい。
ウチはこの場に居たら巻き込まれるんやろうな……せやから今、隣にザゼルさんが着いとる。
それに、アニス君とアンクさんは念のためなのか、ウチと距離を取る。

「……それじゃあアンク、本気で来て。俺も本気で行くから……」

「分かった……ハァァァァ！！」

アンクさんがいきなり力を籠めたら、アンクさんは鳥みたいな怪物……いや、アンクさんに失礼やね……何て言ったらえぇんかな？取り敢えず、変身した。
アンクさんはその姿になるのは久々なのか、自分の体を隅々まで凝視する。

「完全体のなるのは何年振りだ、最近じゃ、普通に翼と右腕だけで戦ってきたからな」

「あはは、ごめんね。アンクも定期的にその姿になれれば良いんだけど、そうもいかないしね。ごめんね」

「気にしてないから安心しろ。さて、サッサと構えろ」

「まぁ、待ってよ。斬魄刀出すから。……来い」

今度はアニス君が何かを取り出した……と言うよりは、いつの間にか刀が一振り握られとった。
しかも抜き身や……あんな、今にも折れそうな刀で戦うんかな？

「舞え、袖白雪！」

「ほぅ、それか……」

そう思っとったら、刀はいきなり姿を変えてもうた。
全部白一色になり、柄の下部分には、布みたいな物がついとる。

「……綺麗や……」

そう、その刀は……凄く綺麗やった……。
ただ白一色の刀やのに、それがまるで……キラキラ光ってる様に見えた。

「それじゃ……」

「第二ラウンド……」

「「開始！！」」

二人が同時に動き出す……砂を蹴り上げて、二人は戦いを始める。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～

アニスサイド

「ハッ！！」

ブン！

「甘い！」

バキッ！

「クッ！

俺はアンクに斬りかかり、攻撃を開始する。
アンクは俺の初撃を避けて、がら空きの体に蹴りを放つ。
俺はそのまま吹っ飛び、砂に突っ込む。うぇ、口に砂入った……。

「ぺっぺっ！うぇ、じゅりじゃりする……」

「ハァ！」

ドンドンドン！！

アンクは火炎弾を三発出す。ちぃっ！間に合わない！

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック！闇の精霊３柱！魔法の射手連弾（ウンデトリーギンスピオブスキュアーマ ギカセリエス）・闇３矢（オブスクーリー）！！」

俺はサギタ・マギカでアンクの攻撃を撃ち落とす。
まぁ、後に思ったんだけど、ガッシュに出てくる氷か水系の呪文で撃ち落とせば良かったって思ったよ。

「はっ！そう来ると思ったよ！」

砂煙に紛れて、アンクは突っ込んでくる……。
ふっ、甘いねアンク……。

「アンク、久々過ぎて、袖白雪の攻撃方法を忘れちゃったかにゃ？」

「何？……しまった！」

アンクは一気に俺と距離を縮めるスピードを落とす。
だけど、もう遅いよ！

「初の舞月白」

カッ！！

アンクは、俺が仕掛けておいた月白の領域に、足を一歩踏み出していた。
右足は氷、右手を同様に凍り付いてしまった。

「ったく、まさか……俺の技を避けた際に、もう仕掛けておいたのか」

「えへへ～、正解！さっ、どうする？」

「はっ、まだだ、まだやるに決まってるだろ？フン！」

バリン！！

アンクは右足と右手に力を入れて、氷を砕く。

まぁ、危ない事すんな～。もし間違えたら、お前の腕と脚、粉々だよ？まぁ、グリードだから大丈夫なのか？

まぁ、分からん。

「さぁ、次はどう攻める？」

「……それじゃ……ソルセン！」

ブン！

呪文を唱えて、俺は刀を振るう。

ソルセン、アースが使っていた呪文。剣から剣閃と共に実体となっ

た刃状のエネルギーを放つ呪文。
攻撃方法が三つしかない袖白雪との相性は結構良い。
手札がグンと増えるし、使いにくい月白も、これで時間を稼いで使う事も出来る。

アンクはその斬撃を避けるが、俺は既に動いている。

「ウルソルト！」

「ちぃっ！」

俺は剣撃の速さを上げる呪文を唱える。
もはや普通の人間には視覚出来ない速度に上がっている……そう、普通の人間には見えない……。

ガシッ！

「……ふぅ、これが斬月だったら、俺の手は斬られて無くなってるな……」

アンクが、刃に触れないように袖白雪を掴んで攻撃を防ぐ。

「さっすが」

「当たり前だ。完全体を甘く見んな！！」

バキッ！

「クッ！ハァッ！」

アンクの蹴りを受け止めて、俺は袖白雪を握っていた右手を開き、
袖白雪を捨てる。
掴まれちゃまだったら攻撃も何も出来ないしね。

「ふん。今度は素手か？」

「そのまさかさ！」

俺はボクシングの構えを取り、呪文を唱える。

「ドラグナー・ナグル！」

ドラグナー・ナグル。テッドの呪文は結構使い勝手が悪い。

第一の呪文を使用しながら魔力を貯めないと、次の呪文が使えない。
その他の呪文を使う時は、一段階ずつ呪文を唱えていくしかない。
だけど、これは守護獣……アルフやザフィーラ辺りになら使える。
もちろん、アンクにも。
アンクはあんまりデバイスを使わない。

だから、今の完全体のままだったら、攻めに転じられる！

「はぁぁぁぁ！」

ブンブンブン！

「ちぃ！」

俺のパンチを紙一重で避け、そのまま攻めに転じようとするアンク。
まだだ！まだ俺のターンだ！

「ギアを上げるよ！セカン・ナグル！」

ドン！

俺は更に速さを上げる。

一段階アップしたスピードで再びアンクに殴りかかる。だがアンクはそれを今度は全て捌ききる。
まぁ、さっきみたいに紙一重で避けるのはキツイよね。

でも……無駄無駄！

「ギアを上げるよ！サーズ・ナグル！」

更にスピードアップ。
もう、これを捌ききるのは難しいよ！

「ハァッ！」

避けるのも捌くのも出来ないと直感したアンクは空に飛びあがる。
へぇ、そうしちゃう……マジで？まぁ、良いか。

「上に飛び上っちゃ、俺の格好の的じゃん♪ザケルガ！」

シュン！

一直線上に真っ直ぐな電撃がアンクに向かう。
ザケルガ、ガッシュやゼオンが得意とする呪文の一つだ。

ザケルと違い、真っ直ぐに飛んでくれるので使いやすい。ザケルは放出系だからね。

「はぁ！」

アンクは腕を振って、ザケルガを殴り飛ばす。
おぉ、すっげぇ、殴り飛ばすか……いや、やらんだろ普通……感電しますよ？

「だったら……グラビレイ♪」

ドゴォッ！

瞬間、アンクはいきなり空から落ちてきて、地面に叩きつけられる。
まぁ、まだ効果の範囲内だったから良かったよ。

「ぐっぁ……！」

俺は、苦しんでるアンクの前に手を出して、一言……。

「降参、してくれるよね♪」

そう言い放つ。

第十五話　はやて視点と模擬戦（後書き）

いやぁ、やっぱガッシュの世界の呪文はこの世界にとってはチートだね

あ、補足

アニスは心の力ではなく、魔力で呪文を使っています
そこん所、よろしく！

それにしても、やっぱ戦闘書くの楽しいわ

だからたまに自重できなくなっちゃうんだ♪

そして、アニスの可愛い場面があまりなかった今日の話

明日は可愛らしいアニスたんを書いてハァハァしたいです

では、ここまで読んでくださりありがとうございます

第十六話　羽休め（前書き）

やぁ

今日は木曜日の番外編を書いたよ

まぁ、面白いか面白くないかは、読んだ人たち次第です

それでは、本編始まります

第十六話　羽休め

はやてサイド

「オーケー、降参だ」

「えへへ、また俺の勝ちぃ～。そろそろアンクもデバイス使ったら？」

凄いなぁ……アンクさんに勝ってもうた。
あれが魔法か～……何か、実感湧かんな～。

「バーカ。俺がデバイス使うとしたら、人間の状態でしか使わねぇよ。この状態で使ったら疲れるんだ」

「……アンク、お爺ちゃんみたいだね……」

「ほっとけ」

何か二人が軽口を叩きあいながらこっちに近づいてくる。

「いやぁ、それにしても……凄かったですね」

「そうですねぇ」

「前に一度戦ったんですけど……いやはや、あれでまだ全力ではないとは……流石に凹みます」

「ザゼルさんもアニス君と戦った事あるんですか？」

「えぇ、つい最近にですけどね。あの時はあんな魔法は使わずに、ほとんど剣術と体術でやられちゃったんですけどね」

おどけて苦笑しながらザゼルさんは言う。
それは悔しいとか、そんな感情なしに……本当に敬服しとる感じの声やった。

「やっぱり、私も強くならないといけないですかね～。更に使い魔も増えそうですし……競争率も高くなりそうですし……」

「競争率って……何がですか？」

「いえ、ただの独り言です。気にしないでください八神さん」

「はぁ……」

何やろう……ウチも強くならんといけん気がしてならんのやけど……。

「あぁ、疲れちゃった」

いつの間にかもうウチの所までアニス君が来ていた。
アニス君は少し肩で息をしている。

「アンク～……暑い……」

「だったら南国の設定にすんじゃねぇよ……」

「しょうがないじゃん、本家がそうだったんだから……あうあう」

はぁ～、あうあう言っとるアニス君はかわぇぇな～。
やっぱアニス君はあれや、天然さんやな。素でそれをやっとるんだから……ある意味尊敬するで。

「はやてちゃんは大丈夫？結構暑いけど」

「あぁ、そう言われれば暑いなぁ……」

「どうせなら、遊んじゃう？水着に着替えてさ。はやてちゃんはさ……泳げないけど……その……水際に座ってるだけでもだいぶ違うと思うんだ」

「……そやな。せやったらええかもなぁ。でも、水着持ってきてないで？」

「それだったら心配ないよ」

パチン。

そう言って、アニス君は指を鳴らした。
そしたらいきなり空間が割れて、その中をアニス君が覗き込む。

「えっと……確かこの辺に～……うわっ！コラ！争うな！ひゃっ、手を舐めるな！うわぁ、ベトベト……きゃっ！ちょっ、コラ！触手伸ばすな！いやぁ！服に入ってきたぁぁぁぁ！こいつ食え！危ないから食っちまえ！」

【ウボァァァァァァ……ゴックン……ゲプ……】

「よしよし」

（（（そこに何が入っているのか、凄く聞きたい……でも聞いたら負けだろう（ですね）（やね））））

「ん～っと……あ、あったあった」

そして、そのまま何かを引きずり出してくる。
その手に握られていたのは……スク水。

「はい、これしかないけど……我慢してくれると嬉しいんだけど……」

「……先ず、アニス君が何でスク水を持っとるのかを小一時間問いただしたいねんけど……」

「八神聞いてやるな……こいつもこいつで苦労してるんだ……」

「そう……これだけは聞いてほしくないんだ……」

何や、アニス君とアンクさんが今にも泣き出しそうな顔をしてるのは……何でやろう？

アニスサイド

そう……このスク水は……前の世界で学校に通ってた時にストーカーから送られた品物です……。
どうやら魔法で作られていて、成長しても着れる優れものらしいです……。
しかもこれ、捨てても捨てても戻ってくる魔法も掛かっているので、今まで魔法空間に投げ捨てていた物だ。

まぁ、安全性は大丈夫。
俺一回着たから。その時使用人全員が鼻血を噴き出して倒れた。
どうやらチャームの魔法が掛かってたらしい（実際は掛かってなくて、自分の恐ろしさに気づいていないアニス。可愛さ的な意味で）。
まぁ、ほとんど魔法は解除したので大丈夫。でも捨てても戻ってくる魔法と伸び縮みする魔法は消えなかった。

「はい、これ」

「あ、ありがとな……」

何かはやてが憐れみの目線を向けてきてるのは……気のせいであってほしい。

「じゃあ、あの屋敷の中で着替て来て？あ、アンク……運んであげて……」

「分かった」

アンクはすぐに動き出し、車いすを押していく。
アンクも一応、屋敷の中知ってるから大丈夫だろう。

「アニスく～ん」

ガバッ！

「ふわぁっ！？ザ、ザゼルさん！？」

「さぁ、今なら私と良い事できますよ？さぁさぁ、良い事しましょうよ！と言うか、食べても良いですか？」

ゾクゾク。

「ひやぁぁぁ……！み、耳元で喋らないでください……くすぐったいです……」

「ふふふ……その年で、良い感度ですね……これは食べごたえがあります……」

「いやぁ……だから、耳元で囁かないでください……はぅ……」

「あぁもう……こんなに愛らしい人を主人にしたのは初めてですよ……」

そう囁きながら、ザゼルさんは俺の体をまさぐりだす。
うわぁ！嘘嘘！？ダメダメダメダメ！！ダメェェェェェェ！

「死ね！」

ドスッ！

「ったぁ！」

「ハァ……ハァ……ア、アンク……」

「全く、人が目を離した瞬間これだ……」

アンクがはやてを連れて、既に戻って来ていた。
た、助かった～……はぁ、もうザゼルさん呼ばない方が良いのかな？

「……あの……私砂に埋まっちゃったんですけど……」

「知るか、そのままずっとその状態で居やがれ！」

「……あっつ……」

まぁ、頭を冷やすには良いかもね……日に晒されて冷やすどころではないだろうけど……。
でもザゼルさんが悪いので、一向に可愛そうとは思わない。

「あはは、アニス君も大変やな～」

「もう、他人事だと思って……結構恥ずかしいんだよ？」

「じゃあウチが恥ずかしいと思わんくなるほど胸揉んだるで？」

はやては手をワキワキさせながら、いやらしい顔で見てくる。

いや、そのワキワキやめなさい……女の子がはしたないよ？はぁ、毎日貞操の危機とか……嫌だなぁ。

「そ、それじゃあはやてちゃん。行こうか」

「せやね……あ、所で……アニス君はいつここ出るん？ウチ、洗濯とかしないといけないから」

「あぁ、言ってなかったっけ？ここから出れるのは２４時間経ってからじゃないと戻れないよ？」

「……へっ？マジかいな……せやったらどないすんねん！ウチ家事とかあんねんけど！？」

「大丈夫だよ。こっちの中では２４時間だけど、外の世界からしてみれば一時間しか経ってないから」

「……うん、ウチはもう何も驚かん……驚かんで……」

「？」

はやてが何かぶつぶつ言いだしたけど……どうしたのかな？

まぁ、大方現実味が無くなってきたんだろうね。大丈夫、君の周りはもう少しで現実味が無くなるから。

まぁ、騎士達がねぇ……でも、優しい奴らだから大丈夫だろう。

「さ、遊ぼうか、はやてちゃん！」

「うん！」

俺ははやてを車いすから抱き上げて、お姫様抱っこする。

「ア、アニス君……力持ち何やね……」

「……ま……まぁ……ね……」

「……無理しとるんか……」

「し……してない……よ……」

「嘘や、腕と足がプルプルしとるで？」

「……あうあうあうあうあうあうあう……ア、アンク……パス！」

「……はぁ、ほら、こっち寄こせ」

俺はアンクにはやてを渡すと、その場に座り込む。
はぁ、やっぱり筋力無いからキツイなー……。

「あはは、ありがとうなアニス君。ウチそれだけで嬉しいねん」

「……はやてちゃん……」

「ほな、遊ぼうか！」

「うん！」

俺とはやてとアンクは、そのまま海の水際で遊びまくりました！！

「……あのー……私は何時になったら出られるのでしょうか……結

構深めに埋まったんで……力使えなんですよね……あの、今回の件、深く深く反省してますので……出していただけたら嬉しいのですが……」

ザゼルは犠牲になったのだ……ｂｙ作者

〜〜

「いやぁ、楽しかったなぁ」

夜、あのまま遊びまくり、はやてちゃんがご飯を作ったりして、そのまま夜になった。

今はもう、寝る時間だ。

「それにしても、ここがアニス君の部屋か〜……何か、地味やな」

「ほっといてよ、俺は無駄な物は置かない主義なんだ」

「とか言いながら、この押し入れにはごっそりスパッツ入っとんのな」

「いや、勝手に開けてみないでくれる？」

プライバシーの侵害！！駄目！絶対！

「所で、ウチは何処に寝たらえぇん？」

「あ、そっか……ここにははやての部屋無いんだもんね……じゃあ今から部屋の用意するよ」

俺は立ち上がり、部屋から出ようとドアに向かおうとする。

だが、それをはやてが俺の腕を掴み阻止する。

「……どうしたの？はやてちゃん」

「……あの……な？もし、もしやよ？アニス君が嫌じゃなかったら……ウチと一緒に寝ても良い……かな？」

「……はぅ……はやてちゃん……些か大胆過ぎだよ……あうあうあうあう……」

うぅ、顔が赤い……照れてるよ俺……あうあう……。

何かそろそろ、このあうあうが定着しつつあるね……自重しなきゃ

……。

「……う、うん……俺は別に構わないよ？」

「ホンマに！？じゃ、今すぐ寝るで！」

うん……やっぱりはやてちゃんは些か大胆過ぎだね……。
はぁ、俺理性保つかな？いや、いつも保ってたし大丈夫だろう……。
こうして、俺ははやてちゃんと一緒に寝ることになった。

「……アニス君、ほんまに小っさいなぁ……ウチの腕にスッポリや」

「あう……はやてちゃんの胸が……顔に当たってる……」

あうあう、俺はロリコンじゃないよ！
こんなもので、俺は欲情なんかするものか！否！断じて否だ！こんなもので、俺の鋼の精神は崩せるものか！！

「アニス君の髪の毛、良い匂いや……」

「か、嗅がないでよ～……はぅ……」

「あぁ、ホンマに可愛い！」

ギュっ！

「ふわぁ!?ちょっ、はやてちゃん……苦しい……」

はやては思いきり俺を抱きしめる。
と言うか、主に顔なんでかなりキツイ……。

「……アニス君……ウチ、こんなに幸せでええんやろうか……」

「……はやてちゃん……」

「こないに暖かい家族が出来て……ホンマウチは幸せ者や。ホンマに……ウチには勿体ない位やで」

「……人が幸せになるのに、良いも悪いも無いんだよ?むしろ、子供だからこそ、色んな幸せを体験して、次の世代に繋いでいく。その方が、ずっと幸せが続くでしょ?俺は人の嬉しい顔や幸せそうな顔が大好きだ、だって、自分も幸せな感じになるから。それが俺のハピネス」

「……アニス君……ありがとうな」

俺とはやては、暖かい気持ちになり……そのまま就寝した。
そして朝、起きてからすぐにゲートに行き、外の世界に戻る。
まぁ、本当に一時間しか経ってなくてはやては驚いてたけど……それはまた別のお話。

「あの……私、忘れられているのでしょうか？」

その後、ザゼルは何とか自力で脱出し、そのまま魔界に帰って行った……。

第十六話　羽休め（後書き）

不純なザゼル乙

まぁ、頑張れザゼル、お前には良い事があるさ……たぶん……

それにしても、最近ドット寒くなったな～とか思ってたら、まだ暑い時間が……

器官系とアレルギー系の発作、両方持ってるから、春先は酷いよ？

季節の変わり目と、花粉のダブルパンチです

まぁ、死ぬね

はぁ……体が環境に着いていかないです

さて

ここまで読んでくださり、ありがとうございました

第十七話　予期せぬ起動と原作崩壊（前書き）

いやぁ

今日は外部取り付け用のキーボード買ったんだ

俺のパソコンはノーパソでね、あんまり使いやすくないんだ

だから、電機屋で買ってきて、今使ってます

いやぁ、固いはこれ……

でも、使いやすい

では、本編始まります

第十七話　予期せぬ起動と原作崩壊

……力が必要だ……。

今までこの小娘から魔力を得ていたが……足りぬ……。

まだ……まだだ……魔力が足りぬ……。

もう、あの小娘からあの小僧に移るしか手は無い……。

ククククッ……小娘よりも質も量もけた違いだ……。

良いぞ……これは良い……やはりあの小娘よりもこの小僧から魔力を貰うとしよう……。

この小僧なら、一気に量を取っても死ぬ事は無い……。

小娘よりも、体が強い……。

あぁ、それにしても……魔力が十分になっても……我は管理人格が出て行かないと出れぬ。

何としてでも……我は外に出る。

だが先ずは……復讐してやりたい……。

我をこんな所に閉じ込めた、人間どもに！！！

それをするには……やはりあの小僧が必要不可欠。

それにしても……クロイツベルか……懐かしい名を聞いた……。

何の因果か……我を殺した一族の魔力を必要とするとは……。

だが、普通の人間よりも馴染みが速いだろう……ククク……あぁ、早く……早く出たい！！

……ふふふ、少し強引だが……小僧の魔力を奪えば……今にでもこの闇の書だけは起動できる……。

前倒しだ……少し、早いがな……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

どうもっす……はやての家に来たから早二か月……。案外キンクリ活用し過ぎ。

今もう無印始まってます。
ユーノの念話が聞こえて来たから分かったよ。
まぁ、ジュエルシードには興味ないし、どうでも良いんだけどね。
それで、今月はもう六月。後三日位ではやての誕生日＆闇の書起動……。何だけど。

ここで、驚く事が一つあります……。

「ア、アニス君！ウチの足が！今動いた！」

はい、決して動くことのないはやての足が、何故か動くようになりました……。
どうしてでしょう？俺にはサッパリです……。
小さいころから闇の書に魔力を取られ、そのせいで足が不自由になってしまったはやて。

それなのに、何故か足が回復？してる様です……。

「ホントに！？良かったねはやてちゃん！ねっ！アンク！」

「あぁ、そうだな。それじゃ、病院に行って石田に診せて来るか？」

「うん！石田先生、きっと驚くやろうな～……。アニス君はどうや？一緒に行かへん？」

「あ……あぁ、ごめん……今日はちょっと……」

「？何か用事でもあった？」

「うん、まぁそんな所だよ」

「……そうか、なら、ウチはアンクさんと病院に行ってくるさかい。戸締りよろしくな！」

「うん、分かったよ！アンク、はやてちゃんをお願いね」

「分かってるっての。それじゃあな」

俺が起きてもう昼過ぎ。
二人ともう俺より先に起きていて、リビングで二人で談笑してる時だったらしい。
はやての足が動いたのは。
まだ大きく動かせないものの、ピクピクとなら動かせるらしい。
今までそんな事は一度もできなかったのに……。

俺ははやてとアンクが出かけた後、すぐにはやての部屋に行く。
そう、闇の書を調べるためだ。

「……何で、はやての足は動くようになったんだ？」

俺は確かに、はやてに魔法の存在は話した。
だが、そこまで原作に大きく影響するような話でもないし……。
どうしてだ？

「まぁ、それはお前を調べれば分かるでしょう……なぁ、闇の書？
いや、夜天の書」

俺は、闇の書の目の前に立ち、そのまま闇の書を見る。
……何処も変わったところは無い。原作と全く同じ……だけど……
魔力が少し漏れている？
どういう事だ？確かにはやての魔力ランクは高い……だが、ここま

で魔力を吸い取れば……いかにはやでも、すぐに死んでしまう量だぞこれは……。

俺はそう思い……闇の書に触れる……。
その瞬間……。

バチン！

「キャッ！？」

いきなり闇の書から電流みたいなのが流れ、俺を拒む。
そして、そのまま闇の書は宙に浮かび、光りだす……。

《起動します》

「なっ！？」

起動するだって！？
まて、おかしいだろ！どうして俺が触れた瞬間起動したんだ！？
時期までまだ裕に三日はあるんだぞ！？なのに……どうして！！

俺は驚いて、後ずさってしまう……。

その時、俺の胸から、ごく少量だが……魔力が出てくる。

「……嘘……だろ……そんな……これは……まるで……」

はやてが闇の書を起動させた時と同じ……現象……。

そして、その魔力が闇の書に吸い込まれた瞬間、闇の書の大きな魔方陣が現れる。

ドックン！

「うぐっ！」

ドタッ！

そして、次に俺に降りかかってきたのは……心臓の痛み。
誰かに鷲掴みにされてるような、そんな痛みが、俺の胸に走る。
俺は痛みに耐えきれず、片膝を付いて、胸を抑える。

「ぐっ……うぁ……うあぁぁぁぁぁ！」

俺の叫び声とともに、魔方陣から放たれている光はより一層発光し、

徐々に弱まっていく。
そして……俺が目を開けたその先には……。

「……なっ！？」

「……闇の書の起動を確認しました……」

目の前に居たのは、この世界のキャラ…八神はやての家族となるであろう……四人の守護騎士が、俺の前で跪いていた。

「我ら、闇の書の収集を行い、主を守る守護騎士でございます」

「夜天の主の元に集いし雲」

「ヴォルケンリッター、何なりと命令を……」

そんな……嘘……だ……。
俺が……闇の書の……主……だって？

「ぐっ……ハァ……ハァ……あ、あの……顔……あげてくれませんか？」

「……はい……!?主!顔色が優れませんが!」

「ハァ……ハァ……だ、大丈夫……だよ……」

俺の体何ぞどうだっていい……先ずはこの、闇の書の事について、解かなければならない……。
何故あそこまで、闇の書から魔力が漏れ出していたのか……。

そして何故、俺が触れた瞬間に、闇の書は起動したのか?

「ハァ……ハァ……先ずは……自己紹介から……が、良いよね?俺は……アニス・クロイツベル……き、君達の、名前……は?」

「その前に主のご体の心配を!今にも倒れそうじゃないですか!」

「あはは……ハァ……ハァ……だい、じょうぶ……だから……」

「大丈夫などではございません!」

「ハァ……ハァ……スー、ハー、スー、ハー……よし……何とか落ち着いた……。それで……名前は?」

「……私は烈火の騎士、シグナムでございます」

「鉄槌の騎士、ヴィータ」

「湖の騎士シャマルです」

「盾の守護獣ザフィーラです」

「そう……何だ……。うん、分かったよ。所で……シグナムさん」

「主、敬語など不要でございます。私の事は呼び捨てで」

「いえ、それはまだ何とも……まだ会って数分ですし……。それよりも……俺はホントに、君達の主……なのかな？」

「はい、間違いございません。主と私達は、パスで繋がっております。間違いなく、主は貴方様です」

と、シグナムがしれっと言う。

あはは、マジか……どうやら、世界は変わってしまったらしい……。

「……ふぅ、だいぶ落ち着いてきた……。分かりました……では、固っ苦しいのは嫌いです！俺の事は主ではなく、アニスと呼んでください！」

「なっ、それは出来ません！騎士ともあろう者が、忠誠を誓った主に、そんな事は……」

「む～、そうですか……だったら、アニスたんでもオーケーですよ？」

「もっと酷くなってます！」

「あ、シャマルさんやっと喋った。ほとんどシグナムさんしか喋ってないんだから、ヴィータちゃんにザフィーラも喋ってよ♪」

俺はもう、現実逃避しか出来なかったよ……。

だって、考えても分かんないし、なっちゃった物は仕方ない。うん、仕方ないんだ。

「ア、アニス……」

「こらヴィータ！主に向かって何だ！その口は！」

「シ、シグナムさん落ち着いて。俺は気にしてませんから。……何？ヴィータちゃん」

「……何歳……何ですか？」

ヴィータは慣れない敬語を使いながら話しかけてくる。
おぅ、この子……可愛いよ……。流石エターナルロリータの称号を持ちし騎士……伊達じゃない。

「あはは、小さい主でがっかりさせちゃったかな？今九歳だよ。あ、因みに俺男だから♪」

「「「「……はい？」」」」

「……いや、だから……俺は女じゃなくて、男だからねって……」

「「「「えええぇぇぇぇ！？」」」」

おぉ！？まさかあのザフィーラまで驚くとは……恐ろべし、俺……。
その後、四人は盛大に謝ってきたのは、言うまでも無い……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「はい？主、今何と？」

「うんだから、収集はしなくても良いよ？俺、特に力とか必要としてないし。特にやりたい事も無いから」

「いや、しかし！」

「シグナムさん、お願い！収集は絶対にしないで！！」

俺はシグナムに頭を下げる。

「あ、主！おやめください！主が頭を下げるなんて！」

「む〜、じゃあ、皆収集しませんって約束で来たら、頭上げてあげる♪」

「うっ…………はぁ……分かりました。みんなもそれで、異論は無いな？」

「はい」

「うん」

「……あぁ」

うむ、どうやら上手く行ったようだ。
これで、収集する事も無いね……いや、だってさ……管理局に見つかりたく無いんだよ。
でも、あのリーゼ姉妹が見張ってるから意味ないか。

でも、リィンフォース出してあげたいんだよな～……。
でも、まだ現時点では収集は出来ない。あんまり目立った行動もとれないし、何より、俺の呪いの進行は、まだそこまで酷い訳じゃないしね。

まぁ、俺が呪いの影響で倒れても、収集はさせる気ないし。

「うん、ありがとう！それにしても……みんな背が高いですね～。俺、９５？しか無いんで羨ましいです」

まぁ、実際嘘なんだけどな。

「えっ！？私より小さいじゃん！？」

「こらヴィータ！」

「あはは、シグナム、気にしなくて良いよ？敬語は禁止！これから家族何だからさ！」

「か、家族……ですか？」

「うん、家族！あから、堅苦しいのは止めてね？ヴィータちゃんみたいに声掛けてくれれば良いよ」

「……は……はぁ……」

「さて……はやてとアンクが帰って来るまで……この四人の服どうしようかな……」

とにかくこの四人の服装……怪しすぎる……。
アンクが襲い掛からないと良いけど……。

シグナムサイド

闇の書が起動し、我らが主の元に集まった……だが。
どういう事だろうか……。

私が今話している主は……今までの主とは凄く違っていた。

先ずは容姿……凄く小さい……守護騎士のヴィータでも１２０はあるのに……主は９５？と言っていた……そして、年齢は九歳……今までの主の中で最年少だ。

そして性別は男……実際、皆女性と思っていた……だが、男性……。
いや、何でもない！

「な、なぁ……シグナム……今までの主よりも……全然違うな……」

「……そうだな……少なくとも、今までの主は……外道だったが……あの少年は、純粋だ……」

しかし、何故さっき、自分は本当に闇の書の主なのかと、聞いてきたが……どうして確認を取ったのだろうか？

「ザフィーラさんでけぇ！抱っこして抱っこ！」

「はい……」

ひょい。

「うわ！高い！わーい！高い高い！」

「……何だろう、今の主を見てると……安心する……」

「そうだな……今の主は、心優しい」

今まで主は……本当に最低の主だった。
こんなに輝いた主の笑顔を見るのは……本当に、いつ以来なのだろう……。

「シャマルさんシャマルさん！ザフィーラでけぇ！」

「そうですね」

シャマルは苦笑しながら答える。

まぁ、返答に困るだろう……今までの我らの扱いを鑑みれば……な。

その時、近くで魔力の反応を感知する。

「レヴァンティン！」

《ｊａ》

私はすぐにバリアジャケットを纏いって……しまった！
まだ主にバリアジャケットを作ってもらっていなかった！

「主！早く我らに騎士甲冑を！」

「え？え？どうしたのみんな？いきなり血相変えて……」

「ここの近くに魔力反応が！こっちに近づいてきます！」

「魔力反応？……あぁ、アンクかな？大丈夫だよ、たぶんそれ、俺のパートナーだから」

主はそう言うと、すぐに廊下の辺りから物音がする。

「いやぁ、石田先生驚いとったなぁ」

「……そうだな……」

「……アンクさんどうしたん？いきなり怖い顔になって」

……我々に気づいたか……どうする……まだ騎士甲冑はもらっていない。
素手で対処すべきか？いや、この魔力量だ……あちらも手練れ……
無理に素手で行かない方が賢明か。

「あ、帰ってきた」

その時、主はひょいっとザフィーラの腕から降りて、すぐに廊下に走り出す。

「主！駄目です！」

「キャッ！？はぅ……シグナムさん……痛いよ……」

「すみません……ですが、今廊下に出てはいけません！」

「え？どうして？」

主が首を傾げながら疑問をぶつけてくる。
だが、あっち奴はもうこっちに来ている……。
どうする……。

そして、ここの部屋のドアが開かれる。

ガチャッ……。

「……お前ら、誰だ？」

現れたのは、金髪の男。
そしてその手は、人間の物ではない……デバイスか？いや、背中に翼が生えている……。
やはり人間ではないのか？

「我らは主アニスの守護騎士……主には指一ｐ「アンク～」って、主！？」

主はいきなり、得体のしれない男に抱き着く。
抱き着かれた男は、やれやれとため息をつきながら頭を撫でている。

「シグナムさん、大丈夫だよ？こいつはアンク、俺のパートナー！」

「……はい？」

「おいアニス、何がどうなってんのか説明しろ」

「……主、我らにもご説明を……」

この男が主のパートナー？
……どういう事だ……？
ヴィータは絶えず警戒をし、ザフィーラもいつでも襲い掛かれる状態だ。
シャマルはすぐに主を救出できるようにしている。そして私も。

「まぁまぁ、皆落ち着こうよ。ところで、はやては？」

「あぁ、危ないから、一応玄関で待たせてある」

「そう……じゃあ、はやても入れて話し合おうか。俺としても、そ

っちの方が早いし。シグナム達も、一体警戒を解こう？ね？」

「……分かりました……みんな」

「……了解」

「……はい」

「……」

それぞれ警戒を解く。

……さて、どうご説明してくれるのだろうか、我が主は。

第十七話　予期せぬ起動と原作崩壊（後書き）

何か……ごめんなさい……

無理矢理感あり過ぎなのは重々承知

でも、こう言ったの書きたかったんだもん！

そしてキンクリ

困ったときのキンクリ

もう早く守護騎士だしたくて、キンクリしちゃったよ

因みに原作はもう開始してます

でも、介入するかは……まだ検討中

しかもただいまかなりの原作崩壊ですからねぇ

それにしても、何か可愛いアニスを書けんかった

次回は可愛いアニスを書きたいと思います！

因みに、ヴィータの身長は１２２？だそうです

じゃあ、どんだけアニス小さいんだよと思った人

三期に出て来たヴィヴィオよりも三センチ小さいと思ってくだされ
ばいいです

ヴィヴィオの身長は９８？です

いやぁ、どんだけ小さいねんって話ですよ

それでは、また明日

ここまで読んでくださりありがとうございました

そして、超展開すいません！！

第十八話　説明と呪いとお祝い（前書き）

いやぁ、明日から実習で居ません

ですから予約で番外編を二つ投稿しときます

あ、そうそう

その内の一つはあれです

前・後編になってます

後編は日曜日に上げたいと思っています

日曜日も泊りがけでパソコン使えないので

それでは、本編始まります

第十八話　説明と呪いとお祝い

アニスサイド

「それでは主、ご説明を」

「う、うん……」

はい、どうも……さて、どう説明して良いやら。
一応はやってもこの場に呼んでいるけど……。やっぱ最初から話すべきなのかな？

「……アニス、何でお前が闇の書の主になってんだ」

「いや、うん……まぁ……何だ……その……あの……えっと……俺にもサッパリ……」

「はぁ……」

ため息つきたいのはこっちだよ……全く。

「じゃあシグナムさん。もう一度確認するけど、俺が本当に闇の書の主で間違いないんですね？」

「はい、先ほども申した通り、主アニスから繋がりを感じます。ですから間違いないかと。それよりも、どうしてまた確認を？さっきもそうでしたが」

「……うん……実を言うとね、闇の書の主は、ホントはそこの車いすに乗ってる……はやてちゃんがなる予定だったんだ」

「……え？ウチが？」

「……主、何故そんな事が分かるのですか？確かにあの子にも魔力は感じますが、私達には何ら繋がりがありません」

「いえ、そうでもないんですよ。つい昨日まで、闇の書に魔力を供給をしてたのは、紛れもないはやてちゃんでした……」

そう、昨日まではやてちゃんがそれを担っていた。
俺もそれは分かってたし、闇の書事態も、起動してからじゃないとどうすることも出来ないから言わなかったんだ、これまでずっと。

「でも今日、信じられないことが起きました。はやてちゃん、足は

少し動くようになったんだよね？」

「うん、いきなりでウチも驚いたけど、確かに動いたで。それに石田先生も、このままリハビリを続ければ歩けるようになる言うてた」

「そう……ホントは、はやてちゃんは闇の書の呪いで、足が動く事は無かったんだ」

「闇の書の呪い？」

「ほら、これだよ」

俺は闇の書をはやてに見せる。
あう、大きいから、重たい……。

「それ、鎖で縛られてた訳の分からない本や……それが闇の書なん？」

「そう……これははやてちゃんが小さい時からあったでしょ？」

「……うん、確かにあったで」

「はやてちゃんは、この本に魔力を取られてたんだ。そのせいで呪われて、足が徐々に動かなくなった行ったんだ……」

「お待ちください主。仮にそうだとしても、何故あの子が私達の主にならなかったのですか？」

「簡単です。はやてちゃんが年単位で取られていた魔力を、俺から一日も過ぎない内に取ったのでしょう。しかも上回ってしまった…だから俺に所有権が移った……としか考えられないのです」

「……でも、そうしたら主が死んでしまうのでは？」

そう、そこが問題なんだ……。
俺の魔力ランクはＳＳ－、はやてと大体同じ位なんだ。
……あ、もしかしたら……。

「俺が魔導師だからかな？はやてちゃんは魔導師じゃないから、量を取らないといけなかったけど、俺の場合は量も質もある、だから、半分以下で補えたのかも」

「確かに、八神よりもお前の方が質は高いな」

「でしょ？まぁ、そんな感じなんだろうね……はぁ……」

駄目だ、頭がこんがらがってきた……。
全く、何もして無いのに原作崩壊って……結構対処難しいんだね。

「大体これで説明は終わるけど、納得した？」

「……主、一つ質問良いでしょうか？」

「ん？良いよザフィーラさん」

「何故主は、そこまで闇の書に詳しいのでしょうか？」

「あぁ、その事。答えは簡単だよ。俺はこの世界の出身じゃない、俺は次元世界の人間なんだ。俺はその世界では結構お金持ちでね、勉強させられたのさ。超機密事項の勉強をした時、ちょうど闇の書の事をね」

「……そうですか……」

「あはは、ごめんね、あんまり格言を獲れる内容では無かったね」

「いえ、それだけ分かれば十分です」

「あはは、ありがとう」

さて、これで説明を終わって良いやら……。
その時、はやてが俺の服の裾を引っ張る。

「ん？どうしたの？はやてちゃん」

「……あんな、ウチが呪われてた言うとったやん……」

「うん、そうだね」

「それはこの闇の書さんに魔力を取られてたのが原因って事は……
ウチの代わりに、アニス君が呪いを受けたのと、同じ事やないの？」

「……ん～……まぁ、そうなっちゃうね」

「……ごめんな……アニス君……」

「何で謝るのさ？」

「だって、ウチのせいで……アニス君が……」

「気にしないの。俺ははやてちゃんの足が動くようになって嬉しんだから」

「それでも！アニス君が代わりになっちゃ、意味ないやん！」

「……意味ならあるよ。こうして、はやてちゃんの足が動くようになった、それで良いじゃん」

「……アニス君……」

「さて！もうこの話は終わり！さ、先ずは皆で自己紹介からしようか！」

さて……これからどうしようか……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～

「ふぅ……」

あれからはやて達とシグナム達が自己紹介をし、皆で昼ご飯を食べ終わった後だ。
皆最初は、やっぱ遠慮がちだった。
はやてが気にせずたくさん食べてとか言ってたのに、皆遠慮しちゃって、

まぁ、少しずつ慣れていけば良いんだもんね。

コンコン。

「アニス、入るぞ」

その時、ドアがノックされる。
どうやらアンクの様だ……何の用だろう？

「良いよ～」

ガチャッ。

アンクは、神妙な顔つきで部屋に入ってきた。
おいおい、どうしたどうした……辛気臭いぞ空気が。

「どうしたのアンク？怖い顔して……」

「……お前、何処に呪いが掛かってんだ？」

おぉう……それですか……いや、一番聞かれたくない事を……。

「さぁ、俺にも分かんない……少し経ってからじゃないと分からないんじゃないかな？」

「嘘だな」

！……鋭い……でもな～、これ言っちゃって良いのかな？
う～ん……どうしよう……。

「何で嘘だって分かるのさ？」

「何年の付き合いだと思ってんだ。お前の言葉の嘘本当何て、もう区別が着いてんだ……正直に話せ」

「……あうあう……アンク怖い怖いなのです」

「……そんな事で誤魔化せると思ってんのか？」

「……はぁ……マジで怖いよアンク。今にも襲い掛かって来そうだ……オーケー、真面目に話そう」

俺は両手を上げて、お手上げだと言わんばかりにおどけて見せる。
まぁ、いずれは言わなきゃならない事だし、今言っておいた方が楽かな。

「率直に言うよ？俺が呪いを受けた場所は、心臓だ」

「！？何でだよ！八神は足だったのに、何でお前は心臓何だよ！」

「しっ！声がデカイ！みんなに聞かれるだろう？それに、まだ確証は無いよ」

「じゃあ、何で心臓だ何て分かるんだよ？」

「……まぁ、少しね……闇の書が起動した時、胸が痛みだしたんだ

よ突然。たぶんそれだと思う」

「……どうにか……出来ないのか？」

「……俺にはどうとも出来ない。それに、収集した所で、はやての役割を俺が代わりにやる事になる。だから、闇の書に飲まれるのは俺だ。そして収集しなければ、俺は年内に死ぬだろうね」

「……」

「あはは、だから嫌だったんだ。この話するの……。まぁ、仕方ないかもね。これは案外罰なのかも。俺が調子乗って力を使って、お父さんやお母さんを危険な目に合わせちゃった……」

「……アニス……」

「ん？うわぁっ！」

何か知らんが、アンクに抱きしめられた。
ちょっ、苦しい……ギブギブ！

「何で、お前なんだよ！」

「……アンク？」

「お前を守るって誓った俺は何なんだ！結局、守れてないじゃないか！！」

「……アンク」

「……絶対死なせやしない……絶対に、お前を救ってみせる」

「……捕まるよ？例えアンクでも」

「お前の為なら、何だってしてやる……今ここら辺に散らばっている、ジュエルシードって奴……あれでお前を……」

「それは駄目！！アレは危険だ！それに、管理局も本当に黙ってないよッ！？」

「じゃあ他にどうすれば良いんだよ！ロストロギアも駄目！収集も駄目！黙ってお前が死ぬのを見てろって言うのかよ！！」

「そうじゃない！でも、他に手がある筈だ！先ずはそれを探してからでも！」

「……じゃあ、他に手が無かったら……良いんだな？」

「そ、それは……」

ギュッ……。

「あう……、く、苦しいよ……アンク……」

「絶対に……死なせない……守ってみせる……」

何か……アンクがヤンデレになった気がするのは俺だけ？
つうか、マジで苦しいんですけど……つ、潰れる……圧殺される……。

「ア、アンク……死ぬ……今死ぬ……」

「おっと……すまん……」

アンクはやっと気づいたのか、すぐに俺から離れる。
むぅ、別に離れてとは言ってないじゃん。

「まぁ、何にせよ……今はシグナム達を歓迎しようよ？」

「……俺は出来ないな。なんたって、あいつらのせいでお前が呪われたんだ」

「アンク、流石に言って良い事と悪い事があるよ？俺も怒るよ？」

「……はぁ、お前は本当にお人好しだな」

「えへへ～、それが俺のジャスティス」

「威張んな」

ドスッ。

「あって……っ～、殴る事ないじゃん！」

「ふん……」

アンクは鼻を鳴らしてすぐにこの部屋から出て行った。
ツンデレか？そして今ツン期に戻ったのか？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「さぁ！今日はお祝いや！みんなたーんと食べてな！」

夜、何かはやてがお祝いとか言って料理をたくさん作っていた。
はやてマジ天使。

「……あの、主……」

「ん？何シグナムさん？」

「本当にこんなにたくさん食べても良いのでしょうか」

「うん！食べても良いんだよ！っと、俺は居候の身だから強くは言えないんだけど……」

「あはは！アニス君も気にしてるやないか！」

いや、まぁ一応気にしちゃいますよ。
収入源はアンクなわけだし……やっぱ翠屋で手伝いしようかな？
でも、信者共うるさいし……たぶんムッツリーニも来るだろう。

「ほら、ヴィータちゃんを見習ったら？」

俺は視線をヴィータに向け、シグナムに見るよう促す。
ヴィータは皿にたくさんおかずを盛り付けてモリモリ食ってる。

「シグナムさんもあれくらい食べて良いんだよ？主従関係なしに。
それはシャマルさんやザフィーラさんにも言える事なんだから」

「主……」

「ありがとうございます」

「お心遣い感謝いたします」

「えへへ～、早く皆が馴染んでくれたら俺嬉しいよ。それで呼び方もちゃんと名前でね」

「そ……それは……」

「え……嫌なの……」

「いえ！決してそのような！ですが、主の名前を気軽に呼んではいけない物なので……」

「あはは、固すぎだよシグナムさん。まぁ、すぐに名前を呼んでと言われても困りますしね。慣れるまで待ちます」

「……すみません……」

「おかわり！」

「あ、こらヴィータ！少しは遠慮したらどうだ！」

ヴィータよ、あんなに盛り付けていたのをもう食べたのか……。

パネェ、すげぇパネェよヴィータ。

「だって、はやての料理ギガウマなんだもん」

「あはは、そないな事言われると、ホンマに作った甲斐があったで。まだまだたくさんあるから、いっぱい食べてな！」

そう言って、はやては皿にたくさん盛り付ける。
おいおい、盛り付け過ぎだコノヤロー。

「主、何か取りましょうか？」

「ザフィーラさん。いえいえ、自分でやりますので、ザフィーラさんは食べてて良いですよ？」

「そうだ、お前は食べてろ。俺がやる」

「いや、アンクも食ってて良いよ」

「なん……だと……」

お前もキャラ崩壊してんじゃねーかコノヤロー。
人の事言えねぇじゃねぇかコノヤロー。

「ふっ……」

「何か言いたげだな、ザフィーラ」

「いや、別に……」

「てめぇ……」

「ちょっ、ストーップストーップ！何怒ってんのさアンク！」

何か二人とも火花散らしながら睨み合ってんだけど！？
て言うかそこの三人！シグナムにヴィータにシャマル！珍しいとか
口に出して言わない！！

「アンクさん、焼もち妬いてるんやない？」

「あのねぇはやてちゃん、俺は男、何でアンクが焼きもち妬くのさ
？」

「だって、アニス君かわえぇもん。よしよ～し」

そう言いながら、はやては俺の頭を撫でてくる。

「あう、こんな公衆の面前で辱めないでよはやてちゃん……あうあう……」

「……あぁ、もうアカン……アニス君！一緒にお風呂入るで！」

「嫌だよ！何考えてるのさ！？それとそこの三人！何悶えてるのさ！」

何か知らんが、シグナムとヴィータとシャマルが悶えてた。
何で？ねぇ何で？

「やんのかお前！」

「俺はそこまで言っていない」

「お前らは何時まで喧嘩してんだ！」

もう口喧嘩から殴り合いに発展しそうだぞこの二人。
ヤバいヤバイ……流石に止められないよ？俺。

そんなこんなで、家族が増えた一日なのでした。

第十八話　説明と呪いとお祝い（後書き）

ザフィーラ大好きな俺が通りますよっと

ザフィーラマジカッコいい……なのに二期も三期もそんなに出番がない……

えぇい製作者！何をやっている！ザフィーラにもっと出番を与えんか！

弛んどる！精神的に弛んどる！

全く、酷い扱いだよ。何でリードして散歩してんのさザフィーラ……

つうわけで、アンクと争わせます（笑）

いやぁ、それにしても……最後のお祝いの所、短い

それに呪いもあれだ、無理やり過ぎ

まぁ、頑張ろう

明日は番外編を上げますゆえ

どうかよろしくお願いします

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございます

番外編　なのはが暴走？？？（前書き）

どうも

たぶんこれが投稿されてる時は、俺は居ないと思います

実習で二泊三日してるので、明日も本編進むことなく、番外編がまた予約で投稿される事になってます

まぁ、実際予約で投稿するのは初めてなので、うまく投稿されてればと

さて、今回は番外編、と、言う事で

普段あまり出番がないなのはとの絡みを書いてみました

アニスとのカップリングはアンク！が大好きな俺としては、何とも百合百合しい物を書いてしまったのではと思います

まぁ、アニスは男なんですけどね

そして最後のオチは……

あ、ちゃんと最後辺りにアンクとの絡みも……あるのかな？

それでは、番外編始まります

番外編　なのはが暴走？？？

アニスサイド

～なのはの部屋～

「……あ～、あはは……どうしたのかな、なのはちゃん……」

「……アニス君ってさ……」

「……うん」

「……本当に男の子？」

何故かなのははいきなり、俺の体をペタペタと触り始めた……何これシュール。

どうも、へ？何でいきなりこんな事になってるのかって？ＨＡＨＡＨＡ！俺が知りたいくらいだよそんなの……まぁ、良いんじゃないかな？知らなくても。

たぶん、禄でもない理由に決まっている。

「男だよ？生物学上は」

「……やっぱり信じられないの！」

「えぇ～、じゃあ俺はどうしたら良いのさ～」

「……一緒にお風呂に入れば判明するよ！」

「おい、待て！何がお風呂だ！入るわけなかろうが！」

「でも、そうでもしないと本当に男の子なのか分からないし……」

「いや、他にも試す物はあるでしょ。後は確認するとことか」

「確認する所……」

そう言って、なのはは俺の股間を凝視する……。

おい、そこの変態。俺の股間を見るな、まだ精通はしてないから何も感じねぇけど、それは立派な視姦何だよ……やめなさい、はしたない。

「あの、そんなにジロジロ見られたら恥ずかしいよ……」

「……ア、アニス君……今のは反則だよ……」ポタポタ

なのはは鼻血を出しながら苦笑している。
最近の女の子は鼻血を出すのがデフォなのだろうか？否！断じて否！そんな女の子は見たくない！
というかそんな奴！某幻想郷に出てくる完璧で瀟洒な従者みたいに、忠義心は鼻から出るがごとく出さないでよ！

「な、なのはちゃん、鼻血鼻血」

「ありゃ、本当だ……」

なのはちゃんはティッシュを持ってきて鼻を抑える。
本当にこの世界の主人公なのだろうか……威厳の欠片も無い……。て言うか酷い絵面だな……俺は、こんななのは、見とうなかった！！

「それにしても、何で俺はなのはちゃんの部屋に来たんだっけ？」

「私と一緒に遊ぶためだよ♪」

「あれ？そうだっけ？」

「そうだよ！」

「……よし、帰ろう」

「何で！？」

「いや……何か後ろに、縄とか見えたから……」

気のせいであってほしいが、何故か見えてしまったものは仕方ない。
後なのは、今更隠してももう遅い、見えてしまったのだからな……。

「あ、あはは……これはその……」

「……なのはちゃんはその縄で、何をしようとしたの？ねぇ、教えてほしいな☆」

「……ごめんなさい……」

「うん、分かればよろしい」

とにかく謝ってほしかったのは確かだし、それでナニかされたら溜まった物じゃないしね。
全く、何でいきなりこんな貞操のピンチに直面してんだろう俺。

「それより、何して遊ぶの？」

「それじゃあ……アニス君、おいで～」

「……何故？」

なのはは両手を開いて俺においでと言う。
完全に膝に乗っける気まんまんだろこいつ。だが、俺がそんな物に釣られクマー！！

「わーい」

釣られちゃいました（笑）

「うわー、アニス君軽い。これじゃ本当に男の子なのか分からないよ。それに、髪もサラサラだし、私より手入れ行き届いてるし……」

「あはは、特にこれと言って手入れしてるわけじゃないんだけどね」

お母さんが無理やり手入れしてくるし、この世界でははやてがその肩代わりしてみたいなものだしね……。

「アニス君の首筋……ハァハァ……」

「ちょっ、なのはちゃん？」

何か後ろで変態がハァハァしてんだけど！？

というか、鼻息が首筋に掛かって……。

「ふぁっ、なのはちゃっ……くすぐった……いゃっ……」

「……あぁ、アニス君……可愛いよ～」

あぁ！？なのはが何かしらんがレナ化した！？これはヤバい！お持ち帰りされる！

誰か！誰か助けてぇぇぇぇ！

「アニス君……良い匂いなの……」

「いやっ、匂い嗅がないで……恥ずかしいし、くすぐったいよ。あうあうあう～」

「アニス君～」

「ひゃっ！おかしいよ！手がおかしい！何処触ってt、やめっ！け、獣！いやぁ！止めて！洒落になってないって！」

「大丈夫だよ、優しくするから。お母さんが言ってたの。「アニス君は絶対に競争率が高いから、今の内に骨抜きにして手籠めにしちゃいなさい！」って」

おぉぉぉぃぃ！桃子さぁぁぁぁぁぁん！あんた一体何やってんだ！
実の娘に！まだ九歳の子供にナニを教えてんだ！って、なのは！？
そこ駄目！

「ひぅっ！？む、胸は……駄目……くすぐってt、あはははは！駄目！さ、触らないで！あはははは！く、くすぐったいよ！あはははは！」

何でみんな俺の胸ばかり揉むのさ！
最近胸が痛いのは絶対お前達のせいだ！

「アニス君、可愛いよ……」

「そ、それは……男の台詞なのでは……ひゃっ！」

「あにふふーん……」

なのははいきなり俺の首を甘噛みしてくる。
きゃっ！噛みながら喋らないで！振動でくすぐったい！

「はぅ！ひぅ！あぅ！ふぅ！」

俺は変な声が出ているのに気づき、慌てて口を押えるが、それが更になのはの攻めに拍車を掛けてしまったようだ……。

「アニス君の声……もっと聞かせて？」

なのはは俺をそのままベッドに押し倒し、俺の両手を抑え、今度は俺を仰向けの状態で甘噛みを始める。

「いっゃ！ひぅ！あぅ！はぁっ！」

「カプカプ……」

「ひぃ！あっ！ふぅっ！」

「……ふぅ……」

「……ハァ、ハァ……」

賢者タイム……だと……と、とにかく、落ち着いた様だ。
た、助かった～。

「っと、思ったでしょ？」

「へっ？いやぁぁぁぁ！」

なのはは俺の上の服をいきなり脱がし始めた。
くっ！この！振りほどけない！というかなのはの力ヤバい！何で振りほどけないの！？
っ！そうか！俺、今身体強化とかしてないんだ！体型が小さいだけ

あって、この運動神経皆無なのはの力でも、裕に俺を抑えれるんだ!?

「いっゃ……やだよぉ……今のなのはちゃっ……怖い……」

「はぅっ……その涙目で訴えるの……凄くそそるの……」

うわぁぁぁ!逆効果だったぁぁぁぁぁぁぁ!
というかなのはがSに覚醒したぁぁぁぁぁぁ!

「その顔、ゾクゾクしちゃうよ」

「やだぁ、なのは……許して……」

「何を許してほしいの?アニス君は何も悪い事してないんだよ?」

「それ……でも……もぅ、許して……」

「ふふふ、だーめ」

クリッッ……。

「ひぅ！？」

なのはが唐突に、俺の……その……胸の突起物をこねくり回す……。
その瞬間、俺の体に電流が走るような感覚に陥る。

「ひ……あ……！」

声も出なくなって来た……これは本当にヤバい……どうしたら……。

「アニス君、アニス君、アニス君、アニス君」

壊れたラジオみたいに、連続して俺の名前を呼ぶなのは。
あぁ、どうしよう……本当にこれ、詰んだかもしれない……。

「に、にゃの……ひゃ……」

もう呂律も回らなくなっている……。
体も熱くて、思考も覚束なくなってきている。

「アニス君……大好きだよ……」

ゾクゾクゾク……。

なのはに耳元で囁かれる。

その時、体がゾクゾクして、完全に思考が追い付かなくなった……。

「にゃのひゃ……もう、らめぇ……これいひょうは……」

「駄目なの。アニス君にはもっともーっと、気持ちよくなってもらわないと……」

それはまさに死刑宣告。今の俺にとっては、もう快楽を感じたくない。

なのに、体は正直だ。それを望んでいるらしい……。

「ひゃぁ……もふ……かえらひて……」

「それも却下なの。さぁ、続きをするの」

そう言って、なのはは俺の唇に……自分の唇を……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「んだぁぁぁぁぁぁぁぁ！こりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「……高町さんとアニスの、濡れ場」

「おいムッツリーニ！貴様は何を！何を書いているのだ！」

「そうですよ、ムッツリーニさん。どうせならここは、アンク×アニスを書くべきです」

「貴女も何を言ってるの！？仁紫園さん！」

「……でもこれ……俺が書くのは苦労した……」ボタボタ

あぁ、鼻血がたくさん出て、ヤバかったんですね。
本編のムッツリーニは妄想しただけで鼻血を出して倒れる奴なのに、この世界のムッツリーニは些か根性があるようだ。

「では、今度はこちらも読んでくれませんか？」

「何々……？」

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰
〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

「アニス……ここが良いのか？」

「アンクぅ……ハァハァ……ここが、切ないよぉ……」

俺は、アンクに見えるように、自分の穴を……。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰
〰〰〰〰〰

「はい！アウトォォォォォォォォォォォォォォォォ！！！！はぁ、はぁ……」

「そうですか？あれ、ムッツリーニさん、どうしました？」

「……俺には、少し刺激が……」ブシャァァァァァァ！

いや、お前にとってどれも刺激にしかなりえないだろ……。
それにしても、この二人に呼ばれたので来てみたら、自作の俺の同人誌を見せたいって……。
俺、一応九歳なんですけど？犯罪だよ？しかもこいつら、中学生だから、一応お前らも駄目な気がするんだが……。

「それにしても、たくさん描いたんだね～」

「えぇ、私の趣味ですし。やっぱり、被写体が良いって言うのもあります」

「……同意……」

「はぁ……もう、帰っていいですかね？一応俺は九歳なんで、今度からは自重していただけると嬉しいんですけど？」

「「それは出来ない（ません）」」

「二人して否定しないで！？」

とにかく、これから俺の受難は続くようだ……はぁ。

番外編　なのはが暴走？？？（後書き）

はい、落ちは同人誌落ち！

まだだ！まだ濡れ場は書かんよ！

いやぁ、これを書いてる時、めっちゃ恥ずかしかったです

俺、こう言ったぬっちょり、苦手なんです

意外に初なんです

普段男の娘男の娘とか言ってる癖して、こう言ったものを見たり書いたり読んだりしたら、顔から火が出るくらい恥ずかしいのです……

それでは、今日はここまでです

明日も番外編になりますので、ご了承ください

ここまで読んでくださり、ありがとうございます

番外編　ムッツリーニと遊園地（準備編）（前書き）

今回の番外編は前後編です

まぁ、後編を上げるのは日曜日にですけどね

何か……書き出したら長くなりそうだったんでわけちゃいました

相変わらずの腐臭

ムッツリーニファンのみなさん、ごめんなさい

あと、時期的にまだ闇の書は起動してません

それでは、番外編前編始まります

番外編　ムッツリーニと遊園地（準備編）

アニスサイド

～～♪～～♪

「……ふみゅ……電話……？」

朝、俺は自分の携帯の着信音で目が覚めた。
うぅ、誰だよ～……俺は朝が苦手なんだ……。
仕方がないので、俺は電話に出る……。

ピッ。

「……はい……こふぃら、アニフでふ……好きな食べ物は……汁物でふ……九歳でふ……」

《……もしもし、土夜です》

「……ふぁ……ムッツリーニ……？……どうふぃたの？」

《……今日俺と、遊園地行かない？》

「……ムッツリーニ……冗談は……君の性癖だけに……してください……」

《……それは心外。俺は、普通だ》

「……ふぁ……そうでふね……それで……どうふぃて、俺なの？」

《……単純に、アニスと行きたいと思ったから》

「……わふぁりまふぃた……でふぁ……何時に……集合しまょう……？」

《……今が朝の六時半くらいだから……九時半に……海鳴公園で、待ってる……それじゃ》

ブツッ……ツー、ツー……ピッ。

……はぅ、どうやら……ムッツリーニ君は……俺とデートしたいみたいです……。

……どうしましょう……下着は……勝負下着の方が……良いですか

ね？

……まぁ、……俺はいつも……スパッツの下は……何も……穿いてないんですけどね……。

「ｚｚｚｚｚ……」

そして俺は、また眠りについてしまった……。

〜〜

「おい、アニス。起きろ！！」

「……ふぁ……アンふ？……もう少し……」

「何言ってんだ！もう八時半だ！いい加減寝すぎだ！」

「……八時半……」

はっ……思い出した……確かムッツリーニから電話がかかって来て、遊園地行く約束してたんだ。

危ない危ない。このままアンクが起こしてくれなかったら、ずっと

寝てたよ。

「……おはよう……アンク……」

「あぁ……それより、顔洗って来い。もう朝飯だ……。あ、ちゃんと服着てから来いよ！」

「……はーい……」

バタン……。

「……さて……何を着て行こう……」

とにかく、今は顔を洗う事よりも優先すべき物はそれだな。
何を着て行こう……取り敢えず、最近某幻想郷の祟り神様の帽子を買ったので、それを被って行こう。
次に上……いつも通りパーカーで良いんだけどな～……どうせならクドリャフカみたいにマントでも羽織る？
よし、採用。
次に下……よし、ジーンズで決定だ。

「……すっげぇ痛い子に見える……特にマント……帽子は良いね。
何かぴったりだ」

想像できない人は……そうだね、可愛い男の娘が、マントを羽織って、ジーンズ穿いてて、パーカー着てて、ケロちゃんの帽子を被ってるのは想像してみれば良いよ。

「さて、行きますか」

俺はそのままリビングに向かう。うん、まだ中に入ってないのに、朝食の良い匂いがしてくる。

「おはよー」

「あ、アニス君おはよう。どないしたん？そんなにめかし込んで？デートでも行くん？（笑」

「まぁ、そんな所だね」

ピシッ……。

空気が固まる音がした……何でだろう？あ、アンクが凄い形相でこっち見てる……。

何か近づいてきた、つうかこっち来た……。

「誰だ……何処のどいつとだ！」

「キャッ！？ア、アンク！？何々！？ちょっと……いたっ……痛いよ……」

「うっ……すまん……」

「全く……別に、デートって言うのは言葉の綾だよ。今日はムッ……じゃなかった。土夜君と遊園地で遊んでくるだけだよ」

「な……何や……男の子か……って……土夜君って誰や？」

「……俺は却下だ！何であんな変態と遊園地に行くんだよ！」

「えぇ！？その子変態さんなんか！？」

「いや、確かに変態だけども……あれでも結構面白い人だよ？まぁ、行くなって言われても行くけどね」

「……はぁ、何かされそうになったら電話しろよ？そいつ殺してや

るから」

「あはは……アンクさん物騒やなぁ……許可するで」

おぉう……ムッツリーニ……君に死亡フラグが立ったよ……どうしましょう。

……まぁ、お触り程度なら怒らんけど、流石にムッツリーニも男。

俺をどうこうしようと思うわけないでしょうに。

たぶん、俺の写真とか撮って、ムッツリ商会で売りさばくつもり何だろう。

「まぁそんな事より、朝ご飯にしよ？俺なら大丈夫、いざとなったら大声出して助けを求めるさ」

ごめんムッツリーニ……流石に俺は君の事を庇いきれないわ……なんてったって、ムッツリーニなんですもん。

まぁ、ムッツリーニは変態という名の紳士なので、そういう事は全くしないから大丈夫。

だから好きなんです。彼は別に、俺をどうこうしようと企んで遊園地に誘ったわけじゃないはず！

取り敢えず、飯食お……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

～～～～～～～～～～～～～

キング・クリムゾン！！

時を……結構消し飛ばした。既にアニスは待ち合わせ場所に着いている。

「つっちや～！！おっはよー！」

「……おはよう」

「もぅ、いきなり誘わないでよ。もし俺に用事とかあったらどうする気だったの？」

「……その時はその時」

「……はぁ……駄目だよ？ちゃんと一日前とかに言ってよ～。今度からはそうする事！良い？」

「……把握」

「ん、分かればよろしい。さて、行こっ！俺、遊園地とか初めてなんだ！エスコートお願いね」

「……任せて」

相変わらず、口数が少ないねぇ。
まぁ、そこがムッツリーニか……。

「……それよりも、着る物は統一した方が良い」

「あ、分かる？まぁ、これしかなかったんだ。似合ってない？似合ってなかったらマントは取るけど」

「……似合ってる。だけど、クドのマントを羽織るなら、帽子はやっぱりクドの帽子の方が良い。そのケロちゃんの帽子でも確かに良いけど……今度からはそっちをお勧めする」

前言撤回……結構喋る奴だった……。
お前、この小説に出てきてから一番喋った場面なんじゃね？あ、メタ発言禁止？知ってるよコノヤロー。

「それじゃ、行こっ！」

「……（コクリ）」

そんなこんなで、俺とムッツリーニは遊園地に向かった。
道中でムッツリーニは俺の写真を撮ってたが……まぁ気にしないでおいた。
それよりも、結海鳴から少し出るのか……あ、ただ今電車の中でございます。
そういや、転生してから電車に乗るのは初めてだな。
やっぱ休日なので、人がたくさん……だから立ちたかったんだけど……。

「吊革が……届かない……だと……」

「……やっぱり席に座ったら」

「ふっ、ムッツリーニ……この完璧健康なアニス君を舐めるな……吊革無しで立っててやる！！」

「……無理はいけない」

「へっ？ちょっ……！」

ムッツリーニはいきなり俺の手を掴み、引っ張って行く。
そして、着いたのは席が一人分空いている車両。

「……座って良いよ」

「ムッツリーニ……悪いよ、俺だけ座るなんて」

「……気にしない」

「いや、お前が気にしなくても俺が気にするんだが……あ、そうだ……。ムッツリーニが座って、俺がムッツリーニの膝の上に乗れば良いんだ！」

「……それは」

「ほら、早く早く！」

「……出来ない」

「もう！ほら、座った座った！」

「うわっ……！」

ドサッ……ポス。

「うん！これでオッケー！」

「……し、刺激が」

何か後ろで聞こえたが……気にしないでおこう……。

「あ、ムッツリーニ。鼻血は出さないでね？」

「……出そう」

「鼻押さえてなさい！」

「……」

「……おい、大きくするな……違和感あり過ぎて嫌だ」

「……ごめん」

「……はぁ、謝んないでよ。て言うか、欲情するな」

こいつは……大丈夫かな？
まぁ、こいつに限って間違いはないと思うから良いけどさ。

「それより、大丈夫？」

「……何とか」

「……うん、分かった、分かったから耳元でハァハァしないで。弱いんだから」

「……善処する」

ま、まぁ……とにかく悪い奴じゃないし……仕方ない、許してやろう。
それも男の性だ。本編ではこいつ、秀吉でもこうだったし……まぁ、初めから怒ってないけどね。
俺も男、良く分かるよその気持ち。

取り敢えず、俺とムッツリーニは、遊園地に向かうのでした……。

番外編　ムッツリーニと遊園地（準備編）（後書き）

いやぁ……もうムッツリーニ可愛いな

アニスはまぁ、今回は何か強気な幼馴染風な口調でしたね

そして、息子を大きくされても動じないアニスたんマジパネェっす

敬服だねもはや

さて、今度後編を上げるのは日曜日です

明日は俺はもう家に居るので、本編を進めます

それでは、後編をお楽しみに！

ここまで読んでくださりありがとうございます

第十九話　買い物と誘い（前書き）

ただいま！

いやぁ、やっと帰ってこれた！

だけど明後日も泊り（泣）

まぁ、頑張りますよ

さて、今回は何か駆け足みたいになっちゃってます

中々話が進まない

本編始まります

第十九話　買い物と誘い

シグナムサイド

「シグナム、アニスを起こして来てくれ」

「……分かった」

我ら守護騎士が目覚めてから、二日目。
昨日分かった事は二つ。今回の主とここの家の主人は優しすぎる事と、この男……アンクと言う男は、とにかく怪しい人物だと言う事だ。

「あぁ、言うのを忘れてた。気を付けろよ？寝起きのアニスにはな」

「？ナニを言っているのか理解できないが、覚えておこう」

取り敢えず、意味が分からないので適当に流しておこう。
それよりも、早く主を起こしに行かなければ。
私はリビングを出て、主の部屋に向かう。

コンコン。

「失礼します」

主は寝ているので、返事は返ってこなかったので、まだ寝ておられるのだろう。
主は朝に弱いのだろうか？
そう思いながら、私は主が寝ているベッドに近づき、主に声をかける。

「主、もう朝です。起きてください」

「……ふぁ……アンふ？……何で……敬語？」

「主、私です。シグナムです」

「……はぅ……シグナムさんでしたか……すみません……寝ぼけてました……今起きます……よいしょっ……」

ガバッ。

主が起き上がり、そのまま立ち上がる。

「なっ……」

私は自分の目を疑った……。

「……どうしました？……シグナムさん……」

「あ、主……その恰好は……」

主の格好が……その……凄く、薄着なのだ……。

「……あうあう……シグナムさんが……固まっちゃったのです……」

「あ、あの……主……」

「……はい……何でしょう……」

「やはり主は……女性なのでは？」

「……あうあう……俺にも……付いてるもんは付いてんじゃー……なのです……」

何でだろうか……卑猥な事を言っているのに、主が言うと可愛く変換されてしまう……。

「……ねむねむ……」

「って、ベッドに戻ろうとしないでください！」

「……眠い……」

「行きますよ？主」

私は主にそう言い、主の手を握る。

……小さい……これで本当に九歳なのだろうか？

「……はい……」

主は弱弱しく答える。

～気を付けろよ？寝起きのアニスにはな～

確かに……これは危険だ……。
明日からは……覚悟を決めて起こしにこねばな……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

アニスサイド

「ほなら！みんなの服を買いに行こうか！」

唐突に、はやてが声を上げる。
まぁ、内三人が女の子だもんね、それには賛成だよ。

「それって……またしま◯ら？」

「うん、そうやよ？」

俺もみんなも大好きなしま◯ら！
まぁ、それは前世の事で……この世界のしま◯らは、俺の知っているし◯むらでは無かったのだ……。

「あの、何もそこまでしてくれなくても良いんですよ？」

「そうです。我々は主をお守りする守護騎士。そんな私達が、買い物などと」

「シグナムさん？遠慮はしちゃいけないって昨日教えたよね？」

俺はジト目でシグナムに良い寄る。
シグナムはバツが悪そうに答える。

「主は優しすぎます。プログラムでしかない我々に、何もそこまで……」

「このお馬鹿！」

ペチッ。

俺はシグナムの頭を叩こうとしたが、身長差があり過ぎたので足を軽く叩く。
て言うか絶対痛くないよ今の。

「シグナム達は家族だよ！プログラムだろうと、なかろうと。それ

は変わりないの！て言うかプログラムだから何なのさ？それとこれとは別！むしろ関係ない！分かったか！答えはハイかイエスかオーケーだ！」

「……は、はい……」

「ハァ、ハァ……疲れた……」

駄目だ、長い台詞だけでもこの疲労。
やっぱりもう少し背があってもよかったんじゃない？

「主、水です」

「あ、ありがとう、ザフィーラさん」

何故か用意が良いザフィーラ……と思ったらアンクに勝ち誇った顔してる……。
どうしてこうなった。

「ま、まぁ。アニス君がほとんど言ってもうたけど、ウチも気にせぇへんよ？せやから服買いに行こう？」

「……」

「俺を見ても駄目だよ？さっ、買いに行こうか。それに、ヴィータちゃんもシャマルさんも行く気満々だよ？」

「……はぁ……分かりました……行きます……」

シグナムはため息をつきながら妥協した。
うむ、良き事かな良き事かな。

「それじゃ、俺も新しい寝間着買いたいから行こう」

「ちなみに、次は何を着る気なんだ？」

「ん～……前行った時に猫耳が着いた寝間着用の帽子があったから、今の寝間着に合わせようかと」

「……前から思っとったんけど、しま○らがど何処に突き進んどるのか分からないんやけど……」

「俺もさ……」

とにかく、現実のしま○らはそんな所では無いので、この話で行ってみようとか思った人……。
お間違いないよう……お願いします。
しま○らはそんな所じゃねーから。
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「うわぁっ……すげぇ……」

ヴィータが驚きの声を上げる。
まぁ、結構服が売ってるし、ヴィータサイズのも売ってるから嬉しいんだろうね。

「ほな、選ぼうか」

そう言ってはやては三人を引き連れて行ってしまった……。
うむ、男だけになってしまった……。

「……俺、選んでくるよ」

「あぁ、こっちはこっちで見て来るから、遠くに行くんじゃねぇぞ

？」

「うん、分かってるよ。それじゃ、行ってくる」

俺はアンクとザフィーラにそう言って、服を見て歩く。
さて、何かあるかな？そろそろ暑くなりそうだし、夏物でも見に行こう。

「確か、こっちで夏物やってたな～っと……あったあった」

何故かこのしま○らは結構広い。
だから何処で何を売っているのかを地図にしてそこらへんに束で置いてある。
俺はそれを見て夏物が売ってる場所まで来た。

「う～む、やっぱり夏は暑いし、タンクトップかな？まぁ、買いだね。１０００円もしないし。あ、外に出かける時用に帽子も必要だね。後は……」

まぁ、何やかんやで俺もショッピングを楽しむのであった。
途中、何かスキマ妖怪が着るような服と傘と扇がセットで売ってたのは、俺の目の錯覚なのだろう……うん、錯覚だ。

「おっ、これは……」

そして戻る途中、ヴィータが好きそうなウサギのぬいぐるみを発見。
俺はそれを持ち、アンクに買ってもらう。

アンクと合流する前に、何か大人からヤラシイ目つきで見られてたのは……たぶんそいつらがロリコンだったかショタコンだったかだね。

来いよアグネス！

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「いやぁ、またいっぱい買ってしまったなぁ」

「うん、袋を見れば分かるよはやてちゃん」

アンクとザフィーラが結構いっぱい詰め込まれている袋を両手に抱えて運んでいる。
うむ、凄い量だな……。

「なぁなぁアニス！」

「ん？どうしたのヴィータちゃん」

「似合ってるか？」

ヴィータは俺の前で歩くのを止め、クルッと一回転して全身を見せてくれる。
うむ、似合う似合う。可愛いな。

ヴィータの格好は、アニメ本編となんら変わり無い。
少しゴスロリチックだね。

「うん、似合ってるよヴィータちゃん」

俺はヴィータの頭を撫でようとするが……届かない……。

「……ドンマイ……」

「憐みの目で見て言っても説得力ねぇよコノヤロー」

軽く絶望した。
これでは逆ナデポではないか！まぁ、良いんじゃないかな？
とか思ってたらヴィータが俺の頭を撫でて来た……。ちくせう……。

「あうあう……ヴィータちゃん、頭撫でちゃいやっ……」

「ヴィータ！主に失礼だろう！」

「だってシグナム……私より小さい人初めて見るから……」

まぁ、この子も苦労してたんだろうね……。
だからって、俺の頭を撫でないでほしいな……。

「まぁまぁシグナムさん。俺は気にしないから。いつもアンクに撫でられてるし……はやてちゃんにだって……」

どんどん声のトーンが落ちていく。
そうか、俺は撫でる側ではなく、撫でられる側だったのか……よっしゃ、ガンバロ。

「でも、ホントにアニス君は可愛いですよね」

「あ、シャマルさん、名前呼んでくれた♪それにちょっと反応遅れちゃったけど、ヴィータちゃんも♪」

「良かったなぁアニス君」

「うん！えへへ～、後はシグナムさんとザフィーラさんだけだね」

「……もう少し待ってください……」

「……右に同じく……」

「あはは、待つよ、いつまでも」

俺は二人にそう言って笑う。
その時、俺を射殺さんとばかりの視線を感じた。
俺はその視線の方をチラッと見る。そこには仮面を被った男が居た……。

やれやれ……来いって言ってるのかな？
仕方ない、乗ってやるか。

「みんな、俺ちょっと寄る所思い出しちゃった！さき帰ってて！」

「それでは、私達はお供させて頂きます」

「ううん、シグナムさん達も帰って良いよ？」

「しかし……」

「大丈夫。ちょっとした事だから。何かあったら念話で呼ぶから安心して？」

俺はシグナムにそう言う。

まぁ、無理かな？でも、着いてこられちゃめんどくさいし……。

「……分かりました。では、何かあれば呼んでくださいね」

「分かってる！アンクも着いてきちゃ駄目だよ？」

「……ちっ」

舌打ちすんな。

「ごめんねはやえちゃん。すぐに帰ってくるから」

「うん、分かったで。出来るだけ早く帰って来るんやよ?」

「うん、分かった!それじゃ行ってくる!」

俺は皆にそう言い、駆け出す。

さて、どっちの方向に行った?探すのめんどくさいし、魔力を辿ろう。

第十九話　買い物と誘い（後書き）

やぁ！二日ぶり！

ディアボロだよ☆

今回は駄作だね

まぁ、頑張ったよ……実習の疲れがまだ残りながらだからね

しかも今日は朝の3時に起きて、それから今までずっと起きてます

授業中は死にそうだった

そして眠い

だから、ついキンクリ使いまくっちゃったんだ☆

次はあの、仮面の男Ａ・Ｂとの戦闘になります

まぁ、ワンサイドゲームになるだろうね

それにしてもこの二人、マジで嫌いだ

第二十話　やっぱり好きにはなれないな（前書き）

どもー

私です

いやぁ、眠たい

昨日１１時くらいに寝たのに、起きたのが昼の１２時

……すっげぇ寝てた……

そんな一日の始まりでした

本編始まります

第二十話　やっぱり好きにはなれないな

アニスサイド

「こっちか」

俺は仮面の男を追っている。
追っていると言うのは、少し間違いかな？誘われた、俺はそれに乗った。
乗るか反るかは俺次第だったはず。
あの仮面の男……いや、悪戯猫……でもないな……まぁ、重罪猫とでもしとこうか。

とにかく、その二人に誘われたのを、俺が乗った。
だから今だって、こんな人気のない所まで来ているのだ。

「……ふふ、お姉さん、身悶えしちゃうってお姉さんじゃねぇや」

そんなボケを、一人で言って自分でツッコム。
この体になってから、久しく忘れていたよ……この高揚感。
若干口調が某とあるに出てくるオリアナみたい感じになっちゃった。

「……もう良いだろ？だいぶ人気も無くなってきた……それに、い

つまでも大人が子供を待たせちゃやーよ？もっと大人は速く行動すべし」

俺は誰も居ない場所で言葉を発する。
うむ、こう人が居ないとさ、独り言みたいで恥ずかしんだが……。

「ガキが何を言っている……」

声が聞こえてくる。
それは俺の声ではなく、第二者の声だ……ふぅん、もう一人は高みの見物かい？ふふふ、そう言うの、嫌いじゃないわ。

「おやおや、男の人でしたか。まさか俺の強姦しようと？キャァァ！犯されるー！」

「……黙れ」

「あらあら、今どきの人には冗談も通じないのかしらん♪つかこの口調めんどくさ、普通に戻そう。それで？何で俺を誘った？」

「率直に言おう。闇の書に関わるのは止めろ」

ほら、やっぱりこれだ……。
でも、気づいてないのかな？俺が闇の書の現マスターだって事。

「え？闇に書？何それ分かんなーい」

「ふざけているのか？」

おうおう、檜山ボイスでよぅ言うわ。

「ふざけてなんかないよ？でも、真面目ってわけでもないけどね」

「……それで、答はどっちなんだ？関わるのか、関わらないのか」

「答え何て決まってんじゃん……関わるに決まってんだろう？バーカ」

「そうか……ならば……死んでもらおう……」

目の前の男がそう言うと、後ろから気配を感じる。
馬鹿だね……子供だと思って甘く見てるでしょ？んじゃ、お仕置き決定。
俺は後ろを振り向き、呪文を唱える。

「レイス」

「なっ！？ガッ！」

俺の手のひらから、野球ボールサイズの黒い球体が放たれる。
それは男のお腹に命中し、男は倒れ込む。

「ありゃりゃ？今のは前戯なのに、もう腰が動かなくなってしまったの？」

「ぐっ……ふざけるな！」

男はそう吐き捨て立ち上がる。
そして、また後ろから気配を感じる。
うむ、仕留めれなかったから自分が……と思ってるのかな？

「はぁっ！」

「ドラグナー・ナグル」

ゴツンッ！！

俺に向かって放たれた拳に、呪文で強化された自分の拳を合わせる。
ふん、子供と思って、魔力強化を怠ったか？
俺はそのまま男の拳を殴りぬける。まぁ、骨折はしてないだろうけど、使い物にはならなくなったね。

「グァァァッ！！」

「おい、舐めてるのか？俺を……だったらお前ら……俺の実力の３分の１も出せないぞ？」

「ハァッ！」

「グッ！オォ！」

今度は二人掛かりか……まぁ、止まって見えるわな。
こんなスローパンチにスローキックじゃ。

「レドルク！」

簡単に合わせられて終わりだよ？

俺は足をレドルクで強化し、二人の軸足を払う。

「ウォッ！」

「ガッ！」

二人は盛大に転ぶ。

ぷぷぷ、哀れだね、今度何か買ってやるから頑張れこのヤロー。

「あらあら、さっきまでの威勢は何処に行ったのやら……」

「貴様……何故デバイスもなしに魔法が使える！」

「ん～、そんな事を敵に教える義理も義務もないと思うんだけどな……それに……ソルド・ザケルガ」

俺は呪文を唱え、巨大な雷の剣を作り出す……。

「今から死に行く者に……言っても無駄でしょ？土産話にでもする？」

「結構だ！！」

右側の男がそう言って立ち上がり、俺に蹴りを入れてくる。
まぁ、無意味に等しいねそれは。

バチバチッ！

「クッ！」

「動けないよね？あはは、残念だったね♪」

俺は目の前にまで転んで尻餅を付いているもう一人の男に剣を向ける。

「卑怯な……」

「へ？何言ってるのお兄さん？お兄さん達が卑怯何だよ？俺はただ自衛してるだけだよ？そこを穿き違いないでよ？人聞きの悪い。お兄さん達がいきなり殺すとか言ってきて俺に殴り掛かってきたんじゃん。なのに、敵に剣を向けて卑怯と言われる何て……心外だな～。俺は悪くないよ？悪いのは闇の書から手を引けだの、関わり合いになるのなら殺すだの……いきなり言って来たお兄さん達が悪いじゃん。じゃあ裁判でも開こうか？まぁ、一切お兄さん達に勝ち目はな

いだろうけどね？」

俺は愉快に愉快に言葉を紡ぐ。
少し悪乗りしてる気もあるけど、まぁ、やり過ぎがちょうど良いって言うしね。

「まぁ、俺としては今ここで殺っちゃっても良いんだけどさ～」

俺は剣を消して、二人を見る。

「それじゃ駄目なんだよね～。あぁあ、残念残念。んじゃ、俺は帰るね～、バイバ～イ」

そして俺は後ろを向き、歩き出す。
時間の無駄だったねこりゃ。あぁ、これだったらアンクと戦ってた方が良い訓練になるよ。

「舐めるな！！」

後ろの男が何か叫び声を上げた。うるさいな……。
俺は振り向きもせずに手だけを後ろに回して。

「グラビレイ」

ズガァン！！

呪文を唱える。

「「ガハ！！」」

「あややや、一人の勝手な行動で、お仲間さんが巻き込まれてしまいましたね。貴方のせいですねこれは」

「アッ……ガァッ……」

「グッ……アッ……」

「まぁ、重力で押し潰されそうになってるから、喋れるわけもないか……さて、今度こそ帰ろうっと……」

俺は再度後ろを向き、踵を返す。

まぁ、久々の戦闘で、少しは退屈しのぎになったかな？

あんましこう言った実践を怠ると、勘が鈍るしね。

「さて……もうここまで来たら追ってこないだろう」

さっき居た場所よりも少し遠くまで歩いてきた。
もう追ってこないだろうし、あれだけ体力を減らしてやったんだ。
今日は諦めるだろう。

「それにしても、やっぱ好きになれそうもないな……あの二人は」

まぁ、どうでも良いんだけどね～。
その時……。

ドックン……。

「っ……！」

俺は急な痛みに、片膝をつく……。

「ぐっ……あっ……」

胸が痛い……だと……。
これは、闇の書が起動した時と同じ痛み……。

「ハァ……ハァ……」

やっば……これ、あの時よりも痛い……。
洒落になってない……。

「アグッ！……か……帰ら……無いと……」

俺は胸を押さえながら歩き出す。
今の状態じゃ、転移系の魔法は使えない……影のゲートでも使うか？
いや、仮に使えたとしても、こう人が居ると駄目だ……。

「っく……急に……どうした……んだろう……」

俺は止まりそうになる思考を無理やり動かして考える。
心臓麻痺？いや、名前を書いたら死ぬ黒いノートの持ち主とかと接点無いぞ？
つか居るのか、この世界に……。

「ハァ、ハァ……くっそ……」

ドックン、ドックン……。

痛い……尋常じゃないねこれ……いやマジで……。

「はは……こりゃ、無理だわ……」

俺はもう一度人気がない所に移動する。
こうなったら、もう使うしかない……。

「……っく……ここなら……大丈夫……だろう……」

俺はアンクの魔力を探り、場所を絞り込む……。
……ここか……。
俺は少しだけ魔力を開放し、そのまま影に溶け込む……。
影のゲートによる転移。ネギまでエヴァが使っていた転移魔法の一種。
習得していてよかった転移魔法！

そんな事を思いながら、体が完全に影に溶け込む。
あぁ、もう……意識飛ぶなこれ……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

アンクサイド

ったく、あいつは何処に行きやがったんだか……。
気になるだろうが。

「どうしたアンク？主が心配なのか？」

「当たり前だ。そういうお前だって、随分挙動不審じゃないか。え？シグナム」

「主を心配しない従者なんていないだろう。それにしても、遅い……」

「まぁまぁ二人とも。アニス君やったらすぐに帰ってくるて」

あれからすぐに家に帰り、アニスの帰りを待って早３０分。
一向に帰ってくる気配がしない。
全く、何処に行ってるんだか……。

「はぁ……」

「あはは、本当にアンクさんは心配性やね～」

「ふん……」

俺はいつも通り、鼻を鳴らして顔を仰向ける。
その時、俺の後ろに魔力の反応がする。
これは……アニスか！
俺はすぐに後ろを振り向く。

ズブブ……。

そこには、俺の陰からドンドン姿を出していく、アニスの姿があった。
しかも、横たわった状態で。

「アニス！！」

俺は急いでアニスのそばに近づいた。

「ハァ……ハァ……」

息はしてるものの、意識は無いようだ。

だが、明らかに息切れって感じの呼吸じゃないな……。

「なっ、主……どうしていきなり……」

「おいアンク！説明しろ！」

ちっ、守護騎士どもも気づいたか。
まぁ仕方ない。めんどくさいが後で説明しないと……。
それよりも、今はアニスだ。

「説明は後だ。それよりも、今はアニスを部屋に運ぶぞ……」

「……分かった」

取りあえず、部屋で寝かしときゃ大丈夫だろう。
俺はそう思いながら、アニスを部屋に運ぶ……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「………んっ……知ってる天井だ」

俺は目を覚ます。
どうやら影のゲートの転移は成功したようだ。
だが、さっきの胸の痛みで、体力を持って行かれた……かなり体が重たい……。

「よいっしょっ……と……あれ？」

どうやら、体力を持って行かれたのと……この寝ているヴィータのせいで体が重いようだ。
潰れるって……。

「……ふふふ、誰かの寝顔を見るのは……久しぶりだな～。プニプニ～」

「ん、うん～……子ども扱いすんな～……」

「クスッ……夢の中でも子供扱いされてるんだ……可愛い」

もう頭撫でちゃえ。
こんなチャンス、滅多に無いや。まぁ、普通に撫でようとしても届かないし、良いよね？

「よしよ～し」

俺はヴィータの頭をなでる。
オレンジ色の髪の毛……俺、髪染めようかな？思い切って白か銀に……。
あぁ、でも……リアルクドになっちゃうからな～。
まぁ、保留ってことで。

そんな時。

ガチャッ。

この部屋のドアが開かれる。
入って来たのはシャマルだった。まぁ当然か。この中では医療担当だしね。

「アニス君！目が覚めたんですね！」

「あはは、おはようシャマルさん。なんてね」

「今は冗談を言ってる場合じゃないですよ！」

「あうあう……シャマルさん怖い怖いなのです。ほらほら、笑って笑って。にぱー☆って」

「す、すいません……少し取り乱してしまいました……。アニス君、動けます？」

「ん、大丈夫だよ。どうしたの？何かあった？」

「いえ、そうではないですよ。目立った外傷は見当たらなかったので、もしかしたらと思いまして」

「そっか……うん、大丈ですよ。心配してくれてありがとうございます」

「従者として当たり前です」

「えー、そこは家族だから、でしょ？まぁ、良いけどさー。ぶーぶー」

俺は少し拗ねた感じを出して言ってみる。
シャマルは少し焦ったように訂正してきた。

「クスッ、冗談ですよ、冗談」

「もう……アニス君ったら……あ、後敬語は要らないですよ？さん付けもしなくて良いです」

「そう？……じゃあ、シャマル」

「はい、何ですか？」

「えへへ～、呼んでみただけだよ。それにしても、シグナムさんやシャマル。ザフィーラさんを見てると、お姉ちゃんやお兄さんが出来たみたいで嬉しいよ」

「……それじゃあ、お姉ちゃんって呼んでも良いんですよ？」

そう言って、シャマルはニコッと笑う。

あう……自分で言っておいてなんだけど……恥ずかしかも……。

「あう……シャ、シャマル……お姉ちゃん……」

「何ですかー？アニス君」

「えへへ～、本当にお姉ちゃんが出来たみたい」

「本当に、アニス君は可愛いですね～」

「あう……一応俺も男だから……少しは自重してください……」

「ふふふ、ごめんなさい。それじゃ、みんなに報告しに行きますよ？」

「はーい。それより、ヴィータちゃんはどうしよう？」

「そのまま寝かしておいてください。起こすのも可愛そうですし」

「そうだね……それじゃ、ヴィータちゃんをベッドに寝かしつけて……っく、持てない……シャマルお姉ちゃ～ん（泣）」

「はいはい」

そんなこんなで、シャマルとは打ち解けました。

まぁ、そんな事よりも……。

「どうしてこうなった」

あの後シャマルと一緒にリビングの中に入ると、二人の般若が居た。
一人は言わずもがなアンクだ。二人目ははやて。
そしてその後ろではシグナムとザフィーラが、物凄く悔やんだ顔をしていた……。
うむ、どうしてこうなった。

「「ア～ニ～ス（く～ん）」」

「……あ～……あはは……どうしたの？二人とも？顔が怖い怖いなのですよ？」

「……正座」

「へっ？」

「そこに正座しぃ！！」

「は、はい！！」

俺ははやての気迫に負け、正座してしまう。

「さて……お待ちかねのお説教タイムや……」

「いや、誰も待ってない……」

「あぁ！？」

「ヒィッ！ごめんなさい！」

アンクに睨まれてしまった……。

この後、二人から小一時間以上説教されたのは……言うまでもない……。

あぁ、疲れた……。

あ、所で、あの胸の痛みは何だったんだろうね？

俺も今だに分からない……ま、何時か分かるでしょう。

それじゃね～。

～オマケ～

「アニス君、大丈夫ですか？」

「はぅ～、足が、痺れて痛いよ～（泣）シャマルお姉ちゃ～ん……」

「「「お姉ちゃんだと（やと）！？」」」

あれ？なんか三人とも反応したんだけど……。
しかも、三人ともシャマルを睨んでるし。

あ、三人って言うのは、アンク、はやて、シグナムの三人だよ？

「シャマル……これはいったいどういう事だ？なぜ主が、お前の事をお姉ちゃんなどと……」

「せやな～、ウチも気になるな～」

「吐いてもらおうか？何故お姉ちゃん、何て呼ばれているのか……」

「あ、あれ？三人とも、どうしたの？わ、私、何かしたかしら？」

「「「問答無用！！」」」

そう言って、三人はシャマルを何処かに連れて行ってしまった。
……終われ……。

あ、そうそう、ヴィータがどうなったかって言うと。

あの後起きて来ていきなり抱き着かれました。

「も、もう絶対に一人でどっか行くんじゃねぇぞ!!」

「……う、うん……」

あれ、もう俺に慣れたの？懐くの早くね？
しかも、それ男の俺が言う台詞じゃ……つかヴィータがかっこよく見える……。

そんな感じでした。

今度こそ終われ。

第二十話　やっぱり好きにはなれないな（後書き）

最後わけわかめ

さて、ここでフラグパロメーターを見よう

アンク：うん、まだいける

はやて：アニス君……抱きしめてもえぇか？

なのは：……まだ……まだぁ！

シグナム：今回の主は、優しすぎる……

ヴィータ：信用……してみるか……

シャマル：お姉ちゃんですよ～

ザフィーラ：今回の主は、小さいな

こんな感じです

相変わらず落ちてるのはまだはやてのみ

シャマルはお姉さんと呼ばれるだけで、落ちてはいません

それより聞いてくれよ

家の妹さ～、最近二次に染まりつつあるのよ

彼氏の影響だねこれ

僕花を毎週見てたし、ウサギドロップも見てるし

最近じゃ俺に

「エンジェルビーツって面白いの？」

って聞いてきた……

……今のこいつにリトバス勧めたらやりそうで怖いｗｗｗｗ

まぁ、妹嫌いなんでどうとも思わないがな

どうせならお姉ちゃんが欲しかった……

田村さんみたいな、な

あの人はブラコンで有名らしいね

何か弟に彼女出来たの知って、泣きながら実家に帰りたくないって言ったらしい

……まぁ、そんなお姉ちゃんが欲しいわけではないけど……田村さんは可愛いからな～

弟さんが羨ましいは

そんな事を思う私なのでした

それでは、明日はまた番外編

ムッツリーニと遊園地後編をお楽しみください

ここまで読んでくださりありがとうございます

呪文説明

レドルク

足を強化する呪文
ウォンレイの呪文で、良く移動にも使われている呪文

ソルド・ザケルガ

ガッシュの兄、ゼオンが独自に作ったオリジナルの呪文
巨大な雷の剣を作りだし、それで相手を攻撃する呪文

そんな所ですかね

では、また明日とか

番外編　ムッツリーニと遊園地（遊び編）（前書き）

どもっす

今夜は俺居ないので、木曜日に上げた番外編の続きを上げます

今回は……甘々なのかな？

自分で見直して、少し砂糖を吐きそうになりました

それでは、番外編始まります

番外編　ムッツリーニと遊園地（遊び編）

前回のあらすじ

土夜と遊園地に行く事になりました。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「おぉ！ここが遊園地！でけぇ！テンションあがって来たよ！」

「…………（グッタリ）」

「……あの……俺が言うのも何なんだけどさ、大丈夫？」

「……心配ない」

「そっか、ごめんね、無理させちゃって」

「……子供に心配されるような軟じゃない」

「……えいっ」

俺は何かむかついたので、ムッツリーニに抱き着いてみた。
そしたらムッツリーニは鼻血を出して悶えてしまった。

「あはは！やっぱ軟じゃん！」

「……それは反則」パシャッ

「おっ、早速一枚？気が早いね」

「……撮れる内に撮っておく」

「いつ倒れても良いように？」

「……（コクリ）」

「あはは、やっぱ軟だ。それじゃ中に入ろうか？」

「……（コクリ）」

俺とムッツリーニはようやく遊園地の中に入る事にした。
まぁ、無駄話してたら時間無くなっちゃうしね。

「あ、そうだムッツリーニ」

「……？」

「手、繋ご？俺こんなナリだからさ、人ゴミに簡単に飲まれちゃうから。迷子になりたくないし、ムッツリーニにも迷惑掛けたくないわけよ。だから、繋ご？」

「……把握」

ムッツリーニはそう呟いて、俺が突き出している手をぎゅっと握る。
……やっぱ大きいな、ムッツリーニの手。まぁ、俺がほぼ幼稚園児と変わらない体格だから仕方ないんだけどね。

「えへへ、ムッツリーニの手、暖かい」

「……」パシャ

「もぅ、また写真。案外恥ずかしいんだから、自重してよ……あうあう……」

「……」パシャ、ボタボタ

「こらこら、鼻血流さない。変質者扱いされるよ？」

そんなこんなで、乗り物に乗るチケットを買い、そのまま遊園地内に入った。
それにしても、やっぱ休日だから人がいっぱい。
子連れからカップルまで……子連れは良い、だがリア充、てめーらは駄目だ。

「……何から乗る？」

「う～ん……ジェットコースター……と言いたいけど……あはは、この身長じゃ規定に引っかかっちゃうから駄目か……」

「……大丈夫、ここのジェットコースターは割かし安全にできてるから、小さい子でも乗れる仕様になっている」

「ホント!?じゃあ行こうよ！」

「……良い笑顔」パシャッ

「も～、だ～か～ら～！恥ずかしいってば！」

全く、油断も隙もない奴だ。
俺、あんまり写真撮られるの好きくない。
まぁ、それからも写真を撮られながらジェットコースター乗り場に着いたのだが……。

「うっわぁ、人がゴミの様だ」

「……ムスカ乙」

何か、長者の列が如くの勢いなのだが……。
あ、そうだそうだ、帽子とマント取っとかないと。ジェットコースターの勢いで飛ばされかねないし。

「……持とうか？」

「ん？大丈夫大丈夫。自分の荷物だし、これ位持てるよ。いくら非力だからって、それは心外だよ？」

「……冗談」

「おい、ムッツリーニ」

全く、こいつの冗談は分かりにくい。
それにしても、ホントに人気だよな、ジェットコースター。何処の遊園地でもそれが目玉だし仕方ないか。

「つうか、前が見えん……」

「……まだだいぶある」

「そうか……あ～、暇だ……」

「……アニスって、結構無責任」

「あはは、俺もまだ子供ですから。でもま、自分で言った事は大体責任持ってるよ？まぁ、今回はホントに先が見えないからつい口にだしちゃったけど」

「……やっぱりアニスは俺より大人」

「あはは、気持ち悪くないかな？実際、他の同い年の子よりも成長してないけど、口調とか考えが逸脱してるから……」

「……そんな事ない。大丈夫、アニスは気持ち悪くなんかない」

「……えへへ～、ありがとう」

「……いただき」パシャッ

「あぅ、油断した……」

くっそ、ムッツリーニめ……。
速すぎる、表情が戻りきる前にシャッターを切るから反応できない。

「えぇい！いい加減に自重しろ！パシャパシャ撮るなぁ！」

「……それは出来ない」

「……お前、今日遊園地に誘ったのは、１０割方俺の写真を撮る為

だろ？」

「……（フルフル）」

「あれ？違うの？」

「……9割9分9厘」

「おい！変わらねぇよ！ほとんど一緒だよ！？何考えてんだお前！」

「……」パシャッ

「えぇい！無言で撮るな！」

その後も、順番が回って来るまで何回も写真を撮られた。
ちくせう……どんだけ撮られたんだ……。

そして、ジェットコースターの乗る俺とムッツリーニ。

「それでは、発射いたします」

そうアナウンスが入り、コースターが動き出す。
帽子とマントと、ムッツリーニの愛用のカメラはスタッフに預けたから、これで落ちる物は無くなったわけだ。
そして撮られる心配もない。

まぁ、流石にムッツリーニも、ジェットコースターに乗りながら写真を撮ろうとする馬鹿では無いと、俺は信じている。
まぁ、危ないしね。
それよりも……。

「あう……緊張してきた……」

ガタガタガタガタガタ……！

ゆっくりと進んでいは行くが、徐々に徐々に、高くなっていく……。
普段空飛んでるのに、どうもこう言った機械仕掛けの物に乗るのはな～……って、デバイスも一応機会に入るやん。

「……大丈夫」

ギュッ。

ムッツリーニはそう言うと、俺の手を握る。
あう……若干安心したのは、秘密だ。

「は、恥ずかしい……」

「……さっき自分から握ろうって言ってたくせに」

「じ、自分からなら案外恥ずかしくないんだよ？って、キャァァァァァァ！」

無駄話をしていたら、いつの間にかジェットコースターが一番上まで来ており、そのまま発車した。
す、凄い速度！

「キヤァァァァァ！！」

他のお客も叫んでいる。
まぁ、大半はカップルなのだが……リア充爆発しろ。

「あ、なんか慣れてきた」

案外慣れるものなんだね、ジェットコースターって。

「キャハハ！楽しー！」

俺は隣にいるムッツリーニの事を忘れてはしゃいで楽しんだ。

一方、ムッツリーニは……。

「………………」

叫びもせず、笑いもせず、ただ無表情にアニスを見続けるのであった……なんか怖い。

～～

「いやぁ～、楽しかったね！ムッツリーニ！」

「…………（コクリ）」

あれからジェットコースターを降りて、遊園地内をブラブラしてる。

ホントに人がいっぱいだな～、はぐれたら迷子になりそうだ。

「ムッツリーニ、絶対に手、離さないでね？」

「……大丈夫、離さない」

「えへへ、ホントだよ？」

「……（こくり）」

「うん、なら安心だね♪」

「……」パシャッ

「あ、くっそ。油断した」

「……油断大敵」

「お前が言うな！」

まぁ、何やかんやで楽しいわなこれ。

それから俺とムッツリーニは、色んな乗り物に乗り、昼飯を食べて

から、また違う乗り物に乗りまくった。

夕方

「いや～、すっかり日が暮れちゃったね……」

「……（コクリ）」

「……もう帰ろっか」

「……そうだね。そろそろ電車も来る時間だし、帰ろうか」

俺とムッツリーニは、そう言って、ベンチから立ち上がる。

あはは、少し疲れちゃったな～。はしゃぎ過ぎた。

「う……ぁ……ふぁ～……ねむ……」

「……大丈夫？」

「ん……大丈夫。ちょっとはしゃぎ過ぎて疲れちゃっただけだから」

「……無理は良くない」

「ふわぁ！？」

ムッツリーニは何を思ったのか、いきなり俺をお姫様抱っこしだした。

ちょっ、いきなり何だし！

「はぅ、ムッツリーニ……は、恥ずかしいよ……」

「……子供なんだから、無理はいけない」

「む～、子供扱いするな～！バカバカバカバカ！！」

俺は手足をバタバタさせて反抗する。

「……暴れたら駄目。幾らアニスが軽いとは言え、流石に落としそう」

「うわっと、ごめん……って！降ろせば済む問題じゃん！」

「……無理はいけない」

「お前はそれしか言えんのか！降ろせ！今すぐ降ろせ！呪うぞ！アホー！」

「……それじゃ、おんぶなら良いの？」

「うっ……ま、まぁ……それならまだまし……かも……」

「……そう」

ムッツリーニはそう言うと、俺を降ろし。
俺の目の前で後ろを向いた状態で屈む。

「……はい」

「……い、良いの？」

「……（コクリ）」

「……鼻血出さない？」

「……頑張る」

「……そ、それじゃあ、お言葉に甘えて……よいしょっ」

俺はムッツリーニの背中に乗る。
そしてそのままムッツリーニは立ち上がり、そのままスタスタと歩く。

「……ムッツリーニ」

「……何？」

「今日はありがとうね。俺、すっごく楽しかった」

「……これ位お安い御用」

「えへへ、ムッツリーニは優しいね」

「……ありがとう」

「えへへ～。……ムッツリーニの背中、暖かい……眠たくなってきちゃった……」

「……寝ても大丈夫。着いたら起こす」

「……う、ん……ありが……とう……」

俺はうつらうつらと船をこき、睡眠の波に飲まれ、そのまま眠りについてしまった……。

「……ニス……ア……ス」

「うっ……ふぁっ……ひゃい……」

急な振動……誰かに揺さぶられている様だ。

う～、誰だよ～、気持ちよく寝てたのに……。

「……アニス、着いたよ。もう海鳴市だ」

「ふぇっ……」

おいおい、まさかおんぶされたまま電車に乗ったってこと？
……恥ずかしい……。

「……はぅ……電車に乗る前に……起こしてほしかったよ～」

「……たぶん、兄妹にしか見られてなかったと思う」

「……字が違う気がするんだが……まぁ良いか……もう降ろして良いよ？」

「……駄目」

「えっ……何で？」

「……疲れてるんでしょ？このまま家まで送る」

「あぅ……だ、大丈夫だよ！少しだけだけど、寝たし、体力も回復したよ！だから降ろして？自分で帰れるから」

「……そう？」

「そう！」

「……分かった」

ムッツリーニはそう呟くと、すぐに降ろしてくれた。

「ありがとう、ムッツリーニ。また今度誘ってね」

「……アニスが行きたいなら、また連れてく」

「あはは、ありがとう。それじゃ、バイバイ」

「……（こくり）」

俺はムッツリーニに手を振り、駅からはやての家まで歩いて帰る。
いや～、今日は楽しかった。また行きたいな～。

じゃあ、そんな感じで、終わりますわ。

番外編　ムッツリーニと遊園地（遊び編）（後書き）

いやぁ～、実はさ～

途中でネタ尽きました（笑）

だからこんな中途半端な落ち方になっちゃいました

まぁ、仕方ないよねテヘペロ☆

さて、明日は俺は居るので、ガシガシ本編を進めていきたいと思います

そして報告！

１１月５日から１１月１０日まで、俺は居ません！

だから、この５日間は、たぶんまた番外編になっちゃいます

へ？今度は何があるんだって？

へっへっへ……それがね、修学旅行なんだ

すまんね、流石にこれには文句は無いよ、俺は……

まぁ、そういう事なので……もし五個書けそうだったら、書きます

無理そうだったら……大体三つくらいは頑張って書きます

では、また明日とか

ここまで読んだ下さりありがとうございました

第二十一話　はやてを祝おう前編（前書き）

はい、こんばんは

帰ってきました

いやぁ、疲れた

何が疲れたかって？

朝までずっと起きてたからさ

しかも外です……

いやぁ、寒いのなんの、冬になりかけの北海道の朝方舐めんな！

へたすりゃ死ぬぞ！

とか思いながら、牛の後ろで一緒に牛見張ってる奴と、湯を沸かしながらカップめん作ってハフハフしてました

しかも、先輩はエロ本読んでたし……

先生の隣でだよ？しかも、一般の人もいる中でだよ？

モラル考えようぜ……

後、テント張ったのは良いけど、結局寝たの三時間

その間ずっと牛見張ってた

疲れた……

つうわけで、本編始まります

第二十一話　はやてを祝おう前編

アニスサイド

「今日ははやてちゃんの誕生日だ！」

罪袋『おぉぉぉぉ！！』

「貴様らにはこれから飾りつけをしてもらう！拒否権は無い！良いか！このヒッキー共！これは年に一回の大イベントである！貴様らみたいな訓練されてない非国民を使うのは心もとないが！多少の失敗は俺が許す！構わん！だが貴様らがそこで力尽きようが果てようが！それは一切俺は関与しない！分かったか！このフニャマラ共！」

罪袋『おぉぉぉぉ！！』

「それでは、者ども掛かれぇぇぇぇぇぇ！！」

罪袋『サーイエッサー！！』

「……不思議なー、夢だったなー……」

おはようございます、アニスです……。
何か壮大な夢を見た気がします……いや、そうでもないか……。
何か疲れてます、夢見ただけなのに、体が疲れてます……どうしてでしょう？
はい、と言う訳で、今日ははやてちゃんの誕生日でございます。

「盛大な出落ち乙」

とりあえず、これだけは言いたかった。

「さて、どうしたものか……」

朝、いつもなら思考が定まらず、口調が覚束ない状態なんだが。
何故か今日は思考が纏まってるし、口調も普通だ。

（神は言っている……はやてを祝えと……）

誰だよお前、あれか、シャダイに出てくる奴か？
つか出てくんなコノヤロー。

コンコン。

「失礼します」

あう、考え事の途中で誰かが来てしまいましたね。
まぁ、声からしてシグナムだろうな。

「あ、主。起きておられましたか」

「おはおはー。いや～、何か壮大な様で壮大でない夢を見て」

「？」

あら、シグナムが頭の上にはてなを浮かべて首を傾げちゃったよ。
まぁ、俺も首傾げそうな程なので、分かる。
「まぁ、気にしないで。さって〜、今日は少し出かけるし、さっさと朝ご飯食べますかにゃ〜っと」
俺はベッドから降りて、そのままドアを開ける。
勿論、背的に背伸びしてなのは、もう慣れた事。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「はい、朝早くからみんなに集まってもらってのは他でもありません。今日ははやてちゃんの誕生日なのです」
あれから朝ご飯を食べてすぐ、シグナム達とアンクを俺の部屋に呼び、作戦会議。
とにかくはやてには聞かれたくないので、少しだけ魔法で小細工を施す。
当然、魔力なんぞは感知されないようにしてる。
「まぁ、それは知ってるだろう。昨日、あいつ小さい声で呟いてたしな」

「そだねー。まぁ、それは置いといて。今からはやてちゃんを祝う為に作戦会議をしたいと思います。先ずはアンク」

「何だ？」

「何か良い案無い？」

「いきなり丸投げかよ！」

「まぁ、俺としてはプレゼントに。自分にリボンを巻いて「俺がプレゼントだよ♪」何てを思いついたんだけど、はやてちゃんにそれをやると、信じられないくらい食いつきが凄いと思い、敢え無く断念」

「……それを考えるお前の思考が、俺にとって恐怖だ……」

「あはは、まぁやろうとは思わないけどね。冗談だよ冗談」

「……ちっ」

「誰だ！今小さく舌打ちした奴！」

何かアンクがいきなり叫びだしたんだが、どうした？
まぁ、アンクはさて置き。

「これから役割分担をしたいと思います。先ずははやてちゃんをこの家に踏み入れさせない係。ヴィータちゃん」

「私か？」

「うん、ヴィータちゃん。ヴィータちゃんならはやてちゃんと外に出て、町の事を知りたいから一緒に行こうとか言っても問題ないかと。もちろん、シグナムさんやシャマルお姉ちゃん、ザフィーラさんでも良かったんだけど、ここはヴィータちゃんが適任かなって思ったから、できれば夕方まで引きつけて。次に飾りつけ、これはシグナムとお姉ちゃんに任せたいんだけど……」

「主のご命令とあらば、喜んで」

「はい、任されました」

「うん。次に買い出し、これはザフィーラさんとアンクに任せるよ」

「分かりました」

「了解だ」

「そして俺は、プレゼントを作ってくるので翠屋に行ってきます」

「？ケーキでも作るのか？」

「Ｅｘａｃｔｌｙ。桃子さんにケーキの作り方を教わりに行くのよ。まぁ、前からやってみないって誘われてたからさ、お願いしてみようかと」

「そうか……まぁ、良いか。あいつの腕は確かだしな」

「うん、そうだね。さて、それじゃあそれぞれ、今の役割で行動をお願いね！」

「「「「了解（把握した）！」」」」

こうして、俺達ははやての誕生日を祝う為に行動を開始した。

あ、そうそう。今日の晩御飯を作るのは俺だよ。

シャマルにをキッチンに立たせたらそれはそれはとても大変な事になっちゃうのは目に見えてるからね。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「と、言う訳なので、ケーキ作りを教えてください！」

へ？展開が早い？
気にしてたら人生損するよ？

「あらあら、もしかしてアニス君の彼女さんかしら？その人」

ピクッ……。

近くに居るなのはの耳が動く。
うむ、気のせいだろう……きっと、メイビー。

「あはは、違いますよ。ただの友達なのです。その子に、俺が作ったケーキをプレゼントしてあげたいな〜って思って、来ちゃいました☆」

「ふふふ、それだったら大歓迎よ。それじゃあ、厨房に行きましょうか」

「ありがとうございます！でも、お仕事の方は……」

「大丈夫よ。今日は美由紀も手伝ってくれてるし、ちょっとくらいなら。ね」

「あはは、すいません」

「謝らなくても良いのよ？それじゃ、行きましょうか」

そう言って桃子さんは厨房の方へ向かう。
俺もそれに後ろから着いて行く。
なのはの視線を無視しながら……。

「それじゃ、始めましょうか」

「はい！それより質問があります！」

「何かしら？」

「何故ウェイトレスの格好をする必要があるんですか！」

「需要があるからよ」

誰にだよ……と思ったのは、許されるはず。
それにしても……。

［壁］ω・）ジーッ

あのこっちをジト目でジーッと見てるなのはを何とかしてほしいのですがね。
俺としては、このままでも良いんだけど、気になって仕方ないんだよ。

「それじゃあ先ずはスポンジ作りから。最初はバターを湯煎で溶かすの」

「はーい」

俺はお湯の入ったボウルの上に小さめのボウルを入れ、その中にバターを入れる。
それを木べらで動かしながら徐々に溶かしていく。

「……ん、全部溶けたわね。それじゃ次は、薄力粉をふるいに入れて、だまにならないように塊を粉にする作業よ」

「はーい」

次に薄力粉をふるいに入れ、下にボウルを置く。
トントンと小刻みにふるいを叩きながら、粉を振るって行く。

「よし、これで良いわ。さて次は、方にさっき溶かしたのと違うバターを型に縫って良くわ」

俺は型にバターを塗って行く。
……何だろう、ホントに視線が気になって来たんだけど……俺はそう思い、後ろを向く。

［調理台の下］ω・）ジーッ

うわっ！近づいてきてる！？
こわっ！？ていうか仕事どうした！？なのは仕事しろ。

「……なのは、一緒にやりたいなら素直に言いなさい？」

「にゃっ！？お、お母さん！」

何故かなのはは動揺してる。
何でだ？あ、首にレイハさん発見。俺の魔力を感じてなのはに告げ口しないと良いけど。
まぁ、分からないように細工してるから良いけど。
案外ユーノとかに名前知られてたら一発かも。
あいつ、スクライア一族だしね。

そんなこんなで、スポンジ生地をを型に入れ、オーブンに入れるとこまで終わらせ、今度は生クリームづくりとイチゴの下準備をする事に。

先ずはイチゴのシロップ用の水を温め、その中にグラニュー糖を加え、火を止めて冷ます。
そして、冷ましてる間に今度は生クリームを作る。
これがまた大変、と思ってたけど、そこはやはり現代。ハンドミキサーなる物があるので、それを使い角が立つまで泡立てる。

チンッ！

「あ、スポンジが出来たの」

そしてちゃっかりケーキ作りに混ざってるなのは……パネェっす。

そしてスポンジが出来たと言う事なので、急ピッチで生クリームを仕上げます。
まぁ、ハンドミキサーだから速いんだけどね。
生クリームが出来たら、スポンジを横に半分切り、下段部分に生クリームを塗る。
全体に滞り無く塗ったら、さっき冷ましていたシロップに漬けていた、半分に切ったイチゴを乗せていく。

最後に、上段部分を下段部分とドッキングし、上段部分に生クリームを塗る。
そして、余っている生クリームを絞り袋に入れ、デコレーションしていく。
後はイチゴを乗せて……。

「出来た――！！」

完成！！
うん！初めてにしては上出来だね！

「あらー、上手くできたわね。初めての人はスポンジで躓いちゃう人とか多いのに、アニス君はスポンジも完璧だったわ」

「ありがとうございます、桃子さん。なのはちゃんも、ありがとうね」

「ううん、私が無理言っちゃったんだし……」

「俺は気にしてないから全然良いよ。桃子さん、箱に詰めるの手伝ってもらって良いですか？最後の最後で失敗したらもう目も当てられないので」

「それだったら私がしてあげる。アニス君はそれが終わるまで休んでて良いよ」

「ありがとうございます。それではお言葉に甘えて……」

俺は厨房に置いてある椅子に腰かける。
いやー、疲れた。ケーキ一ホール作んのも、大変なんだなー。
桃子さん達は凄いな～、それをほぼ毎日やってるとか、考えられん。

「お疲れ様、アニス君」

「ありがとう……あー、疲れた……あ、これから家に帰って今日の

晩御飯作らないといけないんだった……まぁ、良いか……何作ろうかな～」

「……ねぇ、アニス君……」

「何？なのはちゃん」

「アニス君がプレゼントしたい人って……大切な人？」

唐突に、なのはが聞いてくる。
愚問だね……。

「うん、大切な人だよ」

「……そうなんだ……アニス君は、その人の事が、好きなの？」

「……大好きだよ……」

「……そう……」

なのはは顔を暗くして俯いてしまう。

？一体どうしたんだろうか？

「まぁ、大好きって言っても、友達で言う大好きだからね。恋とかでは無いよ」

それを聞いたなのはは、いきなり顔をバッと上げる。
その表情は、さっきの暗い顔と打って変わって、キラキラしている。

「ホントに！？」

「う、うん……本当だよ……」

一体どうしたんだ？
今と良い、さっきと良い……あ、桃子さんが来たみたい。

「はい、アニス君」

「ありがとうございます、桃子さん。それじゃ、俺はこれで」

「あら、もう少しゆっくりしていけば？」

「いえ、これから晩御飯の支度もありますし、少しケーキ作りに没頭しちゃったんで……それじゃ、また来ます。バイバーイ、なのはちゃん」

俺はなのはに手を振り、店を出る。

さて、今日は何を作ろう……一応買い出しは頼んだけど……買ってくる物、教えとけばよかったかな？

第二十一話　はやてを祝おう前編（後書き）

はい、恒例の長くなりそうなので前・後編分けました

つか、もう疲れがピークです……死にそうだ

あ、ケーキの作り方は、ほとんど覚えた奴を書き記しただけです

菓子作り大好きｗｗｗ

ケーキって手間はかかるけど、結構簡単に作れちゃうもんなんだ

パウンドケーキは、あれ手が腱鞘炎になりそうな位生地混ぜるぜ？

バターと薄力粉を混ぜる時点で手首痛くなるし

まぁ、愚痴は良いや

それより昨日はホント酷かった

何が酷かったって？

先輩がエロ本読んでたのもそうだけど、どっかの農家の人が、テレビとＤＶＤプレイヤー持ってきて、ＡＶ見てた親父が居たｗｗｗｗ

もうわいや

そんな俺は、アレルギー性の喘息が出て呼吸困難に陥りました

死ぬかとオモタ

まぁ、生きてるから良いけどね

さて、次回は晩御飯を作るのと、はやての誕生日を祝う話を書きます

ここまで読んでくださりありがとうございました

第二十二話　はやてを祝おう後編（前書き）

どもっす

いやぁ、眠たい

まだ日曜日の疲れが抜けていない私です

ねむ……

それにしても、ホント寒くなってきました

そろそろセーター出さないと

学校の廊下の寒さは異常

そんなわけで、本編始まります

第二十二話　はやてを祝おう後編

アニスサイド

「たっだいま～！！」

どもども、翠屋から無事帰還したアニスなのです☆
いやいや、それにしても初っ端から女装させられるとか、流石に思ってもみなかったよ。

「おっ、帰って来たか」

「お疲れ様です、主」

リビングに入ったら、既にアンクとザフィーラが居たのだよ。
あぁ、買い出しだけだしね。それに、結構な時間翠屋に居たし。

そして、飾り付けも結構良いね。
綺麗だわ。

「お帰りなさいませ、主」

「あ、シグナムさん。ただいま。それにしても、だいぶ飾りつけ進んでるね」

「はい、主よりも先に帰ってきたアンクとザフィーラも手伝ってくれたので」

「そうだったんだ。ありがと、アンク、ザフィーラさん」

「気にするな」

「これも主の為」

固い、固いぞザフィーラ。
まぁ、本編でもこんな感じだったし、仕方ないか。

「所で、お姉ちゃんは？」

「……シャマルなら、あそこに……」

俺はシグナムの指を指した方を向く。
そこには縄で縛られ、気絶しているシャマルの姿が。

「どうしてこうなった」

「シャマルがキッチンに立とうとしたので、止む無く……」

ｏｈ……それはそれは、いい仕事をしましたなシグナム……。
俺は親指を立てて、サムズアップする。

さて、それよりも料理を作らないといけないわけだ
そしてこの私、何を隠そう。転生してから一回も料理を作っていないのだ。
前世では作ってたんだけどね、それにこのナリだし。やり難いかもしれないし、なまってるかもな。

「みー、困った困ったのです……」

最近、梨花の口調が定着しつつある。
まぁ、可愛いから良いんだけど、狙いすぎとか言われそうなのです。
あぁ、言ってる傍からいきなり。いや、どっちかって言うと羽入かもな。

所で、アンクとザフィーラは何を買って来たんだ？
俺はキッチンにある買い物袋を覗き込む。

うむうむ……ほうほう、この材料だったら結構多めに出来るね。
まぁ、良いかこれで。

「うん、じゃあ俺は晩御飯作るから、みんなははやてちゃんが帰ってこないか見張っておいて！」

「「「了解！（把握）」」」

さて、取りかかりますか！

～～
～～～～～～～～～～～～～～

はやてサイド

「はやて、次こっち！」

「はいはい、しゃあないなヴィータは」

いや～、今日の朝、ヴィータが町を案内してほしいって言って来た

のは嬉しかったでホンマ。
こうして車いすも押してもらいながら町を案内するのも、結構ええもんやな。
せやけど、何でヴィータだけ何やろか？
シグナムやシャマル、ザフィーラも町の案内をした方がええのに…
…なーんか気になるなぁ……。

「なぁヴィータ、何か隠してへんか？」

「うっ……は、はやて、いきなり何言ってるんだよ。わ、私が隠し事なんて……」

「じゃあ、何でどもっとるのかな～？ヴィータちゃ～ん？」

「あ……あはは……」

さぁ、キッチリ問い詰めたるでヴィータ。
ウチは手をわきわきさせながらヴィータに寄る。

「あ、アイス屋さんだ！はやて行こう！」

「えっ、ちょっ、ヴィータ！？」

ヴィータは突然車いすの後ろに回り込んだと思ったら、いきなり車いすを押し始める。
ちょっ！？何処に行く気やヴィータ！？
そう思っとったら、着いたのは公園やった。

「はやてはやて！アイス食べたい！」

ヴィータははしゃぎながら言う。
……ふふ、しゃーないなぁ。ほなら……これを食べ終わってからでも問い詰めたる。
ウチはそう心の中で呟き、アイスを買う。

まぁ、たまにはこんなのんびりな日があってもええか。

「おじちゃん、バニラ二つください！」

「はいよ！ちょっと待っててくれ、すぐに出来るからよ。それと俺はまだ２０代だ！」

「あはは、それはすいませんでした」

結構愛想がある人で良かったで。
まぁ、そうじゃないと接客業とか出来へんもんな～。
そう考えとったら、いつの間にかアイスが出来ていた。

「はいお待ち。二つ合わせて３００円ね」

「よいしょ……はい、３００円」

「毎度！また来てくれな～」

さて、話も聞きたいし、そこのベンチにでも座って食べるとしますか。

「ヴィータ、そこのベンチで座って食べよか」

「うん！」

ふふふ……お楽しみはこれからやでヴィータ……。
ウチはにやけそうな顔を必死に抑え、ベンチに移動する。
まぁ、ウチは車いすなんやけどもな。

さて、どう聞き出したろか。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

アニスサイド

ピキーン！

「はっ、ヴィータちゃんがピンチだ！？」

「……お前、頭大丈夫か？」

「……あれ、何で俺そんな事言ったんだろう？」

何かいきなり、そんな予感がしたんだよね。

はっ、これがニュータイプか！？え？違う？ですよねーｗｗｗ

「まぁ、気にしないで……それよりも、はい、出来たよ～」

俺は焼き上がったハンバーグを皿に盛り付けアンクに渡す。

うん、少し手順を思い出すのに時間かかったけど、うまくできてる。

「シグナムさん、唐揚げはどう？」

「はい、もういい頃だと思います」

「どれどれ……うん、そうだね。それじゃ、もう油から出して、油を切らないと」

うむ、良い匂いだ。
体が覚えてるんだね、こう言うのは……まぁ、体自体リセットされてるから分からないけどね。

「ザフィーラさーん、そっちはどう？」

「もう皿に盛りつけました」

そう言って、俺に見せてくるザフィーラ。
うん、これも良くできてるね。やっぱオードブルには欠かせないよね、エビチリ。
後はエビフライもそうだし、アスパラのベーコン巻とかも作ってます。

これで抜かりは無いはずだ……。
後は色々作っているので、足りると思う。

「ねぇねぇアンク、やっぱり出迎えるときって裸エプロンの方が良いかな？」

「……」

ガスッ！

「ひぅっ！？……ったー……」

「目が覚めたか？寝言は寝て言え」

「あうあう……はぅ～……やっぱり痛い～……」

こいつ、絶対軽く本気だしたろ。
一瞬グリード化してなかったか？右腕。……気のせいで合ってほしい。

「いい加減俺の頭をグーで殴るのは止めなさい！脳細胞が死ぬだろうが！馬鹿になっちゃうんだよ！？脳細胞が減ったら！」

「あの発言をする時点で既に馬鹿だ」

「あーうー、言わないでよー……」

だって、なんとなく行ってみたかったんだもん。
それにしても、もうこんな時間か……そろそろはやてとヴィータが帰ってくる頃かな？

「さてみんな、そろそろ配置に付きましょうか。はい、クラッカー持って」

俺は四人にクラッカーを渡す。シャマルはまだ気絶してるけど、無理やり手に握らせておくわ。
勿論、自分の分も確保しておく。
それにしても、やはり百均クオリティー、絵とか柄が安っぽい……
まぁ、仕方ないけどね。

さて、早く帰って来ないかな～。

「ねぇねぇシグナムさん。やっぱりこう言う時ってコスプレした方が良いのかな？猫耳とか猫尻尾とかつけて、やっぱりひげも必要かな？そんで語尾ににゃん♪とかつけてみたり」

「……っ！？」

シグナムは急に後ろを体ごと振り向いた……。
一体どうしたんだ？何か体プルプル震えてますけど……しかも鼻押さえてる……どうして？

「変態がまた一人……か……」

「なっ、アンク！貴様は私を変態とでも言いたいのか！！」

「どうせ想像して鼻血でも出してんだろ？その手を退けて見せてみろよ？」

「い……良いだろう……私が変態ではないと証明してやる！」

そう言い放って、シグナムは鼻から手をどける。
……あ、鼻血……。

「……ほらな」

アンクはにやっとしながらシグナムに言う。
しかもその顔は、何故か勝ち誇っている……状況がつかめないのだが……。
誰か説明してくれない？三行以内で。

「主、これを……」

「ん？ザフィーラさん？」

何かザフィーラに犬耳と犬尻尾とひげを受け取ったのだが……付けれと？
あ、アンクがぶん殴った……ありゃりゃ、ズルズル引きづられて行っちゃったよ……。
まぁ、付けとくか仕方ない。

「……わふー！！」

取り敢えず付けてみた。
そして言ってみたかっただけ、気にしないで。

「いやぁ、猫も良いけど、犬も良いね」

さて、このままの状態で待っておくかな……。

それよりシグナムお願いだから、鼻を抑えるのは止めて……そろそろ血を止めようか……。

っと、その時。

ガチャッ。

「ただいま～」

「……」

玄関からはやての声が聞こえた。
帰って来たか……それにしても、ヴィータがやけに静かだな……どうした？

「みんな、準備は良い？」

「俺は大丈夫だ」

「私もです」

「「……（チーン）」」

約二名、物言わぬ者に変わり果てたが……気にしない方向で。
それにしても、アンクは何時の間に戻って来たんだ……恐ろしい。

「て言うか、それ取れよ！」

「もう時間が無いから無理！諦めろ！」

アンクは俺が着けてる犬耳と犬尻尾とひげを取ろうとする。
でも時間が無いので諦めさせる。

そして……。

ガチャッ。

リビングのドアが開かれる……。

パンパンパン！！

「「「はやて（ちゃん）！誕生日おめでとう！！」」」

部屋にクラッカーの破裂音が響き、三人のハモる声が部屋を包む。
そして、それにあっけに取られているはやての顔が飛び込んでくる。

「……へ？」

えっ、ちょお……待ってえな……。
うわ、ウチ……今絶対顔が変になっとる……。
ヴィータから聞いとったけど……まさかこない盛大にしてくれるとわ思わへんかったは……。

はやてサイド

「あ……えと……アニス君……？」

「何？はやてちゃん？」

「……盛大過ぎや無いか？」

「そうかな？これが普通だと思うよ……でも、イマイチ驚きが足りないな～……もしかしてヴィータちゃんから聞き出したりして……あはは」

「……あ、あはは……ごめん……聞き出してもうた」

「……なん……だと……。ま、まぁ良いや。やる事は変わりないしね。それより、どうしてヴィータちゃんはそんなに疲れ切ってる？」

アニス君は疲れ切っているヴィータを見て言う。
あはは、聞き出す為にくすぐまくったとは言えへンな……。

「ま、まぁ気にせんといて……。それよりも、ありがとうなアニス君。ウチ、とっても嬉しい！」

「あはは、お礼ならアンクやシグナムさん、ヴィータちゃんやお姉ちゃんやザフィーラさんに言ってよ。ほとんどやってくれたのはこの五人なんだから」

「良く言うぜ。メインは自分がほとんどやってたくせに」

「そうですよ。料理もほとんど主一人がやっていた様なものですし」

「……アニス君、料理で来たんか？」

「いや……作る機会が無かったと言うか……出し惜しみしてました……みたいな……あはは……はぅ～」

そう言って恥ずかしそうに鼻のてっぺんを掻きはじめるアニス君。

あ～、もう……何やってもアニス君はかわぇぇなぁ……。

「そか……ほなら、ちょっと早いけどご飯にしよか。アニス君の手料理、食べてみたい」

「うん、分かった。それじゃあ椅子に座って待ってて？すぐ用意するから。アンクとシグナムさんは、そこで気絶してる二人を起こしておいて？」

「分かった」

「了解しました」

な……何で二人が気絶してんねん……。
て言うか今気づいたわ……アニス君、犬耳つけとるやん、しかも大層に尻尾とひげも……。
あぁ、アニス君……モフモフしたいわ……いや、ぺろぺろしたい……アニス君ぺろぺろ……。
はっ、今危ない事考えてた……自重せなな。

そう思いながら、ウチは席に付く。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

アニスサイド

何故か悪寒が走ったのは気のせいだと思いたい。
さて、料理運んじゃいますか。

俺は、既に皿に盛りつけてあった料理をテーブルに運ぶ。
それと、ケーキも用意しないとね。

はやてちゃん、喜んでくれるかな？

「はい、これで全部だよ」

「うわぁ……アニス君、料理上手なんやね～……綺麗に出来てるわ……」

「ありがとう。さ、皆も席に着いて？」

俺の一言で、皆も座る。
既にシャマルとザフィーラは復活していた。しかも、すっごい笑顔なのだが……。

「さて、ここではやてちゃんにプレゼントがあります！」

「プレゼントまであるんか？何か、ホンマに悪い気になってきてもうた」

「気にしない気にしない。さて、問題のプレゼント何だけど……ジャジャーン！何とこのケーキ！俺の手作りです！」

「……な……なんやってぇ！？この店で売っとる様な綺麗なケーキがかいな！」

「そうだよ。今日は翠屋で桃子さんに教わりながら作ったんだ。は

やてちゃんの誕生日プレゼント……どうせなら形がある物でもよかったんだけど……それはまた今度で良いかな？はやてちゃんには日頃お世話になりっぱなしだから、そのお礼も兼ねて」

「……ホンマに……もう何て言ったらえぇんか分からんけど……みんな……ありがとうな……」

はやてはとうとう泣き出してしまった。
まぁ、そうだろうね……両親が亡くなってから、いつも一人で誕生日を祝ってたんだもんね……。
俺ははやての背中を撫でながら、落ち着かせる。

「大丈夫？」

「グスッ……大丈夫……ありがとうな、アニス君。それに、皆も。ウチ、皆と家族になれてとっても幸せや……」

「はやてちゃん……」

「八神……」

「「「「……」」」」

「……さっ！辛気臭い空気はここまでにして、いただこうか！」

はやては笑みを浮かべながら俺達に言う。

その笑顔は決して無理をしながら笑っている笑顔ではなく、心の底から……純粋に喜んでくれている笑顔だった……。

うん、やっぱり、はやてには笑顔が一番だよ。

～～～

「そして、どうしてこうなった……」

「アニスく～ん……」

どうも、ただ今寝る時間で、俺のベッドの中にはやてが居ます。

何か……あれからみんなでご飯を食べ終わって、しばらくしてから。

「アニス君……今日だけ、我がまま言ってもえぇやろうか？」

「何？はやてちゃん」

「……あんな……今日……アニス君と一緒に、寝てもえぇかな？」

って、もじもじしながら言われたので、速効オーケーしました。
だけど、何で抱き着いてくるのが分からない……。

「……アニス君……もう可愛すぎや……それに、暖かい……」

「もうすぐ夏になるけど、暑くなっちゃわないかな？」

「大丈夫や、ウチにはちょうどえぇから……」

ギュッ……。

「はぅ……はやてちゃん……そんなに強く……抱き着かれたら……」

「ふふふ……離さへんで？」

あうあうあう、はやてちゃんが悪い笑みを浮かべてるのです……。
どうしたら良いものか……。

「こうしてアニス君と寝るのは、別荘以来やね」

「そうだね……あの時も確かこんな状態だったよね」

「あはは……そやったなぁ。アニス君、抱き心地最高やもん……あぁ、それにシャンプーの香りが良くて……ついついな……」

「だ、だからって……俺を胸に押し付けちゃ駄目なのです……俺だって男の子、変な気分になっちゃいますですよ？」

「ふふふ、アニス君の軽さやったら、簡単にまるみこまれるとおもうけどなぁ……」

「あうあう……それは言わないでよ……」

全く、確かにはやてでも全力で俺を抑え込めば俺は動けないけどね。やろうとしないでよ？

「……アカン……眠くなってきた……」

「フゥハハハ、では早く眠るが良い……かく言う俺も眠いたいけどね……」

「それじゃ、寝ようか……お休み、アニス君」

「うん、お休み、はやてちゃん……」

こうして、俺とはやては眠る事にした。
この幸せが、長く続きますように……。

「アニス君……寝てる？」

「スー……スー……」

よし、よぉ眠っとるな……。
全く、無防備過ぎやでアニス君。ウチがそう簡単に眠るとでも？

「……ふふふ、可愛い寝顔や……」

ウチはアニス君の顔を覗き込んで、ニヤニヤする。
あぁ、これが至福の時みたいになりそうや……。

「……アニス君……」

ウチはアニス君の名前を呟き、徐々に徐々に、顔を近づかせていく。

「……アニス君が悪いんやからね……」

そして、ウチは……アニス君にキスをする……でも……。

チュッ……。

「……まだウチのファーストキスは上げへんで？やっぱり、起きてる時じゃないと損やもんね……でも……ふふ、アニス君にチュウしてもうた……幸せすぎてウチ死にそうや……」

あぁ、テンション上がってもうて来て……どうないしよう……。
もうこれは、アニス君のお腹をモフモフしながら寝るしかあらへんな。
ウチはアニス君のお腹に顔を蹲らせ、そのまま目を閉じる……。

今度こそ本当にお休みや、アニス君……。

「おやすみ……」

こうして、ウチの幸せな一日が終わった……。

第二十二話　はやてを祝おう後編（後書き）

いやぁ、クリスマスまで残り二か月ですね

どうしようかな

ライブの練習が入ってくるからな～、はぁ……

今日メールで

そのクリスマスライブ内でやるカラオケに、何故か俺も出る事になったんです

いや、一応バンドも出るから無理だろう……

しかも、何を歌うかと言うと、ボカロのシリョクケンサって言う歌

聞いたこともねぇよ……

つうかまだスターフィッシュ覚えてないし

どうしよう……

まぁ、頑張ろう

それにしても、中々話が進まない

たぶん次はキンクリすると思う

もしくはシグナム達と模擬戦か儀式の話を書くかも

それでは、また明日とか

ここまで読んでくださりありがとうございました

第二十三話　死と隣り合わせととある騎士の覚悟（前書き）

どもー

ディアボロです

いやぁ、今日久々に部活に出ました

体力が落ちてました、そしてなまってました

ヤバい、来年で最後なのに、大丈夫かな

さて、本編始まります

第二十三話　死と隣り合わせととある騎士の覚悟

アニスサイド

「はぁっ……」

どうも、アニスたんだお。
何か……もうため息ついてないとやってられないよ……。

「ん？どうしたアニス、そんなに疲れ切った顔して。まだ朝だぞ？」

「いや……まぁ、色々とあるんだよ……それより、今日の夜儀式あるから……」

「あぁ、そうか……って、はぁっ！？何だそれ！」

「むぅ、俺ってそう思ったよ……さっき、馬鹿神から連絡あったんだ」

～回想～

そう、俺はちょうどご飯を食い終わって部屋でウダウダやっていた時だった。
急にデバイスが光りだしたのだよ。
そう、まさにあの時みたいに。俺がいつ儀式をやるのか悩んでた時、神が通信して来た時みたいに。

《ハロハロー、神様じゃよ。ー元気にしとったかー？》

「……帰れ」

《ハッハッハ、冗談がへたじゃのうお主も》

「いや、マジで帰れよ……」

《ほっほっほっ、なんじゃいなんじゃい。せっかくお主に忠告と知らせがあるのに……聞かんくてえぇのか？》

忠告と知らせ？
はぁ、またしょうもない事だと思うのは、仕方のない事だと思う。

「……ちっ、教えろコノヤロー」

《おぅ、何故上から目線なのか気になるが……ま、まぁ良いじゃろう……。まずは良い忠告と悪い忠告、どっちが良い？》

「……んー、じゃあ悪い忠告からで」

《分かった。……お主、このまま魔法を使ったら、間違いなく死ぬぞ？》

なん……だと……。

「どういう事だよそれ！」

《お主も、薄々気づいとるじゃろ……闇の書の呪いじゃ……》

「……はぁ、まぁ、感づいては居たけどさ～……。じゃあ、やっぱあれか？猫二匹と戦い終わった時の胸の痛みも」

《その通りじゃ。お主の呪いは心臓じゃ。しかも、そこには魔力の核となるリンカーコアの近く、じゃから魔力。魔法を行使したら心臓に負担がかかり、激痛が走る……》

マジか～。それは結構キツイな……。

じゃあ何か、斬魄刀も使えないって事か？

《そうなるな》

「心読むなコノヤロー。それで、どうすんだよ？このままだと、俺はいずれ死んじまうぞ？」

《率直に言おう。収集をするのじゃ》

……はっ、今なんて言ったこの馬鹿神は……。
収集しろって言ったか？

《そう言ったが？》

「お前ふざけてるのか！それは、シグナム達を犯罪者にしろと同義だぞ！」

《仕方ないじゃろ……お主をここで死なす事は出来ぬ。お主は神の加護を受けし人間。その人間がその呪いで死ぬ事は、我ら神とて良しとせぬのじゃ》

「何でだよ！あいつらを危険な目にあわせろってか！？」

《……分かっとくれ、それ以外に、お主を救う手だてが無いのじゃ。
それに、お主が死ねば、あ奴らも消えるぞ？》

はっ、消えるか……。
ならそれで良い。俺が死ねば闇の書はランダム転移で次のマスターの元に行く。
そうなれば、死ぬのは俺一人だけだ。

《……お主は大事な事を忘れてはおらぬか？》

「……なに？」

《……八神はやて……》

「！！」

あぁ、そうか……クソッタレが……。
俺が死んだら、はやてが一人になっちまうじゃねぇか……。
アンクもどうなるか分からない……。

《……期間は、お主の呪いが進行する前じゃ……》

「……絶対に他の手段を見つける……」

《……そうか、頑張れよ。んじゃ、次は良い報告じゃ》

「……この空気で良い報告を聞いてもな……」

はぁ、もう最悪なテンションだよ。
つか、良い報告って何よ……。

《お主に魔眼をくれてやる事にしたよーん》

「……魔眼ねぇ……何？魔法が行使できないから魔眼をくれてやるってか？……浅はかだな～」

《うぐっ……な、何じゃい。もう少し良い反応をしてくれてもえぇじゃろうに……》

「……はぁ、んで？どんな能力さ？」

《まぁ、有体に魔眼と言ってものぅ。どうせなら写輪眼とか複写眼

とかがえぇか？それとも、直死の魔眼、キュベレイなど。どれでもえぇぞ？》

……おいおい、写輪眼は魔眼なのか？
複写眼とかは魔眼ぬ分類されてるから良いけど……もしかして輪廻眼とかオーケー？
まぁ、どうでもいいや。

「要らないよ、魔眼なんて。んな物騒なもん目ん玉に入れんじゃねえやコノヤロー」

《なっ！お主正気か！？これが無いと本当に死ぬぞ！》

「はっ、だから言ってんだろ？他に手段を見つけるって。んなもんに頼るよりも、自分の力を信じてやりたい」

《……この馬鹿者が！お主は何を考えているのじゃ！……あぁ、もうえぇ！こっちで勝手に決めてやる！！拒否権は無い！》

ちょっ！？
そんな横暴な！？

「ふざけるな！要らないって言ってんだろ！」

《えぇいうるさい！もう決まったわい！お主に与える魔眼は宝石・隷属の魔眼じゃ！受けとれい！》

「何だよその魔眼！って、いててててて！！両目が痛いって！！」

俺は慌てて両目を抑える……ちくせう……魔眼なんて要らないって言ってんのに……。
あぁ、だいぶ収まってきた。

「っつぅ～……何すんだよ！」

《えぇいうるさい！黙っとれ！そして説明じゃ！その魔眼の能力は遠距離からの「分解・吸収・放出・変換」を同時に行う事の出来る魔眼じゃ！魔法を分解したり、吸収したり、その吸収した魔法を放出したり、変換したりできる！そして最大の強さは、物質、非物質を隷属させる事が出来る！本当は大地からマナを取り込み、体内でオドに変え、魔力という枷にはめ、詠唱によって意味を加え、魔術として放出するという魔術の大原則に則ったものなのじゃ！その効果を「視界内全ての存在」に適用させるのがこの魔眼の効果じゃ！じゃがお主には魔力が使えんし、魔術も使えん。じゃから魔法の分解、吸収、放出、変換は、敵の魔法を封じるための手段じゃ！》

……それって……何てチート？

つうか、使いたくねぇ～……そんな強い魔眼、要らねえって……。

《そして、その魔眼は人間には効かんからの。人間は、神の加護ほどでは無いが、多種多様な加護を受けていて対象にすることは出来ん。そして、その魔眼を持ってるのは、人間ではお主が一人目じゃ。それは神しか持ちえない、最悪の魔眼と言われておる》

そんな魔眼をホイホイと俺にくれてんじゃねぇよ！
何でだよ！

《そして最後に、良い知らせじゃ！今夜儀式じゃ！分かったら準備でもして待っとるんじゃな！！》

ブツッ……。

……最後まで馬鹿神の奴、怒ったままだったな……。
それにしても、今夜儀式か～……あれ？マジで？

～回想終了～

「てなわけだってばよ～……」

「……お前、死ぬかもしれないのにどうして断ったりしたんだよ……」

「だって、要らないじゃん？今のままでも良いとこまで行けてるし、それにもう力なんて要らないよ。後は自分で伸びたいしね」

「ふざけんな！！いい加減お前は自覚しろ！死んでもらっちゃ俺が困るんだよ！それに八神も！守護騎士達も！！」

「だ……だから、他の手段を見つけて呪いを解こうって……」

「それが無いから今回神が通信してきたんだろうが！！どうして分かんねぇんだ！！お前は魔力が使えないのに、この先どうやって戦うんだよ！魔法を使ったら死ぬんだぞ！？呪いはもう後戻りできない所ま出来てるじゃねぇか！」

「むー……アンク、耳が痛い痛いなのです……。まぁ、まだ時間があるし、十分抗える。それにね、アンク……俺は家族を犯罪者にしてまで、生きながらえようとは思わないよ？それだけは覚えておいてね？」

俺はアンクを見据えて言う。

確かに、死にたくないと思ってるし、まだ生きたいと感じている。

だけど、俺の生き死にのせいで家族が犯罪に手を染めちゃ駄目なん

だ。
それだったら、喜んでこの身を差しだそう。

「……ちっ……。……今日の儀式終わってから、考えんぞ……」

「……うん！！」

とにかく、アンクはツンデレなのですな。ニヤニヤ
だが、俺は気づかなかった……この話を聞いていた者が居た事に……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

ヴィータサイド

本当に、たまたまだった。
この話を聞いたのは、本当にたまたまだった……。
私は何の気なしにアニスの部屋の所を通ったんだ。その時、少しドアが開いていたので声が聞こえてきた。
アニスとアンクが話をしている。
私は部屋の中に入ろうとした。アニスと少し話がしたかったからだ。

だけど、私はアンクの言葉で動きを止める。

「ーーーーどうして分かんねぇんだ!!お前は魔力が使えないのに、この先どうやって戦うんだよ!魔法を使ったら死ぬんだぞ!?呪いはもう後戻りできない所ま出来てるじゃねぇか!」

……は?

何……言ってるんだよアンク……アニスが……死ぬ?

魔法を使ったら……死ぬ?呪いで……死ぬ?

「むー……アンク、耳が痛い痛いなのです……。まぁ、まだ時間があるし、十分抗える。それにね、アンク……俺は家族を犯罪者にしてまで、生きながらえようとは思わないよ?それだけは覚えておいてね?」

アニスはいつもと変わらぬ口調でアンクと話す。

何でだよ……死ぬって分かってるなら……どうして私達に収集を命令しないんだよ!

……家族を犯罪者にって……私達は……マスターに命令される為のプログラムだ……。

それなのに……アニスは私達の事を思ってくれている……。

そう思っているアニスを見てるのが、私は堪らなく辛かった……。

出来る事なら目を背けたくなってしまう……。

だけど、背けることが出来なかった……。私は、ただ純粋に嬉しかったからだ。
自分が呪いに掛かって苦しんでるのに、私達を家族と呼んでくれる、思ってくれているアニスが……。

「……ちっ……。……今日の儀式終わってから、考えんぞ……」

「……うん！！」

……儀式？
……何の儀式をすんだ？
私はそう思いながら、アニスの部屋のドアを開けて、中に入り……。

「……なぁ、儀式って……何だよ？」

アニスサイド

抜かった……。
まさか、ヴィータが聞いていた何て……思いもよらなかった。

「ん？どうしたのヴィータちゃん。儀式って何の事かな？アニス分かんなーい」

「誤魔化すなよ！もう、聞いちゃったよ……アニスが呪いで、魔法を使えないって……使ったら死ぬって事も……」

……そこまで聞かれちゃってたか……。

まぁ、自分が悪いか。注意が散漫過ぎたね。

「……アニス……命令しろよ……私達に収集を命令しろよ！！私達はアニスを守る守護騎士だ！！どんな事だって、どんな命令だってやるよ！アニスが収集して、自分を助けろって言えば、私達は何時でもやってやる！！……だから……頼むよ……」

「……ヴィータちゃん……」

……ヴィータちゃんの覚悟は分かった……。

だけど……それじゃ駄目なんだ……。

「ヴィータちゃん……その言葉はとても嬉しいよ。だけど……それは断るよ」

「！？何でだよ！」

「だって、家族を犯罪者にしてまで生きながらえるのってさ……ズルくないかな？」

「そ……そんな理由で……」

「ううん、そんなじゃないよ。俺にとって、ヴィータちゃん達は大切な家族何だもん。それに、どんなちっぽけな理由だと思われても、どんなにくだらないと思われても、俺はこの信念を曲げはしないよ」

「……アニス……」

「だから、ヴィータちゃんがそんな事気にする事は無いよ？でも、ありがとね？俺、嬉しかったよ」

そう言った瞬間、ヴィータは俺に駆けより、抱きしめる。

「嫌だ！！アニスが居なくなるなんて、絶対に嫌だ！！」

「うぉお！？ヴィ、ヴィータちゃん、苦し……ぃ……」

「アンク！お前からも何か言ってやれよ！！」

「……はぁ、こいつに何を言っても無駄だ……それに、こいつは一度決めた事は途中でやめたりしないから厄介なんだ。……だから、俺とお前で支えてやるぞ」

「……支える？……私と……お前が？」

「あぁ。こいつは今、魔法が使えない。使ったら死に近づくからな。そこで提案だ。お前、今日からこいつの儀式手伝え」

「はぁっ！？アンク！お前何言ってるの！？ふむぐっ！？」

俺はヴィータに手で口を塞がれる。
ちょっ！？離せ！苦しいって！？

「……やる！アニスを支えれるなら何でもやる！」

「……決まりだな……。ははっ！良いなぁ、その欲望！！気に入った！その欲望、解放しろ」

そう言って、アンクは何処からか銀色のメダルをヴィータに投げつける。
そして、その銀色のメダルはヴィータの額の中に入って行く。

「うわっ！？今何か入ったぞ！？」

「慌てんな。お前の中にセルメダルを入れた。まぁ、グリードは生まれないが、少し身体能力と魔力が強化された筈だ」

「……そう言えば、魔力量が上がった気がする……」

「当たり前だ。俺の魔力を蓄えてあるメダルだからな。そんじょそこらの強化と訳が違う。さて、これで俺とお前は、利害が一致した仲間だ。よろしく頼む」

アンクは不敵な笑みを浮かべながら右手を突き出す。

「……お、おぅ……よろしく、頼む」

そして、ヴィータは少しオドオドしながらアンクの右手を握り、握手を交わす。
……どうでも良いけど。

「もがもがぁー！（早く手を退けてぇぇぇぇ！）」

何時になったらこの口にやられてる手は離されるのだろうか……。

第二十三話　死と隣り合わせととある騎士の覚悟（後書き）

いやぁ、今日は早く書き上がりました

と言うわけで、ヴィータがこっち側に来ました

これからはアンク・ヴィータが絡んできます

ヴィータはなのはキャラの中で一番お気に入りのキャラです

……ロリコンじゃないやい！

でも、何かヴィータの忠義心パネェっす……あれ？本編でもこんなもんだっけ？

まぁ、いいや

そろそろフェイトとも絡ませたいな～

たぶん次の次の次辺りからちょいちょい無印に絡ませるかも

主にアンクを

さて、次回は二回目の儀式の話を書きます

ここまで読んでくださりありがとうございました

宝石・隷属の魔眼

「物質」「非物質」に関わらず、その視界に入ったもの全てを『隷属』させる
遠距離からの「分解・吸収・放出・変換」を同時に行う

つまり、空気をダイヤモンドに変える事すら可能になる

本来は「大地からマナを取り込み、体内でオドに変え、魔力という

枷にはめ、詠唱によって意味を加え、魔術として放出する」という
魔術の大原則に則ったもの

その効果を視界内全ての存在に適用させるのがこの魔眼の効果
自分の力量を超えて隷属させることは不可能であり、生命を持った
ものは特
有の加護を得ている為に効果は及ばない

実質最悪の魔眼と呼ばれるが、所有者はこれまで「神」以外に存在
しないとされる

物質変換とも呼ばれる

第二十四話　魔眼の能力と二回目の儀式（前書き）

いやぁ、時間かかったね今日は

まさかの２３時過ぎに書き上げるとは

少しゆっくりしすぎた

さて、今回は儀式二回目だね

一体どんな悪魔が出るのか

それでは、本編始まります

第二十四話　魔眼の能力と二回目の儀式

アニスサイド

「なぁ、儀式って一体何をやるんだ？」

そう言えば、まだ説明してなかったな～
まぁ、簡単に説明すればいいか。

「簡単に言えば、悪魔と戦う事」

「悪魔……って、嘘だ～」

「いや、ホントホント。まぁ信じるか信じないかはヴィータちゃん次第だし。さて、儀式は今日の夜中。みんなが寝静まった時にやるからね」

俺がそう言うと、ヴィータちゃんは少し、顔をしかめた……。
何か不都合でもあったのだろうか？

「何か不都合でもあった？」

「いや……いつもはやてと寝てるから、夜中に起きたら怪しまれないかなって……」

「ん～、そうか……。だったら、今日は俺と一緒に寝るってはやてに言えば？」

「それだと、はやても一緒に寝るとか良いそうなんだけど……」

あ～、そうか～……難しいな～。
どうしたら良いかな？

「もういっその事、トイレで起きたって言えば良いんじゃないかな？それか、はやてに気づかれないように起きるとか」

「……アニスって案外デリカシー無いんだな……。でも、やっぱ気づかれないように起きるしかないよな～。アンクは良い案無いのか？」

「気絶させる」

「……アンクに聞いた私が馬鹿だった……」

「てめぇ……」

アンクはヴィータをにらむ睨む。
そしてヴィータも負けじとアンクを睨み返す。

「ま、まぁまぁ！二人とも落ち着いて！それじゃあ、ヴィータちゃんははやてちゃんに気づかれないように部屋から出て俺と玄関前で合流って事で良い？」

「うん、それで良い」

「オーケー。それじゃあ、これでお開き。後は夜を待つだけだね」

さて、この魔眼どうしようかな……。
まぁ、さっき目を見たけど、特に色とかは変わってなかったし、大丈夫だろう。

それにしても……魔眼か～。正直要らないんだよね～。
でも癪だけど、これに頼るしかないんだもんね……。悲しいな～。

「はぁ……」

さて、これからどうしようかな〜……。
〜〜

と言う訳で、うだうだ考えても仕方がないので、少しだけ魔眼を使う事に。
魔力とか使わないから、ただ見ただけで物質を変えたり出来るらしい。

つう事は、石を武器に変えたり、空気を水に変えたり出来るのかな？
まぁ、複写眼は見ただけで魔法をの術式を覚える事が出来るのだから、そう言う魔眼があっても良いのかな？

「まぁ、良いや。少しだけやってみよう」

つう訳で、ただ今庭です。
家の中でやるのも何だし、どうせなら石が落ちてる所の方が良いじゃん？

「でも、どうやって発動させせんの？念じれば良いの？それとも常備展開しとけって事？」

空の境界の両儀式みたいに、死の点が見えたりしねぇよな？
あれ、かなり物騒だから、やめてよね。

「ん～、現れろ俺の魔眼～。ん～、ん～！見えた！」

俺は目を瞑っていた両目を一気にカッ！と開く。
さて、手鏡手鏡……。
ありゃ、何にも変わってないや……む～、どうやら違うようだ……。

「あーうー……分からないよ～……」

どうしたら良いのやら。
もしかしてあれか？命の危険に晒されたときに開眼するとか？
はは、厨二乙。でも、そうしたら魔眼授ける意味なくね？今出来なきゃ儀式でも使えんのだし。
たぶん、あの二人だけでもやれると思うけど。

まぁ、使えないなら仕方ない。
魔眼には悪いけど、このまま封印しておこう。

「まぁ最後にもう一回……」

俺は最後に、そこら辺に転がってる石を睨んでみる。
……うん、やっぱ何にも変わんないか……。
そう思いながら、俺は家の中に入ろうとする。

だが。

バキャッ！

何かが砕ける音が聞こえた。
俺は、音がした方を向く。そこには、さっき俺が睨んでいた石がある所だった。
だが、先ほどの石は、ハンマーで思いきり叩かれたように粉々になっている。

「……え～っと……あはは、これってもしかして、魔眼の効果……なのかな？」

確かこの魔眼には、分解、吸収、放出、変換が出来るって言ってたな。
じゃあ、これは分解？
……あ～、なるほど、やっとこれの本質が分かった。

これは、魔法を吸収する際、分解し、吸収する事が出来るんだ。
そして、分解の工程を行わないで吸収したら、それが魔力に変換さ

れる前に放出を行えば、相手の攻撃魔法をそっくりそのまま返せるってわけか……。

そして、魔力回復も行えるし、相手の武器を見ただけで分解も可能。人間にはこの魔眼は効果を示さないので、小さいペンダント型のデバイスとか、指輪型のデバイスを見立ても、人間は分解されず、デバイスが優先的に壊される。

更には、相手のの周りの空気を物質変換し、有から無に変えることもできる。
なので空気を奪い真空にし、殺せたり出来る。

空気を無数の刃に、空気を雷に、空気を毒に、空気を重力に、空気を火に、空気を光に、空気を水に、空気を土に、空気を風に。

使い道は裕に無限……って事か……。
もはや錬金術も使えそうだな、この魔眼……おぉ、怖い怖い。

「……さて、中に入ろうっと」

何か、ホントにとんでもない物をもらっちまったな～。
はぁ、あの馬鹿神目。ホント要らん事をしてくれた。どうすんだよコレ、ただでさえガッシュの呪文はタイムラグ無しで使えるし、斬魄刀はほとんど使えるし。

それに、まふだ試してない物もあるし……。お前、ネギまの魔法何てそんなに使ってないんだぞ？

「まぁ、なるようになれだな……。頑張りますか」

とにかく、今日は儀式を終わらせて、この身の呪いについて考えないと。
時間が無いんだから……それに……お父さんとお母さんも探さなきゃ。

「……お父さん、お母さん……」

絶対……見つけるから……。

～キング・クリムゾン～

はい、あっちゅ～間に夜になりました。
キンクリ様々ですね……あ、メタ発言駄目、絶対？
すみませんなのです……。

「あ、アンクもう居たんだ」

「あぁ、つい数分前に準備終わらせてな。後はヴィータだけなんだが……」

「ん～、やっぱり難しかったかな？」

「……いや、どうやら来たみたいだ」

俺は後ろを振り向く。
そこにはいつもの格好をしたヴィータが立っていた。

「良かった、気づかれないで出てこれたんだね」

「うん。はやてグッスリ眠ってたし。大丈夫だったよ」

「そう。それじゃ、準備は良い？ヴィータちゃん」

「……なぁ、今まで思ってたんだけど……ちゃん付けは止めて欲しいって言うか……その……」

「嫌だった？」

「いや……何て言うか……呼び捨てで呼んでもらいたくて。はやてだって呼び捨てで呼んでるから……アニスにも呼んでほしいって言うか……子ども扱いしないでほしいって言うか……」

「……うん、分かったよヴィータ。それじゃ、行こうか」

「……うん！」

まぁ、これ位なら良いか。
俺も呼びづらかったし、それに……少し距離が縮まったとも思えるしね。

そう思いながら、俺は玄関のドアを開け、外に出る。
そして、目に映ったのは、久々の灰色の空間。

ヴィータはいきなり空間が変わった事に驚いているが、たぶんそんな暇は無いと思う。
まさか、今回はそっちから出向いてくれるとは。

「あら、こんばんは」

「あ、どうもです……」

「貴方がアニス君……で良いのかしら？」

「あ、はい……よろしくお願いします」

「ふふ、よろしくね。私はイシュタル、二人目の悪魔よ」

「イシュタル……あれ？イシュタルさんって、女神の筈じゃ……」

「あら、良く知っているわね。そう、私は元、女神なの。私に名前から女神って分かってるのなら、分かるでしょ？私が何をしたのか」

イシュタル。
バビロニアの豊穣の女神の一人で、ギルガメシュ叙事詩で知名度を高めた事で有名な女神だ。
冥界に囚われていた神、タムムーズを助ける為に、自発的にアラルにくだった女神の筈……。
まぁ、少し話がアレになっちゃうから後は省くけど……。

「あれ？人間界ではそんな事になってるんだ？」

「え？違うんですか？」

「ただ私は、天界の仕事がめんどくさくて、定期的に冥界に遊びに行ってたら、堕天しちゃって。それで部類もいつの間にか悪魔にされちゃってたんだ～。アラトゥが気を利かせてくれてさ～。今では自堕落のニートまっただ中なのよ！」

うっわー……最初の威厳あるオーラがすっかり見えなくなっちゃったよこの人……。

つうか、まさかそんな事になってるとは……話変わり過ぎだろ……。

「いやいや、それにしても人間の妄想は怖いね。アラトゥがデーモンとナムタルーに命じて、裸になった私を襲わせるなんて……そんなのある訳ないよーｗｗｗ人間の妄想の方が怖いよ」

……はぅ、この人も痴女系の人だった……。

ちくせう……まともだと思ってた俺のバカ！

「コラそこー？そんな痛い子を見る目で見ないの！お姉さん怒りますよ？」

「……おい、こいつにも勝ったら使い魔になるのかよ……」

「さ、さぁ～……」

「……こいつ……私は苦手だ……」

「あらあら……お姉さん悲しみますよー？ま、良いですけどね。さて！それでは儀式を開始しましょうか。私はもう準備万端なので、あとはそちらだけですよー？」

う～ん。
まぁ、こっちも準備万端だし……。

「二人とも、行ける？」

「当たり前だ。もうグリード化は済ましてある」

「グラーフアイゼン、行くぞ！」

《Ｊａｗｏｈｌ》

ヴィータはグラーフアイゼンを起動させ、騎士甲冑になる。
まぁ、アニメ本編となんら変わってないのだが、生で見るのは感動的だね。
つか、原作キャラのバリアジャケット見るの、ヴィータが初めてだな。

「それじゃあ、二人ともお願いね！俺も出来るだけ、サポートするから！」

「任せろ」

「私とグラーフアイゼンなら大丈夫だ！」

「……準備は良いですね？……それでは……行きます！」

イシュタルはそう言うと、武器を取りだし……。
って……おいおい……そんなのありかよ……。

「二人とも！あの武器に気を付けて！」

そう、イシュタルが持っている武器……。
それはこの世全ての宝具の原典の王……英雄王ギルガメッシュ……
正しくはギルガメシュが持つ、最強の武器……。
天地乖離す開闢の剣（エヌマ・エリシュ）……何でそんな物を……。

「あら、やっぱり分かりますか……。これは天地乖離す開闢の剣（エヌマ・エリシュ）…
…私はバビロニアの豊嬢の女神なんですよ？一応オリジナルではあ

りませんので、そこまでの力はありませんが……慢心せずして掛かって来るが良い！人間！」

っと……これはこれは……大層な事を。
でも、あの闘気……正直ヤバいな……。

「アニス、指示を頼む！お前だけがあの剣の能力を知っている！どうやって戦えば良い！」

「……あの剣に……弱点は無い……近距離、遠距離、どちらも最強。でも、やるとしたら近距離で、技を放たせる前にイシュタルさんを叩けば、十分行ける！だから、近距離で戦って！」

「分かった！行くぞ、グラーフアイゼン！」

《Ｊａ》

ヴィータはアイゼンをギュッと握りしめ、勢いよく掛けて行く。
大丈夫かな……まぁ、こっちもサポートしてやんよ！

「アンク！ヴィータと同じく戦って時間を稼いで！俺はその間に、準備をしとく！」

「分かった。だが、何の準備だ？」

「……あの剣の技を封じる準備だよ」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

イシュタルサイド

「ハッ！」

ガキン！

「動きが単調すぎますね。そんな事では、足元を掬われますよ？」

私は、ヴィータと呼ばれているこの足を払う。
その子はそのまま転ぶが、すぐに立ち上がりまた攻撃を開始する。

ガキン！ブン！ドガァ！

……なるほど、力はあるようですね。
これは、一撃喰らえばひとたまりもない……。でも、これ位の攻撃なら十分に避けられる……。
だけど……。

「貴方が厄介そうですね、アンクさん？」

「ハァッ！」

ガスッ！

アンクと言う男の蹴りが私を襲う。
だがその蹴りを私は受け止め、そのままがら空きのボディーに剣を付く。

ドスッ！

「ガハッ！」

全く、この剣に刃が無くて良かったですね？
今頃貫通してましたよ？

「い、け……ヴィータ！」

「言われなくても！アイゼン！！」

《Ｅｘｐｌｏｓｉｏｎ　Ｒａｋｅｔｅｎｆｏｒｍ》

ほぉ、これはこれは……まさかこの男が囮とは……。
でも、一体何をしてくるのでしょうか？
そう思いながら見ていると、さっきまで小さかったハンマーが、形を変えて大きくなっている。

「ラケーテン！！」

シュゴッ！ゴォォォォォ！

そして、ハンマーの片側から炎が噴き出し、その勢いで女の子が回り始める。
その勢いは徐々に加速し始め……。

「ハンマァァァァア！！」

シュッ！ヒュゴォォォォォ！！

そのまま突っ込んでくる。
だけど、さっきとは比べ物にならないスピード……。
だったら……。

「起きなさい、エア……」

キュィィィィィィン！

私の声に反応し、エアが回転を始める。
そして、私は男がエアを掴んでいる手を強引に引っぺがし、女の子の攻撃をエアで受ける。

ドガァァァァン！！

「……なっ……受け止められた……」

「……どうやら、その程度の様ですね……ハァ！！」

私はハンマーを弾き上げ、そのままエアを振り降ろす。

《Ｐａｎｚｅｒｈｉｎｄｅｒｎｉｓ》

ガキン！

だけど、その攻撃は障壁で止められる。

「サンキューアイゼン！」

くっ……結構固いわね……。
だったら……こうしましょう……。

私は女の子から距離を取り、狙いを定める。
なるべき手加減はする……だけど……三人いっぺんに終わらせます！

「……天地乖離す（エヌマ）」

キュィィィィィィィン！！！

さっきよりも回転が速くなる。
そして、徐々に剣に力が溜まってくる……。
その時。

「二人とも！俺の後ろに！」

なっ！？何で近づいてくるの！？
ヤバい、もう止められない！？

「開闢（エリシュ）の剣！くっ、避けなさい！」

幾ら加減してるとは言え、こんなに近づいていたら、大怪我じゃ済まないわ！
お願い、避けて！
だけど、私の心配は杞憂に終わった……。

「ハァァァァ！！」

私の攻撃が、小さくなっていく……。
それも……凄く速い速度で……。

そして、見えてしまった……。
あのアニス君の目の色が……変わっていたことに……。
あれは……神しか持ちえない最悪の魔眼……どうしてあの子が……。
だとすれば、攻撃が消えたのは……分解を使ったのね……。

やれやれ、じゃあ初めから勝ち目がないじゃない。
私はそうそう思い、エアをしまう……はぁ……負けだわ負け負け。

アニスサイド

やっぱりは放って来たか……。
それにしても、ぶっつけ本番程怖いものは無いな。
死ぬかと思ったよ……。
それに、ちゃっかり魔力も吸収しましたので、少し体が軽くなった気がする。

そんな事を思っていると、イシュタルが何故かエアをしまった。
いきなりどうしたんだ？

「あぁ、負けた負けた。まさかそんな隠し玉があるなんて思わなかったわ。隷属・宝石の魔眼だ何て……どの神でも、悪魔でも相性最悪じゃないの。攻撃を見るだけで分解するだなんて……このままだったらエアも分解されるか吸収されるか、分からなかったわね……」

「……っと、それじゃあ……」

「えぇ、第二回目の儀式も無事クリア。おめでとう」

「……ふぅ……終わったぁ～」

俺は地面に座り込む。
いやぁ、案外度胸要るわこれ……技の真ん前まで来て見なきゃならないから、恐怖が倍増。
なのはの砲撃とか目の前で見たくねぇよ……。

「良かったな、アニス！でも、今のは何なんだ？」

「あぁ、魔眼って言ってね。俺のレアスキル。魔力が使えないから、魔力なしで使えるこの目が今の俺の武器。まぁ、癪だけどね」

「そうなのか……」

ありゃりゃ、何かヴィータが少し驚いてるね。
まぁ、俺も驚いてるわ。

「さて、契約しちゃいましょうか」

あぁ、そうだった。
勝ったら契約しなきゃならないんだった。

それよりも……。

「イシュタルさんの契約方法は何ですか？前のザゼルさんは、俺の血を吸う事でしたけど……」

「あぁ。私との契約は簡単よ？手出して？」

「あ、はい……」

俺はイシュタルに言われたとおり、手を出す。
因みに右手だ。

「それじゃ……」

チュッ……。

イシュタルは片膝を付き、俺の手の甲に軽いキスをする。
その瞬間、イシュタルの体が光だし、数秒で収まった。

「……これで契約は完了しました。それでは私は悪魔界に帰りますので、用事があれば、ザゼルと同じ呼び方で私を呼べますので。それでは」

そう言って、イシュタルは帰って行った。

「……ふぅ……それじゃあ、もう寝ようか。儀式も終わった事だし」

「そうだな」

「……今ので終わりなのか……」

「でも、後何回かあるし。その時は、またよろしくね、ヴィータ」

「あぁ、任せとけ！」

そう言って、良い笑顔で俺を見るヴィータ。
さて、後何回儀式があるんだろうな……まぁ、頑張ろう。
そう思いながら、俺達三人は家の中に戻り、各自の部屋で、そのまま眠りについた……。

第二十四話　魔眼の能力と二回目の儀式（後書き）

すいません

イシュタルの武器と話は、全て捏造です

ホントの話は、アニスが地の文で話していた通りになります

ここで言っておきますので……それは間違っているとかの感想は止めてくださいね……

さて、今回は二回目の儀式だったわけですけども……

次は何の話を書こうかな……

もうフェイト出そうかな？

まぁ、イシュタルでも良いんだけどさ

少し無印にも絡ませたいしね

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました

第二十五話　修羅場……なのか？（前書き）

どうも

いやぁ、もう寒い

ここ最近、寒い寒いしか言ってない気が

それはそうと、明日はお休み

なので修学旅行用の番外編を書いちゃいます

そして、ここでお願いです

ネタをくださいお願いします！

感想に、書いてほしい話を送ってください！

一つしか思い浮かばなくて！

お願いします！助けてください！

そんなわけで、本編始まります

第二十五話　修羅場……なのか？

アニスサイド

「ニートの分際で！」

「何よ、そっちだって変態の癖して！」

「変態とは何ですか！私は純粋に愛しているんです、アニス君を」

「あら、どの口が。悪魔界では手癖が悪いと評判のザゼルで通ってるのに……」

「それはあらぬ誤解です！」

ギュムッ！

「うわぁ！？」

「私はアニス君を愛しています！アニス君一筋です！」

「あらあら、でもアニス君は、貴女みたいな貧乳よりも、私みたいな胸の方が好きに決まっているわ」

ギュムッ……！

「ちょっとぉ！？」

あ、どうも……ただいま修羅場の真っただ中に居るアニスです。切実に言います、誰か助けてください……そもそも俺は誰の物でもありません。
むしろ俺の所有物俺なので、俺に許可を取ってください。
そして俺は美乳はです。

さて、みんなにはどうしてこうなったのか話さないといけないね。
まぁ……回想に入ろうじゃないか。

〜〜

「さて、イシュタルさん呼んで、後何回儀式をすればいいのか聞かなくちゃ」

昨日思っていた疑問を効くために、契約したてのイシュタルさんを呼ぼうと思います。
まぁ、あの人ニート生活してるとか言ってたし、呼び出しても大丈夫だろう。
でも、ザゼルさんは……まぁ、良いか。

「使い魔召喚、イシュタル！」

何か最近、魔力を他の所で感知するんだけどさ。
もしかしなくてもジュエルシードの反応？
たぶんそれしかないよね。

そう思いながら、俺はイシュタルを召喚する。
ザゼルさんの時とは違い、少し小さめの魔方陣が展開された。

そして、発行が収まると、視界が開けてくる。
俺はそこで、見てはいけない物を見た気がした……。

「おっ、よっしゃ。紅玉ｋｔｋｒ……あっ」

「……すみません、取り込み中でしたか……」

イシュタルは何故かソファーに座りながらモンハンをやっていた……。
えっと……マジでニート生活してたんだこの人……。

「……あ、どうぞお続けください……」

「その優しさが妙に痛いから止めて！？」

「いえいえ、妙なではありませんので気にしないでください。ただ、これが元女神か、落ちた物だと思っているだけなので気にしないでください」

「二回も気にしないでって言われた……ｏｒｚ」

それは貴女のせいなので、特に言葉も掛けないぞコノヤロー。
つか、何で神はこんな人を女神にしたんだろうか。
仕事はしないし、他の世界に遊びに行くし、堕天するし、いつの間にか悪魔になってるし。
……あぁ、顔か、なるほどなるほど。ホント、神は節操無しですね……ド変態。

「うぅ～……小さい子に虐められた～……」

「あの……マジ泣きしないでくれます？ニートさん」

「ニートって言わないで！せめて自宅警備員って言ってくれないかしら！」

「……契約破棄しちゃいましょう……」

「いやぁ止めて！？やっと手に職付いたのに、一日で解雇ってあんまりよぉぉぉぉ！！」

……何なんだこの悪魔……もとい元女神さんは。
あぁ、もう虫を見るような目で見た方が良いのかもしれませんねこれは。
だってちょうど良いでしょ？

「はぁ、分かりました。こちらがいきなり呼んだのが悪かったのですから、別に契約は気なんてしませんので安心してさい」

「ホント！？やったぁ！それで、何で私を呼んだのかしら？星を一つ壊してほしいって願いなら今すぐにでも！」

「いやっ、やらなくて良いから……。それより聞きたいことがあったんだ」

「？聞きたい事？何です？」

「実は、儀式って後何回で終わるのかな～って思って……イシュタルさんに聞こうかなって思いまして」

「あぁ、その事……。そうねぇ、悪魔の加護を取り払う為の儀式だしぃ～。ん～……多くて後七回、少なくて五回かな」

まだそんなにあるのか……。

そして、最低でも後五人の悪魔が使い魔に……多いなおい……。

「用はそれだけかしら？」

「あ、はい……すいません……お忙しい中お呼びしてしまいまして……」

「それは私に対する挑発と取っても良いのかしら？アニス君……」

あ、ヤバッ……調子に乗り過ぎちゃった……。

「良いでしょう……そまで言うなら……私にも考えがあります」

「な、何でしょう……」

「……貴方を襲います……勿論、辱めると言う意味でですけど……」

えっ……ちょっ…それはいわゆる逆レイプと言うものでは……。
もしくは……いえ、なんでもありません。

「私、昨日から思ってたんです。「この子は良い声で鳴いてくれそう……」って」

うわぁ、この人ドSさんだぁ!?
しかも、九歳の子に何言ってんだこの人!?

「……冗談ですよね?」

「……私が冗談を言うとでも?」

「……あうあう、今から俺、襲われちゃうのですか?みぃ、痛いのは嫌々なのです……」

「……誘いの言葉としか聞こえないのですが？」

なにぃ！？

俺の渾身の梨花の真似で切り抜けよう作戦が通じないだと！？

くそ、ここは黒梨花で行くべきだったか！？

「おトイレは済ませましたか？神様にお祈りは？部屋の隅でガタガタ命乞いする心の準備はオーケー？」

いや、殺しちゃ駄目でしょ！？

仮にも俺、貴女のマスターなんですから！？

「それじゃあ……行きますよ♪」

「ちょっ！？ヤバいッ！？使い魔召喚！ザゼル！」

俺はもうなりふり構っては居られなかった。

仕方がないのでザゼルさんを召喚する事にした。

「ハァーイ！アニス君のアイドル、ザゼルさんですよー！って……

あれ？」

……ザゼルさん、痛いですってその台詞。
余りに痛すぎて、イシュタル固まりましたよ？

「……久しぶりね、イシュタル」

「……えぇ、そうね。ザゼル……まさか、貴女もこの子の使い魔になっているとは……」

「貴女の方こそ、私と同じ人と契約していたとは……いやはや、気づきませんでしたよ。それで、何をしようとしてるのですか？私の物に手を出そうとは……流石、堕天した女神は違いますね。ニートさん？」

「はっ、変態が良く吠えるわね。そんなに今の主が大事？あはは、笑っちゃうわ。性癖がおかしい貴女には言われたくないわね、変態さん？」

そう言いあい、二人は睨み合う。
えっと……これって修羅場？修羅場だよね？

そして、冒頭に戻ります。

〜〜〜

「ちょっ！？　いたたたた！？痛いよ二人とも！？二人の力を考えて！俺死んじゃうから！」

「あ、すいませんアニス君……」

そう言って、ザゼルさんは離してくれたのだが。

「どうやら、私の勝ちの様ですね」

何故かイシュタルだけは離してくれなかった。
あぁ、胸の感触が嫌に腕に着く……はぁ、助けてほしい。

「何が貴女の勝ちなんですか！？どう見たって、引いた私に勝ちでしょう！」

「はん、それは言い訳に過ぎないでしょ？それに、先に引いた方が勝ちなんていつ言ったかしら？」

「ずっと腕を組んでいた方の勝ちとも言っていないじゃないですか

！」

「あらあら、そんな信憑性ない事を言うのかしら貴女は。それだから変態なのよ、貴女は」

「えぇい！さっきから変態変態って！私を一体何だと思っているんですか！」

「変態」

「ムキーーーー！」

ザゼルさんは足をドンドンしながら怒りのボルテージを上げる。
あぁ、そんなにどんどんしたら、あのお方が……。

ガチャッ！

「さっきからうるせぇんだよ！！いい加減にしないと消すぞ！！」

ドゴッドゴッ！！

「「っ……たぁい！？」」

ほら、来ちゃった……アンクが……。
しかもかなり虫の居所が悪いみたいだ。

「な、何するんですか……アンクさん……」

「そうよ～、何するのよ～」

「……良いか……てめぇらのせいで俺がどんだけイライラしてるか分かってんのか！今すぐにでもここで捻り潰して晒すぞ！と言うかアニス！もうこいつらと契約は破棄しろ！」

「「なっ！」」

「……その方が……良さげだね……」

「「すみませんでしたぁ！！」」

「うわぁっ！はやっ！？」

土下座の最高位、ジャンピング土下座を綺麗に決める悪魔が二人、
完成しました。
すげぇ、アンクと契約破棄と言う魔法の言葉……使えるなこれ。

「ふん、お前らはもう帰れ。良い迷惑だ」

「「……はい……」」

二人はショボンとしながら元の世界に帰って行った。
……えっと、もしかして今回はこれがオチ？

……終われ……。

第二十五話　修羅場……なのか？（後書き）

はい

どうやら、今回はネタ話みたいな感じになっちゃいましたね

糞面白くもねぇやな今回

と、自分でも思ってます……つうか、何故フェイト出さなかったし俺

明日に出そうかね

もしくはアリサとすずかを出すとかもありだと思われ

そしてユーノ、もとい淫獣との出会いとか

……もしくはここで、余り出番のない仁紫園さんとか絡ませたりすんのも面白いかもね

さて、ここまで読んでくださりありがとうございました

あ、そうそう……近々１００００００ＰＶ達成記念を書きたいなとか思ってたり思ってなかったり

しかも今現在のＰＶが、既に１７００００位なので、もしかしたら２０００００ＰＶ記念になりそうかもです

それでは、また明日とか

第二十六話　アンクの苦悩（前書き）

こんちゃー

最初に言っておきます

今日はかなり短め＆駄作です

今日はちょっと親が出かけるので、家事をしていて忙しくて、朝の内に急いで書き上げた物です

拙い話ですが、楽しんで頂ければと

それでは本編始まります

第二十六話　アンクの苦悩

アニスサイド

「アニス、ちょっと来い」

「ん？何さアンク」

どもっす、アニスですぞー。
何か開始早々アンクに呼ばれたので近づいてみる。

ひょい。

「ちょっ！？」

何か知らんが、いきなり脇腹辺りを掴まれ、そのまま上に持ち上げられた。
あーうー、恥ずかしいよー……。
ほら、ここリビングだよ？
はやてとかシグナム達が見てるから……。

「……やっぱり体重が軽くなってる……」

「へっ？」

「お前！前よりも体重落ちてんだよ！」

「……あぁ、そうなんだ」

「そうなんだじゃねぇ！お前、最近体重測ったか……？」

……あー、つい昨日測りましたよ……。
ちくせう……。

「あー……あははー……」

俺はアンクから視線を外して、壁を見る。
さて、どうしたものか……。

「……測ったんだな？」

「……はい……」

「……何キロだ」

「……1……7……キロ……っす……」

「……」

「……」

あぁ、沈黙が痛いとです。
だ、誰かたすk……。

「てめぇ！！二キロも落ちてんじゃねぇか！！」

「ひゃい！？」

「どうやったら二キロも落ちんだよ！？九歳の体重じゃねぇぞ！」

「いや……あの……俺……身長９５しかないから……はぅ」

「あぁもう！飯食えちゃんと！！分かったか！！」

そう言って、アンクは俺を降ろし、部屋から出ていく。
あうあう……仕方ないじゃんか……食小さいんだし。その分以上に動いちゃうんだし。

「なぁなぁ。アンク、何であんなに気が立ってるんだ？」

いつの間にか俺の横に居たヴィータが話しかけてくる。
いやまぁ、驚きはしないけど、いつの間に……。

「さぁ……俺には良く分からないし……」

特に今日はいつも通りだったけど。
俺が朝食を食べてた辺りから、少しアンクが険しい顔してたけど……。

「ちょっと聞いてくる」

「へ？ヴィータ……良いの？」

「うん、別に大丈夫」

「……そう、分かった。何か分かったら教えてね」

「分かってる。それじゃ行ってくる」

何か、最近マジでヴィータがカッコいいんだけど……。
うっは、ヤバス。騎士補正掛かって来てるねこれ。

「アニス君、いつの間にヴィータとあない仲良ぉなったん？」

「ありゃ、はやてちゃん。いつの間に」

あの、あんたらはどうしていつの間に俺の横に居る事が多いのかな？
神出鬼没とかのレベルじゃねーぞ。

「まぁ、色々とね……」

「ふぅーん……そかそか……ヴィータは呼び捨てで、ウチは未だにちゃん付けか……そかそか……」

「……あの……どうしたのでしょうか、はやてちゃん……？」

「いや、何でもあらへんよー……アニス君なんて知らへん」

とか言って、はやても何処かに行ってしまう……。

あの、俺何かしたのでしょうか？

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

アンクサイド

最近、あいつは少しやつれて来た様に感じる。

いつも通りのあいつ……だけど……何処かが違うあいつ。

だから、思い切ってあいつを持ち上げて測ってみた。

案の定、あいつの体重は落ちていた。

そう、これがただ普通に痩せただけなら良いんだ。

俺もあそこまで怒鳴ったりなんかはしない。

だが、それが果たして普通の痩せ方なのだろうか？

確かにあいつは身長は低い……だが、それでも体重はいつもキープしていたし、たまに少し減る事もあった……だが、あの日からだ。

アニスが呪いを受けたあの日から、徐々に何かが変わり始めているのを、俺は何処となく感じていた。
気のせいであってほしいが、そうとも限らない。
俺の杞憂で合ってほしいが、それすらも思えない。

ただ刻一刻と、アニスが呪いに蝕まれて行くのを見るのが、この上なく苦痛に感じる。
そうで無くても、俺はあいつの親が飛ばされたときに、それを嫌と言うほど痛感した……。
なのに、どうする事も出来ない……。

やはり、ここはジュエルシードを……それとも、無理やりにでも収集を……。
いや、俺には出来ない。するとしたら、あいつらが率先して動かなければ意味がない。

どうしたものか……。

そう考えていた時、部屋のドアが叩かれる。

「入っても良いか？」

声からしてヴィータの様だ。
俺の部屋に訪ねて来るとは珍しい。

「あぁ、良いぞ」

ガチャッ。

「うわっ、質素な部屋だな」

「黙ってろ。俺は無駄な者は置かない主義なんだよ。それで、何の用だ？」

「いや、何でお前があそこまで気が立ってたのか聞きたくてさ」

「……あぁ、その事か」

「その事かって……まぁ良いや。それで、どうしたんだ？」

「……最近……あいつが、やつれて来たなって思ってよ。それで持ち上げてみたら案の定ってわけだ」

「そうか？見た感じはそんなに変わってなかった気がするけど……」

「……でも、落ちていた。少し心配し過ぎなだけかもしれないが……それでも、あいつには爆弾があるんだ。心配し過ぎな位でも足りないくらいだ」

俺はやれやれと言いたげにため息をつく。
厄介だな、本当に……今のアニスには負担にしかならないし、下手に動く事すらできない。

「まぁ、確かにな……。でも、そこまで症状が表に出てるわけでもないし。今もアニスは元気なんだからさ、少しは気を緩めねぇと、倒れるぞ？」

「はっ、そんなに軟じゃねえよ。それに、あいつがあぁやって立ってんだ。先に倒れるわけにはいかねぇよ」

「……そうか……何かあったら頼れよ？私も、シグナムも、シャマルも、ザフィーラも。力になってやれっからさ」

「あぁ、そん時は頼むよ、ちゃんと」

「そっか……そんだけだから。戻る」

「あぁ、さっさと出てけ」

「ちっ、むかつくけど、やっぱそっちの方がアンクらしいわ」

バタン。

……一言余計なんだよ、あいつは……。

ったく、口の減らないガキが。

「余計な、お世話だっつの……」

全く、マジ腹立つ……。

〜〜

「おら！ドンドン食え！」

「あうあう、もうお腹いっぱいだよアンクぅ……うわっ、また皿に

盛られてる！？」

「アンクさん、もうその辺にしとき。アニス君ももう限界ですよ？」

「いや、こいつだって男だ。もっと食べれるはずだ。ほら食え！もっと食え！」

「……あう……もうお腹が痛い……シグナムさ～ん……」

「分かりました。私が代わりに食べましょう」

「お前が食っても意味ねぇんだよ！」

あうあう、最後の切り札、シグナムを投入したのに……軽く突っぱねられた……だと。
しかも何でまた皿におかずが盛られてるんだよ！！
どう考えたっておかしいじゃないか！！

「も、もう……無理……」

「ほら！後一口だ！頑張れ！」

「ふ……不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

こうして、何故こんな事になったのか、皆目見当もつかない一日なのでした

……終われ……。

第二十六話　アンクの苦悩（後書き）

いやぁ、すんません……

マジですいません

何か今日は、話をまともに進められなくてすいません

明日！明日は絶対にフェイト出す！

出すから！許してください！！お願いします！！

はい、今回はここまで！！！

ここまで読んでくださりありがとうございました！！！！

第二十七話　自販機での出会い（前書き）

いやっほぉ

何か、寝すぎた

そして、目がスッキリしてる

何だろう、久々にスッキリしてる

そして、今日は部屋を掃除しました

まぁ、ちょっと探し物がてらに掃除しただけなんだけどね

それでは本編始まります

第二十七話　自販機での出会い

アニスサイド

「にっしっしっし」

どうも、アニスたんだおいやぁ、今日はアンクがバイトで居ないのだわさ。だから思い切って俺のアイデンティティであるスパッツを穿いて外に出ようと思うんだ。

だから先ずは、はやてを振り切らないと駄目なのだわさ……。さて、今日の格好だが。まんまクド。あ、ちゃんとマントの下はスパッツだおー。

いやさ、最近めっきりこの服の存在価値と言う物がね、無くなってと感じているのだよ。だから思い切って完璧クド使用にしてみました。はい拍手！

でも女装では無いので悪しからず。

「さて、行きますか」

俺はそう呟き、動き出す。

ガサッ、ズズズズズ～。

ん？何の音だって？
はっはっはっ、段ボールが床に擦れてる音に決まっているじゃないカ。
まぁ、そんな訳で……摩擦でケツが痛い。つうか熱い。

「ん？何でこんな所に段ボールが……」

あっ……この声はシグナム……。
開始早々見つかるとか、俺にはスネークの素質は無かったのか……
残念だ。

まぁ、そんな事思ってたら段ボール持ち上げられたよ。
そりゃ当たり前だ。

「……主、何をしているんですか？」

「あはは、見つかっちゃいましたか……わふー……」

さてと、まぁシグナムにばれちゃった事なので、全速力で逃げるとしますか。
ふはは！全速前進ＤＡ！！

「あっ、主！」

「ちょっち出かけてくるおー！！」

俺はシグナムの声を無視して靴を急いで履き、勢いよく飛び出していく。
それをシグナムは、少し苦笑しながらやれやれと言いたげな感じでため息をつき、段ボールを畳む。
シュールにも程があるだろ。

「いっえーい！！無事に家から出られたって、アニスはアニスは綻んでみたり！って、俺のキャラじゃねーや」

某打ち止めの真似をしてみたが、俺のキャラに似合わず敢え無く断念。
いやぁ、無理だわ。俺にあんな純真無垢な子供の真似をするとか、俺の心は薄汚れてますしね。

「いやぁ、それにしても……補導とかされないよね？今日平日やし」

まぁ、大丈夫。このナリだし、何とか誤魔化せば行ける行ける。
それにしても、俺ってニートじゃね？
学校にも通ってないしね……いや、学校に通ったら通ったで、結構大変な気がする。
主に男子の目線的な意味で。

それにしても、道行く大人共の視線が痛い。
何だよい！そんなにマントと帽子が気になるのかよい！

「まぁ、仕方ないか……さて、何処に行こうかね～」

今日は無計画で出て来たから、これと言ってやる事も行く所も無い。
だからと言って、速効家に帰るのもあれなので、徘徊する事に。

「それにしても暑いな～。やっぱマントはまずかったかな？」

流石にもう夏だしね。中はスパッツと半袖だから良い物の……マントで蒸れるわ。
でも着ないともったいないやん。
まぁ、クドわふでじゃ夏にも限らずクドは羽織ってたのでおｋ。

「でも、喉乾いたな～。何か自販機で飲み物でも買おうかね……」

俺は辺りを見渡して自販機を探す。
えっと……何処かに自販機は～……っと……おっ、あったあった。
俺は自販機を見つけて、すぐさま駆け出す。

いや、喉乾いてるなら走んなよってな……。

「おっ、色々売ってる～♪でもこのどろり濃厚ピーチ味って……何なんだ……」

そんな物が置いてあるとか……パネェな……。
さて、まぁここは無難ファンタとかだね。
って、ガラナもあるのか……あれは北海道限定ではないのか……。
気にしないで良いか……さて、お金お金って……。

「……届かない……だと……」

ここで問題発生！
自販機のボタンは愚か、お金を入れる所までもが届かないのです！
これは由々しき事態なんだよ！くそ！これではジュースが飲めないではないか！

「ん～！んん～！！と～ど～か～な～い～！！うなーーーー！！！！」

ピョンピョンピョンピョン！！

くそ！届け！俺のコスモ！ってちゃうわい！！
届かない……あ～、何処かに何か乗っかるものねぇかな～。
とか思ってたら。

トントン……。

「キャッ！？」

いきなり肩を叩かれた。
いや、びっくりして悲鳴あげちゃったよ。

「あ、びっくりさせちゃったかな……」

俺は後ろを振り向き、声の主の顔を見る。
うむ、金髪でサイドツインで可愛いのう。それに、何か水樹さんの声に似てるね。
……ってフェイトじゃん！

「あの……何でしょうか……？」

「いや……君がさっきから何かやってたから、気になっちゃって。どうしたのかな？」

「はぅ……大変お恥ずかしながら、この自販機の、お金を入れる部分に手が届かないのですよ……あはは……はぁっ……」

いきなりのフェイトの登場に驚いたものの、そこは俺。何とかポーカーフェイスを保ったよ。いやぁ、生フェイトは可愛いね。

あれだよ、大人になったのムチムチフェイトよりも、今の方が俺的には好きだ。

……ロリコンではない。

「……ここに入れるだけで良いのかな？」

「……入れてくれるのですか？」

俺はたぶん、目がキラキラしてると思う。

いやぁ、世の中捨てた物じゃないね。こんな優しい子が居るとは……もう精神年齢が成人してるので、こう……来るものがあるね。

「うん、私が代わりに入れてあげるよ」

「すいません……お願いします」

俺はフェイト二小銭を渡して入れてもらう。
あぁ、何て優しいのだろうフェイト……こんなフェイトを人形扱いするかプレシア……許すまじ……。
でも無印に介入するのは……まだ検討中。

「はい、入れたよ」

「ありがとうございます……さって～……って……ボタンも届かねぇorz」

もう、何なんだよ……俺。
確かに小さくって頼んだが、ホントあの神極端だよね……。

「あはは……ボタンも押してあげようか？」

「あうあう……みぃー……お願いしますなのです……」

もう……どうでもいいや……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

フェイトサイド

「えっと……何処だったっけ……」

私はこの世界に来てすぐに、サーチャーを飛ばしていました。
それを終えたので、マンションに戻ろうとしたのですが……まだ場所を把握しきれていなくて、迷ってしまいました……。どうしよう……。

「こんな事になるんだったら、もう少し地図とか見て道を覚えるんだった……」

照るつける太陽が、ジリジリと地面を熱し、その暑さが私の足などに襲い掛かる。
暑い……。黒系統の服を着ているので、熱を吸収しているのだろう……。

そんな時……。

「……届かない……だと……」

不意に、近くから声が聞こえた。
声の高さからして、女の子だろう……。
何故かその声は、凄く驚いてる声に近かった。

「ん～！んん～！！と～ど～か～な～い～！！うなーーーー！！！」

ピョンピョンピョンピョン！！

少し歩いて角を曲がったら、マントを羽織り、帽子を被った子が、
ピョンピョンと飛んで何かをしている……。
……あの機械みたいのは何なんだろうか？
そしてあの子の飛び跳ねてる姿……可愛い。

私はその子の近くまで行き、少し屈んでからその子の肩を叩く。

トントン……。

「キャッ！？」

いきなり肩を叩かれてびっくりしてしまったのか、女の子は短い悲

鳴を上げる。
……びくっとなったところも可愛い……はっ、いけない、私ったら……。

「あ、びっくりさせちゃったかな……」

女の子はこっちを振り向き、私の顔を見る。
その子は、とても肌が白くて、目がパッチリとしていて、顔も整っていた。
そして、人形の様に可愛らしい唇……いや、もう全てが人形みたいに綺麗だった……。
その子は一瞬驚いたような顔になったが、すぐに元の整った顔に戻り。

「あの……何でしょうか……？」

そう聞いてきた。
やっぱり初対面だし、いきなり肩を叩かれたんだもんね、しょうがないか。

「いや……君がさっきから何かやってたから、気になっちゃって。どうしたのかな？」

「はぅ……大変お恥ずかしながら、この自販機の、お金を入れる部分に手が届かないのですよ……あはは……はぁっ……」

そう聞いた私に、女の子は顔を赤らめて、恥ずかしそうに訳を話してくれた。

あぁ、可愛い……すごく可愛い……こう、ぎゅってしたくなるような小ささに加え、そのあどけない笑み……本当に人形が生きているみたい……。

そしてその子はため息をつき、項垂れてしまう。

私はこの子が見ていた機械を見る……。

見たところ、ジュースを売っている様だけど……。

あっちとは全然形も違うので、分からなかった。

そして、私は声を上げる。

「……ここに入れるだけで良いのかな?」

そう言った瞬間、女の子がバッと顔を上げる。

その目はキラキラしていた、とても期待に満ち溢れてる目をしていた。

「……入れてくれるのですか?」

……お預けをされて、ようやく良いと言えわれた犬みたい……。
愛くるしい……今すぐにでも頭を撫でてみたい……。
でもその感情をグッとこらえ、言葉を紡ぐ。

「うん、私が代わりに入れてあげるよ」

「すいません……お願いします」

女の子は私に何かを手渡してくれた。
あぁ、手も小さい……にぎにぎしたい……。
それにしても……これをその隙間みたいな金属口になっている所に入れれば良いのかな？

私は機械に近づき、三枚のコインを投入する。
三枚目が入れ終わったら、いきなりボタンが光りだす。

「はい、入れたよ」

「ありがとうございます……さって～……って……ボタンも届かねぇｏｒｚ」

お礼を言ってから、クルッ機械に向かい、ボタンを押そうとするが。
コインを投入する所よりも上にあるボタンを、この子が押せるわけ

も無く。
それに気づいた女の子はまた落胆する。
私は苦笑交じりの笑い声を出す……。

「あはは……ボタンも押してあげようか？」

「あうあう……みぃー……お願いしますなのです……」

……み……みぃーって……。
それに……あうあうって……っ～～～～～～～～～～～！！
可愛い……抱きしめたい、頭を撫でたい、プニプニしたい……。
今この子、鳴いたよ！

「どれを押せば良いかな？」

私は顔に出さないように必死に堪える。
お母さんのお仕置きよりも、ずっと苦しい……何でだろう……。

「あ、その紫色のをお願いしますです……」

「これだね」

ピッ、ガコン！

女の子が指を差していたボタンを押す。
そしたら下からジュースが出て来た。
女の子はそのジュースを取り出して……。

「ありがとう♪」

満面の笑みで、お礼を言ってくれた……。
……もう死んだも良いかもしれない……。
はっ、いけない……死んじゃったらお母さんのお願いが……。

私は首を横に振り、正気を保つ。
危なかった……。

「それじゃあ、俺は行くね？」

ん……俺？

「君、女の子が俺とか言っちゃ駄目だよ？」

ここはお姉さんとして言っておかないと。

この子の将来が……。

「あはは……俺、男何だけど……」

「…………えっ？」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～

アニスサイド

ですよねー。
まぁ、仕方ないからさー。
つか、フェイトがすっごい変な視線をさっきから俺に浴びせてたのは何で？
すっごい寒気を感じたんだけど……。

「えぇぇぇぇ！！嘘……嘘だよね？」

「ホントだよ？良く間違われるから仕方ないですよ。そして、このナリで九歳なんですよねー」

「……私と同い年……は、反則だよ……」

ですよねー。
頑張れフェイト、驚いた分だけ良い事あるさ。

「大丈夫ですか？」

「……あ、うん……大丈夫……」

フェイトはまだ驚きが取れてないので、まだちょっと顔が引きつっている。
まぁ、ドンマイだね。

「何か知らないですけど……ごめんなさい……」

一応謝っとこう……紳士の嗜みです。

「あ、全然気にしてないから大丈夫だよ。こっちこそ、女の子って間違えちゃってごめんね……」

「いえいえ、さっきも言った通り、何時もの事なんで気にしないでください」

うむ、埒が明かないねこれ。
でも、フェイトってこんなに喋ったっけ？
まぁ、良いか。

「……所で……名前聞いても良いかな？」

「あ、良いですよ。俺はアニス・クロイツベル。みんなからはアニスって呼ばれてるから」

「……クロイツベル？」

その名を聞いた瞬間、少しだけどフェイトの顔色が変わる。
……どないしたん？

「……もしかして……アニスは……魔導師……？」

そう……フェイトが口にする。
その目は、少し戸惑いの目をしている……半信半疑か……。

「……どうして俺が魔導師って、分かったんですか？」

「私の住んでる世界では、クロイツベルの名は絶対。そして、この世界でその名前の人間は居ない……だからです」

「……ふぇ～、知らなかった……俺の一族って……そんな有名だったんだ」

「あらっ……」

フェイトが転びそうになる。
あはは、キャラじゃねえって。

「……もしかして、知らなかったの？」

「うん、全然。俺一切自分の家の事とか把握してませんでしたし。して、貴女は何なのでしょうか？魔導師を知っているのなら、貴女も魔導師なのですか？」

「うん、私もそう……もしかして……アニスもこの世界に落ちたジュエルシードが狙いなの？」

「ジュエルシード？……知らないですよそんなの。第一俺がこの世界に来たのは、家が襲撃されたからこの世界に逃げて来ただけであ

り、そんなジュエルペット何ぞ知りませんよ」

家が襲撃された、その台詞を聞いた瞬間、またフェイトの顔色が変わる。

何これ、面白い。

「……ごめんなさい……聞いちゃいけない事聞いちゃったね……」

「いえいえ、気にしないでください。これで疑いが晴れるのならば、安いものですよ。ところで、貴女の名前、まだ聞いてませんのですが……」

「あ、そうだったね。私はフェイト・テスタロッサ。フェイトって呼んで」

「はい、分かりましたフェイトちゃん。それで、疑いは晴れました？」

「……まだちょっと……半信半疑かな……」

「ですよねー。まぁ、信じるか信じないかは貴女次第です。でも、これだけは聞いてください。俺はそのジュエルなんたら何て物、この世界に落ちて来た事すら知りませんでした。今こうして貴女に言

われても、ホントにそんな物がこの世界に？って思っていますし、どんな物かも分からない物に興味を持つなんてあり得ません。ですので、俺は白とでも言っておきます」

「……ホントに、信じても良いのかな？」

「だから、信じるか信じないかは、フェイトちゃん次第です……」

俺は真っ直ぐにフェイトを見つめて言う。

……何故かフェイトは少し顔を赤らめているが、気のせいだろう。

「うん、じゃあ信じるよ」

「やけにあっさりですね……」

「だって、初対面でそんなに面と向かって言えるものかな？こっちが嘘って思っても、私は何も分からない。それは裏を返せば本当かもしれない……だから、私は信じてみようって思ったの」

「……ｏｈ……純粋……痛い、心が汚い俺にとっては痛い……ｏｒｚ」

もう、フェイトにたんの称号を授けようと思う。
これからフェイトたんと名乗るがいい。
あ、嫌だ……さーせん……。

「それじゃあ、私は行くね」

「うん、また何処かでね～」

俺はフェイトに手を振り、俺も歩き出す。
さって～、何処に行こうかな～。
とか思ってたら……。

トントン。

「わふっ!?……フェ、フェイトちゃん……またなの?」

またフェイトが俺の肩を叩いてきた。
いや、お前あっちに行ったんじゃねぇのかよ……。

「あの……マンション何処にあるか……分かるかな?」

「……はい?」

第二十七話　自販機での出会い（後書き）

フェイトたんマジフェイト

つうわけで、フェイトはキャラ崩壊させた方が面白い！

そんな事を思っている俺が通りますよ～

さて、やっとフェイトが出せました

フェイト可愛い、ヴィータの次に可愛いよ

でも三期のフェイトには何の魅力も感じなかったのは……何故だろう……

どっちかって言うと、ナンバーズの方にグッと来たんだけど

……スバル可愛いよ

どうだ！これで俺はロリコンでないと分かったろ！！

はっはっはっはっ！

それはそうと、あのガンダムのデータカードダス付きのアイスあるじゃん

あれ、アイス美味いし、カードも欲しいから最近食べてるんだけど

今まで本数から言うと四本食べたんだけど

何故か当たるカードがシャアとシャアザクのみ

内三枚がシャア、一枚がシャアザク……

俺はおとめ座でもなければ、センチメンタリズムも感じません

狙いはダブルオーと刹那何だけど……

そして抱きしめたくもねぇよ！！

つう話でした

ここまで読んでくださりありがとうございました

第二十八話　道案内と黄昏と（前書き）

ディアボロだす

いやぁ、もう疲れた

今日は実習の日で、一日家で仕事してました

もう疲れで書き終わらせるのに時間かかった

つう訳で、前書きはもう良いですね

本編始まります

第二十八話　道案内と黄昏と

「むぅ、フェイトちゃんはおっちょこちょい何ですね。道を忘れてしまうとか」

「あはは……返す言葉も無いよ……」

何かこの子、迷子になってたらしい。
懐かしいな～、つい二ヶ月位前に、俺も迷子になったよ。
その頃は地図すら目を通してなかったから、あそこでなのはに会えたのは運が良かった。
俺、案外幸運Ｂくらいはあるのかな？

「さって～、それじゃあジュースのお礼も兼ねて、道案内してあげますよ」

「ありがとう。アニスって優しいんだね」

「いえいえ、フェイトちゃん程ではないのですよ、にぱー☆」

っと、いかんいかん。また素で梨花になりかけている。
うむ、どうやらもうこれがデフォになっている様だ。
まぁ、自分自身この口調は好きなんだけど……万人受けはし無さそ

うだよね。
あれは幼女がやるから愛でられるのであって、男がやってもあまり需要はないと言いますか何というか。

でもそれは容姿の問題であり、もし仮に圭一がやったら、それはそれはとても大変で凄くて気持ち悪い結果になり。
圭一自身がバットで自分の頭をウッディしそうな勢いでしょうね。

そして何故こんな事について俺が語ってるのかと言うと。
目の前のフェイトが悶えているのでこの様な暴挙に出ました。
だって、軽く鼻から忠義心が見え隠れしてるんだもん。

「あ、あの……フェイトちゃん？鼻血みたいなのが出てるんだけど……」

「はぅっ……」

フェイトは慌ててポケットに手を突っ込み、ティッシュを取り出して拭く。
その間二秒。
お前は第四次聖杯戦争初期の切嗣か……、まぁ少しなまってるワルサーに弾詰め込めなかったけどな。

「……フェイトちゃんは変態さんなのかな？かな？」

「へ、変態さんじゃないよ……」

「まぁ、家にも似たような人が居るので慣れてるので気にはしませんけど」

「お願いだからその人と同類みたいに言わないで……」

「みぃー、変態さんには罰をなのです」

どんどん黒くなっていくね俺。
これならリアル梨花を目指せそうなんだけど、既に中の人と繋がりがあるので止めておこうかな？
まぁ、誰とは言わないけど。

「……アニスってやっぱり女の子なんじゃ……」

「あはは、何を言ってやがりますのですか。こんなダンディズムにあふれた男の子を捕まえて、女の子と口走るとか……って、何処もダンディズムあふれてねぇやな。しかもこの格好だし」

何処からどう見ても、男子がする格好じゃねぇしな。

まぁ、好きでこの格好してるから良いんだけどね。

「つか暑い……マント取ろうかな……」

「アニスってマントとかいつも羽織ってるの？」

「いや、気分だよ。この帽子もね。最近使ってなかったからね。似合ってる？わふー！何てね♪」

俺は右手を上にあげて元気よく言う。
わふーは共通言語で良いよ。
あ、そういや今日ナツブラ終わりじゃん……あ、何でもない、こっちの話だよ。

「わふー？」

「あ、口癖の様なものだから気にしないで」

共通言語になるのはまだまだ難しそうだ。
まぁ、フェイトが知ってたら今飲んでるジュースを吐き出す所だったけどな。

「それにしても、フェイトちゃんは暑くないんですか？そんな黒一色だ何て……見ててこっちが暑いよ……」

「実は結構……」

「ですよねー」

ホント、フェイトは黒色が大好きなんですねー。
まぁ、俺は来るものは拒まずと言いますか、似合えば何色でも何でも着るからね。
あ、女物は別な。

「今度から半袖を着ることをお勧めしますのです」

「うん、そうだね」

うむ、やっぱこう見ると、あんまりフェイトは笑わんな。
笑わんと言うよりも、笑顔が無いと言いますか、何と言いますか……。
でも可愛いんです、優しいんです。

「むぅ、もう飲んじった。ゴミ箱はこの辺に……ねぇか」

そこら辺にポイ捨てしたら隣のフェイトがお母さん化するからな～。
どうしたものか……まぁ、ゴミ箱見つかるまで持ってよう。

「それにしても、結構あそこから遠い所まで来ましたね。マンション結構遠いよ？」

「行き辺りばったりで来ちゃったからね」

「こんなに暑いのに、根性ありますねー。俺は無理ですわ」

「でも今外に出てるけど」

「……さて、行きましょうか」

痛い所を突かれました。
もう生きていけません……ちくせう。

「それにしても、さっきから視線がウザい……」

それがフェイトに行けばいいんだけど、如何せん……その視線全てが俺に来ている気がするのは、俺の自意識過剰故の被害妄想なのだ

ろうか……。

「さて、フェイトちゃん。少し速く歩くけど大丈夫？」

「あ、うん。大丈夫だよ」

「そう。それじゃあ行くよ」

俺は少し速度を上げて歩き出す。
それに着いてくるフェイト。
速度を速めたのは、一刻もあの視線から逃れたかったから。
あんましいい気分にはなれそうも無かったからね。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～

「と、言う訳で、マンションに着いたお」

「……誰と話してるの？」

「あ、気にしないでフェイトちゃん。ただの独り言だから」

「あ、そうなんだ……」

「に、しても……結構豪華なマンションに住んでるのね。何、フェイトちゃんって良いとこのお嬢様だったりするのかな？」

「ううん、違うよ」

ですよねー。
いや、でも……プレシア結構凄い奴だし、案外的を射てるかもしれぬな。

「それじゃあ、また縁があったら何処かで会おうね」

「うん。それじゃあ、またね」

俺はフェイトに手を振り、そのまま後ろを向き歩き出す。
さて……今何時だ？
俺は付けている腕時計を見る。

「むっ、１３時か……早いな、もうそんな時間か……」

どおりでお腹が減っていると思ったよ。
ちょいとフェイトと長話し過ぎたし、視線が無くなってからまたゆっくり歩きだしちゃったから、仕方ないか。
いやぁ、それにしても、フェイトと敵対し合わなくて済みそうだね。
へ？なのは？

戦わせときゃ良いじゃん。
戦いから生まれる友達ってのも、中々おつでしょうに。
べ、別に、介入するのがめんどくさいとか思ってないんだからね！
でも、プレシアどうしよかな～。

助けても良いんだが……ねぇ、今の俺は魔法が使えないわけでして。
そして闇の書のマスターですし、あまり管理局には顔を割られたくないのです。

「さて、どうしたものかな～……」

まぁ、時期が来るにはもうちょい時間がある。
それまでに答えを出しておこう。
優柔不断は嫌われちゃうので、サッサと結論を出したい所ではあるね。

それにしても、お昼どうしようかな～。
別に食べなくても良いんだけど、またアンクに痩せたとか言われてグチグチ言われたくないし。

あんまし食べ過ぎも良くないんだぞ、アンク。

「よし、んじゃこのまま突き進もう」

何かお昼お食べるのめんどくさくなってきたので、このまままた町を徘徊する事に。
今度は誰と遭遇すんのかな～。楽しみだわ。

〜〜

「……さっき楽しみだとか思ってた過去の俺を思いきりエスカリボルグでぶん殴りたいわ」

はい、ただ今時刻は夕方の四時でございます。
結局誰とも会わないまま時間と体力ばかりを消費しました。
いやぁ、やっぱフェイトみたいに行き辺りばったりは駄目なんだね、痛感したよ。

「はぁ、もう学生たちが下校する時間なのですか……」

何だろう……なまじ中途半端に高校生活を送り、高1で死んでしまい、今に至る俺なんだけど。

……学校行きたいなって思っちゃう。

小学校でも良いって思うけども……流石に無理だよね、今の家庭事情じゃ。

戸籍は……まぁ、何とかなりそうだけど、シグナム達やはやての事もあるしね。

「……はぁ、学校行きたいな～」

別段、友達と言う物が欲しいと言う訳ではない。

学も欲しい訳ではない。ただ、中途半端に通っていたのだったら、せめてちゃんと通っておきたかった。ただそう思っているだけ。

あ、でも学校生活に友達はつきものなので、やっぱ欲しいかも。

そんな事を思っていたら。

「……アニス、ここで何やってるの？」

「ふぇ？」

不意に声をかけられた。

俺は後ろを振り向き、そいつを見る。

……ムッツリーニ……。

「あ、ムッツリーニ。久しぶりだね」

「……（こくり）」

相変わらず、表情が変わらん奴だなこいつは。
ん？後ろに数人人が居るな、こいつの友達か？

「あー！ムッツリーニが女の子と話してる！？しかも子供の！」

「彰久落ち着け、もしかしたら道を聞いてるだけかもしれないぞ。
女の子が」

「いや、明らかにムッツリーニの方から声掛けてたし……」

……おいおい、見た目的に結構見覚えあるんだが。
つか、完璧バカテスの明久、雄二、美波なんだが……。

「お友達？」

「……（こくり）」

「……そうなんだ。挨拶しても良い？」

「……（こくり）」

うっし、ムッツリーニの許しもえたし、いっちょかましますか。
俺は三人が居る所に、ムッツリーニと一緒に行く。

「ねぇムッツリーニ、その子どうしたの？ムッツリーニの知り合い？」

「……紹介する、この子は……」

「土夜お兄ちゃんの彼女の、アニスです♪よろしくね。お兄ちゃん、お姉ちゃん♪」

「「「ブーーーッ！！？」」」

ふはははは！どうだムッツリーニ！
これが俺の奥義よ！！

「ムッ、ムッツリーニ!?恋愛は人それぞれだけど、それは犯罪だよ!!」

「見損なったぞムッツリーニ!決して女子には手を出さない紳士のお前が、実は隠れてこんな幼気な幼児と……クッ、俺のクラスに、まさか犯罪者が混じっていたとは……」

「ムッツリーニ、ウチ、信じてるよ?ムッツリーニはそんな事しないって」

「……（ブンブンブンブン！）」

ムッツリーニはすっごい首を横に振って否定している。

……何これ、面白い。

「そんな……お兄ちゃん……あの時私に、あんな事しておいて……うぅ、酷いよ……アニスはお兄ちゃんの彼女じゃなかったの?」

「ムッツリーニ、お前!?」

「……アニス、いい加減に悪ふざけは……」

「えへへ～、まぁ、今回はこのくらいで許してしんぜよう。この前遊園地でバカスカ写真を撮りまくった罰だよ」

「「「へっ？」」」

ふはは、どうよ？
四人ともアニス節に引き入れるこの手際のよさ！
惚れ惚れするねもう。

「改めまして、こんにちは。アニス・クロイツベルって言います。ムッツリーニとはただの友達何で、そんなヤラシイ関係じゃないですよ？それに、野郎と付き合うほど俺落ちぶれてないので悪しからず」

「えっと……じゃあ……」

「全部この子がでっち上げた嘘？」

「……（コクリ）」

「何だー、良かったぁ～。ムッツリーニがとうとうやらかしたかと思ったよ」

「あぁ、俺もだ。まぁ、これで何よりだ」

「所で……俺って言ってるけど……まさか君って……」

「あ、はい。俺は正真正銘男ですので。できれば君付けでお願いします」

うむ、やっパリ驚くよねそりゃ。
あのフェイトですら驚いてたし。

「……まさかここにも、第三の性別が……」

「ん？第三の性別？」

「いや、こっちの話だから気にしないで」

何か、このバカっぽい奴がいきなり切り返したんだが……。
まぁ、良いか……。

「……所で、あそこで何をしていたの？」

「あぁ、ちょっち黄昏てた」

「……まだそんな年じゃない」

「あはは。子供に、色々事情があるんですよっと……んじゃ、もう家に帰るわ」

「……今度はその恰好でまた会えることを願う」

「何で？」

「……クドの格好のアニスは需要がある。今日はカメラのバッテリーが切れた」

「あはは、そりゃ残念。そんじゃ、行くねムッツリーニ」

「……バイバイ」

俺はムッツリーニ達と別れた。

別れ際に手を振ろうと後ろを向いたら、何かムッツリーニが変な格

好をした奴らに連れてかれた。
何かアニスたん見守り隊とか書かれてたのは、俺の目の錯覚なのだろう。
取り敢えず、俺は何も見なかったことにして、そそくさと帰った。

こうして、俺の一日が終わりを告げるのであった……。

今日の日記、お終いまる

第二十八話　道案内と黄昏と（後書き）

まさかの日記オチ

いやぁ、それにしても……バカテスとクロスさせ過ぎやね

そろそろ自重します

はぁ、可愛いアニスたんを書けたので、今回は満足

でも戦闘を書きたいな

戦闘を書くのは楽しいは、ネタばかりの日常よりも、戦闘やシリアスの方が筆が進みます

でも文才は皆無っと

あぁ、そうだ

昨日ガンダムのアイスで付いてくるカード云々ってあったじゃん

昨日コンビニで二本買っててさ、今日最後の一本食べようとして、
アイスに付いてるカードを剥がして、袋を開けたら

何んと、ダブルオーガンダムが当たったんだ

やったね！

これでまたシャアやシャアザクだったらどうしようかと思った

アイス売ってる会社に文句つける所だったよ

まぁ、無駄話はここまでにして

明日はどんな話を書こうかな～

そろそろアリサとすずかとユーノとレイハさんでも出そうかね

うん、そうしよう

そして、軽くジュエルシード争奪戦も書きたいしね

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました

第二十九話　イチャイチャと気づいた事とサッカー観戦（前書き）

どもっす

最近、ホントに暖房が欲しいと思っている俺です

俺の部屋には暖房器具がありません

隣の妹の部屋には何故か元から完備されていたので、俺の部屋にはありません

何これ虐め？

北海道の冬舐めてんの？

暖房無かったら、部屋普通にマイナスの温度だよ？

息白いんだよ？

まぁ、暖房器具は本格的に寒くなったら買ってもらおう

それでは本編始まります

第二十九話　イチャイチャと気づいた事とサッカー観戦

アニスサイド

～～～♪～～～♪

ピッ。

「あぁ、やっぱり、今回も駄目だったよ。あいつは人のいう事を全く聞かないからな。次は、これを見てる奴らにも、手伝ってもらう事にするよ」

《……アニス君、何を言ってるのかな?》

やっほほー、アニスたんだよ。
早速出落ちだね、まぁ、良いんじゃないかな?あいつも、良くやってくれてるしね。
って、あいつって誰だろう?

まぁ、とにかく……何故かこんな朝早くから電話来たんだけど……。
出てみたら相手はなのはだった。

「何だ、イーノックじゃないか。私のサポートがそんなに心配なのか？」

《だ、だから……ナニを言ってるのかなアニス君は？それに、私はなのはだよ！》

「……いやですね……私とてそんな事は分かってるのですよ……ですがね……寝起きの私は、物凄く思考回路が纏まらず……変な事を口走ってしまうので……朝早くに電話をするのは……やめてください……それじゃあ……」

《あ、うんごめんね……って、違ぁぁぁぁぁう！！切っちゃ駄目！なのはまだ要件言ってないの！？》

「……すー、すー……」

《寝ないでぇぇぇぇぇ！！》

うぅ……うるさい……。

耳がキンキンする……何でこう、皆ってこんな朝早くに電話をかけてくるのでしょうか……。

俺は眠くて足らないのに、そいて今日は休日……ゆっくりしたいやん。

まぁ、学校に行ってない俺にとって、毎日が休日なわけなんですけ

おね。

「う～、はいはい……何でしょう……」

《あ、あのね！今日、お父さんがコーチ兼オーナーをしてるサッカーチームの試合だあるんだけど！一緒に見ない！？》

……何このなのは、テンション高すぎてついていけないんだけど……。

あうあう、めんどくさい……まぁ、行っても良いけど……サッカーねぇ……。

サッカー……サッカー……。

ガバッ！

俺はある重要な事を思い出してベッドから飛び起きる。

サッカーっつったら、あれじゃん。原作の第三話め。

しかも、ジュエルシードを持ってるのが、そのサッカーチームに居るやん。

まぁ、介入はしないんですけど、町に被害が及ぶのはねぇ……。

「……分かった、行くよ」

《ホントに！？やったぁ！それじゃぁ、公園の近くのグランドに来てね！九時半くらいから始まっちゃうから、できれば九時くらいに来てほしいんだけど……》

「あい、分かった。それでは」

《うん、それじゃあまた後で！》

ピッ！

パタン。

俺は携帯を折りたたみ、そこら辺に置いておく。

さて……どうしたものか……。

まぁ、取り敢えず先ずは、朝飯を食わなアカンな。

よし、リビング行こうっと。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～

「おっはよー！」

あれから俺は服に寝間着から少しラフな格好に着替えた。
と言っても、上を半袖に変えただけなんだけどね。

「おはようアニス君。今日は誰にも起こされんでも起きたんやな～」

「まぁ、ちょっと友達からモーニングコール的な電話来てね……」

「ん？また何処か出かけるんか？」

「うん。何か友達のお父さんがコーチ兼オーナーをしているサッカーチームの試合があるらしく、それを見ないかって言うお誘いが来てね、行ってみようかと」

「やっぱりアニス君も男の子やなー、そう言うスポーツに興味を持つことはええ事やで」

「あはは、ありがとう。それにしても、今日はやけに静かだね。他のみんなは？」

俺は周りを見る。
何時もは居るはずの守護騎士達も、アンクも居ないのだ。
めずらしい……。

「シグナムは道場で剣道のコーチに、ヴィータとザフィーラは散歩に。シャマルは何か医療の本を欲しいとかで本屋さんに、アンクさんは……よぉ分からへん……」

「そうなんだ……あぅ、迂闊だった……みんな居ないとは思ってなかったよ。これじゃあはやてちゃん一人になっちゃう……」

「あはは、ウチ何か気にせんと、遊びに行ったらえぇやん。ウチは家事とかで忙しいし。それに、もうすぐヴィータとザフィーラも帰って来るし、大丈夫や！それに」

ツツツーッとはやては車いすで俺の所まで近づいてきて。

「アニス君分を補給させてくれたらそれで……」

「えっと……はやてちゃん……その両手のいやらしい動きの意味は何かな……」

「もちろん……こうする為や！」

ガシッとはやては俺の胸を掴む。
ちょ！？

「いぃぃぃやぁぁぁ！お願い！胸は！胸だけは止めてぇぇぇぇ！」

「ほらほら、ここがえぇんか？ここがえぇんか？」

「あはははは！くすぐったいって！そして痛いって！」

ちょ！？どさくさに紛れてスパッツの中に手を入れようとするなし！
そしてそこ！舌打ちすんなコノヤロー！

「えぇもんえぇもん。そないに嫌がるんやったら、抱き着いたる！」

と言い、はやては俺から距離を置くと、車いすから飛び降りた。
って、飛び降りたぁ！？

「ちょっ！？危ないってはやてちゃん！？って……あれ？」

「ふっふ～ん。どや？アニス君、ウチ立ってんねんで！？」

そう、はやては車いすから飛び降りたと思ったら、普通に仁王立ちで立っていたのだ。
えっと……これなんて原作ブレイク？

「って、足プルプルしてるじゃん！？」

「ふふふ、まだ少し、歩くには時間が掛かるけど、これ位の距離なら！」

はやては震える足を少しずつ前に前に進ませる。
そして、そんなに遠くなかった俺とはやての距離は縮み、すぐにはやては俺の胸に飛び込んできた。
でも……。

バタン！

「むぎゅぅ……！」

さ、流石にはやての大きさだと、支えられないって……。
だって、俺よりも４０センチ位違うんだよ！？そんなのどう支えれと！？

「あぁ、しもうた……。アニス君、ウチより背ぇ小さいから、簡単に潰れんねんやった……」

「今……思い出さないで……俺に……抱き着く前に、思い出してほしかった……ったたた」

「ご、ごめんアニス君！ウチ、すぐ避けるから！」

そう言って、はやては俺からよけようとするが。
俺は経とうとするはやての腕を掴み、こっちに引き寄せる。

「えっ！？」

「えへへ～、しょうがないなはやてちゃんは。今回だけだよ？頑張ったご褒美に、アニス君分をプレゼントして進ぜよう」

そして、俺ははやての顔を、自分の胸辺りに付け、抱きしめる。
うむ、たまに攻守交代も良いね。

「あ、アニス君……」

「ん？何かなはやてちゃん？」

「は、恥ずかしい……」

「フゥハハハ、それが俺の今まではやてちゃんに受けていた辱めだ！存分に味わうがいい！」

「……すーはーすーはー……アニス君の匂いや」

「ちょっ、順応するの早！？」

ものの数秒で慣れやがった！？
恐ろし子、八神はやて……。

って、チュウチュウ吸うなぁぁぁぁぁ！！

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あ、おはようアニス君！って……随分やつれてるけど……どうしたの？」

「だ、大丈夫だ……問題ない……」

あれからはやてに返り討ちに合わされたのは言うまでもない……。
そして、危うく貞操を無くしかけた……危なかった……。

「今日はごめんね、無理に誘っちゃって」

「いやいや、気にしてないよ。それにしても、まさか士郎さんがサッカーチームをねぇ……」

まぁ、多趣味なのは良い事なのかもしれない。
でもここでふと疑問が。

俺、この前フェイトに会ったんだけどさ、確か三話ってあれだよな？
まだフェイト出て無かったよな？

だって、もしその時点でフェイトが居たのだったら、町で暴走したジュエルシードの魔力を感知して、介入してきた筈だ……。

う～む、これはイレギュラーが働いてると見ても良いですな。
それにしても……何故あの如何にもツンデレっぽそうな女の子は、こちらをジーっと見てるのでしょうか？

「なのはちゃん……どちら様？あの後ろに居る子。何か俺をジーッと見てるんだけど」

「あ、そうだった。それじゃあ紹介するよ。アリサちゃん、すずかちゃん。ちょっとこっち来てー！」

なのはは二人を呼び、こちらに来させる。
むぅ……何でしょうねこれは。

「えっと……どうも、アニスと申します……よろしくお願いします」

「アリサ・バニングスよ、よろしく」

「月村すずかです、よろしくね、アニスちゃん」

ろっとぉ……これはこれは、またまた女の子と間違えられていますね。
なのはさんや、この二人に性別の事は無していないのですね。
困ったものです。

「な、なのはちゃん……二人に性別の事は無してないの？」

「あ……にゃはは、ごめんね、忘れてたよ……」

「……ハァ、まあいいけど。二人とも、良く聞いて?俺は女の子じゃなくて、男だから」

「……あはは！何それ！アニスったら冗談が下手ね！」

「そうだよ、こんなに可愛いのに、男の子な訳ないよ」

うむ、二人は笑いがら言ってくるのだが……普通そうですよねー。
まぁ、別にどっちでも良いんだけどね。
たかが性別ですし。

「おっ、アニス君。久しぶりだね」

「あ、士郎さん。おはようございます」

「相変わらず、今日も可愛いね」

「ちょっと待ちなさい士郎さんや、貴方俺の性別分かってるじゃん

？わざと？ねぇわざとなの？」

何か士郎さんに会って早々、いきなり可愛いとか言われたんだけど。
何それ怖い。

「練習見て無くて良いんですか？」

「あはは、何、少しくらい目を離しても大丈夫さ。それよりも、アニス君もどうだい？試合に出てみるってのは？」

「あはは、冗談は止してください。試合何て……俺が混ざったら間違いなく俺死にますよ？身長差を考えてください。あの中に絶対六年生とか混ざってそうなんですけど？俺と６０？さもある相手からどうゴールを決めろと？そしてどうボールを取れと？」

「それもそうか」

「考えてなかったんかい……」

危なかった、危うく殺されるところだったよ。
いやぁ、それにしても……俺、サッカーのルール知らないんだけど……。

第二十九話　イチャイチャと気づいた事とサッカー観戦（後書き）

明日にはジュエルシード出すし！

そして、ユーノ出すし！

それからもっとアリサとすずかに出番回すし！

そしてついに、アンクがジュエルシードを！？

と伏線を立てておきながら、それを回収するかはわかりません

それにしても、今日書き終わるの早くね？

現時点でこの後書きを書いてるので大体八時半

速い……速すぎる

まぁ、良いんだけどね

さて、明日はどんな話を書こうかね

アニスにサッカーでもさせちまうか？

ジュエルシードの方は……もう決まっています

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました

第三十話　頑固とサッカーとイナイレ化（前書き）

おはっす

いやぁ、もう足が冷たくて死にそうや

部屋も寒いし

懐も寒いし

人生も寒いし……

……本編始まります

第三十話　頑固とサッカーとイナイレ化

アニスサイド

「ですから！俺は男なので俺と言う一人称は合っているんですって！」

「だから！何処にそんな可愛い男子が居るのよ！」

「ここに居ますって！」

どもー、アニスたんです。
どうにも、この人には俺の性別を分かってくれそうにも無いです。
アリサ・バニングス……うむ、生でくぎゅボイスを聞くとはのうのう。

何か一人称が気に食わないので、直しなさいと怒られたので、本気で性別を弁解してる俺なのですが、一向に信じてくれる要素がありませんねこれ。

ほら、なのはだって苦笑いししながらこっち見てるし……。
助けんかいボケ。

「あーうー……どうしたら信じてくれるのさー」

「ア、アリサちゃん、アニス君は本当い男の子なんだよ～、信じて～」

「なのはまで！こんな何処からどう見ても女子にしか見えない子が男子？ありえないわ！」

「ア、アリサちゃん、落ち着こうよ。もう少しで試合始まっちゃうし……」

「すずかは黙ってなさい！もとはと言えば、こいつが下らない冗談を言うから悪いのよ！」

「あうあう……ホントに僕は男の娘なのですよ？みぃー」

へ？ホントにお前は弁解する気があるのかって？

何か、めんどくさくなってきちゃった、こう言った相手に誤解を解こうとすると、多大な時間と労力を使うので、こっちが引かざるおえないのだ。

つか、もう口調を梨花で統一しちゃおうかな？

何かそっちの方が、この体にはしっくりくるし。
戦闘の時に黒梨花の口調になりゃそれで十分。

「んー、何かめんどくさくなってきちゃったし。もうどうでも良いか」

「そ、それで良いの？」

「うん、結局このナリに生まれた自分が悪いってわけよ」

まぁ、自分で選んで容姿なので、後悔は微塵もしてないしね。
むしろ毎日が新鮮なんよ。男なのに女の子扱いされんのとか。
前世は童顔でも、男だって言えば通ったしね。

「さ、試合始まったし、見ようか」

俺は三人をグラウンドの方に視線を寄せる。
見てやらんと可愛そうじゃん？主に、この三人に好意を寄せてる初な男子が。

それにしても、やっぱサッカーのルール分かんないや。
野球ならまだしも、サッカーはな～。
やった事ないし、テレビでもちょびっとしか見た事ないからわかん

ない。

イナズマイレブンは知ってるけどさ。あれはサッカーじゃないと自覚してるよ？
でも、今の俺なら素で疾風ダッシュ位なら出来るかもしれないね。

うむ、それにしても、こういうのが青春なんですなー。
いやぁ、若いって羨ましいね。俺なんか体こそ若いが、精神年齢がね、もう成人ですからね。
もう社会人ですよ、精神年齢だけは。

はぁ、若さって何なんですかね？
振り返らない事なんですかね？

いつもみぃみぃ鳴いてあうあう言ってさ、もう馬鹿かとアホかと。
……あ、別に田村さんをディスッてる訳じゃ無くて、俺ね？俺俺。

まぁ、何が言いたいかって言うと。

俺って実際そんな若くねぇなって言いたい、ただそれだけうん、それだけなんだ。
あぁ、若さってどうやって保つのだろうか……もういっその事17才教にでも入って、永遠の17歳と豪語しようかのう……。

つかサッカー関係ないねもうこれ。
何でこんな話になったんだっけ？俺が若くないって言ったからだっけか？

まぁ、そんな些細な事は水に流して、試合を見なきゃ……って、いつの間に一点取ってたんだよ……お前ら、俺見てないのに。
まぁ良いけどね……さて、眠くなってきたんだが、どうすれば良い？

「……所で……何でフェレットが？今更感否めないんだけどさ」

ビクッ！

あ、何かなのはとユーノがビクッとした……。
あ、もしかして念話でお話し中だったかにゃ？

「何々？これってなのはちゃんのペット？」

「あ、うん！ユーノ君って言うんだ！アニス君にはまだ話してなかったね」

「キュー！」

あ、ユーノが鳴いた。
何々、？？……こいつ、人を馬鹿にしているのか？
俺の何処が？だ！俺の攻撃はちゃんと命中するわ！

「ねぇねぇ、こいつちょっと触っても良い？」

「うん、良いよ」

そう言って、なのははユーノを俺の膝に乗っけてくる。
うむ、今のうちに、去勢は済ませておいた方が良いかな？

「おぅ、何だコノヤロー、お前意外にモフモフじゃないかコノヤロー」

まぁ確かに、可愛いっちゃ可愛いんだが……ねぇ、何か違和感があるのよね。
そりゃ怪しまれても仕方ないよね。

何処とは言えんのだけど、何処か違和感があるんだよね～。

「む～……まぁ良いか。モフモフ～」

そして俺は、考えるのを止めた……。

ピピー！！

その時、ホイッスルがけたたましく鳴り響く。

「大丈夫か！？」

あれ？士郎さん、何でそんなに慌ててんねん？
何や？誰か怪我でもしたんか？……ありゃー、こりゃ酷い、誰か怪我しとるさかい……。

ん？何かあの選手、無理っぽそうだね、可愛そうに……うわぁー、足痛そ……。
ドンマイだな、後でアイスノン買ってやるから我慢しやがれコノヤロー。

んで、何であんたは俺の方をチラチラ見てんだ士郎さん。
こっち見んな。そしてこっち来るな。

「アニス君、お願いがあるんだが……」

何か隣辺りから、士郎さんまでそんな冗談を……って聞こえたのは、スルーの方向で。

「内容によります」

「さっきの選手の代わりに、試合に出てほしいんだが……」

「嫌ですよ。俺サッカーのルールしりませんし、スポーツ何て得意じゃないので」

だって、産まれてこの方、サッカー何てやった事ないもん。蹴った事も無いもん。サッカー何てやりとうない！

「そこを何とか！こっちには代わりの選手が居ないんだ」

「む～……あまり過度な期待をされるのは困りますですよ？一点勝っているのであれば、俺はただ突っ立ってるだけになりますけど、それでも良いですか？」

「うん！それだけでも構わない！」

「それじゃあ引き受けましょう」

まぁ、突っ立ってるだけなら何とでもなるでしょう。

さて、では半ズボンを脱いでっと。

「あ、スパッツになる必要はないからね？」

なっ、俺の行動が読まれただと！？

マジかよ……まぁ、良いか、たまには半ズボンで。

俺はなのはにユーノを返し、そのまま中に入る。

三人が心配そうな目で見てたのは言うまでもない。

〜〜〜

「あの……よろしくお願いします……」

「……し、士郎さん……この子、どう見ても女の子じゃないですか！それに、まだ幼稚園児ですよ！？」

「いや、こう見えてもこの子は男の子何だ。それに、年齢は９歳…

…信じられないとは思うけど……ホントの話なんだ」

「あう……士郎さーん、やっぱり俺じゃ無理なのでは？」

「大丈夫大丈夫。さてみんな、ここでアニス君が入ってくれないと不戦勝になってしまう。それで良いのかい？今まで練習してきたことを水の泡にしたくは無いだろ？」

「そ、それは……確かにそうですけど……」

「なら、この子を入れようよ。この子はただ立っているだけだが、それでも足りないよりは良いと思う！さて、もう少しで終わりだ。今は一点差で勝っている。ここまで来たら勝ちたいだろ！」

うむ、士郎さんは煽るの美味いね。
でも、何か聞き捨てならない事を聞いたのは、まぁこの際無視してあげます。

「……俺は、勝ちたいです！」

「俺も！」

「僕も！」

「うん、それじゃあ決まりだ。それじゃ、アニス君」

「はい？」

「頑張ってくれ！」

いや、何をどう頑張れと。
さっきあんた突っ立てるだけで良いって言ってたじゃんか。
俺、走らんよ？動かんよ？ボール蹴らんよ？

「それじゃあ、再開しようか！」

あぁ、もうどうにでもなてや！！

ピィィィィー！

再びホイッスルがけたたましく響く。
再開の合図だ……さて、見てよう。

残り十分か……もう少しだが、その十分が長いんだよね～。
つか、突っ立ってるだけならなのはにも出来たのでは？
あ、女子にはやらせられない？ぶーぶー、男女差別はいけないと思う。

「そっち行ったぞー！戻れ戻れー！」

それにしても、目の前で見ると、ホント青春だよね。
あぁ、やっぱ若さか……若さが原因なのか？
そしてここに、血色の良い男どもの血がたくさん……。

いや、まぁ、吸血する気はさらさらないよ？
吸血鬼じゃあるまいし、でも……やっぱ羨ましいよね、青春とかね。
リトバスが良い例だよね。あれが最高の青春だよもう。

とか思ってたら、もう残り五分……。
あれ？何か軽くキンクリしてない？いつの間にかもう半分になってるんだけど？
ここにボスが居るのか！？何処だ？何処に居る！？

「ボール！そっち行ったぞ！！」

テンテンテン……。

「あれ？」

何か、今俺の足元にボールがあるんだけど……目の錯覚かな？
あれ？しかも何かこっちに人が来てるんだけどさ……何？俺これどうしたら良いの？

「ボール！こっちこっち！！」

あぁ、そっちに蹴りゃ良いのね。
ボールをあいつにパスするだけの簡単なお仕事です♪
って、何速効マークされてんだお前！！

あぁ！お前に気ぃ取られたせいで、もう目の前じゃねぇか！？

「貰った！」

……フッフッフ、そう言う三下の台詞は……。

シュッ！

「……あれ？……消えた？」

「死亡フラグですわよ？」

シューーン！！

何か身の危険を感じたので、ボールを蹴って逃げ出しました。
いや、初めてサッカーやってるよ俺。

ズザザー！！

「ほっと」

何かスライディングして来た奴が居たので、蹴ってやろうかと思ったけど、絶対それはいけない事だと思い、俺はボールを足で挟み、上にジャンプし避ける。

「こっの！！」

「何の何の」

今度は横からボールを奪いに来たので、俺は簡単にあしらう。

あはは、何か楽しー。

「そこだ！」

「何処でもねぇよ」

次は真正面から。
それを軽いフェイトで抜き去り、ゴールが見えてきた。

「……何か、イナイレの円堂みたいなやつがキーパーやってんだけど……」

「こいっ！！」

「……まぁ、無難にここはパスですな」

俺は仲間にパスしようとするが、何故かみんなにマークが付いている。
……おい、お前ら……素人に何まかせっきりにしてんだよ……。

「はぁ、仕方ない……適当にシュート外して時間稼ぐか……」

もうめんどくさくなって来たので、俺はシュートを適当に外すことにした。
さっき素人って言ってるし、外してもだれも攻めんだろう。

「アニス君！合体技で行くぞ！」

「って、お前誰やねん！」

何か知らんが、いつの間にか俺の横にし知らん奴が居た。
あと、合体技って何だよ！？

「意味が分からんわ！」

「行くよ！！」

「行かねぇよ！！」

俺はそいつを無視してシュートを打とうとする。
って、お前合わせてくんじゃねぇよ！！

「イナズマ１ごう！！」

結局同時に打つんかい！！
って、速っ！？何かボールがもの凄い速いんだが！？

「ゴッドハンド！！」

まてぇ！
おかしいだろ！？何でゴッドハンド使ってんだあいつ！
そしてこいつから一点取った奴！出て来い！お前もうプロ行っちまえよ！

「今度は合体技か！だけど、さっきみたいにはいかない！ハァァァ！」

「これも決める！」

お前だったんかい！
そりゃそうだわ！お前しか入れれんわな！こんな合体技とか放つ奴しか入れれんわ！

バシン！！

あ、ボールが弾かれた……っれ、こっちに戻ってくんなし……。

「くっ、さっきよりもゴッドハンドが強力になっている！アニス君！あれで行くぞ！」

「あれって何！？」

「クロスファイヤさ！行くよ！」

「えっ、ちょっ！？」

あぁもう！仕方ない！付き合ってやるか！

「ハァァァ！」

「もうどうにでもなれぇぇぇ！」

俺と名も知らない奴が交差し、同時に回り蹴りをボールに食らわし、そのままボールは何かもの凄い勢いでゴールに向かった。

「ゴッドハンド！てぇぇぁあぁぁぁぁ！！」

うむっ……あの子には魔力を微塵も感じない……やっぱあれ、超次元サッカーなんやろうか？

「うわぁぁぁぁぁ！！」

バスン！！

ピピー！！

「ありゃま、入っちった……」

「やったねアニス君！」

「……いや、だからお前は誰なんだよ……」

何でだろう……確かに点が入ったのは嬉しいんだけどね。

それでもね、こう思うんだ……。

俺の知ってるサッカーと違う。

第三十話　頑固とサッカーとイナイレ化（後書き）

イナズマイレブンは世界編から見ていない

エイリア編が大好きな俺としては、あの技の習得するための練習風景が好きだった

次はどんな技出るんだってワクワクしてた

エターナルブリザードが大好きな俺

後は豪炎寺と吹雪が大好き

二人ともカッコえぇよ

そして立向居の魔王・ザ・ハンドなる物があると聞いた時は

この小説の魔王様が降臨したら最強やうな～って素で思った

そして友達に言ったら

「それはね、言っちゃだめだよ?それもうキーパー技じゃない、ただの懺滅技だから……」

って言われました

まぁ、スターライトブレイカーを手のひらから出して止めちゃったら、ボールが跡形も無く消えるね

それほどの威力を誇るＳＬＢ

おぉ、怖い怖い

アフロディとヒロトが可愛すぎて死にたい

何やもう、かわえぇな状態ですねん

さて、イナイレ談義はここまでにして

つか、結局は無し進んでないじゃん！

明日にはジュエルシード出すし！

もっとアリサとすずかとユーノに出番回すし！

もっと頑張るし！

ここまで読んでくださりありがとうございました

第三十一話　鬱と心の傷とはやて病（前書き）

どもっす

さて、明日ついに世界が滅びるわけなんだが

どうだろう諸君、そうと知っておきながら、何故俺達は学校や会社に行かなければならないのだろうか？

もしこれがホントなら、人生は明日で終わりを告げ、悔いが残ったまま死んでしまう……

これは由々しき事態だ！

だから、俺は！

……まぁ、いつも通り寝て過ごしたいですはい

それでは本編始まります

第三十一話　鬱と心の傷とはやて病

翠屋

アニスサイド

いやぁ疲れた……。
あの後試合が終わってさ、士郎さんが詰め寄って来てよぉ。

「アニス君サッカー出来るじゃないか！どうだい？うちのチームに入る気はないかい？」

って言われたけど、丁重にお断りした。
あんな超次元サッカーに巻き込まれたくない、つかめんどくさい。

だって何かあいつに付き合ってたら、エクスカリバー位なら素で出来そうになりそうで怖いねんもん。
おぉ、怖い怖い。

「……あんた、やっぱり男子なの？」

「ん？やっと信じてくれやがりますか？」

そんで今試合が終わったので、試合に出た選手……っつっても、士郎さんのチームが翠屋に来て飯とか食ってるだけなんだけどな。

「だって、どう見てもあの動きは女子には無理だもんね」

すずかが少しおっとりした口調で言ってくる。
うむ、可愛いなお前。だがはやてには適わない！

「でもサッカー何てやった事ないから適当にやってただけなんだけどね」

「それも嘘っぽいのよね。何で初めてなのにあんな動きが出来るのか……ホントあんたは不思議よねぇ」

「でもウェヒヒヒ、これホント。おっとそのクッキーはもらったぁ！」

ヒョイッ、パクッ！

「あー！それなのはが取ろうとした奴―！」

「んー、うまうまなのですー。にぱー☆」

俺はなのはが取ろうとしたクッキーを横から奪い、そのまま口に入れ恍惚の笑みならぬ恍惚のにぱー☆を繰り出す。
うむ、流石桃子さんだ。うまいクッキーだのぅ。

「ん？どったの三人とも？顔を赤くしてさ。風邪でも引いた？」

「あ、アニス君……それ反則なの……」

なのはは顔を赤らめながらそう言い、後の二人が賛同する。
そしてそこのフェレットモドキ、てめぇも顔を赤くしてんじゃねぇよ。風邪か？
生憎と、淫獣に付ける薬はねぇんだ。

「むぅ、反則と言われてもねぇ……俺は別に何もしてないんだけど……」

反則と言われる筋合いわないよ！
全く、しつれいしちゃうねぇ。

その時、なのはが急に視線を外す。

俺はそれに気づき、なのはと同じ方向を見る……。

ぬー、ジュエルシードですかねー……？どうしようかなー。
町に被害が及ぶのは嫌だけど、今の俺じゃ魔法は愚か、バリアジャケットすら使えない状態なわけでして、それに、俺の、魔眼は果たしてジュエルシードに通用するのかどうか。

曲がりなりにもロストロギア、しかも暴走した状態なんだし……うむ、どうしたものか……。
つか、いつの間にかサッカー小僧たち解散してるやん。

「それじゃあ、私達も解散」

「うん、そうだね」

「そっかー、今日は二人とも午後から用事があるんだもんね」

「うん、お姉ちゃんとお買いもの」

「パパとお出かけ！」

「いいなー、月曜日にお話し聞かせてね？」

うむ、お姉ちゃんにパパか……。
……まぁ、お姉ちゃんは良いんだけどさ……お父さん、元気かな～。
お母さんも……まぁあの二人なら大丈夫だろう。
お父さんは卍解も使えるし、お母さんは補助魔法の天才だしね。

「おっ、皆ももう解散かい？」

「あ、お父さん」

いつの間にか士郎さんがこちらに来ていた。
うむ、背高けぇな……。

「今日はお誘いいただいてありがとうございました」

「試合、カッコ良かったです」

「ははは、すずかちゃんもアリサちゃんも、応援ありがとうな！応援してくれて。変えるなら送って行こうか？」

「あ、いえ。迎えに来てもらいますので」

「同じくですー！」

「そっか。なのははどうするんだ？」

「んー、アニス君、この後用事とかある？」

「俺？今日は特にないよ」

「それじゃあ一緒に遊ぶの！」

う～ん……まぁ、良いんだけどさ……。
何をして遊ぶんだろうか？俺男ですし、なのはの遊びとかたぶん合わないし。

「別に良いけど、何して遊ぶの？」

「んー、それは家に行ってから考えよう！ねぇお父さん、良いでしょ？」

「ははは！良いよ、二人で遊んだら良い。お父さんも一っ風呂浴びて、お仕事再開だ。三人で一緒に変えるか」

「うん！ありがとうお父さん！」

むぅ……えぇのう……お父さんか……。

（ほらっ！アニス！）

（ちょっ、お父さん！？もう俺もいい年なんですから、そのっ……
高い高いは止めていただけないでしょうか……）

（ははは！子供が遠慮とは、世も末だな。なぁ、アリス）

（それだけアニスが大きくなった証拠ですよ、貴方）

蘇るのは、あの楽しかった俺の毎日の日常。
隣にいつもお母さんが居て。仕事で忙しくて、たまにしか俺と遊んではくれないけど、それでも遊んでくれる時は俺よりも楽しんでいるお父さん。
そして、それを見ながら微笑んでいるアンク……。

平凡で、何処となくファンタジーで。
それでも、前世の記憶を払しょくされる毎日の日々。

その中で、毎日俺は笑い、少しむくれたり、泣いたり。でも、すぐにまた笑って、お母さんやお父さんもつられて笑ってくれた。

ありふれた家族だったけど。
何処にも負けない、幸せな家族だったと、俺は自負している。

訓練の時は厳しかったけど、成功したら自分の様に喜んでくれた二人。
例え俺が、前世の記憶を持ち合わせていた子供でも、前世の親を覚えていた、二人を受け入れられなかった俺が居たとしても。

それを知らなかったとしても、きっと何処かで気づいては居たのだろうが……それでも態度も、接し方も変えなかった二人。

失って初めて気づく、隣にぽっかりと空いた穴。
それを埋める様に、今度はアンクが俺の隣で……そして、もう片方の穴にはやてが居て。
それから、シグナム、ヴィータ、シャマル、ザフィーラが居て……。

それでも……やっぱり何かが足りなくて……。
あの日の事をいつも悔み、嘆き、後悔してきた。
その為に、もっと力を付けようとも誓った……。

俺が欲しかったものが、今目の前に映っている。
平凡が……日常が……ただ親と笑い合っているだけでも良かった……。
原作介入とか、崩壊とか……ホントはどうだって良かったのかもしれない。

それはただの建前で、ホントはその……前世でほしかったものが、手に入った事に酔いしれたかっただけなんだろう。

「よしっ、それじゃあ行こうか」

「うん！ばいばい、アリサちゃん、すずかちゃん！」

「またね、なのは！」

「ばいばい、なのはちゃん」

二人はなのはに別れを告げて、そのまま帰って行く。
……ふぅ、鬱になりそう……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～

「……はぁ……」

結果的に、夕方辺りまでなのはと雑談しただけであったのだ。
何か……もう……あぅ……。

「……うぅ……」

もう、泣きたくなってきた……。
まぁ、なのはが悪い訳じゃないし……なぁ……うむ、もうどうしたら良いんだろうね……。

つうか、何で魔力反応無かったんだろう？
今日はジュエルシードの暴走日じゃなかったっけ？

まぁ、無いに越したことはないんだけどさ、やっぱイレギュラーが働いてんのかな？
うむ……どうしたものか……まぁ、俺が闇の書を起動させちまった辺りでもう原作は崩壊してるしね。

「もう良いや、帰ろう……」

何か今日はどっと疲れた……。
肉体的にも精神的にも……あぁ、これが病み期なのかな？

あぁ、明日辺り何か死にたがりになりそうですねコレ……。
はぁ……。

まぁ、そんなこんなで家に着いたわけなんですけども……ここで一つ違和感が……。
何故か魔力の残り香が感じられるのは何故？
それにこの感じ、翠屋で感じたのと同じ魔力なんですけど……。

だれかがジュエルシード持って帰ってきやがったな……これ。
まぁ、大概検討は着いてるからいいや。

俺はそう思いながら玄関のドアを開けて、無言で家の中に入る。
もうただいまを言う気力も無いよ……。

そして俺は終始無言のまま、リビングのドアを開ける。

「ありゃ、いつの間に帰って来たんアニス君？全然気づかんかったで？」

「……うん……そうだね……アンク、何処かな？」

「ん？アンクさんなら今お風呂やで？」

「……そう……」

じゃあ、少し待ってよう……。

あぁ、頭が痛い……。

「アニス君、どないしたん？何か元気あらへんけど……」

「あ、ううん。大丈夫だよ？あはは」

もう無理してる感満載の笑い声だね。

乾いた笑い声しか出ないよ……あぁ、鬱だ、死のう。

その時、アンクが風呂から上がり、リビングに戻ってきた。

「おっ、帰ってたのか」

「……うん、まぁね……」

「何か元気ないが、どうした？」

「……アンク……ジュエルシード、取って来たんでしょ？」

「！？……な、何の事だ？俺は知らんが」

あくまで白を切るかこいつ……。

つか、魔力の残り香で一発なのに、分から無いのかねこいつは……。

「まぁ、それをどう使おうが、アンク次第だしね。とやかく言う事や、余計な詮索はしない。でも……俺は望んじゃいないからね？」

俺はアンクにはっきりと告げる。

ジュエルシードに、ロストロギアに頼るなんて事はしない。

例え、それしか手が無かったとしても、だ。

「それじゃ、俺ちょっと部屋で休むは……」

「……あぁ、分かった……」

アンクはそれだけ言って、ソファーに腰かける。

俺はその場を去り、自分の部屋に戻ろうとする……。

その時ちょうど、道場からシグナムが帰ってきた。
俺は玄関でシグナムと鉢合わせしてしまった。

「あ、主。ただいまです」

「……うん、お帰り、シグナムさん」

「どうしました？主、顔色が優れませんが……」

「あはは、大丈夫。何とも無いさ……ただ……ちょっと疲れちゃっただけだから……心配しないで……」

俺はそれだけ言って、自分の部屋に入ろうとするが、シグナムがそれを許さない。
シグナムは俺の腕を掴み、こちらに引き寄せられる。

「な、何すんのさ！？」

「主。どうやら貴方は、何か勘違いをされている」

「な、何をですか……？」

「私は貴方の騎士です。心配するなと言われて、はいそうですかと言われて引き下がるほど、私は落ちぶれていません。何があったのですか？もし出来るなら、私が話を聞きます」

「シグナムさん……」

俺はシグナムのを見上げる。

……話すことはしない……こんな話なんてしたって、スッキリ何てしないし……。

でも……出来る事なら……。

「……あの……さ、シグナムさん……」

「何でしょうか？」

「……あぅ……その……俺を……抱きしめてくれませんか……？」

「……主がそれで、笑顔に戻るのならいつでも」

そう言って、シグナムはそのまま俺を抱き上げ、抱きしめてくれる。

……暖かい、そして、優しい……。

女性特有の甘い香りに混じり、汗の匂いも感じられたが……気にはしなかった……。

ただ、ひたすらに湧いてくる感情を抑えるので、精一杯だった。
泣いてしまいたい……そんな衝動に駆られている……。

「……どうです主、落ち着きましたか？」

「あうあう……ありがとございますシグナムさん。お蔭で何とか元気が出ましたのです、にぱー☆」

まぁ、何と単純な俺だ事。
でも……こう言うのも悪くないのかもね。
だけど……流石に恥ずかしいとは思う……けどね。

「主、私の事はどうかシグナムとお呼びください。それに、敬語も不要です」

「……シグナム、その……さ……それは良いんだけどね？……何で手が少しヤラシイ動き方をしてるのか気になるんだけど？」

さっきからまさぐられてる感が否めないんだけどさ。
何？貴女も今巷で流行っている流行り病、はやて病にかかったんで

すか？
そして、無意識だったんだろね、何故かいきなりハッとなり、俺を急いで床に降ろしたよ。

そして光速の速さでリビングに走って行った。

……うむ、部屋で休もう。

第三十一話　鬱と心の傷とはやて病（後書き）

はい、はやて病がとうとうシグナムにも感染して来ました

シグナムはこれからどんどん変態の道へと足を踏み入れることに

なのはキャラの中では姉御肌の存在のシグナム

Ａｓ編を見た時思いました

こいつぁやべぇと

だって……ね？巨乳なうえ、姉御肌ってあんた……誰でも着いて行きたくなるやん！

カッコえぇやん！

リトバスの来々谷さんも姉御肌で着いて行きたくなるけどね

さて、前書きでも話した通り、明日世界が滅びるらしい

やだねー、せめて俺、成人したいよ、酒飲みたいよ

エロゲーどうどうと買いたいよ

でも、買っても積ゲーしちまいそうで怖い

まぁ、たぶんノストラダムスの大予言のごとく外れるに決まってるさ

さて、明日滅びなかったらまた会いましょうか

ここまで読んでくださりありがとうございました

第三十二話　例えばそんな一日（前書き）

何か短編集的な事になってしまった

いやぁ、人類滅亡しなかったね

俺としてはバンバンザイだよ

さて、今回は守護騎士四人にスポットを当てて書きました

それでは、本編始まります

第三十二話　例えばそんな一日

アニスサイド

「トゥットゥルー♪人類滅亡しなかったー！！」

どもっす、アニスたんだお。
いやぁ、今日人類滅亡しなかったね？あはは、アニスたんうーれーしーいー！
それにしてもさぁ……。

「何でヴィータは俺にくっ付いてるの？」

何故か朝起きてすぐにヴィータがべったり何だよね。
甘えてるって言った方が差支えないかもしれないね。

「べ、別に良いだろ……」

「いや、まぁ良いんだけどさ……」

どうやらただ今デレ期の様です。
まぁそれだけなら構わないんだけどね、はやてとアンクが睨んでお

ります。ヴィータの事を。
あぁ……誰か助けて……。

～例えばそんな一日～

～たれヴィータ～

「んで、ヴィータよ、何故俺にくっ付く」

「何と無く」

「何と無くでくっ付くんじゃありません！」

「い～じゃ～ん」

そう言って、ヴィータはダラ～ンと俺にもたれてくる。
熱い、そして暑い……あうあう、これはこれで堪えますな。

「ヴィータ！アニス君に迷惑掛かるからやめなさい！」

うむ、はやてが怒ってくれた。
流石にはやての言う事は聞くだろう。

「嫌だ……」

なん……だと……。
はやての言う事も聞かないとは……これは相当ですな。

「今日は一体どうしたのさ？どうして急に甘えて来るの？」

「……シグナムから聞いた……アニスが何か悩んでるって。それと私は甘えてない」

うむ、あ奴め……言いおったか。
まぁ、良いんだけどさ。悩んでる理由は離話してないしね。
でも、甘えてないって……これは甘えてるに入りますよ？

「まぁ、悩んでるっちゃ悩んでるけど、それとこれとは話が別なんじゃ？それに、どっからどうみても、これはヴィータが甘えてるって……」

「うー、うるさいなー」

グダグダ言いながら、ヴィータはさらにもたれてくる。
重くは無いんだけど、暑い。ただひたすらに暑い。

「暑いって、もたれて来ないでって。暑いって」

て言うか、そろそろ体重支えれなくて潰れそう。
重くは無いんだ、でも如何せん踏ん張りがきかない。
つか、この体いくら鍛えても非力にままなので、あんまし力は無いんだ。

だから。

「むぎゅっ……」

すぐに潰されちゃいます。
と言うか、何か押し倒されてる感じさえするのは俺の気のせいで合ってほしい。

「いい加減にしろ！」

ドゴォッ！

「むぎゅっ！」

「いったぁ！」

ア、アンク……ヴィータの頭を殴るのは良い。
だが、俺が下敷きになってる事を考えて殴ろうよ……。

「あ、すまんアニス」

「うぅ～。鼻が痛い……そしてヴィータ、早く避けて……」

結構キツイ、重さ的な意味では無く、羞恥的な意味で。
取り敢えず、ヴィータは自重を知ろう、そんな一日の朝。

～例えばそんな一日～

～何故か髪に執着のあるお姉ちゃん～

「何故か久しぶりに出れた気がするのは何故でしょう？」

「お姉ちゃん何言ってるの？」

何故かすっかり定着しえしまったシャマルの呼び名。

でも、お姉ちゃんよりもお姉さんの方が、シャマルには合っているかもしれない。

「それにしても、アニス君は髪の毛サラサラですね」

「みんなそう言うんだよね～。特に手入れもしてないし、これと言って特別なケアをしてるわけでもないし。ただシャンプーで洗い、リンスで洗い、流し、乾かし、終わり。ってだけだしね」

「羨ましいですね～。普通だったらそう簡単にはいかないですよ？」

「そうなの？まぁ、女の人は人一倍髪に気を使うからね。それにしても、髪切りたいな～」

俺の背だと、もう少しで髪が床に着いちゃうし、今の髪だと洗いにくいんだよね。
良くシャンプーが行き届かないし。

「それは絶対駄目です！もったいないじゃないですか！」

「えっ、お、お姉ちゃん？」

「その髪でしたら色々な髪型が出来ますよ！ツインテールやポニーテル！サイドツインやサイドポニー！ウェーブを掛けたり巻いてみたり！さまざまです！」

な、何だろう……いきなり語りだしたぞ？

「そもそもアニス君は遊び心がありません。そんなに髪の質が良いのなら、少し遊んで見るべきです！さぁ、私が手ほどきしてあげますから、自分で結えるようになりましょう！！」

「ちょっ、自重しようよ！？何処まで髪にこだわってるのさ！？」

そして何処からそのヘアスプレーや櫛を出してきたし！？
って、おい……何でそんな手つきしてるの！？
それ明らかに髪を結う手つきじゃないよ！？

髪を弄られるそんな一日の昼前

～例えばそんな一日～

「ハァッ！！」

ドゴッ！

「踏み込みが甘いです！」

チッ！

「おっと、てぇいやぁ！！」

シュッ！

ただ今シグナムと剣の鍛錬中。
真剣は使ってないよ？木刀でやってます。

俺はそっちの方がしっくりくるから良いんだけど、最初は竹刀だったからね。しないは使うえんわ。

「そこっ！」

ドゴッ！！

あちゃー、また受け止められちゃった……。
う～む、まだまだ駄目か～。

「やっぱ駄目だ、しばらく剣を振ってないとなまっちゃうな」

斬魄刀が使えないッえのも考え物だねこりゃ。
あ～、たまには氷輪丸とか使いたいな～。でも、出した出したで心臓痛くなるし、やんなるな～もう。

「でも、筋は中々あります。精進すれば、私なんて簡単に越えれますよ、主なら」

「まぁ、だと良いんだけどね」

「そ、それで主……れ、例の約束なのですが……」

「あ、そうだったね。良いよ？」

「あ、ありがとございます！……し、失礼します……」

シグナムは一度かしこまってから、俺を抱き上げ、抱きしめる。
そう、あれ以来……何か俺を抱きしめるのにハマったシグナム。

まぁ、良いんだけどさ、胸がすっごいデカイからあたるんだよね。
それに、結構苦しいし。でも、我慢だね。シグナムには稽古に付き合ってもらってるし。

（あぁ、主……何て小さいんだ……そして、何て柔らかいんだ……。
あぁ、主……私は主の為なら何だってします！もう一生着いて行きます！）

何か……すっごい事考えてないこの人？
俺の気のせいかな？……あ、気のせいですね、そうですね。

（主の柔肌、主の髪の毛、主の呼吸、主の息遣い、主の心音……あぁ、どれをとっても可愛い……。こんな愛くるしい人が主とは……
我が一生に悔いなし！）

……やっぱこの人変な事考えてるよね？
危なくね？精神的にヤバい気がするんだけど？
さっきからハァハァ聞こえるんだけど……怖いってこの人、ちょっ、
お巡りさん！こっちです！こっちぃぃぃ！！

「あぁ、主……主ぃ～……」

さっきからうわ言みたいに主主連呼してるんですけど……。
そして、そろそろ離してくれないかな？結構恥ずかしくなってきた。

あぁ、暑い、苦しい……シグナム、胸でか過ぎ。
でも大きくならないのは凄いね、やっぱ体は子供か。

「シ、シグナム。そろそろ満足した？」

「……いえ……後もう少し……」

どんだけよ……。
いや、良いって言ったのは俺だけど、まさかこんなになるとは思わ
なかったよ。
まぁ、最初は冗談半分で言ったんだけど、思いの他本気にしちゃっ
て、こうなっちゃったんだ。

「シ、シグナム……くっ……苦しい……」

「す、すいません主！」

シグナムは慌てて俺を降ろす。
いやぁ、危うく殺されるところだったよ。窒息死とか洒落になってないからね。
もしくは圧殺。

「もぅ、あんまり優しくしてくれないんなら、もう禁止するよ？」

「うっ、そ、それだけはどうか……」

「ふふふ～ん、どうしようかな～」

やっぱり主には勝てないシグナムを虐める俺、そんな一日の夕方。

～例えばそんな一日～

～モフモフザフィーラ～

「ザフィーラモフモフ～」

ただいま狼素体のザフィーラをモフモフしております。
いやね、モフりたいんだもの仕方ないじゃないか。くそ、猫一筋が揺らぐではないか。
って、もう負けてるか。

「ザフィーラモフモフ～」

「主、先程お風呂に入られたのですから、お戯れはそこまでにしておいた方が良いです。せっかく体を洗いになったのに、毛が着いてしまいます」

「そんな事気にしてたらモフれないじゃ～ん。モフモフ～」

「……はぁ」

むぅ、ため息とは酷いね。
俺は純粋にこのモフモフ感が好きなだけなのに……それを止めるなんて俺には出来ない！！
それいしても、青色の毛の狼なんて実在しなくね？

所々色も違うし……あ、それ言っちゃお終いだって？
ですよねー。

「ザフィーラはさ、俺の事どう思ってる？」

「……唐突にどうしました？」

「いや、なんとなく」

「……そうですね……子供らしくない子供……とは感じていますが、言動は子供。でも、行動が大人びていると言いますか……たまに子供じみていると言いますか……」

「つまりは子供と」

「……そうまりますね……」

「……うむ、まぁそうだよね～。そう言う教育を受けてましたからね、大人と対等に話せる様なしゃべり方、行動……それを払しょくするように口調も変えてるし、行動も少し変えてるんだけどね」

癖が抜けきれないのだ。

だから、それを少しでも消そうとしたいが為に、今の口調に定着してしまった。

まぁ、梨花口調は好んで使ってるから良いんだけどね。

「……主は、一体何者なんですか？」

「むぅ、それ聞いちゃいます？」

「すみません……無礼が過ぎました」

「いや、そう言う事じゃないんだけどね……俺が何者……ねぇ……そんなの、俺が知りたいくらいだよ」

俺自身、自分の事は何もわかっていないのだ。

分かっているのは、前世の事。
■■■が、■■■であった事は知っている。だが、■■■がアニスに成り代わった。
俺は、自分の家族や家柄の事は何も知らない。

今の俺は語れないが、前世の俺は語れる。
今の家族の事は勝たれないが、前世の家族の事は語れる。

「……」

「ん？どうしちゃったのかなザフィーラ、急に黙っちゃって」

「……主でも、自分の事は分からないのですか？」

「うん、全然。全くと言っていいほどね。俺が俺たる何かを、まだ見つけてないし……それに、俺は家族の事を全然知らないからね」

「家族……ですか……それは八神やアンクの事ですか？それとも……」

「……後者で合ってるよ。ザフィーラが言わんとしてる事……それはお父さんやお母さんでしょ？」

ザフィーラは喋れない。
……図星か。

「勘違いしないでね？俺のお父さんとお母さんは生きてるから」

「そうなのですか？……では、どうして主は……」

「ん……それは流石に、ね？」

「……失礼しました」

「ううん、気にしないで……さて！りがとうザフィーラ！俺もう寝るよ」

「分かりました。お休みなさいませ、我が主」

男と男の語らい、そんな一日の終わり。

おやすみなさい、みんな。

第三十二話　例えばそんな一日（後書き）

いやぁ、シグナムが一番酷いｗｗｗｗ

そしてたれヴィータ可愛いよ

さて、今回はあんまり出番のないシャマルとザフィーラを出しましたが、如何だったでしょうか？

俺は少し試行錯誤しながら書きましたけどねｗｗｗｗ

さて、明日は妹の学際か……

まぁ、あいつの事は嫌いなんでどうでも良いです

明日は何を書こうかな～

ネタ募集中！

修学旅行中に予約投稿する番外編のリクを募集してます

もう主要キャラは出しましたので、出来ればリクエストしてくれたら助かります

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました

第三十三話　進行と結果と己の正義（前書き）

どもっす

いやぁ、今日も今日とて昼寝してましや

どうも休日は昼寝してしまいます

夜眠れなくなるのに……

それにしても、お気に入りが２５０件になりました

嬉しいｗｗｗｗ

ホントにこんな駄作を読んでくださりありがとうございます

それでは、本編始まります

第三十三話　進行と結果と己の正義

シグナムサイド

「なぁ、何でアンクってデバイス使わないんだ？」

「あ？何だ唐突に。別にどうでも良いだろ」

「良いじゃん、それ位教えてくれても。アニスも言ってたぞ？アンクのデバイス使った所見た事ないって」

最近、ヴィータと奴が妙に仲が良い……。
一体何があったんだ？あのヴィータが主の他にも懐く奴がいるなんて……。
だが、そこは些末な問題なんだ。

一番疑問に思っている事は、その切っ掛け。
あの二人に何があったのかは知らないが……。どうもあの男は気に食わない。
それは私だけでなく、他の二人もそう思っていることだろう。
だが、ヴィータだけは違う……。

「あぁもううるさいな！！理由なんてねぇよ！」

「じゃあ見せてくれても良いじゃんか。アンクがどんな魔法使うのか見た事ないし」

「また今度な。さって、少し散歩してくるか……。それよりも、まだアニスは寝てるのか？」

「アニス君、さっき起こしたんやけども全然起きないんです」

「……最近おかしいな、何時もだったら8時には起きるのに。今はもう10時か……」

そうなのだ……。

ここ最近、主は起きるのが遅い。夜は早くから睡眠に入られるのに、起きてくるのは私達よりもすごく遅い。

「きっと夜更かしでもしとったんじゃないですか？」

「それは無いと思います。アニス君、いつも早く寝ていますし。それに、一度寝ちゃったら揺すっても起きないくらい寝つきが良いんで」

「それか、小さい体やし、人一倍体力使うんとちゃいますか？良くチョロチョロしてますし」

「あ、それ分かる。アニスっていっつも動いてるよな」

ヴィータには共感だ。
主はいつも活発に動いていて、またその小さい体でたくさん動いているので、凄く癒される。

「まぁ、あいつは活発な奴だからな。まぁ、今の所はそういう事にしておこう。もしまだ続く様だったら、今度は病院かな」

「せやったら石田先生に見てもらった方が良いですね。何かと融通聞きますし」

「そうだな……」

それにしても、本当に主は大丈夫なのだろうか？
少し心配になって来た……。
私は誰にも気づかれないようにリビングから出て、主の部屋に向かう。

アニスサイド

「うむっ……これは流石に困った……」

どうも、アニスたんだお。
あ？何が困っただって？いやぁ、聞いてくれよー、それがさぁ。

「吐血しました」

うん、冗談じゃなく。
どうしよう、皆に急展開過ぎてワロタとか言われないかな？
まぁ、それは良いとして。

「まさか今さっき起きてすぐに軽く咳き込んだ位で吐血とは……う～む、口の中でも切ったかな？」

それだったら良いんだ。
寝てる時にほっぺの内側を咬んで血が出て、咳した時に出ちゃった、なら良いんだ。
でも、何処にもその形跡がない。
さっきから下でモゴモゴして探したけど、無かったんだ。

「ふ～む、これは……もしかして本気でヤバい？」

体はいつも通り何だけどね、どうしたものか……。
その時、唐突に部屋のドアが開かれる。
おっとヤバい、様子を見に来たのか。

俺は瞬時に手を拭き、窓の外を見る。
まさに、今起きました的な空気を醸し出しながら。

「あ、主。起きられましたか」

「みぃー、シグナムおはようなのです。少しお寝坊さんになっちゃったです」

「誰も気にしては居ませんので大丈夫です。朝食は取られますか？」

朝食か……つか、今何時だ？
……ゲッ、もう１０時過ぎか……うむ、前までは８時に起きてたのに……どうした俺。
つか、あんましお腹減ってないや。最近さらに小食に拍車が掛かってるな。

「う～ん、要らないや。そんなにお腹減ってないし」

「分かりました」

「んじゃ、着替えるからシグナムは戻って良いよ。着替えたらリビングに行くから」

「分かりました。失礼します」

そう言って、シグナムは部屋から出ていく。
うむ、固いねまだまだ。もう少し時間が掛かるかな？あ、でも本編でもそんな感じか……。

「さて……どうしたものか」

あんまりこう考えたくはないけど、呪いが進行してきた証拠かな？心臓が呪われてるんだ、肺もその内やられるに決まってる。その予兆かな？
これまた随分と厄介な物を。戦闘中に吐血して血が詰まったら呼吸できなくなるぞ。

「ケホッケホッ……うむ、どうやら咳も出る様だ」

風邪は引いてないし、喘息持ちって訳でもないしな～。

はぁ、鬱だわ……そういやしばらく死にたがり出とらんな。
後が怖いわ……いつ出るか分かったもんじゃないし。

「ケホッ……着替えよ」

少し怖くなりながらも、俺は衣類を引っ張り出す。
さてと、今日は何の服を着ましょうかね。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「トゥットゥルー♪おはようなのです」

「あ、アニス君おはようさん。やっと起きたんやな」

「えへへ、少し寝すぎちゃった」

「何時もだろうが」

「うっ、痛い所を着突くねアンク……ケホッケホッ」

「ん？風邪でも引いたのか？」

「にはは、実はそうなんだ。ケホッケホッ」

「普段からあんな格好で寝るからだろ。自業自得だ」

それを言われると痛い。
まぁ、風邪ではないんだけどね。

「さて、今日は何をしようかね」

「何言うてんねん。風邪引いてるんやったら安静にしてなアカンで？」

「そうですよ。そう言う訳なので、今日は外出禁止ですからね？」

「なん……だと……」

マジか……。
くそ、暇ジャマイカ。何をしてろと言うんだ！
別荘にでも引き籠ろうかしら。

「んじゃ、寝るわ」

「そうしとき。それよりも、朝食は要らへんの？」

「うん、そんなにお腹減ってないから大丈夫」

最近ホントに飯を食わなくなったのよ。
いやぁ、そのせいで、また体重落ちたんだよね。確か今……15キロだったかな？

まぁ、もう九歳の平均体重じゃなかとね。
つか、もうそろアンクには何か言われそうだね。

「さて、んじゃまた寝間着に着替えよう」

仕方ないので、今日は大人しく寝ていることにする。
はぁ……でも、どうせなら外に出て遊びたいな～。

このまま外にトンズラでも……。

「分かってると思うが、抜け出そうなんて考えるなよ？」

「い、嫌だな～アンクったら。お、俺が抜け出すわけないだろ？」

「どうだか……今日が一日安静だからな。俺はバイトに行ってくる」

そう言って、アンクはリビングから出ていき、そのままバイトに出かけてしまう。

ちぇっ、良いよ。だったらヴィータとイチャコラして遊んでやる。

「よし、ヴィータ一緒に寝ようか」

「はぁ！？な、何言ってんだよアニス！？」

「いや、ヴィータを抱き枕にして寝ようかと……」

「いや、私は別に良いけど……」

「駄目に決まっとるやろ！風邪が移るから駄目や！」

くそ、なら本当に寝るしかなさそうだ……無念。

しゃあないから、デバイスとお話ししてよう……もしくはザゼルさ

んでも呼ぼうかな、イシュタルでも良いけど……。

俺はトボトボと歩きながら部屋に戻る。

あぁ、暇だ……。

〜〜

「それでさクイーン、こんなバリアジャケットなんてどうかな？」

《……マスターは少し、自重をした方が良いかと思われます……》

「うぇっ、クイーンにまで言われた。何だ？反抗期かこんにゃろーう」

ただ今寝っころがりながらクイーンと会話してます。

そういやこいつと全然会話してなかったわ。

そして何故か声が……たみぃボイスなのは仕様なのか？

「クイーンは今日から民安って名前で通ってくれる？」

《何を言っているのかさっぱりわかりません》

「いや、何と無く……」

《はぁ……久々にマスターから話しかけてくれたと思ったのに……がっかりです……》

「あはは、ごめんねクイーン。でも、グリード何て一回も使われてないんだよ?そっちの方が可愛そうとは思わんかね」

《……グリード乙》

ですよねー。

まぁ、いつか使ってやるだろう。だってアンクだし……でもグリード化したらデバイス無しでも強いからなー。

《それよりマスター、朝血を吐かれていましたが。大丈夫ですか?》

「ありゃ、見てたの?その事は皆に内緒にしておいて?皆うるさいからね」

《了解しました》

うむ、本当に良くできたデバイスだ。
でも少し堅苦しい……ボイスがボイスだしな～。
もう少しはっちゃけたキャラでも良いのに。

《それよりも、マスター》

「ん？何、クイーン」

《マスターのリンカーコアなのですが……》

「あ、解析終わったんだ。それで？どうだった？」

さっき新バリアジャケットを考案する前にクイーンに頼んでリンカーコアの解析をお願いした。
さて、結果はどうなんだろうか。

《……大変言いにくいのですが……このままだとマスターは、後半年ももたないと言う結果が出ました……》

……半年ももたない……か……。
随分と進行が速いな……まぁ、そんな事も無いのかな？
本編の時はクリスマス辺りで進行がかなり進んでたし……大丈夫だ

ろう。

《マスターのリンカーコアは、徐々に汚染されて行っています。それに伴い、臓器の働きにも影響が出ています。影響が酷い臓器は、心臓と両肺……そして、今は胃にの所まで伸びています》

あ～、やっぱ肺やられちゃってたか……。

まぁ、当然の結果だよね。呪いが心臓に直接来てるってだけでも酷いのに。

《このままだと、マスターは寝たきりになると思います。脊椎にまで汚染が広がり、そして徐々に徐々に足を蝕み……最後は体の至る所の臓器や血管の機能が止まり……死に至ると……》

「ひゃ～。怖い怖い……さて、どうしたものかな」

二択、何だよね。

このまま死ぬか、苦渋の選択で収集をするか……。

でも、後者は絶対にしたくないし、させたくない……。でも、死んだら死んだで、もしかしたら今度はマスターの所有権ははやてに移り、物語にかなりのラグが出来てしまう……。

勿論……それは避けたいし、せっかく歩けるようになって来たはやてを、また悲しませたくない……。

……あぁ……そうか……俺ってホント、頭が悪いな……。

「……シグナム達に収集を頼むんじゃなくて……俺自身で収集すれば良いんじゃないか……」

そうだ、結局。家族を巻き込まないで、俺一人だけ犯罪者になればそれで良いんだ。
でも……それだと少しリスクが高いな。
次元世界を移動するのは、まぁ仕方ないけど魔具を使わせてもらおう事にして……。

俺の魔眼だったら、生物にリンカーコアを取り出すことくらいは出来るだろう。
生物を分解する事は出来ないが、生物の中にあるリンカーコアなら、俺が吸収して放出し、変換してリンカーコアを生成すれば行ける。

だが……ばれた特はどうするか……シグナム達にも、そして、はやてやアンクにも迷惑が掛かるし……最悪、守護騎士も捕まってしまう……。

「そうだ……これを闇の書による物と思わさなければ良いんだ。次元世界から一度こっに戻ってきて、それからリンカーコアにして収集すればいいんだ……それも、別荘の中で」

そうすれば、先ず管理局にはばれないし。
もし６６６ページ収集し終えても、俺がリィンフォースを説得して、最後に化け物を倒せば……それでオーケーだ……。

「……はぁ、俺も大概だな……結局、収集をするんだ……」

何が、家族を犯罪者にまでしても生きながらえたくないだ……。
結局、俺は生にしがみ付いてる。
だけど……俺一人が罪を被るのなら……それはそれで、気が楽だ。

俺一人だけが……犯罪者になれば良いのだから……。

第三十三話　進行と結果と己の正義（後書き）

はい、アニスはダークサイドに落ちました

自分が一人が悪者になればそれで良い……

ははは、厨二乙

それにしても、クイーンのボイス……全くの俺の趣味ですｗｗｗｗ

因みにアンクのデバイスのグリードの声は、中村悠一さんです

まんまハガレンのグリードｗｗｗまぁ、性格はグリリンの時のグリードです

つか、グリードの最後マジ感動した

最初で最後の嘘とか……もう、泣くしか無いやろ！！

さて、それでは、私が修学旅行に行ってる時に書く番外編を少しお教えしましょう

先ず一つは

アニスたん、翠屋でコスプレショー！

次に

もしアニスがＦＡＴＥの世界で、サーヴァントとして呼ばれたら

次に

アニスとフェイト&アルフ、料理をいたしましょう

最後に

もしアニスがとある魔術の禁書目録に転生したら？同時上映、超電磁砲もあるよ

……てな感じです

まぁ、もしかしたら全部グダるいかもしれないですが、気にしないでください

ここまで読んでくださりありがとうございました

第三十四話　モンハン？いえいえ、違う違う（前書き）

どもっす

今回は超短いです

ちょっと今日はバタついてて長々と書けませんでした

明日はちゃんと書きます！

本編始まります

第三十四話　モンハン？いえいえ、違う違う

アニスサイド

どうも、体調があまりよろしくないアニスです……。
と言っても、体がだるいと言う訳で、別段横にならなきゃならない様な感じではないので悪しからず。

そしてただいま、何処に居るのかと言うと。

「静かだぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

文明が無く、生物しか生きていない次元世界に来ています。

《マスター、うるさいです》

そっちか……ネタの方にツッコンで欲しかったのぜ。
まぁ、それは置いといて……。

「ホントにこの世界に生物居るの？」

《私が信じられないのですか？マスターは》

「いや、そんな事思ってないよ」

《安心してください、ここにちゃんと生物が存在します》

「……ホントだね？」

《やっぱり信じてないじゃないですか……》

「あぁ嘘嘘！ごめんねクイーン！今度猫見せて上げるから！」

《……ま、まぁ、今回は許してあげましょう》

くふふふ、やっぱり猫好きにはこの言葉が一番。
まぁ、猫可愛いもんね。俺も好きだよ。

「さて……先ずは手ごろな生物から狩りたいな……この近くに何匹くらいいる？」

《……約６匹……ですね……》

6匹か……。
まぁ、それ位だったら何とかなりそうかも。
もし駄目そうだったら奥の手で呪文使おう。一回そこらじゃ死なねぇしな。

「んじゃま、寄ってみますか」

それにしても……あっちの方は大丈夫かな？
体調は良くなったって言って、遊びに行く的な嘘を付き、そのままこの世界に来たけど。

「アンクにばれるのだけは避けたいな～」

あいつの鉄拳と怒号は、今でもなれない。
子が親の拳骨には勝てない原理かもね……あぁ、いやだいやだ。

後はやての一時間正座の刑……あれも嫌だね。
今度は何か二時間に増やすだとか増やさないだとか……増やされたくないね。

「それにしても、ここはジメジメしてて嫌だねぇ……全く。こんな所に好き好んで住んでる生物何、きっと背中にこのことか生えてるに決まってるよ」

某ポケモンに出てくるパラセクトみたいな？
あはは、そんなん出たら気持ち悪いけどね。

「おっ、あの影は……」

《……どうやら生物の様ですね》

「よっしゃ、早速狩りに行きますか！！」

俺はそのまま走りだし、その影が見えたところまで走る。
さて、一体どんな生物が居るのやら……。
その岩陰に隠れた奴、今すぐ出てきなさい！

「って、デカぁ！？岩に隠れてんじゃなくて、岩そのものなんかい！！」

おっと、ついうっかり突っ込んじまったじぇ。
それにしても、デケェ～……何？ドダイトス？

「ブォォォォォ！！」

《どうやらこちらに気づいたようですね》

「言われんでも分かる！」

俺は急いで緊急回避を行い、何か凄いデカイ生き物の尻尾を避ける。
……あれ？何かこれ、急にモンハンっぽくなってね？

いや、どうでも良いけどさ。

「ブォォォォォォ！！」

「あぁもううっさい！黙れ！」

ドゴォッ！

また尻尾で攻撃をしてくるデカ物。
さて、どうしてやろうかな……。

《マスター、早くしないとやられますよ？ただでさえ呪いを受けて体が弱っているんですから。早く終わらせちゃってください》

ちぇっ、怒られちゃった。
しょうがない、あっけない幕引きだったけど、まぁ良いか。

「吸収！！」

俺は生物を見て魔眼を発動する。
発動するのは吸収の魔眼。……うむ、どんどんあの生き物から魔力を吸収できてるな。
おっと、あんまり吸収し過ぎると死んじゃうからこの辺でっと。

「ブォォ……」

ドタン！

ありゃりゃ、遅かったか。
でも呼吸してるから、気絶しただけだろう……たぶん。

「さて、確かまだ居たはずだな」

手当たり次第魔力を吸収して、地球の帰るとしますか。

～～～

「ただいまぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「お帰りぃぃぃぃぃぃぃ！！！」

なん……だと……俺のハイテンション挨拶に着いてくる奴がいるとは……。

つか、まぁはやてなら納得できる自分が居て怖い。

「いやぁ遊んだ遊んだ。つう訳で少し休憩」

「余ほど激しく遊んできたと見るで、服とか砂だらけやんか。払ってきなさい」

「あいあーい」

ホントにはやては主婦だね。

いや、お母さんかも……この頃から母性本能は目覚めていたしな。

主にヴィータ。

まぁそれよりも……闇の書は今俺の部屋の中にあるわけなのだが……。

問題は別荘だね。使う所を探さないと、誰かが部屋に入って来た時にばれちゃうな。

もしくは予め、一時間位寝るから部屋に入ってこないでって言っておこうかな？

うん、そっちの方が良いかもしれないね。

うん、そうだ、そうしよう。

俺は砂を払いながらそう考えていた。

よし、払い終わった。さて、行ってこよ～。

第三十四話　モンハン？いえいえ、違う違う（後書き）

短すぎワロタ

さて、どうするか……

明日はたぶん闇の書に魔力を吸収させてから、ザゼルとイシュタルの修羅場二回戦目に突入させちゃうかな

それにしても……最近喘息の発作が酷くて、おちおち小説も書けやなしない

今も出ているのでかなりきついです

まぁ、バタついてたので結構体力も無くなってるのも原因の一つなんですけどね

さｒて、明日はちゃんと書きますので

ここまで読んでくださりありがとうございました

ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ！お菓子をくれないと悪戯しちゃうぞ☆……それ

タイトル長ｗｗｗｗ

はい、今回はハロウィンと言う事なので、それを題材にして番外編を書いちゃいます

そして、それプラス２００００ＰＶ達成おめでとう＆あざまーすの奴も兼ねてますので悪しからず

それではここで、アニスたんに恒例の挨拶を、どぞ！

アニス「ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ！それとも……お兄ちゃん達は悪戯されたいかな？」

よしオッケー！

それでは番外編始まります

ｔｒｉｃｋ　＆　ｔｒｅａｔ！……あ、違うか……

ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ！お菓子をくれないと悪戯しちゃうぞ☆……それ

アニスサイド

ハロウィン、あるいはハロウィーン（Ｈａｌｌｏｗｅｅｎ，Ｈａｌｌｏｗｅ'ｅｎ）は、ヨーロッパを起源とする民族行事で、毎年１０月３１日の晩に行われる。
ケルト人の行う収穫感謝祭が、他民族の間にも行事として浸透していったものとされている。由来と歴史的経緯からアングロ・サクソン系諸国で盛大に行われる。

ケルト人は、自然崇拝からケルト系キリスト教を経てカトリックへと改宗していった。
カトリックでは１１月１日を諸聖人の日（万聖節）としているが、この行事はその前晩にあたることから、諸聖人の日の旧称”Ａｌｌ　Ｈａｌｌｏｗｓ”のｅｖｅ（前夜祭）、Ｈａｌｌｏｗｓｅｖｅが訛って、Ｈａｌｌｏｗｅｅｎと後に呼ばれるようになった。

ｗｉｋｉ参照。

まぁとどのつまり、日本には何ら関係も接点も無い日なんだけど。
それはその家庭の話で、店。
特に喫茶店やコンビニ、デパートなどはハロウィンとかこつけて、

カボチャなどで作ったスイーツを販売したり。

カボチャをくり抜いて顔を作ってそこら中に置いたりと、結構日本では見る光景になっている。

勿論、それは店内での話で、家庭とかではあまりハロウィンに何かをする……と言った事はあまり聞かない。

精々カボチャをくり抜いて玄関先に飾ったり、店で買ったカボチャのスイーツを食べる程度の事位しかやらないだろう。

だから仮装をして近隣住民の家を駆け回り、ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ　何て言っても、子供位しか相手にされないだろうし。

もしかしたら追い返されるかもしれない。

俺はそう思っているし、間違ってはいない……だけど……。

「ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ！なのです☆」

「よしよし、はい、飴玉を上げよう」

「ありがとう！おじちゃん！」

何故俺は、狐耳と尻尾を付け、更には付け髭を付けて、ここ翠屋でこんな事をしているのだろうか……。

「飴玉もらったった！」

「どうでも良いけど、恥ずかしくないか？」

「かなり」

うっさいアンク。そしてそこ、俺にもちゃんと恥じらいと言う物がだな。
それよりも、何故俺が翠屋でこんな事してるかって？

俺だって知りたいわ！
だって家でのんびりしてたらはやてから。

「今日は思い切ってみんなで仮装してみよか？そしてアニス君、翠屋でアンクさんがカボチャケーキを予約済みやさかい、ちょっと取りに行ってくれへんか？」

何て頼まれたから、翠屋に行ったさ、ケーキを受け取りにね。
んで行ったら行ったで桃子さんに捕まり、仮装させられてこんな事をしています。

「ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ！なのです☆」

「おぉ、眼福眼福……どんなお菓子が欲しいですかな？」

「甘いのが良いです」

「それではおじさんのここを」

「あーｗｗｗ反応に困るｗｗｗ止めなさいｗｗｗ」

つかナツブラネタ……それは止めなさいっておじさん。
しかも若干緑川ボイス……勿体ねぇ……。

「やっぱり居ましたか……」

「あ、仁紫園さん。お久しぶりです」

日傘を差して颯爽と登場した仁紫園さん。
つか、あの話以来じゃん。ムッツリーニと同時に初登場した辺りから。

「大人の事情と言う物がありますので……それと間違わないでください。二度目です。同人誌をアニス君に見せた時も居ました」

あぁ、そういや居ましたね。
まぁ、そんな黒歴史はもう葬り去りたいので蒸し返さないでほしいのだが。

「それで、ご注文は？」

「そうでした。それではこの、ハロウィン限定カボチャケーキと紅茶をお願いします」

「かしこまりました」

俺は注文を紙に書き、桃子さんの所に持って行く。

「桃子さーん、ちゅーもーん」

「ありがとう！そこに置いてちょうだい！」

「はーい」

俺はカウンターの注文用紙を置き、お客さんの所に戻る。
それよりも、あの変態共は来ないの。珍しい。

まぁハロウィンはあんまり日本に馴染みないし、案外翠屋でハロウィンフェア？やってる事知らなかったりしてな。

「それにしても、仁紫園さんもやっぱ女の子なんだね」

「……それはどういう事でしょうか？」

「いや、仁紫園さんってパッと見物静かでクールに見えるから、こう言った物とか食べてる所が想像できないんだよね」

「それは偏見です。私だって甘いものは大好きです」

「うん、そのようだね」

「……ニヤニヤしないでください」

「えー、ニヤニヤ何てしてないよー。ウェヒヒ」

「その笑い方も止めて欲しいです」

「気にしない気にしない」

良かった良かった、仁紫園さんがＢＬ以外にも好きな物があって。
甘いものは女の子の代名詞だもんね。

「んじゃ、俺は戻るね」

「頑張ってください。私はそれをネタに新たな同人誌を……」

「だからやめなさいって」

でもやっぱ変人なのですねこの子。
さて、サッサと仕事ケーキ受け取って帰るか。

〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

《ふはははは！ヘイ、ｂｏｙｓ＆ｇｉｒｌｓ．ｈａｐｐｙ　Ｈａｌｌｏｗｅ' ｅｎ．》

「止めなさいクイーン」

それは流石に駄目だよ。
分かる人には分かる言い回しだよそれ。

《某動画投稿サイトですね、分かります》

黙れ、この腐れデバイスが。

「それにしても、だいぶ寒くなって来たね」

《もう１１月になりますからね。それよりも、呪いの方は大丈夫なのですか？最近吐血してばかりの気がするのですが》

「あぁ、大丈夫大丈夫。今日は血は吐いてないよ、ただし嘔吐はしたけど」

《……はぁっ……》

呆れないでほしいな……。
へ？こんな外でデバイスと話してて良いのかって？
大丈夫大丈夫、人なんて何処にも見えないから。

「さて、サッサとケーキ持って帰りますか」

寒いし一人は寂しいし、アンクはまだだし。
つか、帰ったらまた仮装しなきゃならんのか……めんどくさ。
次は何を着せられるのか。

～キング・クリムゾン！～

「ただ今！」

「お、お帰りやでアニス君」

「あ、もう仮装してるんだ」

はやては何故かドラキュラの格好をしている。
外付け牙もついてるし、案外本格的。

「あ、帰って来ていたのですね主」

「あ、シグナ……何じゃそりゃ……」

いや、ホントになんじゃそりゃだよ。
何でシグナムはカボチャ被ってんだよ……。

「驚いたやろ？それ、カボチャやのうて被りものなんよ」

「へ～、でもこれってあり？」

「ありや」

「……まぁ良いけどさ……」

でも……良くシグナム了承したな……。
まぁ、たぶんかなり際どい奴かこれ、どっちが良いって聞かれて迷わずそっちにしたんだろうけど……。

「所でさ、何でハロウィンなんてやろうと思ったの？日本じゃそんに馴染み無いって聞いたけど」

「いやぁ、ザフィーラを見とったらやりとうなってな」

あぁ、ザフィーラはリアル狼男だからね。
それなら仕方ないか……それにしても、さっきからはやてがなにか持ってるんだけど……。

「それで？それは誰が着るのかな？」

「ふふふーん、勿論、アニス君やで？」

「ちょっと待て。その衣装は無しでしょ……」

はやてが持っている衣装、スク水にセーラー服に猫耳にメガネ……
何処の変態だお前は……。

「まぁ、強制やで？」

「嘘ーん……いや、逃げさせてもらうから関係ないんだけど」

俺は速攻でリビングから出ようとするが。

「行かせないぜ！」

「ここから出しませんよ！」

「己！ヴィータにお姉ちゃん！裏切る気か！」

そこには何か良く分からない物に仮装したヴィータとシャマルが。
えぇいどけぇ！速くしないとあのたぬきが！！

「捕まえたで？」

「……オワタ……」

～見せられないよ～

「うぅ……汚された……」

「アニス君……似合ってるで……」

うっさい、話しかけんな……。
糞……どさくさに紛れて胸とお尻揉まれた……。

しかもこのスク水とセーラー服、無駄にピッタリなのが怖い……。
これだったら翠屋の方がましやないか！！

「……主、どうでしょうか？今から二人きりなになると言うのは……」

「ふざけんなシグナム。お前アニスに何する気だ」

おいシグナム、お前賢者タイムに入ってんじゃねぇだろうな？
何でそんなみょん、じゃなかった。妙に落ち着いてんだよ。

「アニス君は今日それで過ごしてもらいます」

「エエエエエエエエエエェェェェェ（´Д`）ェェェェエエエエエエエエエエ」

懲りずにまたエルシャダイネタ。
凄く、好きなんです……エルシャダイ。

それよりも、ここには変態しか居ないのなもう……ザフィーラは何か何処かに居るらしいけど、一向に顔を出す気配はない……。

とにかく俺は言いたい……。

この格好に果たしてハロウィンは関係あるのだろうか？

因みに、はやて達は帰ってきたアンクに怒られました、ざまぁ。

あ、みなさん。

ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ！

そして、これからもこの小説をよろしくお願いします！

ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ！お菓子をくれないと悪戯しちゃうぞ☆……それ

どもっ、ディアボロです

いやぁ、ハロウィンにかこつけて、ようやく２００００ＰＶ記念
を書けました

楽しかった

そして、アニスがはやてに無理やり着せられた格好は

分かる人には分かりますよね？

あれです、変態アルビレオ・イマとの賭けで、エヴァが負けたら着
ることになっていた例の物です

あそこのエヴァたんマジかわゆす

今はもう顔芸がすさまじいし

そして……刹那は百合百合してるし……

俺は百合が嫌いなんじゃぁぁぁぁぁぁ！！

女の子と女の子がチュッチュ？

無理でございます……百合が大好きという方、気分を害したらすいません……

さて、楽しんでいただけたでしょうか？

今回はあんまり出番のない仁紫園さんを少しだけ登場させました

そして、番外編近況報告

もしアニ、ＦＡＴＥ編は書き上がりました

喫茶翠屋編は後もう少しです

アニスとフェイト&アルフ、料理を作ろう（こんなタイトルだっけ？）は、まだ手を付けていません

もしアニ、とある魔術の禁書目録、同時上映、超電磁砲もあるよも、
まだ手を付けていません

たぶん水・木辺りで仕上げると思います

後、金曜日から修学旅行何で、また予約投稿

感想は……一応携帯かｉｐｏｄｔｏｕｃｈで返そうと思っています

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございます

そして、これからもこの小説をよろしくお願いします！

ｔｒｉｃｋ　ｏｒ　ｔｒｅａｔ！

第三十五話　罵倒罵倒また罵倒（前書き）

今週の金曜から初関西な私です

関東はディズニーランドに行った位です

まぁ、修学旅行でもディズニーランド行くみたいなんだけど

俺、人ごみ嫌いなんですよねー

そして飛行機も嫌いなんだよね

俺高所恐怖症なんですよ

だから、飛行機に乗る時は目を瞑って耳塞いでぶるぶる震えてます

あぁ、何で鉄の塊が空を飛ぶんだろう……

つうわけで、本編始まります

第三十五話　罵倒罵倒また罵倒

アニスサイド

「よし、こんなもんで良いでしょ」

どもっす、アニスたんだお。
ただ今細工中なのでございます

この別荘を何処に隠そうか現在検討中。
間違ってもアンクとかに入られたら一発でばれちまいますので、結構大変なんだよね。

「さて、闇の書ももったし」

《私も居ますし》

「……いや、お前は要らんだろ」

《何故ですか！？》

「ぶっちゃけ今のお前の存在意義って、俺との暇つぶしできる喋る機械の立ち位置何だよね」

俺バリアジャケット使えないしな。
それに、まだ喋れせてもらえるだけましだって。グリード何て常にスリープ状態だからな。

「まぁ、良いけどさ……」

《ほっ……》

何でホッとしてんだてめぇは……。
まぁ良いけどさ……。さて、んじゃ行くとしますか！

俺は魔方陣の中に入り、転移を開始する。
さて、闇の書に魔力収集し終わったら何して暇潰そうかな～。
まぁ、無難にこれからの対策練って、それから少し魔眼のコントロールかな。

とか考え事をしてたらいつの間にか着いてたみたいだ。
さって～、やりますか。

俺は浜辺の方まで歩いて行き、闇の書を開く。

そして、その状態のまま、俺は取って来た魔力を変換し、取り出す。
それを闇の書は感知し。

《Ｓａｍｍｌｕｎｇ》

そのまま魔力を収集した。
俺は闇の書を開き、ページを確認する。

「……大体７ページか……」

魔力を取った生物も７匹……。
う、うん……仕方ないよ。だって生物の保有魔力なんてたかが知れてんじゃん。

《外れだな》

「そんな鈴ボイスは要らんとです」

《残念だったね》

「理樹ボイスも要らんとです。そして佐々美ボイスも要らんとです」

《……チッ》

舌打ちすんなし。
それにしても、何か割に合わないな～。結構大変だったのにさ～。
結構ショック大きいよこれ……。

「……やはりここは血色の良い魔導師から魔力を奪った方が……」

《今のマスターならすぐに捕まりますね。それに、逃げてる最中に吐血でもしたら、それこそ手が付けられませんので止めてください》

「ふふふ、吐血って何か厨二臭いよね」

それは俺の偏見かな？
でもとあるは厨二じゃね？幻想殺し（イマジンブレイカー）、一方通行（アクセラレータ）、暗黒物質（ダークマター）、超電磁砲（レールガン）、原子崩し（メルトダウナー）、心理掌握（メンタルアウト）……後の二人はよぉ分からん。

つか、良くこんな名前とか考えられんな。
まぁ、ただ英語表記にしただけだろうけどね。

後はハガレン……いや、あれはあれで良いのか？
でも神作である。とあるもな。

「そして今思った。俺って今軽くスカー状態じゃん」

錬金術の理解・分解・再構築で、俺は分解で留めてるみたいな。
うわぁ、何それ厄介。
まぁ、魔法を分解出来る時点でかなり厄介だけどな。

何か二つ名で魔導師殺しとか言われそう。
何その切嗣……魔術師殺しと同等やないか。

「まぁ良いか……さてと……」

俺はその場に座り込み、今後の対策を練る事にした。

「ねぇクイーン、どうしたら良いかな？」

《丸投げですか……まぁ、マジレスすると。あれです、今のまま秘密裡で収集を行うか。もしくは守護騎士にまかせっきりにするかの二択ですね》

「いや、ばらさないから。みんなにやってほしくないから俺がやっている訳で」

《貴方は馬鹿ですか？さっきのペースですと、必ずマスターは途中で動けなくなります。結局は守護騎士任せになってしまいます。浅はかです、馬鹿です、抜かりあり過ぎです、アホです、駄目駄目です》

「みぃー、そこまで言わなくても～」

《ホントに抜けてます。この将来合法ショタ&ロリ有望のマスターめが。いい加減自覚してください。貴方一人では対処しきれないんです、いずれ倒れる身なんですよ？確かに抗う事も必要でしょう。ですが、貴方のはあまりにも行きすぎです。血反吐を吐いても何も言わず、自分がもう死にかけの状態なのに何も言わず……貴方はホントに生き残る気があるのですか？》

「うわぁ、酷い言いよう。そんなに言わんくても……」

《……はぁ、ホントに自覚があるんですか？貴方が死んだら守護騎士は消え、はやてさんはどうなりますか？アンクもです……貴方の身勝手で、どれほどの人が苦しむのでしょうか？》

「……ふっふっふっ……あっはっはっはっはっはっはっはっ！！！あーっはっはっはっはっはっ！！！いやいや、そこまで言いますか。完敗だよ、完敗。くっふふふ……あぁ～、清々しいよね。そ

こまで言ってくれると」

《……何を開き直ってるんだか……》

まぁ、そう取れるね。
でも開き直ってなんかいない。十分俺はそれを受け止めてるんだ。
理解もしてる。

自分が死に体だと言う事も、いずれ倒れるって事も。
でも、それでも……踏んばらんといかんのよ。

俺も一応男。男には男の意地ってもんがある。
俺は非力だし、何もできないし、迷惑かけっぱなしだから……。
だから、俺は俺がやれる事をしたいんだ。

「十分過ぎる位、俺は自覚してるよ。だけど、譲れないんだ」

《はぁっ……ホント、貴方は馬鹿ですね》

「ウェヒヒ、俺はマゾヒストじゃ無いんだよ?そろそろ罵倒は止めようぜい」

《いいえ、何度でも言います。このチビ助が》

「へイへイ、どうせチビですよーっと。さて、それで今後の事なんだけど。今度は効率良く進めたいから、もうちょい生物が居る世界に行こうと思ってるんだけど」

《……まぁ、それ位なら大丈夫ではないかと。でも、余り行き過ぎると、管理局に目を付けられますよ?》

「それは何とかクリアするよ。変装でもなんでもすればいい話だしね」

《……それが一番手っ取り早いですかね、あ、手っ取り早いと言えば。地球に落ちたジュエルシードを使えば、もっと早く魔力が集まるのでは?》

「それこそ馬鹿だよ。そんな事したら管理局に早々と目を付けられるだろ」

《だから変装でもすればいいんですよ。もしくはそれを集めてる人が見つけた瞬間に魔力を吸収してしまえばいいのでは?》

う〜ん。それもそれでやりたくないんだよな〜。

それに、ロストロギアにロストロギアを収集させたらどうなるんだか分からんし……。

「それはまぁ保留にしとこうか」

あんましそっちの本編には首を突っ込みたくないし。
でも……アンクがジュエルシードの一つを保有してる時点でもう首突っ込んでる感が満々なのは……まぁ深くは考えないようにしよう。

「まぁ、今後の展開次第かな。さって……これで今後の対策会議は終わりっと。ついは魔眼のコントロールでもしようかね」

俺は立ち上がり、背筋を伸ばしてから歩き出す。
はぁっ……頑張ろ。

その後魔眼の使い方を練習しまくって、夕飯食って、また魔眼の練習して、風呂入って寝ました。
そして、次の日には元の世界に戻りました。

誰も気づいていませんでした、ふふふ、チョロイチョロイ。

第三十五話　罵倒罵倒また罵倒（後書き）

ねむてぇ

明日は番外編を書き上げないと……

まだ三つ残ってる

大変だ

さて、今回はあれです

色々厨二が何たら言ってましたが

作者自体がもう厨二何で、あんまり気にしないでください

鎌池先生すいません、荒川先生もすいません

ここまで読んでくださりありがとうございます

第三十六話　急展開過ぎてワロタァァァァ！（前書き）

どうも

性癖に少し問題があると友人に言われた俺です

男の娘の何が悪い！

まぁ、リアルにそんな子はいないので、俺の性癖何て世の中に何ら悪意を齎す事は無いでしょう

さて、もうすぐで四十話になるのですが……ここで時系列を言っておきましょう

大体なのはがフェイトと初めてエンカウントし辺りを想定してます

だから、次の次の章では……違った……

修学旅行から帰って来たら温泉の話を書きます

そして、修学旅行が終わって一週間たったらテストなので

一時更新を停止します

あぁ、毎日更新が（泣）

まぁ、良くも一か月も毎日書けたなと思ってます

それでは、本編始まります

第三十六話　急展開過ぎてワロタァァァァ！

アニスサイド

「ケホッケホッ……ウェッ……」

えー、食事中の方すみません。
中継をおトイレに繋いでいる為、少々酷い絵面ですが、チャンネルは間違いではありません。
どうも、アニスたんだお。

「ゲホッ……」

ビチャッ！

「……ペッ！」

トイレで吐血なう。
いや、洒落になってないって……。

「あう～、気持ち悪い……それに、痛みが無いって所がまた恐怖をあおるねこりゃ……ケホッケホッ……オェッ……」

駄目だ……まだ出そう。
口の中が鉄の味ですわもう、こりゃ呪うどうこうの前に、出血多量で死んじまうって。

「ガフッ……あ～、ダリィ……」

ズルズル、ストッ……。

俺は耐え切れず、その場に座り込む。
全く、厄介だねぇこりゃ。まだ足に呪い受けて動けんくなった方が楽だよ。

「あ～……貧血かなこりゃ……体が小さいってのも考えもんだねこりゃ……あー、気持ち悪い……」

立ちたいが……もう駄目だ、フラフラ。
もうかれこれ２０分はトイレの中だ。そろそろ出ないと、流石に駄目かな。

「よっと……ふぅ……水流さんとな」

カシャッ、ジャー！

「おぉ、水が赤い赤い。まるでサイレンに出てくる水みたいだ」

あれを飲めば死屍に……クックックッ……。
って、何言ってんだ俺は。冗談じゃない。

「あーうー……フラフラするよ……あー気持ちわる……」

今にも倒れそうですね、分かります。
それにしても……どうしたものかな。こりゃ予定が狂うな。
予定よりも呪いの進行が速い……うむ、こりゃ本気でクリスマスまで生きてるかな？

「まぁ、何とでもなるか。後でシン・ライフォジオでも使おうかな。でも、使うと心臓痛い痛いなのです、みぃー状態になるから……駄目か～」

口では何とでも言えるが、実際あの心臓の痛みは洒落になっていない。
例えるなら……そうだね、麻酔なしで腹をかっ捌かれて、開きになった状態から手を突っ込まれ、至る臓器を手でぐちゃぐちゃに潰される……位？

いや、それだと俺ショック死してるから……う～ん、分かんない。
あ、因みに。シンと付く呪文は一通り使えます。

ってあぁ！！そうだった！！
ガッシュが使ってたシン系の呪文って、確か心の力使わなくても使えてたやん！
でも、俺でも魔力なしで使えんのかな？

「って……うだうだしてたらまた……！ウェッ！ケホッケホッ！」

ビチャビチャッ！

「ケフッケフッ……あー……もう駄目だ……しんどい……」

一気に血を流し過ぎた結果がこれだよ。
あーうー、貧血で頭くらくら……このまま気を失いそうで怖いね。
せめて血で、犯人はやすって書いておかないと……。

「あうあう……もうまともな思考ですらなくなってきていると言うこの事態……つか、無理に立ち上がるのはよろしくないか……」

無様だなぁ……俺。

力をもらっているのに、これじゃあ前世と何ら変わりない。
これじゃあ、地を這う虫同然じゃないか……くっくっくっ……。

「ホント、無様だよなぁ……笑っちまう……くっふふふふ……」

あー、もうまともな思考回路何ざしてねぇしな。
もうどうとでもなれってんだ。

「こんな状態で、収集か……ったく、決断が遅いんだよ、俺は……よっと……」

俺は壁を使いながらヨロヨロと立ち上がる。
体が重たい……頭も痛いし……また吐きそうだ。

「っとと……いでっ！った～～～」

壁に頭をぶつけた。
むっちゃ痛ぇ……あー、絶対こぶで来たってこれ……。

「あーうー……さっさとでよっ……っと、流すの忘れてた」

カチャッ、ジャー！

「うむ、これでスッキリだな」

さって、出ますか……。

俺はドアに手を掛けて、開く。

「……誰も居ないな……」

辺りを見回して、自分の部屋に戻る。

さっきトイレでの出来事を聞かれていたら即死だった。

危ない危ない。

「ハァッ……ヤッヴァイ……キツイ」

部屋が凄い遠く感じる……。

足がまともに前に進んでくれない……。

息をするのが苦痛だ、焼きこげそうなくらい、肺が熱い。

「……駄目だ……こりゃ……」

ドタッ……！

「ハァッ……ハァッ……流石に……痛い……かな」

胸が苦しいと言うよりは、痛い。
俺は耐え切れずに倒れ込む。

あー、こりぁマジでヤバいって……。

「ぐっ！……ケホッケホッ！」

ツー……。

やばっ、また血が……。
それに……このままの大勢だと……血が喉に詰まって……。

「ガフッ！……グッアッ……」

ガリッ……。

息が……出来ない……。
苦……しい……。

「うっぐぁ……ゲホッ！！ゲホッ！！」

俺は無理やり口の中の血を吐き出す様に咳をする。

こりゃ……ヤバいな……。

あぁ……意識……が……。

酸素が……行き届いて……ない……。

ドタドタッ！！

あぁ……何だろう……誰かが……こっちに向かってきてる……。

えへへ……身体がボロボロなの……ばれちゃう……な……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～～～

シグナムサイド

ドタッ！

部屋の外から、何か倒れた音が聞こえた。

最初は気のせいかと思っていたが……。

ゲホッ……ゲホッ……。

誰かが咳き込んでいる様な声も聞こえてくる……。
もしやと思って、リビングから出て見てみたら。

手洗いの近くで、倒れている主が居た……。
それを見た瞬間、いきなり頭の中が真っ白になった……。

何故、どうして……と、思考の波はグルグルと私の頭の中で回っていた。
そして我に返り、すぐに主の元に駆けだす。

「主!!」

ドタドタ!!

これは……酷い……。
どうして……こんな……。

「ゲホッ……!」

「！主！お気を確かに！」

駄目だ、ここで無理に動かしては……。
それに吐血……すぐさま口内の血を出さねば、窒息してしまう……。
……これしかないか……。

「主……すみません……」

私は主を抱き寄せ、主に口に自分の口を付け、そんまま中の血を吸いだす。
そして、吸い出した血を床に吐き捨てる。
まだ残っている……どれだけの出血を……。

それを数度と繰り返し、息が荒かった主の呼吸が整っていく……。
……やっと来たか……。

「シグナム、どうしたんだよきゅうｎ……って……アニス！？ど、どうしたんだよ！！」

「主が血を吐いて倒れた……。すぐに主の部屋に運ぶぞ、ヴィータ」

「ちょっと待ってろ！今シャマルを呼んでくる！シグナム一人でも

行けるだろ！」

「……仕方ない、早急にな」

「分かってる！！」

ヴィータはすぐにリビングに戻り、シャマルを呼びに行く。
だが……どうして急に、主は倒れたのだ……。
これ程の事なら、日常生活を見ていれば……。

！？日常生活！
思い返せば……不審な所はいくらでもあった……。
食欲不振に加え、睡眠の長さ、咳……私は主の守護騎士として失格だ！
何故気づけなかった！

……いや、悔いるのは後で幾らでも出来る。
今は主だ……。

主……何故何も言わなかったのです……。
……私は……無力だ……。

第三十六話　急展開過ぎてワロタァァァァ！（後書き）

どうしてもこうなった

何か、書きたいように書いてたらこうなった

しかもね……今日で話書いてんの三つ目……

疲れた……

今日は学校が建立記念日で休みなので、ずっと書いてた

……嘘ですごめんなさい

ほとんど見てないアニメを消化しながら書いてました

ｆａｔｅ見れてなかったので全話見ました

……あの糞蟲爺……

とまぁ、怒りはさて置き

バーサーカーパネェっす……

騎士（ナイト・オブ・オーナー）は徒手にて死なず……強すぎでしょ……

まぁ、それは置いといて

やっぱｚｅｒｏランサーカッケェは

声優が緑川さんって……

信じられるか？あれで４３歳何だぜ……

俺の親父の一個上やん……

エロイ、すさまじくエロティックだ……

兄貴いぃぃ！！

そしてあの糞蟲爺！やっぱ死ねやぁぁぁぁぁぁぁ！！

っと、つい口調が汚くなってしまいましたね

では、今日はここまでにさせていただきます

ここまで読んでくださり、ありがとうございました

第三十七話　家族会議（前書き）

どうも

今日は修学旅行一日前なのに、喘息の発作が出ている私です

これを書いてる間、何回呼吸困難になったか

死ぬかと思った……

さて、遅くなったので

本編始まります

第三十七話　家族会議

前回のあらすじ

アニスが血を吐いて倒れた。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「……ん……」

知ってる天井だ……。
あれ、おでこに何か乗ってる……濡れタオル……。

「よいしょっ……ケフッケフッ……」

うむ、まだしんどい……。
どうやら俺は、部屋に担ぎ込まれた様だ。
うむ、俺が使っているベッドだ……。それにしても、頭が痛い。
まだ貧血治っとらんなこりゃ。

《自業自得です。一人で収集何かするから》

「あら、起きてたんだクイーン」

《えぇ。それよりも、貴方はやはり馬鹿です。魔力を吸収するのは良いですが、変換する際、魔力を取り出すのにも魔力が通過していくのですから、結局倒れちゃうじゃないですか》

……あー……そうか……。

ホント、俺ってつくづく馬鹿だなぁ……。

「あーあぁ……俺って、ホントボケボケだな……」

《それがマスターですからね》

「はぁ……」

もうふて寝してやろうか。

それにしても、良く救急車とか呼ばなかったな。

「あぁ……収集どうしようかな……また流血覚悟でやろうかな……

それとも、吸収しないで分解してから変換して……あぁ、それで良いか。それで行こう」

《……はぁ、貴方って人は……》

「呆れんな呆れんな」

つか、最近こいつ出番あるな。
まぁ、良いことかもしれないけども……これは本人に謝った方が良いのでは？

「あうあう……血が足りないのです。今夜あたりはレバ刺しのある店でレバ刺しが食べたいな」

《くぎゅ乙》

分かる人には分かるネタ。
あはは……ホントに分かる人居るかな？

その時、この部屋のドアが勢い良く開かれる。
そこに居たのはシグナムだ……。

「主！！目を覚まされましたか！！」

「あ、シグナム。おはようぇっ！」

ギュムッ！！

「あぁ、主！良くぞ御無事で！いや、御無事ではないですけど……良くぞ目を覚まされました！」

「クッ……アッ……出る……内臓的な物が……口から……つか、死ぬ……シグナ……ム……潰れる……」

「す、すみません主！」

危うくシグナムの熱い抱擁で死ぬところだった……。

あぁ、後吐血しそうになった……恐ろしや、シグナム……。

「もう、ただ貧血で倒れただけなのに、大げさだなぁシグナムは」

「大げさではありません！主は血を吐かれたんですよ！？」

「あぁ、あれオイルだから。血じゃないよ」

《貴方は一度頭の中を掻っ捌いて見てもらいなさい。馬鹿マスター》

「痛い痛い……それは痛いって」

何でそんなスプラッタな考え思いついたし。
あぁ、頭痛い……。

「それが主のデバイスですか」

《お初にお目にかかります。マスターのデバイスのクイーンです。
通称民安とこの前命名されました……》

民安さん……ディスってるわけじゃありません。
もう民安さん愛してます結婚してください……と、ウチの作者は申しており……へ？そこまで言ってない？
あと、メタ発言は止めろ？
すいませんでした。

「さて……それでは主……」

「はい、何でしょうか？」

「これより家族会議が始まるので、覚悟しておいてください」

「……ふぇ？」

何やら不穏な空気を感じます……。

〜〜

「これより、家族会議を行います」

「えっと……これは洒落になってないのですが……」

何か昔の日本の拷問みたいな感じになってるんだけど……。痛い……もの凄く痛いし重い。

「さて、アニス君が倒れた事について、何か意見ある人おる？」

「はい」

「はい、ヴィータ」

「呪いのせいだと思う」

「その線が高いな。それで、どうなんアニス君？」

おふぅ、そこで俺に振っちゃいますか……そうですか。
まぁ、良いんですけどね。

「いいえ、違います。あれはオイルです。オイル交換をしようとして、あんな事に……だから旧式のオイルは駄目だとあれほど足に更に重さが増したぁぁぁぁぁ！！」

「さて、今の言い分に意義のある人」

「はい」

「はい、シグナム」

「先程あの体制で血を吐いていたので。あのままだと喉に詰まって窒息してしまうので……その……主の……血を吸いだしたのですが……あれは紛れもない血でした！」

「「「「「「なん……だと……」」」」」」

俺のファーストキスがぁぁぁぁぁぁ！
いや、シグナムみたいな美人なので、これはこれで有りなのか。

「ご馳走様でした……ってまた重みが増したぁぁぁぁぁ！！」

そろそろ潰れる！
グチャっと潰れるからぁぁぁぁ！

「シグナム、それについては後で言及に追及するので、残るように。
さて……アニス君……ここで何かウチらに言う事、あるんやないか？」

「えっ？床汚しちゃってごめんなさい？」

「ちっがぁぁぁぁぁぁう！！」

「えっ、違うの？」

「もっと言う事あるやろう！！」

「……トイレ汚してごめんなさい？」

「それもちがぁぁぁぁぁぁぁう！何や！？わざとか！わざと言っとんのか！？」

う～む、これも違うらしい……。
何だっけ？……う～ん……あ、これかもしんないね。

「血を吐いて家を汚してごめんなさい」

「押し倒して犯したろか！！」

「はやてちゃんたら、まだ太陽が昇ってるよ……」

「アンクさん、一個追加や」

「了解だ」

「わー！嘘嘘！倒れてすいませんでした！黙っててすいませんでし

た！！もう隠しませんから許してくださいいいいいいいい！！」

もうこれしかないだろう！
どうだ！正解だろう！

「よし、一個追加や」

「おし来た」

「何でぇぇぇぇぇ！？いやぁぁぁぁぁぁぁぁ！」

「自覚してるのならなお悪い！！」

おぅ、正論過ぎて何も言い返せません……。
それにしても……もう太ももが限界なんですけど……。

「えぇか？アニス君。うちらは家族や。迷惑何てかけて何ぼ、掛けられたなんぼや。それが嫌やから何も言わんと自分だけで抱え込んで……アニス君が言っとる事矛盾しとるやんか！！」

うむ、痛い所を突くねはやて。
あぁ、何その、もう一個増やすぞ的な目は……後でぶん殴ってやる、

アンクめ。

「でもねはやてちゃん……確かに俺の言ってる事は矛盾してる。だけど、それとこれとはもう別次元の話なんだ。俺の迷惑って言うのは……みんなになってくださいって言ってるようなものだ。いや、確かにそうなんだけど……みんなが犯罪者になっちゃって、俺が生き延びられても、俺はそれを良いとは思わない。家族だから、は……効かないんだ」

「主、それは違います。我ら守護騎士は、主をお守りするためにあるのです。主が命令すれば、私達は何でもやります」

「いや、それが駄目だって言ってるの。みんな俺の家族、その家族にやらせる事自体が間違ってる。俺はそう言ってるの。守護騎士だからとか関係ないの」

「それは綺麗事です。我ら守護騎士が主を守らなければ、居る意味がない。主のお心遣いは確かに良いです。ですが、それでは主を救えない、守れないではないですか！」

「ザフィーラ……」

「主、何なりとご命令を……我ら守護騎士は、主の手となり足となり、剣となり盾となり、主をお守りいたします……。さぁ、ご命令

を……」

ザフィーラ……。
ここで、これを無視したら……守護騎士のプライドを……無下にしてしまう……。
はぁ、仕方ない……。

「じゃあ……命令するよ……」

俺の言葉に、四人は急にかしこまる。
ハァ、別に聞く体勢とかどうでも良いのに……。

「……俺がこの呪いを解く方法を、収集以外で見つけるまで、収集はしない！」

「「「「……はっ？」」」」

「えへへ、命令と言うよりは、お願いだけどね」

「それじゃあ何も変わってないじゃん！それでアニスがまた倒れるのを見てろって言うのか！」

「そうです！それだったら今の現状と何も変わりません！」

「主の言わんとしてる事は分かります、ですが……私達には耐えられないのです！」

「このまま主が弱り、倒れ、傷つき、床に伏せる主など……我らは望んではいません！！」

「あはは……でもねみんな……これだけは譲るつもりはない。俺は収集以外での道で、自分を治したい。みんなに負担は掛けたくないんだ……」

そう……これは譲れない。
俺は既に収集してるけど……これは俺個人の問題。そこに守護騎士が首をツッコム事は無い。

「主……お願いです……」

「我らに……ご命令を……」

「……あーもう！分かった！じゃあ言ってやんよ！！俺の手伝いをしてくれ！収集はまだ検討中！！もし後一か月……いや、二週間で俺が他の手段を見つけられなかったらみんなに収集を頼む！もうこ

れしか譲らない！譲らないんだったら譲らないんだからね！」

「……分かりました……二週間ですね」

「うん……もうこれしか無いしね……」

はぁ、どっと疲れた……。
まぁ、これで一時的には大丈夫だろう……そう、守護騎士はな……。

「さて、シグナム達とは和解したようだが……俺らはまだ納得してないぞ？」

「これからが説教の始まりや……」

そう、まだこの二人が残っているのだ……。
……オワタ……。

第三十七話　家族会議（後書き）

今日修学旅行の買い物に行った帰りに、ゲオに寄ったんです

何時ものように古本見てたら……

お宝を発見してしまいました

タイトルは……

スーパー男の娘タイム

……うぅぅぅぅぅぅぅぅぅいゃっほぉぉぉぉぉぉぉぉいぃぃぃぃぃぃ！！

おったからおったからー！

もちろん即買い！

いやぁ、可愛かった……

さて、今日はこの辺で

明日から四日間は番外編です

そしてお詫び

時間が無くて、同時上映、超電磁砲は書けませんでした……すいません

んじゃ、今から予約してくるお

ここまで読んでくださりありがとうございました

番外編　喫茶翠屋へようこそ（前書き）

はい

私は今日から修学旅行なので

番外編を載せていきたいと思います

帰って来たら本編進めますゆえ

それでは、番外編始まります

番外編　喫茶翠屋へようこそ

喫茶翠屋

可愛らしいウェイトレスと、カッコいいウェイターが居る、魅惑の喫茶店。
さて、そんな魅惑の喫茶店……本日はどんなお客様が来るのだろうか……。

「よし、色々待て。全部待て、て言うかもう黙れ」

何なんだ上の地の文は！？
明らか少女漫画風の入り方だったぞ！？

「はぁっ……とうとう、俺も焼きが回ったか……」

やぁ、挨拶が遅れたね。
アニスです。はい、口調で分かる通り、アニスたんでございます。
最初の入り方から察するに、今俺は、翠屋に居ます。

「アニスたーん！」

へ？そこで何やってんだって？
まぁ、色々やってるわけでありまして。

「馬鹿！今はアニスたんじゃなく、てゐだよ！」

「うるせぇ！たとえてゐのコスをしてようがアニスたんはアニスたんなんだよ！」

ちょっと外野がうるさいけど、気にしないで。
それで、今日は特にすることも無かったから翠屋に遊びに来たんだけど。

「（　゜∀゜）ｏ彡゜てゐてゐてゐてゐてゐ！」

「……うるっせぇぞこの野郎！てめぇらに幸せ運ぶぞこの野郎！」

っと、つい言葉遣いが汚くなってしまいました。
紳士のアニスたんで通っている俺としたことが、つい……。
まぁ、それで……遊びに来たわけなんですが。

桃子さんから人手が足りないので手伝ってほしいと言われてしまい、止む無く手伝ってるんだけど。
どうやら俺のコスプレショーをお望みだったらしく。

ただ今、何故桃子さんが知ってるしと思ったてゐの衣装を着て接客してます。

それが、今現在の俺の黒歴史更新履歴でございます。

「アニスくーん、これ運んでー！」

「あ、はーい！分かりましたー！」

「後ついでに衣装チェンジねー！」

「はーい！」

次は何を着なきゃならないんだ……。

つか、これ児童ポルノに引っかからないか？何やかんやで、てゐって薄着だし……。

まぁ、良いか。

そしてアンク、チラチラ見てくんな。仕事に集中しろ。

とか思いながら、俺はデザートを運んで、衣装を着替えに行く。

～更衣室～

「あ～、もう疲れた。主に精神が……」

俺は衣装をハンガーに掛けて、スパッツ一丁になる。
まさかこんな事やらされるなんて思っても見なかったわ。だいぶキツイし。
主に変態共に視姦されるのは嫌だね。同じ男だし。

さって～、次は何のコスプレって……ゑ。えじゃなくゑ……。
これって……黒猫？ｏｈ……俺の得意分野の厨二ですか。
つか、桃子さんどっからこういうの拾ってくるんだろう。
元ネタ分からないけど、服を探してたらそれがたまたま黒猫の服でしたってオチかな？

つうか、スカート……はぁ、マジ嫌だわ。

「でも、着なきゃ服は帰ってこない……」

なのはの奴め、余計な事をしやがって……。
あぁ、糞……着るしかないか。

「……あー、あー、……黒猫の口調って、どうだったっけ？」

とっくの昔に忘れてしまった……。
確か厨二設定だったのは確かだけど……。

「まぁ、どうでもいいや」

とにかく、サッサとこの地獄から抜け出したい所存であります。

まぁ、何やかんやで、表に出たよ……。

「おぉ!?あのゴスロリは!?」

「黒猫!?」

「……今から俺を見た物には、一生解けない呪いが掛かるよ……それでも良いと言うのなら、好きなだけ見ると良い」

「アニスたーん!」

「……」パシャッパシャッ!

あ、ムッツリーニがいつの間にか来てる。
はぁ、それにしても、後ろの桃子さんが怖いのだが。俺を見ながら終始ニヤニャしてるのだが……。

「よっ、土夜」

「……こんにちは」

「元気そうだね。あ、この前はどうもな。マジで楽しかったわ」

「……黒猫コス」

「うん、しかもご丁寧に俺の体型に合わせてあるね……あの人気持ち悪いくらいに俺の大きさとか分かってるから怖い」

ホント、何であそこまで正確なんだろう……。
しかも、全部ピッタリっていう……。

「おい、聞いたか……」

「あぁ、ムッツリーニがアニスたんとデートしたって……」

「異端審問会議だ！！」

「会長！？」

おい、ＦＦＦ団はここに入店すんな、帰れ。
つか他の客の迷惑だろうが……。

「……デートじゃない」

「まぁ、あいつらに何を言っても無駄さ。んで？ご注文は？」

「……コーヒーとショートケーキを」

「あいよー。桃子さーん！コーヒーとショートケーキ一つずつ！」

「分かったわー！」

うむ、こんなに繁盛しとったら、猫の手もかりたいよな。
まぁ、ほとんどは男なので、たぶん俺目当てなのかもしれないがな
……。死んでしまえ。

「……それよりも、これ」

ムッツリーニは束になっている写真を俺に渡してくる。
ん？何の写真だ？

「って、わぁぁぁぁぁぁ！！お、お前！いいい、何時の間にこんな写真を！！」

そこには、遊園地で撮られた写真が。
しかも、全部が全部、俺が恥ずかしい思いをした奴だ。

「……可愛かったからつい」

「ふざけんなぁぁぁぁぁぁ！！」

くそっ！アイスクリームが鼻に付いてる写真や、俺がすっ転んで苦笑いしながらムッツリーニの手を借りて立ち上がってる写真もある……。
しかも……あんな写真やこんな写真まで……。

「はぅ……思い出したら恥ずかしくなってきた……」

「……」パシャ

「撮るなぁぁぁぁぁ！！」

あぁもう！
ホントにこいつは油断も隙もねえ奴だなっておい！

「これは駄目だろ！何時の間に撮ったんだよホントに！」

俺があるアトラクションでビチョビチョになったので、店で小さめのシャツをムッツリーニが買ってきて、俺が陰でコソコソ着替えてる写真だ。
……これは流石に犯罪だって……。

「……大丈夫だ、問題ない」

「問題ありだ！」

「……みんなの夜のお供」

「俺を汚さないでぇぇぇぇぇ！！」

誰だそいつらは！！
俺がこの手で抹殺してやる！！居場所教えやがれ！

「アニス君、さっきからどうしたの？大声出して」

「あ、なのはちゃん」

「ん？何？この写真」

ペラッ……。

あっ、ちょっ！見んなし！
そう言おうとした瞬間、なのはの顔がみるみる赤くなっていく。

「あちゃ～」

「ア、アアアア、アニス君！ここここ、これ！」

「分かってるよぉ……はぅ……」

「……もらっとこう」

「上げんわ！」

パシィッ！

俺は瞬時写真をなのはから取り返す。
あぶねぇ、んなもん上げれるわけねぇだろうに。

「……ここにまだいっぱいある。価格は二百円」

「買ったの！！」

「買うな！！」

何でそんなに現像してんだてめぇ！
あぁ、お前ら群がるな！！
アンク！こいつらを止めてくれ！そう思いながら俺はアンクのいる方を向くが。

「アドレス教えてください！」

「あっ、私にも！」

「今忙しいので、また後にしてください」

あっちはあっちで女性に群がられてる！
何だこの差は！羨ましい！これがイケメンと童顔の違いか！
ていうかお前らハァハァしてんじゃねえぇぇぇぇぇぇ！！

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「はぁっ、大変な目にあったと、アニスはため息をつきます」

やっと収拾が着いたんだ。
もう大変だったよ……ムッツリーニが更に写真を売り出したし。
なのは達は狂喜乱舞だし阿鼻叫喚だし……まぁ、最後はアンクの怒号と折檻でかたが着いたけどな。
そしてただいま御坂妹のコスをしております。

因みにこれはムッツリーニのリクでごぜぇやす。

「似合っていますか？と、アニスは一回転をして全身を隈なく見せます」

「……やっぱり打ち止め（ラストオーダー）の方が良かったかも」

「あぁ、あれは口調が御坂妹よりも厄介な気がするからパス」

すっげぇ喋る打ち止め（ラストオーダー）よりも、あんまり喋れない御坂妹の方が楽。

「スカートはやっぱりスースーするんだが……」

「……何のためのスパッツ」

「スパッツはさっき桃子さんに奪われた。その代わりに女の子用のパンツを履かされているのだよムッツリーニ君」

「……桃子さんグッショブ（ぶしゃあぁぁぁ）」

「お客様ー、店内では鼻血を吹き出すのはお止めください。店内が汚れますので」

全く、何でこいつはすぐ鼻血出すのかな？
まぁそれがムッツリーニなんだけどな。

「さて～、もう少しで終わりだにゃ～。流石に疲れちまったぜい」

結構な時間手伝ってるしな。
つか、これ大丈夫なのか？労働基準法とか……まぁ、ただの手伝いなら大丈夫だろう。
ただ、児童ポルノは知らんが。

「……今日はいっぱい撮らせてもらった」

「今日もの間違いでしょ！全く、俺の裸体取るんだったら今度から有料だからな！」

「……なら払う」

「いや冗談だから。お前捕まっちまうぞ……」

本気にすんなし。
ってなのは、お前も満面の笑みでお金を持ってくるな。

「駄目だよ売春なんて。なのはちゃんには一生縁のない事だからね？」

「売春？」

「いけないって事。もうやっちゃいけないよ？」

「分かったの！」

売春駄目！絶対！

まぁ、そんなこんなでお手伝いが終了しやした。
もう絶対にコスプレショーなんかやらん！
そう心に固く誓う俺なのでした。

因みに、この日のムッツリーニの方の売り上げが数万行った事を、俺は知る由もなかった。

番外編　喫茶翠屋へようこそ（後書き）

今回出て来たの

てゐ、黒猫、妹達（シスターズ）でした

三人とも俺の大好きなキャラでございます

いやぁ、楽しかった

明日も番外編になります

ごみーんね☆

それでは、ここまで読んでくださりありがとうございました

番外編　もしもアニスがｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔに転生したら（前書き）

はい、今回は矛盾がありまくりです

何故士郎はアヴァロンを持ってるのに、呼び出されたのがアニスなのか……

それは今度、俺が番外編でｚｅｒｏ編を書く……かもしれないからです

それでは、番外編始まります

士郎サイド

「……問おう、貴方が私のマスターか？」

その光景は今でも覚えている……。
風に揺れる赤髪の髪……月明かりを纏った黒い死覇装。

そして何より……。

「サーヴァント・セイバー、召喚に応じて参上した」

その……口調に不似合いな身長……。

「マスター……サーヴァントだって？」

「はい、その令呪がマスターである何よりの証……これより我が剣は貴方と共にあり、貴方の運命は私と共にある。ここに契約は完了した……さて……それじゃあ型っ苦しい挨拶はこれまでにして、表の奴さんと、ちょいと遊んできますか」

って、軽!?
さっきまでの緊迫した空気が嘘の様だ!?

「って、ちょっと待ってくれ!もしかして、さっきの男と戦うつもりなのか!?」

「勿論、そのつもりだけど?まぁ任せといて?この聖杯戦争、絶対マスターを勝利に導くから」

そう言って、彼女は土蔵から外に出て行った。
俺もそれを追うように外に出る。

「よぅ……一応聞くがよ、この勝負、次に預けるつもりはねぇか?そこに居るお前にマスターも、訳がわからんって顔していることだし……お互い、万全の準備を整えてから戦う方が好ましかろう?」

「出来ればそうしたい……何て通ると思ってる?もう既に戦いは始まってる……先ずは……お前を討って、この聖杯戦争の勢いをつける」

「ハッ!よく言った!だがお前は馬鹿か!武器を構えずに戦いの場に臨むとは、うかつにも程がある!」

槍を持った男が、容赦なく襲い掛かる。
だが、それを女の子は異にも返さず、それを何かで受け止めた。

「なっ、武器がいきなり現れただと！？」

「ハァッ！」

ガキン！！

「ぐっ！」

なっ、あんなに小さい子が大の男を圧倒するなんて……。
何て奴だ……。

「一つ聞かせろ……お前の武器……それは一体何なんだ？武器にしちゃ、魔力が余りにも無さすぎる。よもやそんな鈍で、この俺の槍を受けたと言うのか？」

「ふっ……敵に情報を与える訳ないでしょ？それに……この刀を鈍と思っているのなら、腕一本……いや、四肢を全て切られると思え」

「言ってくれるぜ……最優と名高い剣使いのサーヴァント。まさかここで見えるとはな……！ったく、生簀かねぇマスターにしみった れた偵察任務。この聖杯戦争、ハズレを引いたと諦めかけていたが、こういう展開なら悪くねぇ」

聖杯戦争！さっきアイツも言ってたけど、一体何の事なんだ？

「随分と口が達者だね……あんたもサーヴァントなら、その槍で語ったらどう？」

「……ハハッ！いいぜ……ならばこの槍にかけて……貴様を討つ！！！」

～アニスサイド～

うひゃ～、ちょっち調子に乗り過ぎちゃったかな？
どうしようかな～……ゲイ・ボルクを避けきる運は俺には無いとも う。

やっぱ始解しないと駄目なパターンかな？
別にこれが俺の宝具ってわけじゃないし……ここはギガ・ラ・セウシルで跳ね返そうかな？
でもそれだと、俺がキャスターって呼ばれそうで怖いな。

まぁ、別段どうでも良いことだけど……ここで呪文なんて使ったら、侮辱だ！とかなんとか言われるに決まってる。

「じゃあな……その心臓貰い受ける！！」

やっべ、来るな。
仕方ない……少し、頑張ってもらうぜ！

「刺し穿つ（ゲイ）……」

「霜天に坐せ……」

「死棘の槍（ボルク）……！！！」

「氷輪丸！！」

ドゴォッ！！

激しい音とともに……俺は吹っ飛ばされる……。
っつぅ～、まさに紙一重かな？

それにしても……因果の逆転か……おぉ、怖い怖い……正確に俺の心臓を突いてきやがった……。
まぁ、それがちゃんと、刃が出ていればの話だけどね。

「なっ！俺の槍が……凍っている……だと……」

「ケホッケホッ……ゲイ・ボルク……それが貴方の武器の名か……。それじゃあ、貴方の真名は……」

俺は始解を瞬時に解き、ランサーに問う。
ランサーは軽く舌打ちをしたのち。

「まずったぜ、こんな早々に正体がばれちまうとはな」

「逃げるつもり？」

「あいにく、マスターの命令なんでね。死ぬ気があるなら追ってくるが良い！」

誰が追うかよ。
こちとらお前の槍で打撲してんだ。まぁ、凍らせて心臓を貫かれるのを守ったのは俺なんだけどな。

「ケホッケホッ……あ～、痛い……」

骨折で済んだものの……心臓貫かれてたら大変だった。
あの槍が穿った心臓は修復不可だからね。嫌な呪いだ。

「おい！大丈夫か！」

「ケホッケホッ……」

あぁ、そういやあんた居たね。
まぁ、こん位ならすぐに治るって。もう死覇装がビリビリになってるところの修復も済んでるし、あとは骨だけ。
そんなに時間はかからないだろう。

「一体なんなんだよ……お前ら一体何者なんだ！！」

やっぱ聖杯戦争の知識は皆無か。
原作の知識があるものの……少しうろ覚えだな。

聖杯戦争の事は、聖杯からの知識を受けているので問題ない。
でも、説明すんのめんどくさい。

「聖杯戦争、七人の魔術師の殺し合い、俺、その為の使い魔、お前、選ばれた、だから、マスター」

「……もっと分からなくなったんだが……」

「ぶっちゃけ～、聖杯っつ～なんか手にしたら願い叶えてくれる系の願望器って奴を奪い合う儀式の事を聖杯戦争っつぅ～んだけど、貴方はそれに選ばれちゃった系なの。その儀式をする魔術師の一人に。んで、俺貴方の使い魔何です……以上」

「……いや、今度は少し分かった……けど！君みたいなのが使い魔だって！？」

う～む、この厨ニ病持ちめ、中々にうるさいのぅ。
まぁ、しょうがないか……さって～、原作とほぼ変わりないのなら、そろそろ来るころだよな～。

「マスター、話は後です……新手の気配を感知しました。マスターはここで待っていてください」

シュン！！

俺は瞬歩を使って衛宮亭から抜け出す。
なんか史郎のちくしょうとか言ってる声が聞こえたけど……気にしない。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～～～～～

？？？サイド

あぁもう！何で私はいつもこうなのかしら！
一度殺したと思っていた目撃者をもう一度殺しに来ることは当たり前じゃない！

「！止まれ、凜」

「どうしたのよアーチャー？」

「……ランサーの気配は遠くに行ってしまったが……やはりもう一体のサーヴァントの気配を感じる。先ほどの少年が召喚したのかもしれない……な」

衛宮君が？
……嘘でしょ……と、とにかく急がないと！

「アーチャー、行くわよ！」

「了解だ」

だいぶ近づいてきた……もう少しで衛宮君の家に着くはず。
そう思っていた矢先、いきなり何かが現れた。

トッ……。

「ハァ～イ、今晩は、魔術師さん？」

「くっ、敵！？」

「そうみたいだな……それにこいつは……サーヴァントだ……」

「せいか～い。んじゃ、正解者には……」

来る……。
このサーヴァント……得体がしれない……。

「俺のマスターの家の招待券を上げちまいま～す♪」

「あらっ……！な……何なのよそれ！」

い、今このサーヴァント、何て言ったのかしら！
自分のマスターの家に招待！？

「……ふむ、どうやら嘘を着いているそぶりもないらしい……」

「はっはっはっ！嘘はつかんよ。まぁ、こっちも少し困ったことがありんしてね。うちのマスター、聖杯戦争の知識が皆無なのやさ。だから、ちょっち顔貸してほしいな～。なんて思っとります」

「はぁ？それって、様はあんたのマスターに聖杯戦争の事を教えろってことでしょ？何で私がそんな事しなきゃならないわけ？」

「いやっ、何となく……」

「……呆れた……何なのこのサーヴァント。第一、聖杯から知識を受けてるじゃない。貴方一人でも説明位は出来るはずよ？」

「うん、ぶっちゃけめんどくさい」

……ぶん殴っても良いかしら、こいつ。

「おーい！そこに居たのか、セイバー！」

「おっ、噂をすれば……」

噂をすれば……。

まぁ、私の予想通りね、このサーヴァントのマスター。

「って、遠坂！？何でここに！それに、学校で見た男も！？」

「まぁまぁ落ち着きなさいなマスター。何ぞこの子、マスターん家目指してたらしいよ。まぁ大方、ランサーの気配を感じて来た……とは思うけど」

あいつ……何ニヤニヤしてんのよ……。

あぁ、その顔をガンドで撃ってやりたいわ……。

「それより、君があの最優と名高い、セイバーかね？」

「うん、そだよー。貴方は？」

「……アーチャーだ。さっき私のマスターが呼んでいたろ？」

「にはは、まぁ聞いてたけどね。何々？その怖い殺気は、俺とやろうっての？良いよ？相手になるよ？」

「止めろセイバー、戦わなくて良いって」

「うぇーい」

な、何なのかしらこの空気は……こうしてサーヴァント同士顔を合わせているのに、どうしてセイバーは……。
ていうか小っちゃ！？あんなのがセイバーなの！？

「それで？衛宮君に聖杯戦争の事を説明すればいいのかしら？」

「あれ？何々、してくれるの？あざまーす」

「お前、そんな事頼んだのかよ？」

「うん、だって説明すんの苦手だし、めんどくさいし」

……こんなサーヴァント、ありなのかしら……。

番外編　もしもアニスがｆａｔｅ／ｓｔａｙ　ｎｉｇｈｔに転生したら（後書き）

実際、因果の逆転を凍らせただけで防げるのか？

魔槍なのに……まぁ、ごめんなさいです

こういうの書くの楽しいです

たぶん一番筆のノリが良かったかも知れま……いや

次のフェイトの話の方が、書いてるのは面白かったな

やっぱ違いました

さて、ここまで読んでくださりありがとうございました

番外編　アニスとフェイト&アルフ、料理を作ろう（前書き）

これで早三つ目の番外編

たぶん俺は二日後に戻ってきますね

たぶん今頃は京都かと

食べ歩きとかしちゃってる感じですかね

それでは、番外編始まります

番外編　アニスとフェイト&アルフ、料理を作ろう

アニスサイド

「えぇい！育ち盛りの子どもが冷凍食品ばかりを食べちゃいけません！そんな事、アニスお母さんは許しませんよ！そしてアルフさん！ドッグフード食ってんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！」

いきなりの怒号乙。
ただ今フェイト宅にお邪魔しております。

どういう経緯でこうなったか、軽く説明して進ぜよう。

～～

今日の朝、俺は普通に散歩していたんだ。
暇だったし、アンクはバイトで居ないし。はやては週に一度のリハビリの日。
シグナムは道場で剣道の指導、ヴィータはザフィーラを連れてゲートボールに。
シャマルははやての付き添いに……。

みんな俺を置いて放置プレイなんだもん！
まぁ、寝てた俺が悪いんだけどな。

んで、暇だったから散歩してたんよ。
そしたらちょうどフェイトと会ったんだ。

「あ、アニス」

「おー、フェイトちゃん。お久しぶりですね」

「そうだね（また会えた！今日も可愛いー……）」

……何だろう、そこはかとなく寒気がしたんだが……。
ま、まぁ、気のせいだろう。

「それよりも、こんな所で何してたんです？」

「あ、今日もジュエルシード探しだよ。どうにもサーチャーじゃ不十分みたいで（あぁ、今日の格好もまた可愛い、何でそんなに似合ってるの？）」

「そうなんだ。大変なんだねー」

「まぁね。それよりも、アニス何か痩せたね。ちゃんとご飯食べてる？（心配だ、前に会った時よりも痩せている気がするよ……心配だ）」

「あはは、ちょっと最近、体調を崩しちゃってね。それでしばらくご飯が通らなかったんだよ。でもま、もう治ったから良いんだけどね」

「そうなんだ……良かったぁ」

「ありがとね、心配してくれて。んじゃ、俺はもう行くよ。フェイトちゃんの邪魔になっちゃうだろうしね」

俺はそう言って通り過ぎようとしたが。
フェイトが俺の手を掴み、俺の行動を止める。

「ど、どうしたのかな？フェイトちゃん」

「あ、あのね……め、迷惑じゃなかったらで良いんだけど……マンションに遊びに来てくれる……かな？」

「……ふぇ？」

何だこの子いきなり……。
何です？誘拐ですか？お持ち帰り何ですか？

「えっと、ジュエルシードを探すのでは？」

「き、今日はもう終わりだよ。うん、終わり終わり」

……さっき探してる言うとったやんけお主。
でもま、良いけどさ。どうせ暇だし、何もやる事ないしね。

「まぁ、良いけどさ」

「……本当に？」

「うん、良いよ。俺も暇だしね」

「じ、じゃあ、行こうか……」

恥ずかしいなら誘わなきゃ良いのに。

でも、原作よりも明るい性格になってるから、俺としては嬉しい限りだよ。
あ、でもアルフが何て言うか……はぁ、先が思いやられるなこりゃ。

「あいよー」

とまぁ、こんな感じでフェイトの家にお邪魔する事になったんだ。

「お邪魔しまーす」

うむ、やはりデカイなこのマンション。
前世でもこんな良いマンション何かはいって事もねぇよ。

「あれ、靴がある……親居るの？」

「ううん、親は居ないよ。使い魔の靴だよ」

むぅ、すまんなフェイト。
こうでも言わんと怪しまれるのでな……。

「フェイトも使い魔居るんだ」

「もって事は、アニスも？」

「うん、何時も狼の状態で待機してるけどね」

「私の使い魔も狼何だ。名前はアルフって言うの」

「うちのはザフィーラって言うんだ。ガタいが良くて、カッケェ奴だよ」

「へぇ～。あ、立ち話も何だし、中入っちゃおうか」

「だねー。じゃあ、上がらせてもらいます」

俺は靴を脱ぎ、そのまま上がる。

はぁ、どうしてこう……この世界の主人公って金持ちとか多いんだろうか。

いやでも、はやては違うか……。

なのはは……まぁ、意外に金持ちだろう……あんな儲かりようだとな。

アリサにすずかも、あいつらは何なんだ。
社長令嬢？……誘拐とかには気を付けるんだぞ……。

何て事考えていたら、いつの間にかフェイトが部屋に入っていたので、俺も後に続く。
って、中広っ……。

「ただいま、アルフ」

「お帰りフェイトー、ジュエルシードは見つかったか……い……」

アルフは何かヘトヘトの状態でだれていた。
そんで、こっちを見た瞬間固まった。

「……フェイト……誘拐はいけないよ……」

「ゆ、誘拐じゃないよ！？」

「……ボク、誘拐されちゃったの？」

「アニスも何言ってるの！？」

何となく乗ってみた。
まぁ、アルフは本気で言ってるけど、俺は冗談で言う。

「お姉ちゃん、お母さんこっちにいるって言ってたよね……？」

「……フェイト、自首しよう……」

「だ、だから違うよ！アニスも冗談は止めて！」

「あはは、ごめんごめん。フェイトちゃんが面白くてつい」

俺は両手を合わせてごめんとジェスチャーを加えながら謝る。
いやぁ、フェイトが可愛すぎてついやっちまった。

「し、紹介するよ……この前知り合ったアニス」

「どうも、フェイトとは友達の立ち位置で良いのかまだ分からないアニスです。……んで、どうなの？」

「えっと……友達……だよ」

「あのフェイトが……友達を作るなんて……これはめでたい出来事だよ！」

そんなに驚く事か。

……いや、驚く事か、だってあのフェイトだしな。

なのはと友達になったときだって、こいつ泣いてたしな。

まぁ、良いけどね。

「それより、今日はどうして呼んだのさ？それに、探し物は？」

「あ、今日はもう切り上げたんだ。見つかりそうにも無かったし……それにアニスに会えたし……」

最後の方はぼそっと言ったので聞き取れなかった。

でも、アルフには離してないのな。俺が魔導師だってこと。

「えっと、アニスだっけかい？私はアルフ……フェイトとは……えっと、そう！姉妹だよ姉妹！」

「あはは、別に誤魔化さなくても良いですよ？俺も魔導師ですし、

アルフさん、フェイトの使い魔でしょ？」

俺がそう言うと、アルフは驚いた顔をするが、少し腑に落ちない顔をする。
まぁ、魔力の事だろうね。

「……アンタもジュエルシード狙いかい？だとしたら、容赦はしないよ？」

「あっはっは！ジュエルシード何て興味ないですよ。俺はただ逃げて来ただけなんですから。それに、ジュエルシードが落ちてきたのは、俺がこの世界に来てからかなり後ですよ？」

「逃げて来た？……誰からだい？」

「ア、アルフ……それは流石に駄目だよ……」

「別に俺は気にしてないし良いよ？まぁ、簡単に言えば、俺を殺そうとして来た過激派だよ。そいつらから逃げるために、この世界に来たんだ。だから、俺はジュエルシードのは興味は無いよ」

……うむ、空気が、重くなってしまった……。
どうしよう……。

「……そうだったのかい……いや、疑って済まないね。この世界にもう一人魔導師が居て、その子もジュエルシードを探していて、最近少し躍起になってるんだ……」

「いえいえ、誤解が解けて何よりです」

「それより……アンタ自分の事俺って言ってるけど、男なのかい？」

「あ、はい。そうですよ？」

「ふぅーん……世の中には不思議な男も居たもんだね」

「あれ？驚かないんですね」

「まぁ、私は鼻が良いからね。少しは気づいてたさ」

……うちのザフィーラは気づきませんでしたが何か？

つか、もう昼か……お腹減ったな。

「それよりもフェイトちゃん、もうそろそろお昼だし、何か作ってあげようか？」

「あ……確かにそうだね。でも悪いよ、アニスにご飯を作らせるなんて（新婚さんみたいで良いかもしれない！アニスがお嫁さんで私が……キャッ！私ッたら……）」

「ううん、気にしないで。遊びに来させてもらったんだから、それ位したいしね」

「でも、私らいつも冷凍食品しか食べてないよ？私はこれだし」

そう言って、アルフさんはドッグフードを取り出す。
………おいおい……これを某正義の味方さんが見たらなんて言うか……。
いや、この際言ってしまおう……これは酷い……。

んで、冒頭に戻ります。

～～～

「良いですか！食とは体の資本！それを怠るとは何たる事ですか！

それにフェイトちゃん！貴女は育ちざかり伸び盛りなのですから、ちゃんとした栄養を取らないと俺みたいになりますよ！？良いんですか！１８超えてもロリロリな身長で！それにアルフさん！貴方は確かに狼ですが、ドッグフードはいけません！せめて肉を食べてください！たんぱく質を取ってください！！脂肪を取ってください！そうしないと……どうなっても知りませんよ？」

最後に二人を脅して説教を終わらす。

……ハァ、全く……こんなひどい食生活だったとは思いませんでしたよ。

「「ご、ごめんなさい……」」

「いえ、そんなに怯えなくても……ハァ、仕方ありません……。お昼ご飯は作りますら、これからは自分達で料理してくださいね？」

俺は二人にそう言い、キッチンの方に行き、食材を確かめる。

……中には何も無かった。

あったんは飲み物と……醤油……。

これは先ず、買い物から覚えさせないといけませんね……。

～キング・クリムゾン！～

はい、あっちゅーまに買い物を終わらせました。
買い物中、フェイトがずっと恍惚の笑みを浮かべていたのはスルーします。

（あぁ、ホントに新婚さんの気分だったよ……えへへ……アニスって、ホントに可愛いな～。野菜を選んでる真剣な目……いつもとは違うギャップがまた……）

……おっと、悪寒が……どうしてでしょう。
最近、悪寒が走るようになって来ました……。

「さて、これから作る料理は簡単です。毎日……とは、流石に行きませんが、大体はこれを基本に作ってもらえれば大丈夫だと思います」

俺は今、二人に料理を教えている。
俺が作る……と言ったが、流石に俺が作って、これからは自分たちで作って食べてくださいじゃ無理なので、粗方料理の仕方だけは教えておきます。

「良いですか？先ずは食材を切ります。ここで、余り包丁と、抑える手を近くにし過ぎると指を切ってしまうので。手は猫さんの手なのです！にゃーにゃーなのです！分かりましたか？」

（アニス……それは反則だよぉ……にゃーにゃーって……あぁ、もう可愛すぎるぅ！）

「あ、アルフさん上手いですね。狼ですけど」

「ほっときな！」

「あ、違いますフェイトちゃん。ここはこうです」

俺はフェイトの手を軽く掴み、動かす。
良く小学校の先生とかやるよね、こういうの。

「あ、ここはこうなんだ（アニスの小っちゃな手…プニプニしてて気持ちいい……）」

「はい、良くできましたね……さて、次はその野菜を炒めていきます。炒める手順は、火が一番通り難い者からです。ですからこの場合だと、人参ですかね。その次に玉ねぎ、その次にピーマン。最後にお肉……といった具合です。これはどの料理でも共通ですので、覚えていて損は無いでしょう」

うむ、これで一品の作り方は覚えただろう……。

後は味噌汁、魚の焼き方、ご飯の炊き方を覚えさせれば……後は自分の手で違う料理は作れるだろう……。

あ、ボスー！またお願いします！

～キング・クリムゾン！！～

「はい、できました」

テーブルに、肉野菜炒め、お味噌汁、ご飯、魚を並べていく。
和風の料理で攻めてみた。

「うわぁ、美味しそうだねフェイト！」

「そうだね、アルフ」

「さ、冷めないうちに食べちゃいましょうか」

俺の言葉に二人は反応し、皆すぐさま席に着く。
さて、ここは日本ならではの挨拶を。

「それでは、いただきます」

「えっと……いただきます」

「……いただきます」

うむ、宜しい……。
さて、お味の方は……うむ、普通だ。普通だが、これがまた美味しいのだ。

「美味しい！」

「うん……美味しい……」

「それは良かった。さて、これから自分たちでご飯を作るわけなのですが。困ったことがあったら電話してください。流石にこっちの世界の通信端末機は無さそうなので、この家にある電話で、俺の携帯に電話してください。電話番号、紙に書いておいて置きますので」

「ありがとう、アニス」

「いえいえ……それでは、食べちゃいましょうか」

皆で囲って食べるのが良い。
それは日本だけじゃなく、万国共通なのだ。
思う。

世界の共通言語は、英語じゃなくて笑顔。
その笑顔が多く出る場所は……きっとこの食卓なんだろうと、俺は

美味しいご飯を食べながら、家族、友人、愛人などと語り、酒を飲み、笑う。
そんな、誰もが羨む世界に……なってほしいな……。

フェイトにも……そうなってほしいですね。

ま、当分は、俺がなってあげますよ。
はやてたちと食べるご飯も良いですが。これはこれで、また違った楽しみがあって良いですね。
ご馳走様でした。そして、お粗末様でした。

番外編　アニスとフェイト&アルフ、料理を作ろう（後書き）

一番書いてた中で楽しかった

フェイトは壊れた方が可愛い

だからキャラを壊した

反省はしている、だが後悔はしていない！

故に、私は心から謝らない！

あ、ごめんなさい！調子乗りました！

ここまで読んでくださり、ありがとうございました

番外編　もしもアニスがとある魔術の禁書目録の世界に転生したら（前書き）

はい、もうストックが突きました

今頃私はディズニーランドでエレクトリックカーニバルを見てる最中だと思われます

それでは、番外編始まります

番外編　もしもアニスがとある魔術の禁書目録の世界に転生したら

アニスサイド

「ふわぁ～……ねむっ……」

「何だぜい何だぜい。今日から夏休みだっていうのに、そのテンションは」

「……ふぁ～……土御門～……貴方は補習要員なのですから、夏休みは毛ほどしかないと思うのですが……」

「それ言っちゃいけない約束なんだにゃ～」

そう言って、土御門は机に突っ伏す……。
くはは、ドンマイだね。これが真面目にカリキュラムを積んでる奴と飛んでない奴の差なのだよ！
まぁ、俺も小萌先生の補習は受けたくはないので真面目に受ける。

「何やアニスたん、やっぱ補習は嫌な口何か？」

「勿論。補習何て受けたくないのです、めんどくさいのです。だか

ら普段から真面目に取り組むのです。嘘です、勉強なんてあんましてません」

「だろうにゃ～。なんたってアニスは、ウチの学園が誇るレベル５何だからにゃ～」

そう、俺はこの学園都市ではレベル５なのだ。
序列は……まぁ、気にしないで。

「別にレベルなんてどうでも良いんだけどね～。まぁ、元は原石だったし、興味もないよ」

「あはは、流石はアニスたんや。レベル５なのにそれをどうでも良いと一蹴り。カッコェェなぁ。いや、カッコかわぇぇなぁ～」

「それにしても、今日も当麻は遅刻？もう時間になるけど」

「ま～たどっかの誰かさんを助けて、急いでこっちに向かってきてるに決まってるぜい」

「ホンマ、アニスたんはカミやんの事が好きなんやね～」

「うん、大好きだよ！」

《どうしていつも上条ばかり……》

クラスの息が合った瞬間だった……。

「だって、当麻弄ると楽しいじゃんｗｗｗ」

「あぁ、それは確かに分かるなぁ～」

「おっ、噂をすればカミやんのお出ましや」

廊下からけたたましく足音が聞こえてくる。

どうやらホントに来たようだ。この物語の主人公が。

「よっしゃっ！今日は遅刻しなかったぜ！！！」

「とっうまー！」

ドゲシッ！

「ぐっは！！」

俺は当麻に毎日恒例のフライングボディープレスをお見舞いする。

「ア、アニス！？」

「ふはは！どうだ我（オレ）のフライングボディープレスの味は！！」

「むしろ当たってはイケナイ物が当たって、ゲバァァァ！」

「俺は男だと言ってんだろうが！」

俺は当麻の右腕に関節技を掛ける。
どうだ！痛かろう！

「ギブギブ！折れる！腕が折れるから止めてぇぇぇぇ！上条さんの関節はそっちの方向には曲がりませんよぉぉぉぉぉ！」

「あっ、取れた」

「何が！？何が取れたんです！？俺の右腕ぇぇぇぇぇぇぇ！！」

「土御門ー、青髪ー。ボンドか瞬間接着剤無い？くっつけないと」

「だから何が取れたんだぁぁぁぁ！不幸だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！」

って、冗談だから暴れんなって！
あっ、こら！ワイシャツのボタンに手を掛けるな！

ブチィ！！

「あっ……」

「へっ？」

パラパラ……。

ま、まさかの……ワイシャツのボタン全部取り……。
さ、流石上条クオリティ……。

「あちゃー、ボタン全部切れちゃった。ちょっちおふざけが過ぎち

やったなこりゃ」

『うぉぉぉぉぉ！』

『コラ男子！そっちを見てんじゃないわよ！』

うっは、男子うぜぇ。
っておい当麻……てめぇも何興奮してんだ。

「はーい、みなさん静かにしてくださーいって……アニスちゃん！？どうしたんですそのワイシャツ！？」

あ、タイミング悪く小萌先生が来ちゃった。
まぁ、俺が今回悪いのでちゃんと言っとくか。

「当麻とじゃれてて全部千切れ飛びました」

「と、取り敢えずアニスちゃんはジャージに着替えるなりしてください！それと、少しは恥じらいを持ってですね！」

「いや、男子に言っても意味ないんだすがね……」

「と、とにかく！早く着替えてください！」

「はーい」

まぁ、仕方ないし着替えるか。
っと、確か今日は体育がちょうどあった日だな。
良かった、体育があって。さて、着替えるか。

「ちょっと待ってください！アニスちゃんは何処で着替えようとしてるのですか！」

「いや……ここ？」

「だからアニスちゃんは自覚してください！」

「良いぞアニスー！もっとやれー！」

「男子！煽るんじゃない！」

「アニス君、私達が壁になるから、早く着替えちゃって」

「そこは男子の役目だろ！」

「黙ってなさい変態男子！あんた達が壁になったらアニス君が可愛そうでしょ！」

「当麻ー」

「アニスちゃんはその恰好で上条ちゃんに近づいちゃいけません！！」

とまぁ、こんなんが俺の日常です。
とあるの世界に転生してから、毎日こんな感じ。
当麻とは小学校からの付き合いでさ、そん時からもうレベルは違ったけど、俺は学校を無理やりランクを落としたのだ。

レベル5がランクの低い学校に、何て最初は思われてたし言われてた。
だって、興味も無かったし、レベル5だからって罰別に、能力を高めようだ何て思わないしな。

それに……序列一位何て一方通行（アクセラレータ）にくれてやった。
つまんないしな。だって、あいつの反射何てギガ・ラ・セウシルで返せるし。反射を反射でな。

まぁ、そんな生活を１６年も続けてるのだが……身長が一向に伸びないのが悩みです
９５？しか無いのですよ。

まぁ……十中八九あの神様のせいだろうな……今度会ったら殺す。
しかも、俺は皆の騒ぎ用から察するに、女顔だ。

まぁ、気にする事はない。俺だってついてるので、男子の気持ちは痛いほど良く分かる。
だけど告白は止めて欲しい。

まぁ、そんなこんなで、高校生になってからの初めての夏休みなのだが。
まぁ、まだ夏休み一日前ってところだ。

もう少しで原作が始まる……まぁ、明日の朝インデ……なんたらさんがベランダに干されてる感じで登場するんだろうな～。

まぁ、明日は部屋で一日中寝て、夕方辺り、当麻が補習から帰ってきた時に合流して部屋に入れろやみたいなことを言えば何とかエンカウントできるだろう。

つう訳で……。

キング・クリムゾン！！

「あ、当麻ー！」

「おー、アニスじゃねぇか」

「ちょっと！アンタ聞いてんの！？」

おや、そこに居るのは御坂さんではありませんか。
序列第三位の電気使い（エレクトロマスター）。

「って、あんた誰よ。アンタの妹？」

「あん？んな可愛い妹を持った覚えは上条さんありませんよ。こいつはクラスメートのアニスだ。ついでに男」

「やっほー、アニスでーす♪」

「……はっ？アンタ何言ってんのよ。どっからどう見ても女子にし

か見えないわよ？」

「いや、もし女子だったら普通私服はジャージとかじゃなくて可愛い服とか着たりするだろうが」

「残念。俺はホントに男の子なのでしたー♪しかも当麻と同い年だよ？」

「……はは……嘘よ……ｏｒｚ」

あらら、何かガクッと落ち込んじまったけど大丈夫かな。御坂のみーちゃん。

……何か某動画投稿サイトの歌い手みたいな名前だな。

「つうか、どうしたんだ？お前がここら辺に居るなんて」

「ん、当麻の家にでもお邪魔しようかなって思ったけど。お前補習だったじゃん、だからここら辺で待ち伏せしてた所存であります」

「ははは、そりゃごめんな。まぁ、汚い部屋だけど、良いぜ？」

「えへへ～、じゃあ行こうか」

「おぅ！」

俺と当麻は再び歩き出す。
勿論、御坂のみーちゃんを置いてだ。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～

「……いねぇか……」

……さっきから当麻はキョロキョロしてまんねん。
まぁ、イン……ペリアルドラモンさんを探してるんだろうけどね。
あえて気づかないふりをする。

「ふんふふーん♪久々の当麻の部屋だー。楽しみだなー」

「お前はいつもそうだよねー。俺の部屋に来たって何にもねーぞ？」

「当麻が居るじゃん。当麻と居るだけで楽しいっつの」

「なっ……ったく、どうしたそうこっ恥ずかしい台詞をサラッと言えるんだか」

てめぇにだけは言われたくねぇよ、このフラグメーカーめが。
っと、エレベーターが止まりましたなっと……。

「ん？ねぇ当麻、何か清掃ロボがガンガンやってるんだけど」

「おっ……もしかして……ちょっと見てみるか。ちょうど俺の部屋の前だしな」

とうとう魔術師戦開始か……。
どれ、ちょっくら捻ってやるか。

「おい！そこで何やってんだよ。また行き倒れたか！？」

何か、嬉しそうですねアンタ……。
なーんか、嬉しそうですねアンタ……。

「……あ……？」

「……これはまた……何ともスプラッタな……」

「やっ……やめろ！」

当麻は急いでインデ……ペンデンスの所に駆けより、すぐさま安否を確認する。
まぁ、まだ息はしてるし、生きてるな。

「何だよこれ!?ふざけやがって！一体どこのどいつにやられたんだ！」

「退いて当麻、治すから」

俺は当麻を避けさせ、サイフォジオを唱えようとするが。

「うん?僕達「魔術師」だけど?」

ある男の声で、それはさえぎられた。
まぁ、タイミングを計ったように出てきよるわな。

出て来たのは、魔術師ステイル＝マグヌス……。
赤髪で、目元のバーコードが着いていて、１４歳の癖にヘビースモーカーで、身長が２メートル超えてる……少し分けろやこら！

「わざわざ網に掛かりに戻ってくるとはね。忘れ物でもしたのかな？」

「……随分とまた、厨二くさい奴が出て来たものだ……。んで？てめぇは誰だよ」

「言葉を慎みたまえ。君みたいな子どもなんて、簡単に殺せちゃうんだからね」

ステイルはニヤニヤしながら言う。

……なぁ、ここでこいつ殺しても良いかな？このヘビースモーカーをよぉ。

「それにしても、随分とはでにやっちゃって。神裂が斬ったって話は聞いたけど……ま、死にかけだろうと何だろうと、回収はするけどね。それの持ってる１０万３０００冊の魔導書は」

「……魔術師だか何だか知らねーが……こんな小さい女の子によってたかって……てめぇら！！！大体、こいつがぢジブ魔導書なんて持ってるんだよ！？」

「「完全記憶能力」という言葉を知ってるかな？あるさ、魔導書は

……禁書目録（ソレ）の頭の中に。君なんかには意味が分からないだろうけど、そいつを使える連中の手に渡ると少々厄介な代物なんだ。だからこうして僕達が保護してやりに来た、と」

「ほ……ご？」

「そうさ、保護だと。ソレに幾ら良識や良心があったって、拷問と薬物には耐えられないだろうしね。そんな連中に女の子の体を預けるなんて考えたら、心が痛むだろう？」

「めぇ……！何様だ！！」

くはは、俺様空気。空気ＺＩＰ……違うか。
まぁ、良いけどね。

「ステイル＝マグヌスと名乗りたい所だけど。ここはＦｏｒｔｉｓ９３１と言っておこうかな。僕達魔術師は魔術を使う時に真名を名乗ってはいけないと言う因習があってね、魔法名……」

そう言って、ステイルはタバコを地面に落とし。
そのタバコが大きな炎に成り代わる。

「殺し名、かな。巨人に苦痛の贈り物（Ｐｕｒｉｓａｕｐｉｚ Ｇｅｄｏ）を！！」

「うっ……わあ！！うわぁぁぁぁぁ！！」

ちょっ、俺を巻き込むなし！！

仕方ない、セウシルで自分を守りますか……。

そして、俺と当麻を、大きな炎が包んだ……。

「ふん、やりすぎたか？まあいい、夏休みとやらで住民は残っていないようだし。ご苦労様、残念だったね。真正面から向かって来た蛮勇（ゆうき）は認めて上げるよ」

「だーれがご苦労様、だって？」

うむ……どうやらあいつも無事に防げたらしいね……。

まぁ、俺も何だけど。

「どうも……このバリアを壊すには……パワーが足りねぇなぁ……

えっ？魔術師さんよぉ……」

んな炎何回出そうが、俺の敵じゃねぇ！

「やれるか、当麻」

「あぁ、お前こそ」

「俺を誰だと思ってるの？」

「学園都市に八人しかいないレベル５……その中の元最強様、だろ？」

「はっ、分かってるじゃん……んじゃ、行くぜ！」

「おう！！」

こうして、俺＆上条ＶＳステイルの戦いが、今始まった。

番外編　もしもアニスがとある魔術の禁書目録の世界に転生したら（後書き）

さて、一体この続きは何時書くのでせうか？

俺には分かりません

また気が向いたら、書いてみようかと思います

さて、明日は俺はいるんで、ガシガシ本編進めますよ！

ここまで読んでくださりありがとうございました

第三十八話　何か温泉に来ちゃいました（前書き）

おっす！オラディアボロ！

久しぶりだな！

オラ、久々の執筆だからワクワクすっぞ！悪い意味で

はい、つう訳で帰ってきました

この狂気のマッドサイエンティスト、鳳凰院凶真がな！

ふぅーっはっはっはっはっ！

はい、本編始まります

第三十八話　何か温泉に来ちゃいました

最初はこの一言で始まった。

「はっ？温泉」

「そうだ、温泉だ」

「……何でまた温泉なのさ？」

「士郎が、お前も誘って全員で温泉に行かないかって言ってきて、お前に聞いてみてくれってうるさいんだ」

「……いやさ、俺は良いんだけど……シグナムやはやてちゃんは無理なんじゃ……」

「そう、そこが問題なんだ」

俺とアンクははやてとシグナムを見る。
まぁ、主にシグナムの方に視線を重視する。

「ウチは気にせんよ？」

「私は主に着いて行きます」

ほら、これだもん。
こいつは付いてくる気満々だし……さて、どうしたものか……。

～～～

「………………」

どうも、アニスたんでございます。
今日は大変お日柄もよく、良い温泉日和ですね。
まぁ、それは置いといて……これは一体どういう事なのでしょうか？

「～～～～♪」

「……あの……なのはちゃん」

「何？」

「……何故俺はなのはちゃんの膝の上に座っているのでせうか？」

ただ今なのはの膝の上に座っております。
どうしてこうなった……。

「やっぱりアニス君は軽いの」

「答えになってません。そしてそこの二人！羨ましそうに見てないで助けてください！」

何なんだ！その物欲しそうな眼は！
俺は動物じゃねぇ！ユーノでも膝に乗っけてろ！！

あ、因みにシグナムは簀巻きにしてしまっておきました。
後、ヴィータ達が見張ってくれるそうです。

シグナムは心配性です、俺はそんなに軟じゃありません！
……いや、呪いがあるから軟なのか……。まぁ、最近は吐血はしてないし。収集も順調。
たまの羽休みと考えて、今回は温泉に浸かろう。

それにしても……ファーストキスがシグナム……か。

こう……今考えると、何も覚えてないのが恨めしいような、残念なような、恥ずかしいような、悲しいような……。

これはキスとカウントして良いのだろうか？
勘定に入れたくは無いけど、それだとシグナムが可愛そうだし……、うむ、めんどくさい。

「なのはちゃん、どさくさに紛れて触ろうとするのは止めなさい」

「……ちっ……」

舌打ちは止めなさい。その年で変態になりたいのか？
はやてのようになるぞ？後恭也、後ろの車からこっちを睨んでんじゃねぇ。
大人げないぞシスコン。

て言うか、なのはなんも悩んでないのかな？
この話の前に、フェイトにはあってるはずだけど……。
もしかして俺で悩むまいとしてる？それとも、これから？あぁ、止めなさい。せめて降ろしてください。

まぁ、着く前辺りで悩みだしましたけどね。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「嫌だぁぁぁぁぁ！行きたくなぁぁぁぁぁぃ！！」

何故かダメギかしてる俺です。

ってちょっ！？離せ！えぇい！貴様らなんぞに俺の柔肌を見せてたまるもんですか！

だから！引っ張んな！

「俺は男だって！女湯に何て入るわけにはいかない！！」

「駄目なの！アニス君は私達と同じお風呂じゃないと駄目なの！」

「だから！俺男！なのはちゃん女！分かった！？」

「でもそれだとそっちの所で死人が出ちゃうよ！」

「どういう意味だそれは！人を殺戮兵器みたいに言うんじゃあえりません！！それと士郎さーん！恭也さんが木刀持って俺に襲い掛かろうとしてまーす！！」

ドガァッ！！

ズルッズルッ……。

……何と手際の良さ。
一発で熨して男湯の方に引きずって行った……流石士郎さん。

「アンク助けっ……っていねぇ！？」

あいついねぇ！？
使えねぇ！？何でいないの！？おかしくね！？

「アンクさんなら温泉には興味が無いみたいだから、部屋で待機してるの」

「来た意味ないじゃんあいつぅぅぅ！！アンクのバカー！！いやぁぁぁぁ！」

アニス、誘拐。
その時脳裏に過ったのは、今までの明るい生活！

「誰だ！カイジみたいな地の文入れた奴！出てこーい！」

ズルッズルッ……。

こうしてー、アニスはー、連れて行かれたー……。

「しくしくしくしくしく……」

「うわー……」

「これは……」

「反則かも……」

どうも、辱めを受けましたアニスです。
もう何回目の挨拶何だか分かりません！……アニスです……。

「しくしくしくしくしく……」

「ア、アニス君……そんなさめざめと泣かなくても……」

「誰のせいだと！誰のせいだと思っているんだぁぁぁぁ！何で俺が女湯に入らにゃならんのですか！何でこんな事になっているのですか！せめて某試召戦争に出てくる人みたいに何か新しい湯とかあれば良かったのに！！」

俺の精神はゲシュタルト崩壊寸前！
マジで死んじゃう5秒前！

「はぁっ……このまま男湯に突貫するしかないか……って、桃子さん？」

何か桃子さんが俺の両肩を掴んで、マジな目で俺を見てるんだが……。

「アニス君、自分の顔を……いえ、自分の姿すべてを考えて見ましょう。アニス君が男湯に入ると、凄く大変な事になるの」

「大変な事……ですか？」

「そう……アニス君は男の子だけど……顔は女の子そのもの……いえ、それ以上よ……そんな子が狼の男湯に行ったら、どうなるか分かる？あそこは狼の巣窟よ、アニス君じゃ絶対に生き残れない……」

「こ、こぇぇ！男湯こえぇ！」

何か俺の口調がよつばみたいな感じになってるのはなんでだろう？
まぁ、男湯はそんな所じゃないって信じてる。

「だから、アニス君は女湯で我慢してね？」

「男湯行って来まーす」

ガシッ！

ズルッズルッ！

俺は犠牲になったのだ……。
て言うか助けてくださぁぁぁぁい！！

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～

「うぇ～い……きんもちいい～……」

「アニス君、お年寄りみたい」

「順応はやっ」

「あはは、アニス君らしいね」

温泉浸かりなう。
どうして露天風呂ってこんなに気持ちが良い物なのだろうか。今の俺には理解できない。
だって、ただ外にお風呂を沸かしただけだよ?それは凄いと思わないかい?

「それにしても、アニスって髪相当長いわね。切らないの?」

「切っても良いんだけどね~。アンクがうるさいんだー。だから未だに髪の長さは更新中だよ。最近は地面に着きそうで着きそうで。せめてなのはちゃん達と同じ身長だったら大丈夫なんだろうけど」

「ふぅーん」

「何さ、その意味深なふぅーんは……」

「アニス君って、自分で髪手入れしてるの？」

「いや、特別な手入れはしてないよ？ただ簡単にシャンプーしてリンスしてるだけ」

「羨ましいわ～」

「うわっ、いつの間に桃子さん……」

何かいつの間にか横に居たんだけど。
へ？それよりも恥ずかしくないのかって？いや、だってみんなタオル巻いてくれてるし。

「私もアニス君みたいにサラサラの髪になりたいな～」

「今でも十分サラサラだと思いますがね」

「あら、ありがとう」

まぁ、ホントの何だけどね。
だってこの人達って、歳とればとるほど若返る戦闘民族でしょ？
え？違う？ってですよねｗｗ。

「それじゃあ、そろそろ私達はあがるの」

「そうね、あんまりつかり過ぎちゃうとのぼせちゃうし」

「だね」

「あれ？三人とも上がっちゃうんだ。それじゃあ、俺も体洗ったらすぐあがるよ」

「分かったの。それじゃあ一足先に部屋に戻ってるからね」

「あいよー、です。さて、体洗っちまうか」

俺は湯船から出て、近くの椅子に座り、タオルにボディーソープを漬けてわしゃわしゃし、体を洗う。
それにしても、ホントに痩せたな……。
アンクが気を利かせて、最近まで体調悪くて食欲が無かった云々って言ってくれなかったら今頃どうなってたか。

うむ、これからどんどん痩せこけていくのかな？
それはそれで怖いな。でも、食ったもんが血となって吐き出される

し、あんまり多くは食えない。
……はぁっ、サッサと収集しないとな。もう起源は残ってない。

早くしないとシグナム達が収集を始めてしまう……。
そうなる前に、俺の手で終わらさなければ。
俺はそう考えながら、身体を流す。

「さて、上がりますか……」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「いっやぁ〜、きんもちよかった〜」

《何かつやつやしてるなお前》

「何でそこで鈴口調になったのかは知らないけど、つやつやはするさ。温泉だし」

《そんなもんか》

「そんなもんだ。つか、目の前で見知った顔が居るのだが……」

何か言い合いしてんのかな？
それにしても……まぁまぁ、子供に単価斬るなよな……。

「あれ？三人とも何してんの？こんな所で立ち止まって」

「あ、アニス君」

「ちょっとこのお姉さんが……ね？」

「あ、アニス良い所に来たわね！何か言ってやんなさいよ！この人ったら！」

「アニスじゃないかい！久しぶりー！」

あ、アルフ……。
あぁ、ジュエルシードがらみで居るのですね。分かります。

「あれ？アルフさん、お久しぶりですね」

「そうだよー、ホントに久しぶりだよー！全く、何で遊びに来てく

れないのさ！」

「あはは、ごめんなさい。少し色々忙しくてですね」

「まぁ、この際良いさ。それにしても、アンタこの前より痩せて無いかい？ホントに心配になって来たよ」

「いえいえ、心配ないですって……って、三人とも何でそんな目が点になってるのさ？」

何か、凄いシュールなんですけど……。
まぁ、どうでも良いか。

「あの、お知り合い？」

「あ、うん。ちょっとこの間知り合ってね」

「そうなんだ……」

「あ、そうだ！アニス、ウチの連れに会っちゃくれないかね？」

「連れ？……あぁ、あの子ですね」

一応お茶を濁しとく。

なのはには気づかれて、俺が一応関係者ではない事を装っておく。

「ごめん、ちょっちこの人の連れに会ってくる。すぐに戻ってくるから！」

「うん、分かったよ。それじゃあ、行こうか」

「すずか！アンタそれで良いの！？」

「いってらっしゃーい」

「なのはまで！？う～、あぁもう分かったわよ！行ってきなさい！」

「ありがとう、アリサちゃん。それじゃあ行きますか、アルフさん」

「そうだね。それじゃねー、ちびっ子達」

こうして、俺はフェイトに会いに、アルフに着いて行くことにした

のだった。

〜続く〜

第三十八話　何か温泉に来ちゃいました（後書き）

いやぁ、疲れた

何か久々にパソコンに向かいました

それにしても、もう何か買い込み過ぎてわいや

まぁ、楽しかったから文句は無い

今日は早めに就寝したいので、ここで終わりにしたいと思います

ここまで読んでくださりありがとうございます

第三十九話　ギャグからシリアスに発展する事ってあるよね（前書き）

はい

もう何か

疲れて死んだように今日は寝てました

修学旅行の振り替え休日で

朝十時過ぎまでぐっすり寝ました

そして、眠りが少し浅かったのでしょう

夢を見ました……

某幻想郷に出てくる普通の魔法使いさんと

イチャコラする夢を……

魔理沙可愛いよ魔理沙

いや、何て言うか……全国の魔理沙ファンの皆様……

決してこんな夢を見たいと望んだわけではありません

だから殺さないでください

では、本編始まります

第三十九話　ギャグからシリアスに発展する事ってあるよね

あらすじ

友達と旅館に泊まりに来て、温泉から上がったら、アルフに会いました。

〜〜

「あの子ら、アンタの友達かい？」

「あ、はい。そうですよ」

「……そうかい……」

「どうしたんです？アルフさんらしくないですね」

何故こんなに俺とアルフさんが親しいかは。
番外編の方をご覧いただければと。
あれから何回かアルフさんとは交友を交わしております。

「……アニスは何も言わないのかい？」

「何がです？」

「私があの子らに……いや、あの子に絡んでた事に」

「……知ってますよ。なのは……あの三人の中で魔力がかなり高い子の事でしょ？」

「まぁ……ね……」

「アルフさんが何を思っているのか知りませんけど。俺はとやかく言う筋合いは無いですよ。俺はジュエルシード何て興味ありませんし、どうでも良いのです。例え、友達が魔導師で、フェイトちゃんと取り合いをしていても、俺にも口を出して良い権利何て存在しません」

これはマジな話だ。

なのはがやると決めた事に、手を貸す意味も権利も。口を出す権利も何処にもありはしない。

これはなのはの問題であって、俺の問題ではない。そして、これはフェイトにも言える……けど。

もし、フェイトがジュエルシードを集めることが嫌……って言ってくれたら、俺は全力でフェイトを助ける。
プレシアに良いように使われて、最後は捨てられるなんて。俺は是非としない。

でも、今助けようとしても、今の俺じゃ無理だしな～。
いや、攻撃とかなら魔法を見れば全て分解できるからどうとでもなるけど、フェイトん家の座標しらねーしな。

「そうかい……」

「別にアルフさんが気にする事でもないでしょうに」

「一応アンタの友達じゃないかい、少し負い目もあるんだよ。まぁ、今感じてる事だけどね」

「みぃー、それは今日この場に俺あいなければ良かったと言う意思表示と取っても良いのですか？」

「ち、違うよ！それはアンタが勝手に感じてる事じゃないかい！」

「あはは！冗談ですよ冗談。それよりも、アルフさん達が止まって

る部屋ってここですか？」

「あ、そうだよ。遠慮なく入って入って」

いや、遠慮も何も……ここアンタの家じゃねぇから。
まぁ、気にしないで開けて入ろう。

俺は戸を開けて中に入る……が。

「あれ？フェイトちゃん、居ないみたいですけど」

「あら……ホントだ……。う～ん、あれほど部屋で休んでって言ったんだど、まだ探してるのかね～」

「探してるって、もしかしてここら辺にジュエルシードが？」

「あ、そうだよ。ちょっとそこら辺を探してくるから、アニスも探してくれないかい？」

「はーい」

俺は仕方ないので、散策を開始する。
つか、旅館用のこの和服？子ども用でも凄く大きいので歩きづらい。
ちくせう、こんな事だったらちゃんとした服着るんだった。
下がスースーするよ……って……スースーする？

「はわぁ！？スパッツ穿くの忘れてた！？あうあうあう……」

ヤバい……普通のパンツ穿いてきちゃった……。
ヤバい……恥ずかしい……スパッツ無いとどうしても恥ずかしい……。

「そ……それよりも、フェイトを探さねば……」

森の中に入っては見たものの……さて、何処に居るのでしょうか？
取り敢えず、木を揺すってみる事に。

ユサユサユサ。

「キャッ！」

……あれ？何か冗談で木を揺すったら当たっちゃった。
今の短い悲鳴、間違いなくフェイトだよね？

「だ、誰！？」

「ヤッホー、フェイトちゃん」

「ア、アア、アニス！？どうしてここに！？」

「いやぁ、今日は友達とここに泊りに来たんですけど。さっきアルフさんに会ってさ、フェイトちゃんが何処かに居るから探して会ってくれって言われたですから探してました」

「そ、そうなんだ……（あぁ……アニス可愛いよぉ……。今着てるのって、この世界の文化の服なのかな？サイズが合ってなくてブカブカだけど、そこがまた良い！愛くるしくて良い！）」

「それよりも、どうして木の上なんかに居たんです？」

「あの……サーチャー飛ばしてたんだけど、もう少し上の方にし掛けたかったのもあったし、少し場所を確認してたんだ（変な子って思われてないかな！？大丈夫かな！？）」

「やっぱりここにもジュエルアシードあるんですね……」

「うん……そうみたい（あぁ、シュンってならないで！私が絶対にジュエルシードを封印するから！被害無く封印するから！あの白い魔導師も蹴散らすから！）」

「……あの、そっちに行っても良いですか？」

「あ、うん！良いよ。（やった！アニスが近くに来る！こう木の上って狭いから、抱き着いちゃっても大丈夫かな？……いや、危ないからやめておこう。それでもしアニスが落ちちゃったら大変だ）」

何か上で葛藤したんですけどこの人。
……まぁ、フェイトが何考えてるか分からんので無視する事に。

「よいしょ……よいしょ……」

「大丈夫？（一生懸命に木に登ってるアニスも可愛い！！）」

「あう……ごめんなさい……これ以上登ったら、この浴衣？が着くずれしちゃいます。しかももう帯が取れて……どうしましょう……このままだと裸になってしまいます……」

「え、えぇ！？（は、裸……アニスの裸！み、見たい……凄く見たい……でも……ここではまずい……人目が気になっちゃうし……何

より他の人にアニスの肌を見られたくない！）」

「どうしましょー……」

「わ、私が下に降りるから、そのままアニスは手を放して！受け止めるから！」

そう言って、フェイトはそのまま木から降りて、俺の下に来る。
あんたすげぇな。結構この木高いのに、そのまま着地ですか。すげぇな。

「も、もう良いですか？」

「うん、大丈夫だよ！」

「わ、分かりましたー！」

そして俺は落ちたのだった。

ポスッ。

「っと……」

「……あうあう……すみませんフェイトちゃん、お手数をおかけしました……」

よし、何とか助かった。
つか良く持てたな……まぁ、俺軽いし、衝撃は然程ないだろう。

「ア、アニス……」

「い……言わないでください……」

とりま、帯が取れて、お腹丸見えのパンツモロ見えです。
死にたい、羞恥死って奴ですかね？もの凄く死にたいです。はい。

「……」

「ジッと見ないでください！」

俺はフェイトの腕から飛び降り、逃げるように走る。
そして少しフェイトから間を置き振り返って一言。

「フェ、フェイトちゃんの……変態……」

そしてまた走り出す。もう俺はお婿に行けない！
あ、帯忘れた……どうしましょう……。

一方フェイトは。

「………………」ボタボタ

鼻血を出し、恍惚の笑みを浮かべ、立ちながら気絶をしていました。
やれやれ、この世界では変態しかいないのか？（↑元凶）

〜〜〜

「ハァッハァッ……うぇっ……」

フェイトかた逃げ出したアニスです。
走ったらかなり体に負担が掛かりました。軽く口の中が鉄の味してるのは気のせいでしょうか？
それにしても、やはりあそこで裸になってしまったのは痛い……。

フェイトから記憶を消したいのだが……う～む、止めておこう。
これは一刻も早く黒歴史化しなくてはならない様だ。

さて、帯どうしようかなコレ。
まぁ……手で押さえてるから大丈夫だけど、部屋戻ったら大変な事になりそうだねこれ。

「それにしても……何か、嫌な予感がするんだけど、今回のジュエルシードの件」

別に、ジュエルシードが暴走する……ってわけでもなさそうだけど。
少し……不安になって来た……。
何でだろう？今日に限って、この胸騒ぎは……。

何か……起きそうな気がする……。

第三十九話　ギャグからシリアスに発展する事ってあるよね（後書き）

まさかの温泉の話を伸ばす私

そういや、もうフェイトは変態固定で良いですかね？

だってフェイトだし

アニメ本編では百合百合しちゃってるし

反吐がでるし

何か友達から聞いたら、同人誌のフェイトはすさまじく変態だとか

……マジで？

まぁ、同人誌に興味のない私が同人誌を見ようなどとは思いませんし

親にバレたら殺されます

さて、そんな事より

今日更新が少し遅れました

理由を申し上げますと

民安さんが今日ニコ生で生放送してましたので、見てました

もう少しで書き終わるとか思ってたら、気づいたら、そっちの方に行ってました

民安さんマジカワユス

そして、ニコニコ動画あさってたら

何かフェイトゼロの英霊を変えてみたって奴があったのね

それで

セイバーがシャナ

ライダーが……フリーダム？あのカップラーメンのキャラの奴

キャスターが一期映画のなのはｗｗｗ

アーチャーに現界しないだけましかとｗｗｗ

アサシンが……黒さん……だったっけ？仮面被った……よぉ分からへんかった

バーサーカーがアクセラレータｗｗｗｗ

勝てねぇｗｗｗアクセラレータがバーサーカーとかｗｗｗｗマジパネェｗｗｗｗ

ランサーが……キャラ分からんかった

アーチャーがまさかの鹿目まどかｗｗｗｗ

つか英霊として召喚できねぇだろｗｗｗｗ

んで、最近思ったんだけど

ヘラクレス、第五次でバーサーカーのクラスだった英霊だけど

もしかしたらアーチャーのクラスもありえたかもね

ヘラクレスはヒュドラ退治で毒矢を使っている

それで誤射してケイローン殺しちまってるし、十分ありえたかもしれないね

でも、ヘラクレスはそっちよりも十の苦行の方が有名だし

まぁ、ゴッドハンドは十二回殺されないと死なないけど

ヘラクレスの認められた苦行の数はホントは十で、内二回は認められなかったとか

さて、どうでもいい話はここまで

ここまで読んでくださりありがとうございました

第四十話？？？　作者体調不良の為、今日は短めです

あらすじ

フェイトが目覚めました

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

どうも、ディアボロです。

今日は私が体調不良のため、長く書いていることが出来ませんので、今日はこの小説の没設定を晒そうかと思っています。

明日から頑張りますので、許してください……。

さて、んじゃ晒していきます。

アニスの能力に、うえきの法則の神器を入れようとしていた。

はい、これです。

何故没になったかと言うと、俺がうえきの法則全巻売ってしまっていたので、漁っても出てこなかったので、泣く泣く没になりました。

うえきの法則は実際リリなのの世界で使ったらあれですね。
デバイス要らないと思います。

空飛ぶならセイクーでおｋ。

速いスピードで動きたいならライカでおｋ。

……あれ？結構強くね？

でも、空飛びながらフードは使えないので、なのはの砲撃とか喰らっちゃうか……良く考えたら。

さ、さて、気を取り直して。

死にたがりは常時発動させようと考えていました

いや、これもう当初から決めてたのですが、それだと何か話進まねぇなって思ってやめました。

何かいっつも死にたい殺して、っとか言ってる男の娘とか誰得だよって。

さて、何か俺の残り残機がヤバくなって来たので、サクサク行きます。

アニスとはやての二人で闇の書のマスターにしようと考えていた。

結論から言いますと、この設定は他の作者様のと被っていたから没にしました。

これで良いだろう！

って思って、空いた時間でリリなののの小説漁ってたら、既にその設定使っている作者様が居たので、止めました。

良かった、この設定起用する前に見つけられて。

さて……もうここまでにしようかと思います。

もうヤバい……毎日更新の為……ここまでする必要が……とか思われそうですが。

俺は基本こうやって毎日やって置かないと、絶対にサボりますゆえ。

どうかご理解いただければと。

感想は明日返させていただきます。

すみません……こんな糞話に時間を割いていただきありがとうございました。

明日には元気になっていると思うので、頑張ります！

それでは、また明日とか！

第四十話　酔っ払いどもめ！（前書き）

どうも

昨日あれからすぐに病院に連れてかれたディアボロです

いやぁ、お前死ぬ気かって親に脅されましてね

結局病院に連れていかれました

昨日はすいませんでした

毎日更新したの初めてで、途切れるの嫌だったんで、あぁ言う形にしてしまいました

容体なんですが、発作です

自分が居る土地は、俺の体と相性が悪く

どうにも不定期に発作が出てしまうんですよ

そして、この土地から離れたくても、親の仕事柄、そうもいかないんですよ

いやぁ、昨日はマジで死ぬかと思ったですはい

さて、本編始まります

第四十話　酔っ払いどもめ！

あらすじ

作者が倒れました……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

はい、帰ってきましたアニスたんです。
さて、これはどういう事でしょうか？

「あははははは！」

「うぇ〜、目が回る〜」

「ｏｒｚ」

……何ぞこれ……。

「やーアニス君、やっと戻って来たかい」

「士郎さ……酒臭っ！つかこの部屋事態酒臭っ！」

何なんだこれは……いつの間にこんな宴会モードに……。
って……アンクゥゥゥゥゥ！お前何酔いつぶれてんだぁぁぁぁぁ！

「あー、アニス君なの～」

「やっと戻って来たわね！遅いわよ！」

「ｏｒｚ」

……もう目が完全に座ってますねあんたら。
つかすずか、あんたは何時までそんな恰好で居る気だ……誘ってんのか？

はい嘘です、ごめんなさい……。

「いやっ……あの……近寄らないでくれたら嬉しいんだけどな～」

「え～、どうして～？」

「じゃあアニスがこっちに来なさい！」

「ｏｒｚ」

……すずかもしかして死んでる？
だ、誰か救急車呼んであげないと……。

「って酒臭っ……」

「ちょっと～、女の子に向かって臭いって言うな～」

「私、臭いかな～？」

「……頭痛い……」

あ、生きてた……。
良かった～。つか、いつの間にか二人がこんな至近距離に居るのですが……。

「アニスく～ん」

「ちょっ！抱き着いてこないで！倒れるって！キャッ！」

ドタッ！

「いたたた……」

「ア、アニス君……」

「……う、うわぁぁ！」

なのはに押し倒された挙句、帯がない事をすっかり忘れていて、そのまま押し倒された勢いで上がはだけました。
恥ずかしいです。

「あ、あああああああ……アニスくぅ～ん！！」

「いやぁぁぁぁぁ！なのはちゃんの目怖い！ア、アリサちゃん！たすけっ！」

「カリカリカリカリ、モフモフモフモフ」

「カリモフメロンパン食ってんじゃねぇぇぇぇぇぇぇ！確かに三期やってるけども！今ここで！この場で食べてる状況じゃねぇだろう！って！なのはちゃんは必要以上に俺の下を引っ張らない！そして桃子さん士郎さん！貴女の娘なんだから何とかしてくださぁぁぁぁぁい！！」

何この地獄絵図！

アンク！はよ起きんさい！アンタのパートナーが貞操の危機なのよ！

「ちょ……はう……いやぁ……横腹、触んないで……くすぐったい……」

あぁ、ヤバい……くすぐったくて死ぬってこれ……。

あぁぁぁぁぁぁぁもう！

「止めんか！」

ドゴッ！

「きゅ～」

パタン……。

「はぁっはぁっはぁっ……」

頭突き一発。どうやら俺の頭突きが効いたらしい。気絶させれたぜ。これなら慧音を越えられる！訳は無い……だって慧音の頭はオリハルコンだもん。

〜〜

「あ〜、やっと抜け出せた。それに酔っ払いどもは全員寝たし……あー、疲れた。つかもう夜かよ。はぇえなあおい……」

あぁ、月が綺麗だなおい。

はぁ……何でだろう……貞操は守り切ったけど、何かが汚された。

「隣、良いですか？」

「ふぇ？……あ、ファリンさん……」

何かファリンさんが隣に来ました。

……まぁ、良いですけどね。

「ノエルさんは？」

「今お嬢様たちを看病していますよ」

「あはは、全く……士郎さんも桃子さんも、どうして止めなかったんだろうか……いや、元凶はあの二人か……はぁっ……」

「あはは、アニス君も結構苦労してるんですね」

「あ、敬語は良いですよ？ファリンさんの方が年上ですし」

「そう？ふふ、ありがとう。それにしても、今日は月が綺麗だね～」

「ですね～。こんな日は、狼男さんとか吸血鬼さんが出そうですね～。ガオガオ～、食べちゃうぞ～。血を吸っちゃうぞ～……なんちゃって」

「あはは！アニス君可愛いね～」

そう言って、ファリンさんは俺の頭を撫でる。
……つか、吸血鬼のフレーズ聞いたとき、何か一瞬顔をしかめたが
……どうして？
……あぁ！そういや夜の一族でしたね。

つかトラハしらねー……何か色んな二次元創作で知った事だったから、良く分からないんだよね。
まぁ、俺もわざと行ったわけじゃないので許してほしい。

「ふわぁ～……ねむねむっ」

「もう寝たら？アニス君、結構絡まれて疲れてるでしょ？」

「にはは、ごめんなさいなのです……少し、疲れちゃっただけなので。みぃー、まだまだ元気いっぱいなのです、にぱー☆」

「……あーもう！可愛い！」

「ふわぁ！」

ちょっ、抱き着くなし。
苦しいって……痛い痛い……。

「アニス君小っちゃくて可愛い！」

「ほ、本性を現したな！この！離して！呪うぞ！アホー！」

「アニス君になら呪われても良いかも～」

「ちょっ、止めてください！恥ずかしいですって！後、ホントに苦しいんで、離しっ……ケホケホッ！」

やばっ……はしゃぎ過ぎて、気分が……。

「うわっ！ご、ごめんなさい！つい調子に乗っちゃって！」

ファリンは慌てて俺を離してくれた。

「ケホッケホッ……もう、幾らファリンさんでも、少し酷過ぎます。こんな幼気な男の娘を苛めるだ何て、悪趣味にも程があります」

「だ、だからごめんって」

「にはは、冗談ですよ、もう怒ってませんって。ケホッケホッ……」

「ほ、ホントに大丈夫？」

「えぇ、心配いりません。ちょっとトイレ行ってきますんで、なのはちゃん達の事お願いします」

「あ、はい！任せて！」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「うぇっ！ケホッケホッ！ハァッハァッ……」

くっそ……まさか、ここまで落ちてるとは……。
ただはしゃいだだけで吐血か……嫌なものだな。

「ケフッケフッ……はぁっ、何とか収まった……」

正直キツイっす……あぁ、もうあれだ……。
動きたくない……でも、動かんとあれだし……しゃあない、少し夜風にあたってこよう。

俺は壁を伝ってトイレから出る。
あー、まじ怠い……。

俺は何とか無事外に出て、置いてあるベンチに腰を掛ける事に成功した。

「あー……風がきんもちいー」

《……だいぶ、ヤバい状況ですね》

「あ、たみぃ、おっす」

《誰がたみぃですか。ご本人に迷惑が掛かりますので普通に呼んでください》

「へイへーイ……あー、だりぃ……」

《やっぱりジュエルシード収集しませんか？》

あー、またその話ですかー……はぁ。

「正直めんどくさい」

《ぶっちゃけましたね》

「度台、俺如きの小さな器では不可能だ……」

《中年オヤジの仕事の泣きごとかよぉ……》

「……はぁ……もう中年オヤジでもなんでも良いよ……あー、だりぃ……うぇっ……吐きそう……」

はぁっ……もう何か、色々と疲れちまった。
明日家帰ったら……少し収集してこようかな。

「……あー、少し横にならしてもらうは……もう、動きたくない……」

《了解しました……二時間くらいしたら起こしますので》

「ありがとう……」

こうして、俺は少しここで寝ることにした。

後でジュエルシード争奪戦が勃発する事も忘れて。

第四十話　酔っ払いどもめ！（後書き）

いっえーい

まだ病み上がりなあたしなのですはい

それにしても、一話のをまだ引っ張る俺って……

それにしても、何か感想が結構溜まってます……

これ書き終わったら返しますので

どうか見捨てないでください……

それでは

ここまで読んでくださりありがとうございました

第四十一話　弱い、弱すぎるぞ！（前書き）

今回の作業用ＢＧＭは

ナイト・オブ・ナイツ

Ｕ．Ｎ．オーエンは彼女なのか？

ルパン・ザ・ファイヤー

一つだけ東方じゃない件

どうも、私です

さて、早くも四十話行っちゃいましたね

そしてお気に入り登録件数３００件ありがとうございます

これも皆様のお蔭でございます

いやぁ、もう……何か……テンション上がりますな

そんな作者なのでした

本編始まります

第四十一話　弱い、弱すぎるぞ！

あらすじ

作者とアニス、共に体調は絶不調。

〜〜〜

キーーンッ……！

「ハッ……！」

何だ……今の感じ……。何処かで、魔力が漏れている……いや、これは……。

《ジュエルシードですのぅ》

「……ふみゅ……てっめ……今何時やねん……起こす言うたんはお前やろが……」

どうやら、ジュエルシードが解放されちまったらしい。
つかもう夜中やん……良く俺を捜しに誰も来なかったなおい。

《いやぁ、このクイーンにも、うっかり機能と言う物ですがね》

「……よし、んじゃ中身バラすからその機能取ってやるから覚悟しろコノヤロー」

《すいません、居眠りしてました……》

デバイスが寝てんなよ……。
お前機械なんだからねる必要性無くね？

「さて、部屋に戻って寝なおすか……」

《どうあってもジュエルシードを取りには行かないのですね》

「もうどうしたら良いか分からない」

《また泣きごとかよ》

「いやまぁ、めんどくさいしね。それに、なのはには俺が魔導師だって事伏せてるしな」

《変装、しないのですか？》

「俺が出来る変装と言ったら、髪型変える位しか出来ん」

《使えねぇよこのボケ》

仕方ないやん、産まれてこの方変装何てした事ねぇもん。コスプレならあるけどな。

「しゃーない。だったら二人の様子でも見に行きますかなっと」

俺は軽く駆け足になり、先を急ぐ。
くそー、瞬歩さえ使えれば速く移動できるのに。やっぱ収集を急いで方がよさそうだ。
基本動作さえも使えないとなると、結構辛いんだよねぇ。

～～

アンクサイド

「むっ……」

……何処かでジュエルシードの反応が……。
ってっ！……。

「つぅ～……！頭が痛い……」

《飲み過ぎだ、バーカ》

「うるせぇ……ったく、士郎の奴め……ガボガボ飲ませやがって……つぅ～」

《その割にはノリノリだったけどな》

ちっ、口のへらねぇデバイスだ。
それにしても、まさかここにまでジュエルシードがあるとわな。
丁度いい、一個じゃ足りないと思っていたところだ、もう一つ頂戴してくるか。

《……行くのか？相棒》

「誰が相棒だ……あぁ、少しばっか運動に行ってくるだけだ」

《あーぁ、たまには俺に使ってもらいたいものだね。こちとらまだ一回も使われてないんで、日に日に疲弊不満が溜まっちまう》

「その内使ってやるから我慢しやがれ。つか試しに一回使ったのを忘れんな」

《はん、あんなの使われた内に入んねぇよ。おら、行くならさっさと行きな。隣の部屋の魔力が高い嬢ちゃんが、今出てったぜ》

「情報どうも……んじゃ、正体バレちゃめんどくさいし……」

俺は外に出て、翼を生やす。
次に手……次に足……最後には体全体を変化させる。周りには真っ赤な羽が舞い落ちる、俺はそれを異にも介さず、自分の手や足を見る。

「……久々だなぁ、完全化は……」

《ハッ、やっぱお前はそっちの方がお似合いだぜ》

「ふん、煽てたって何も出ないぞ？……さて、行くか」

俺はそのまま空を飛び、ジュエルシードがある方向へと向かう。
さて、高町よりも先に封印しないとな。

「ま、精々手加減はしてやるさ……」

怪我何てさせちまったら、アニスがうるさいからな。
ホント、つくづく甘くなったもんだな俺も。

「……もう少しか……」

そろそろ着く頃だな。
それにしても、何だ、このもう一つの魔力は。
高町以外の魔導師が、この世界に居るのか？……ちっ、めんどくさい事になって来たな。

《あの嬢ちゃんの他に、まだ魔導師が居たとわな。しかも、こりゃ使い魔持ちって所かぁ？》

「そこまで分かるのか？」

《あぁ、一応な。何か知んないけど、使い魔の魔力も感知したぜ。どうすんだ？》

「決まってる。蹴散らすまでだ」

《ハッ！至極単純、シンプルで良いこったぁ。ま、それがお前か》

「ま、所詮その程度のレベル。俺の敵じゃない」

《アニスの旦那には勝てないくせに……》

「あいつはオールラウンダーだから、俺よりも攻撃のパターンが多いだけだ」

《お前も増やせば良いのに。馬鹿の一つ覚えみたいに体術、火炎弾なんて……やれやれ、まだアニスの旦那に使われた方が良かったな》

「バリアジャケットがあんなんになるけど、良いのか？」

《……いや、やっぱり何でもない》

そりゃそうだわな。
あんな女っぽいバリアジャケットを着る奴なんて、アニス位しか居ない。

《そろそろ着くぞ？》

「了解だ……」

漸く見えてきた。
どうやら、相手は高町と同い年くらいのガキらしい。そしてその近くに、やはり居やがった……。
あの黒いマントを羽織ってるガキの使い魔……か。

「封印するよアルフ、サポートして」

「へいへい」

《……おい、封印するつもりだぞ》

「ちっ、もう少しスピード出せば良かったか……んじゃ、行きますか！」

俺は牽制も兼ねて、火炎弾を一発放つ。
それに気づいたガキと使い魔は、それを簡単に避ける。

「誰だい！」

「……ふん、今のを避けるか。ま、そうじゃないと拍子抜けだからな」

ふん、ガキが一著前に睨むか……。
ま、そんな程度だろうな……。

「そのジュエルシード……俺がもらって行く」

「アンタもこれを狙ってるのかい？アンタ、誰の使い魔だい」

「使い魔？ハッ、まぁ……そんなもんか……。何でわざわざ敵にそんな事を教えなきゃいけないんだ？」

「……これは渡さない。私がもらう」

「ガキが何を言ってんだ……オラッ！」

ドン！

俺はもう一発火炎弾を放つ。狙いは金髪のガキ。

《ｐｒｏｔｅｃｔｉｏｎ》

ガキン！

「クッ……！」

「フェイト！ハァッ！」

使い魔は俺がガキを攻撃するや否や、すぐに襲い掛かってくる。

何ともまぁ、遅い動きだ。

「ハァッ！」

「遅い……」

ブン！ブン！パシィッ！

「クッ！」

「そんな遅い蹴りやパンチで、俺をどうにか出来ると思ってんか？オラッ！」

ドゴッ！

「カフッ！」

俺は使い魔の拳を受け止めて、そのままがら空きの腹に一発喰らわす。
弱い……弱すぎる……。

「アルフ！フォトンランサー、ファイヤ！」

ドドドドド！

黄色い魔力弾が俺に向かって撃たれる。
俺はそれを最小限の動きだけで避けきる。全然駄目だな……。

「そんな……！」

「遅いんだよ……お前らの動きは……」

はぁ……詰まらんな。こんなもんじゃ運動にもなりゃしない……。
その時……。

「ハァッハァッハァッ……あの……えと……」

ちっ、高町がもうき来やがったか……。
めんどくさい事になった……。

「……お前も、ジュエルシードを狙ってるのか？」

「えっ……あの……はい……」

「……そうか……だったら……」

ドン！

めんどくさいので、このままご退場願おうか……。
俺は高町に向けて火炎弾を撃ち込む。
不意を突かれた高町は、障壁を貼る事が出来ない……だが……。

「ハァッ！」

ガキン！

小さい小動物が、高町の前に立ち、障壁を貼る。
ほぅ、あれも使い魔なのか……。

「いきなり何なんだ、君は！」

「俺か？俺はただ、ジュエルシードを回収しに来ただけだが？」

「何だって……」

「お喋りはここまでだ……おい、黒いガキ……さっさとそのジュエルシードをよこせ」

「……嫌です……」

「……そうか……だったら……」

バサッ！

翼をはためかせ、風を生み出す。
その風を黒いガキにぶつけて、軽く吹っ飛ばす。

「キャアッ！」

ドン！

そしてその勢いで、後ろの木に背中を打ち付ける。

「グッ……ケホッケホッ！」

「ふん……さて……」

俺はガキを見ずに、そのままジュエルシードの所に向かう。
やっぱ、楽な作業だったな。

「ディバィン……バスター！！」

「なにっ……ちぃっ！」

いきなりの横からの攻撃……。
高町か……俺はその攻撃を裏拳で弾き飛ばす。

「大丈夫！」

「くっ……ケホッケホッ……何で……私を……」

「何でって……ほおっておけないからに決まってるでしょ！」

ハッ、さっきの攻撃で、魔法か何かですぐさま黒いガキの方に向かったのか……。
んじゃ、この隙に……。

（……アンク……お前何やってんだおい……）

「！？……ア……ニス……？」

頭の中から直接語りかけてく声……。
おい……あの馬鹿！

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「ケホッケホッ……ったく、あの馬鹿は。何をやってやがりますか」

様子を見に来てみればこれだよ……。
あぁもう……何やってんだあいつは。

「おい！お前、何で念話なんか使ってんだ！近くに居るんだったら
直接話せ！」

あぁ、うるっせぇなおい。
声なんて出して喋ったらバレんだろうが。言わせんな、恥ずかしい。

(そんな事したらバレるだろうが。それより、さっさと帰って来い、
ジュエルシードとか良いから)

「…………」

……無視ですか？そうですか。
いや、この場合そうですかとか言って引き下がれるわけないじゃんかよぉ。

つか、どんどんジュエルシードの所に向かうなし！

「グッ！ゲホッゲホッ！」

ビチャッ！

「うぐっ……ちぃ、念話も駄目か……こんなに凄い少量の魔力でさえ、負担が掛かるとか……」

《だから止めなさいと言ったのに……》

「うるせぇ……それよりも……ありゃ駄目かな……止められないわ」

何かもう封印する気満々何だが……。
あ、なのはとフェイトが立ち上がった……おぉ、攻撃を仕掛けた。

でも悉く避けられてますな。

まぁ、アンクは結構強いから当たり前か……はぁ、仕方ない……ここは俺が出て止めるしか……。

「って、もうありゃ無理かな……。もう封印終わってら……はぁ……ホント、あの馬鹿は……」

仕方ない……後でお摂関だからなあいつ……。
それよりも……。

「今はこの出血をどうやって止めるかが問題だ……」

《うわ～、見事な出血ですねこれ……》

何か腹から血が出始めてんだすけど……。
えっと、これって拒絶反応ですかね？

「あはは、マジですかい……」

俺は土御門かってんだ。
……どうすっかなこれ……仕方ない……。

「矛盾しちまうけど……ジオルグ……」

俺は呪文を唱え、傷を癒す。
次の瞬間、腹の出血は止まったけど、激しい吐き気に襲われる。
俺はそれに抗いもせずに、溜まった物を口から吐き出す。
案の定、血だ。だけど、さっきよりも体が軽く、少しだが元気になった。

「……ふぅ……何とか……収まったか……」

俺はそのまま立ち上がり、口に付いた血を拭う。
はぁ、辛い……マジで死ぬってこれ……。

「……ちっ、もういなくなりやがったか、あいつらは……」

自分の事で精一杯だった。
気が付いたら、もうジュエルシードはアンクが取って行き、なにはもフェイトも、ユーノもアルフもいなかった……。

「……あー、何つうか……不幸だー……はぁっ……帰ろ……」

俺はもう旅館に戻る事にした……。

～～～

「それじゃあ、帰るか」

朝、昼に差し掛かる前にみんな車に乗り込む。

なのはは少し暗い表情をしていた。

アンクは……まぁ、いつも通り。

家帰ったら絶対に摂関だバカヤロー。

そして俺は、何故かアリサの膝の上でございます。

「帰りもこれかよー！」

「アニスうるさい！少し静かにしなさい！」

「いやぁぁぁ！俺も普通の席に座りたい！」

「アニス君はこれで良いと私は思うなー」

「すずかちゃんまで！？」

あぁ、もう何て言うか……。

帰りまでこれってあんまりじゃね？

まぁ、そんあこんなで、楽しい一泊二日は終わりを告げたのでした。

第四十一話　弱い、弱すぎるぞ！（後書き）

やっと温泉の所が終わった……

次は何を書こうかな……

もう少しであのＫＹ執務官が出て来るな

でも、もう少し先の話だし、アニスには関係の無い話ですな

アンクは……どうだろう？

まぁ、流石にもう介入はさせないでおこうかな？

……いや、まだあった

プレシア亭に乗り込むと言う話がなぁ！

ヒャッハァ！汚物は消毒だァ！

何てな

あ、そうだ……

感想で、作者はアニメ本編のフェイトは嫌いなんですかって質問が来たんですけど……

まぁ、そう取られても仕方ないですよね

アニメ本編のフェイトは嫌いじゃないです

ただ、百合や百合臭などが嫌いなだけであり、普段のフェイトは嫌いではありません

ただ……いちゃつくのはねぇ

まぁ、そこもひっくるめて好きな方もいますので

気分を害された方、すいませんでした

それでは、また明日とか！

ここまで読んでくださりありがとうございます

第四十二話　人間関係はめんどくさい（前書き）

どうも

間違って今回書くはずだった話を消してしまった私です

いやぁ、テンションダダ下がりですよ

今回は前書きも結構書いてたのに

まぁ、少し書きますね

今回の作業用ＢＧＭ

ココロオカリン（作業手に着かず）

ココロオドル

オーディエンスを沸かす程度の能力

今回はラップに手を出してみました

云々です

まぁ、しょうも無い話何でどうでもいいですがね

それでは本編始まります

第四十二話　人間関係はめんどくさい

あらすじ

アニス土御門化

～～～

ちっすー、アニスたんだお。
今回は他の世界からお送りしております。

《マスター、二時の方向に居ます》

「了解！」

ただ今収集中。
それにしても、やっぱ少ないな～、魔力。
まだ５０ページしか溜まってないよ。ホントにどうしようかな。期限まであと一週間ちょい……。

「そらっ！」

「ガァァァ！！」

「あーもう！暴れんな！ほら、もう少しで終わるから！」

「グァァッ……」バタン！

あーらら、またやっちった……。
どうも手加減が難しいなこれ。どうしてもギリギリまで取っちまう……。

むー、まぁ……それでも1ページか1ページ半位しかないんだけどね。
はぁ、マジでどうしよう。

《お疲れ様です》

「どもー……あぁ、疲れた」

これでどうやら最後の様だ。
少ねぇな……10匹程度か、ここら辺に居たのは。
まぁ、これ以上やると管理局とか来そうだし、ここは引き上げると

しますか。

「帰りますか」

《ですね》

俺は転移符を使って、地球に戻る。
これ、魔力使わないから良いね、便利で。そう思う俺なのでした。

〜〜

シュン！

「っと……よし、帰ってこれた」

着いたのは海鳴市の公園。
しかも人気のない所。ここならバレズに転移を出来るし、戻っても来られる。
うむ、我ながら最適な場所を見つけたと自負しているよ。

「さーって……帰りますか」

《ですね》

俺は森の中から出て、公園の人気の多い所に出る。
でも、今日は誰も居ない。何か、寂しいなおい。

「って……あれ？なのは……？」

ふと遊具の所を見たら、なのはが鞄を背負ってブランコに乗っていた。
……？こんな所で何やってんだ？もう学校は……終わってる時間か。

まぁ良いや、行ってみよう。
そう思いがなら、俺はなのはに近づく。

「やっほー、なのはちゃん」

「うわぁっ！？」

何故驚くし……つか、何気にショックなんですけど……。
え、何？俺嫌われちゃってる系？

「ア、アニス……君？……あっ！」

バッ！

なのは俺を見て、何故か疑問を投げかけてから、いきなり何かを思い出したかのように顔を俺から背ける。あら、やっぱり嫌われてる系なのねこれ。

「あの……何故に顔をそむけるのでしょうかなのはちゃん……」

「その……今の自分の顔……見られたくないから……」

「今の顔？」

うむ、何かいたずら書きでもされましたかな？
それとも前髪を間違えてハサミでパッツンしちゃったとか？

「どうしたの？顔に悪戯書きでもされたのかにゃ？」

「そ、そんなんじゃないもん！」

なのははいきなりこっちを向く。
……うむ、悪戯書きは無い、前髪をパッツンしたわけでもない……。
なら、どうして顔を見られたくないって言ったんだ？

「どうしたのなのはちゃん、元気ないけど……」

「あぅ……その……な、何でもないよ！うん、何でもない！」

何故か妙に元気になったないきなり。
これが空元気と言う奴か？

「嘘、明らかに空元気でしょ、それ」

「あぅ……違うもん！なのは全然元気だもん！」

「今まで浮かない顔をしていた人がどの面下げてそんな言葉が言えるのか……あぁ、アニスたん悲しい。友達に何も話してくれないなんて……およよよ」

「うっ……」

ありゃりゃ、また浮かない顔になっちゃった……。
俺のせい？……ですよねー。

「ホントにどうしちゃったの？なのはちゃん、何時ものなのはちゃんらしくない。何か俺には言えない事？もしかして、恋愛とか？」

「ち、違うよ！そんなんじゃないよ！」

「じゃあ何？喧嘩でもしたのかにゃー？」

「……そ……それは……」

そう言って、再び俺から視線を外すなのは。
……うっそ、マジで当たっちゃった？

「もしかして、当たり？」

俺のその言葉に、少しを間をおいて、なのはは小さく頷く。
喧嘩……あぁ、もしかしてアリサが何かなのはが元気なくぼーっとしてるのが気に食わなくて云々所ね。

「……どうしてまた喧嘩なんて？」

「……なのはが悪いの……なのはが、アリサちゃんやすずかちゃんそっちのけで、考え事ばかりしてたから……」

「考え事？」

ジュエルシードの件ですね。
この度はうちのアンクが失礼しました、これ以上余計な事はさせませんので、許してください。

「その考え事って……なに？」

「その……ごめん……言えない……」

「……うむ、もしかして、アリサちゃんやすずかちゃんにも？」

「うん……言えない事なんだ……」

「隠し事ですか。そりゃアリサちゃんが怒っても無理ないね。どうせ、アリサちゃんが怒って、すずかちゃんがなだめ役だったんでしょ？」

「うん……」

「ふむ……まぁ、人間誰しも秘密の一つや二つ位はあるものですし。それに、話せない様な事だから秘密とう言う物ですし。そんなにホイホイと人に話せたら、それは秘密じゃありませんしね」

「……でも……」

……えぇい、この生真面目が。
ちったぁポジティブシンキングに考えろよ！俺だって呪いが掛かってるけど頑張ってんだよ！
この絶望の状況下の中で！
どうしてそこで諦めるんだよ！頑張れ頑張れやればできるどうしてそこで諦めるんだよ積極的にポジィティブに頑張れ頑張れ！

「まぁ、話せないのなら良いですけど。特に追求も言及もしません。ただ、覚えておいてください」

「えっ……？」

「なのはちゃんが悩んでいるのなら、それをどうにかしたいと思うのが友達です。今はまだ話せないのでしたら、時間が掛かっても構いません。必ずとも言いません。その秘密を、悩みを打ち明けれる

様になってください。俺も待ってるんで。俺はからは以上。んじゃ、俺は帰ります。ノシ」

俺はなのはに視線を外して振り返り、そのまま踵を返す。

だけど……。

ギュッ……。

「……はい？」

足が宙に浮いてる……だと……何これ怖い。

っつか、背中が妙に暖かいんですけど……。

「えっと……なのはちゃん？」

「……ありがとう……アニス君……」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～

なのはサイド

わわわ！
どうしようどうしよう！ついアニス君を後ろから抱きしめちゃった！

でも、アニス君の言葉、凄く重かった……。
自分が魔導師である事、あの子の事……フェイトちゃんの事や、この前現れた新しい誰かの使い魔さんの事……。

そんな事をずっと考えて、それでアリサちゃんと喧嘩しちゃって。
そして、元気のない顔を見られたく無くて、つい寄り道をして、この公園に来ちゃった。

ここでアニス君に会えるた事は少しびっくりしちゃったけど。
アニス君は言ってくれた、待ってくれると……。

絶対にこの事を打ち明ける様に頑張る！
……でもその前に……。

「……ありがとう……アニス君……」

「……なのはちゃん……」

「アニス君のお蔭で、元気が出たよ」

「いえいえ、あんなの俺が一方的に話してただけですので。お礼を言われる筋合いわないと思いますけど」

「じゃあ私も一方的に言うよ。ありがとう、アニス君」

「みぃー、少しこそばゆいのですよ……あうあう」

そう言って、恥ずかしそうに頭を掻くアニス君。
ホントに、可愛いな～。

「あの……そろそろ離してほしいのですが……」

「あ、ごめんね。今降ろすから」

少し名残惜しいけどね……。
私はそう思いながら、アニス君を降ろす。

「それじゃ、俺はもう帰るね？」

「うん、ありがとうねアニス君。私、頑張るから！」

「うむ、良い表情だ。そんじゃね～」

そう言ってアニス君は駆けて行く。

さて、私も早く家に帰って少し休んでから、ジュエルシード探ししなきゃ！

～～～

アニスサイド

「いや～、人間関係ってめんどくせぇな」

《しまらない、流石マスター、しまらない》

「えぇい黙れこの腐れデバイス。つかマジで人間関係って複雑でめんどくさくてあれだね」

《それが度し難く、醜悪で醜く酷くても、それが人間なのですよ。所詮人間関係など一本の線でしかありません。それが無数に人に繋がり、徐々に増えていく。切ろうと思ったら簡単に、直そうを思え

ば難しく、でも……切っても切れないと言う線もあります。それが縁です。まぁ、人間はそれを無意識に理解はしてますけど、意識的には理解してませんので仕方ない事かと》

「永遠の議題だね。人間関係」

《ですね》

何か最後にしてはいきなり何か哲学チックになっちゃったけど気にしない。
だってそれが俺だから♪

第四十二話　人間関係はめんどくさい（後書き）

結局今日は何の話を載せたかったかと言うと

久々の死にたがりアニスたんを書きたかったのです

つか最近食欲が落ちました

コンビニ弁当を一個食えませんでした

結構ボリュームのある弁当買ったのが悪かったのかってわけでもなく、単純に食えなかったです

何時もなら食えたのに……

歯が痛いせい？

何か金曜日に歯医者に行ったっきり、今まで痛くなかった右の歯が
死ぬほど痛い
もうご飯も噛めないの

泣くかと思った

まぁ、日常生活（食事を抜く）には支障はないのですけどね

まぁ、食欲不振は怖いです

まだ体調が万全ではないので、何か違う病気にかかったかな？

風邪程度なら良いけど……

後、友人や家族に

「髪切れ、その髪型厨二くさい」

って言われました

もちろん、厨二くさいって言ったのは友人ですよ？親が厨二とか知ってたら恐怖です

駄目ですかね？左側の髪をちょいとヘアピンで留め、後の残った髪で右目を隠すヘアスタイル

結構気に入ってます

だが厨二だ

どうしましょうね

まぁ、先生から別段何も言われてないのでまだ切りません

そして髪の手入れがめんどくさくなった件

修学旅行前に親に強制的に強制縮毛を掛けられたので、天パからストレートへ

……なんやねんこの髪、ごっつ乾かさんといかんらしい

せやないと真っ直ぐにならんし、自然乾燥させると、天パだった時よりも髪が酷い事に……

結局真っ直ぐを選ぶことにしました

そんな羞恥を受けた作者なのでした

それでは、また明日とか

ここまで読んでくださりありがとうございました

第四十三話　どうやら前の話を引っ張ってる様です（前書き）

今回の作業用ＢＧＭ

シザーハンズ（Ｄａ－ｌｉｔｔｌｅ）

二息歩行（Ｇｅｒｏ）

マトリョシカ（はしやん&ゼブラ）

ｂａｄ　ｂａｙ（こまん）

ミツバチ（赤飯）

今回は主に歌い手で攻めてみた

赤飯さんとげろりんは大好きです

ダリさんはあれです、英語むっちゃうまいなー位しか分かりません
だってシザーハンズしか聞いたことないですから

はしやんさんとゼブラさんの子コラボは大好き

こまんさんはｂａｄ　ｂａｙで知りました

そんな感じの今日の作業用ＢＧＭでした

それでは本編始まります

第四十三話　どうやら前の話を引っ張ってる様です

あらすじ

とりま作者の人間関係は最悪

あれ？これ関係ないよね？俺関係ないよね？おーい、アニスたーん。なに？嫌がらせかい？普段お色気担当にしかしてない俺への嫌がらせかい？

取り敢えずあらすじ用の看板そこにあるから取ってよ。うん、それそれ……へし折るなし……。

まぁ、何が言いたいかって言うと

人間関係はめんどくさい

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～

どうも、先ほど作者があらすじ用に作っていた看板をへし折ってやったアニスたんです。
あの作者に良いようにお色気担当にされていたことが発覚したため、少し憂さ晴らしをしてきたアニスたんです。

取り敢えず、大概にしろって事ですたい。

「それよりも、アイスが食いたい……」

ただ今夜でございます。
既にご飯も食べ終わり、風呂に入った後です。しかももう１０時です……。
こんな時間に子供がコンビニ……行けるかな？しかもこんなナリだし。

「……う～む、難しいねぇこりゃ……まぁ、要は試だ。行って来よう」

俺は何時のも寝間着から普通の格好に着替えて財布を持ち、こっそり音を立てずに玄関に行、靴を履く。
そして音をたてないようにドアを開けて、外に出る。

「よし、ミッションコンプリート……アイスが俺を読んでるのぜ！」

アイスは読んでもいないし喋りません。
等と、注意を呼び掛けてみたり。

それよりも、結構ここ暗いなぁ……。
案外街灯が少ないね。……べ、別に、怖くなんかないんだからね！

《嘘乙》

「ふにゃあ！？ク、クイーン！？お、おお、脅かすなよ！」

《ぷぷぷー、マスターッたら、こんな夜道が怖いだ何て。まだまだ子供ですねぇ》

いや、まぁ……精神年齢は成人してますので言い返せません……。
でも、体は子供なのだから別に良いのだ！

「う、うるさいっ！何だよッ！俺が幽霊とか苦手で悪いか！」

《いえいえ、案外可愛らしい一面あるじゃないですかｗｗｗね、マスターｗｗｗ》

ううー、こいつ……後で覚えとけよー！
そ、それよりも、早くアイス買って帰ろう。こんな所に居たくない！俺早くコンビニ行く！

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

＼あ、ありがとうございましたー／

買えちゃったよおぃ。
何か、俺一人だけで買えちゃったよおぃ。若干何でこんな夜に子供がコンビニに的な目で見られたけど、買えたよおぃ。

「はむはむ……美味し」

《何これ卑猥。そんなに棒状な物を口いっぱいに含んで、はしたなく舐めて食べるんじゃありませんマスター。しかも白い……狙ってます？》

「むー？ふぁにふぁー？」

《無意識……だと……何このマスター、怖い》

何怖がってんの知らないけど、何か酷くね？
何かひでぇ言われようなんですけども、ここは怒っても良い所だよね？

「うわ、舐めすぎちゃった……顔に付いちゃった……うー、べたべたじゃないかよー……」

《……グハッ！！（吐血音）》

「んー？何だよ今の声は」

（な、何だこのマスター……これでホントに狙ってやってないだと……。何と言う……何と言う逸材。この子は化ける！いずれ化ける！恐ろしい、こんなマスターを持ってしまった事が恐ろしい！）

……何か急にクイーンが黙ってしまったのだが……。
まぁ良い。それよりこのアイスうめぇな。やはりミルク味は嗜好。

「はむはむ……ぶっ！ごほっごほっ！！」

ちょっ！？何か飛んでますやん！？ビルとビルの上を跳んでますやん！？
って、あれアルフじゃね？……しかもフェイトを抱えてますね……。
……あ、そういや、今日の夜、ジュエルシード争奪戦の日でしたね。

んで、ジュエルシードが暴走して、そんでなのはとフェイトのデバイスが故障し、フェイトが負傷……。

あ、だから抱えられてるのか。

「……心配なので見に行こう……」

何か、居ても立ってても居られないので、行ってみることに。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「あらら……結局、フェイトが借りてるマンションに来ちまいましたよ……」

うーん、途中でがんばって鉢合わせしてみようやないかい！

って思ってたんだけど……まぁ良いか。

ほなチャッチャと行こうか。

そう思いながら、俺はインターホンを押す。

……まぁ、こんな夜にインターホンを鳴らされても警戒しますわな。

仕方ない。

「フェーイトちゃん、あーそびーましょっ！」

……ドタドタドタ！

ガチャッ！

「……や、やっぱりアンタかい」

「こんばんみー、アルフさん。ちょっち入っても良いですかい？何かさっき、血相変えてビルの上を跳んでるアルフさんを見まして、少し心配になって来ちまいました」

「まぁ、入んな」

どうやら入っても良いそうです。

流石アルフさん……。

「……でっ、何で俺が夜散歩してみれば、フェイトちゃんが怪我してるんでしょうねぇ……アルフさん？」

「……はい……」

まぁ、散歩と良いますか。コンビニでアイス買って食ってただけなんですけどね。
あ、アイスは美味しくいただきました。

アイスはミルクこそが嗜好。

「いやまぁ……アルフさんが全部悪い訳ではないんですし、そんなにかしこまらなくても……それで……フェイトちゃん？」

「……あの……」

「うん、何かな？」

「……ごめんなさい……」

「……うん、良くできました。まぁだけど……良くもまぁこんなに無茶しちゃって。ジュエルシードを集める為とは言え……そりゃジュエルシードの近距離で技をぶつけ合えばそりゃ暴走もするって……しょうがないわねぇ……」

暴走したジュエルシードを素手で掴むと言う暴挙。

まぁ、命があっただけでもめっけものだねこりゃこりゃっと。
しっかし、こりゃ酷い火傷だねぇマジで。痛そー。

「フェイト、じっとしてなきゃ駄目だよ」

「……ごめんね、アルフ……」

「何で謝るんだい。私はフェイトを守りきれなかった、私の方が謝らないといけないよ」

うむ、仲睦まじきことは良い事。
だけどねぇ、それとこれとは別問題なのやね。

「はぁ、全く……ほらフェイトちゃん、手出して。治してあげるから」

「アニス、治癒魔法使えるのかい？」

「うーん、魔法……と言うよりも、固有スキルかな。先天性のだけどね。……ん、これならたぶん……」

試した事ないけど、これって傷にも有効なのかな？

魔眼、見た物の分解、吸収、変換、放出が可能な能力を持つチートな目……。
まぁ、分解は怖いので、今回は吸収しとこ。

「……」

俺はフェイトの手の傷に集中する。
少し経ってから、フェイトの手の火傷が徐々に消えていく。
それを見て、二人は驚く。……いや、もう人の傷吸収すんの止めよう。

吸収した分、俺に来るんですけど……何これむっちゃいてぇ。
何でこんな痛いのにフェイト我慢できんですかはてな　やっぱりマゾヒストなんですか？

「よし、これで終了。もう良いよ」

「ありがとうアニス！やっぱあんたは良い奴だよ」

「ありがとう、アニス」

「いえいえ、例には及びませんですよ。……あうっ……」

痛い……全く、吸収はやっぱするんじゃ無かったかな？
手が焼けるように熱いっつうか、焼けてるから火傷なんですけどね。

「って、あんたも怪我してるじゃないかい！？」

「ん？あぁ、これフェイトちゃんが受けた傷を俺が吸収して移しただけだから。気にしないで」

「き、気にするよ！アルフ、包帯！」

「分かったよ！」

アルフがテキパキと救急セットを持ってきて、中から包帯を取りだし、フェイトに渡す。
そしてフェイトがその包帯を俺の手に巻いて行く。

「いやはや、早計でした。吸収したらこうなる事は予想できたのに、アニスったらマジドジッ子♪」

「こんな時に冗談言ってる場合かい！」

「そうだよ！治してくれたのは嬉しいけど、それでアニスが傷ついちゃ意味ないよ……（あぁ、アニスの柔肌に傷が！？痕とか残っちゃったらどうしようどうしよう！？）」

うむ……二人が本気で怒っとりゃあす。

まぁ、当たり前か……。

「まぁ、女の子に傷痕が残るよりも、男の俺に残っちゃった方が良いでしょ？別に気にしてないし」

「アニスは何も分かってないよ！お願いだから、少しは自分の心配も……」

「それはフェイトちゃんが言える台詞ではないと思うのですけども……」

「……そ、それもそうだね……」

「まぁ、フェイトが言えた義理ではないね。フェイトも自分の心配をしなきゃ駄目だよ！」

「「「……プッ、あはははは！」」」

アルフが最後にまとめ上げてから少しの静寂。
そして三人同時に笑い出す。うむ、まぁ良いんじゃないかな、たまにはこんな空気も。

「さて、んじゃそろそろお暇しますかな。俺無断で外に出て来たから、バレたらたぶん説教入るから……」

っべー、マジっべー。マジ早計だった。
完璧俺が無断で出て来たこと忘れてた……まぁ……早く帰るとしますか。

「何言ってるんだい。流石にもう出歩いたらアニス一人じゃ危ないよ！今日は泊まって行きな」

「……はい？」

「う、うん。私もその方が良いと思うな（だってもしアニスが襲われでもしたら大変だもん！そんな事、私が許さい……）」

……どうやら、俺は今回死亡フラグをむんむんと建ててしまっていたようです。

第四十三話　どうやら前の話を引っ張ってる様です（後書き）

ネタが尽きた作者です

だからネタに逃げました

そして、もうマンネリ化してきた……

どうしよう……もう書きたい事が二期にしかない……

まだあのネタを封じるべきだと思い思い……思い悩みまくった結果

ネタが尽きました

そして作者の体調がまだ絶不調

咳が止まらない食欲不振、更には軽い貧血の症状も出て、軽い不眠症

……何これボロボロ……

あー、お肌が荒れちゃうわねこれ……まぁ、女ではないので、別段肌なんてどうでも良いんだけどね

ただしニキビ、てめぇは駄目だ

そして最近は、右耳の聞こえが悪いです……

あれ？もしかして右耳詰んだ？

ま、まぁ……気のせいだと思いたいです

それにしても、今回は駄作、次回も駄作、その次も駄作……

うむ、流石俺だ

さて、ここでアンケートを書きたいと思います

アンケートの内容は、プレシアさん&アリシアに着いてです

先ず一つ目

プレシアさんは生存させた方が良いでしょうか？

1：プレシアさんは生きて無いと嫌だ！

2：判決！死刑！死刑！！死刑！！！！死刑！！！！

3：お前の決めた行動に、俺敬意を評す！

この三つの中からお選び下さい

アリシアは、プレシアが生きてないと生き返らせる事はないので

ある意味、アリシアもアンケート内容に入ってます

さて、たくさんの投票待ってます

それでは、また明日とか！

ここまで読んでくださりありがとうございました

アンケート（募集終了しました）

こんばんは

すいません、また俺がやらかしました

今日はもう俺の体調が思わしくないので、昨日のアンケートを少しだいだい的にやろうかと

それにしても、昨日お願いしてから、すぐにアンケ回答感想が来ました

ありがとうございます

現在の票数を見ると

プレシアさん生存が４

見捨てるが０

俺が決めるが３

……うむ、みなさん優しいね

さて、今回はまだ感想で答えて無い人ドンドン募集中なので、ここにも書いてしまいます

まぁ、俺が今日は本編を書ける体力が無いだけなんですけどね……

さ、さぁ、チャッチャと書いちゃいますか

1：例えプレシアがどれほどの屑でも、どんな理由を並べても……それでフェイトが悲しんでいい事には、ならねぇだろうが！！！

2：いいか……この蹴りはフェイトの分だ。顔面の何処かの骨がへし折れたようだが、それはフェイトがお前の顔面をへし折ったと思え。そしてこれもフェイトの分だ！その次の次の次のも……その次の次の次のも……次の！次も！フェイトの分だぁぁぁぁぁ！！これも！これも！これも！これも！これも！これも！これも！

3：お前が決めなきゃ、死んでも死にきれねぇ！！

……2が異様に長い件。

ま、まぁ、要約しますと。

1がプレシア生存

2が救わない

3が作者の自由です

期限は明後日の11月17日まででお願いします

すいません、昨日感想をくださった方、そして今日もくださった方。

返信は明日させてもらいますので、どうかご理解を……すいません……。

それでは、今日はもうこれまで。

明日はバリバリ本編進めますんで、楽しみにしててください！

それでは、また亜明日とか！

第四十四話　お泊りって緊張するね（前書き）

どうも、昨日はお騒がせしました

何とか持ち直した私です

何時もより更新速度ましましでお送りしております

それにしても

何かアンケが凄い事に……（汗）

感想返そうにも、多すぎるｗｗｗ

困った……

なので、少し時間かかるので、明日になってしまう人もいるかもしれません

何分、病み上がりなので……

すいません、体弱い作者で

自覚はしておりますので、何とか頑張って倒れないようにしたいと思います

それでは、本編始まります

第四十四話　お泊りって緊張するね

あらすじ

作者がまた倒れました

～～～

「……よし、もう一度言ってみましょうかフェイトちゃん……」

「だ、だから……今日はもう遅いから、ここに泊まっていった方が良いって言ったんだけど……」

……えっと、これは何でだろうか。
俺フェイトにフラグ建ててましたっけ？　いえ、俺はフラグなんぞとは無縁な男の娘。
恋愛フラグ何て建てていません！

※アニスは恋愛フラグ以外のヤバめなフラグばかり建てています、それを忘れないでください。

「いえ、今日は帰りますよ。流石に朝起きて俺が居ないって大騒ぎになっても、大変ですから」

「で、でも。今の時間外に出て、アニスが襲われでもしたら。そっちの方が大変だよ……（アニスは川いんだから、少しは自覚してほしいよ！）」

「ふぅーむ……別に男だって言えばどうとでもなりそうですけどね……」

「そう言う趣味を持った変態だっているかもしれないじゃないかい。だから今日は泊まっていきな」

「……アルフさん、中々マニアックな事知ってますね……」

「ど、どうだって良いじゃないか！」

「まぁ……そうですね……少し待ってください。電話して聞いてみますから」

俺はポケットから携帯を取り出して、アンクの番号をに掛ける。
まぁ、まだあいつは寝てないと思うから大丈夫だと思うけど……。

プルルル……プルルr。ガチャッ。

『家に居んのに電話掛けてくんじゃねぇ！』

「あらあら、ごめんごめん。お休み中だった？それともアンクったら……お盛んですなぁ」

『……今からお前の部屋に行って殴りかかっても良いか……？』

「あ、それそれ。俺は今家に居ません」

『……ハッ？』

「いや、ハッ？も何も、居ません」

『……てめぇ今どこに居んだよ！！』

「あ、友達の家でございます」

『ハァッ？友達だ？』

「うん、ちょっち用事があったから家抜け出してきちゃったんだ。それでその子が、もう夜も遅いから、泊まっていきなさいって。だから皆に言い訳しといて。お願い♪」

『……帰って来たらシバキ回す……！』

「いやん♪そんな過激な事言わんといて☆帰ったらお触りさせたげるから」

『それこそふざけんな！あぁ分かった！黙っとくからさっさと帰って来いよ！』

「あざまーす。んじゃお休み」

ピッ……。

うむ、何やかんやで優しいねアンクは。
これではやて達にはばれることは無いかな？……いや、それでも心配なんですけどもね。
俺の部屋に入って来たら一発でばれるなこれ……。

「アンタは普段どんな会話してんだい！」

「へっ？どんな会話って……普通ですけど？」

「そんな恋人みたいな会話があるかっ！何だい、さっきのお触りだとか！？」

「えっ？普通じゃないですか？」

「「何処が！？」」

二人して突っ込まれた……どうやら普通じゃないらしい。
普通だよね？

「じゃあ触る？ホラホラ、プニプニだよ？」

俺は服をたくし上げてお腹を見せる。
まぁ、そこまでプニプニではないんだけどね。すべすべだよ？

「アンタは少し恥じらいを持ちな！」

「ひゃん♪」

「絶対わかってないだろっ！？ってフェイト！？鼻血鼻血！」

「ア、アニスのプニプニのお腹……（駄目だよアニス！はしたないよ！）」

あれ？何かフェイトが変態に見えてきたのは気のせいだろうか？しかも、何か口走ってるし。

「フェ、フェイト！少し落ち着きなよ！」

「ハッ……わ、私ッたら……」

どうやら正気に戻ったらしい……。

う、うむ。フェイトの前ではこんな真似はもうしないでおこう。食われるわ。

「さ、さぁって……それよりも、泊まる事になりましたけども。俺は何処に寝れば良いのでしょうか？やはりここはソファーでしょうか？分かりました、ではおやすみなさい」

「何言ってるんだい？私らと一緒に寝るに決まってるじゃんか」

「うん、そうだよ」

「……なん……だと……」

マジかよおい……。

ま、まぁ……何回かはやてと一緒に寝た事あるから、余り大差ないか……。

～～

あれからフェイトとアルフはシャワーを浴びて来て、少し話をしてから布団に入る事となった。

ま、まぁ……緊張はしてるので、俺の事は気にしないでほしいんだ。

「それじゃあ寝ようかね」

「そ、そうですね……あはは……はぁ……」

いやはや、何でこんな緊張してんだろうか。

俺らしくないじゃん！……いや、らしいっちゃらしいか。

「……お、おやすみなさい……」

「う、うん……お休み……」

カチッ……。

電気が消され、各々布団の中に入る。
俺は……うん、フェイトと一緒に寝ています。

「……き、緊張するね……」

「そ、そうですね……あは、あはは……」

「……アニスはさ……寂しくないの？」

「寂しくないって……？」

「お父さんや、お母さんと離れて暮らす事」

……これは何ともハードな質問でございますな。
まぁ、寂しいっちゃ寂しいけど……。

「寂しいよ……でも、それ以上に、毎日が楽しいから、そんなんでも無いのかもね……」

「そう……なんだ……」

「……フェイトちゃんは寂しいの？」

「……うん、少しね」

「そう……。まぁ、フェイトちゃんは子供ですからね、仕方ないですよ」

「むっ、それってアニスが大人みたいな良い方だね……」

「いえいえ、そんな事は言ってませんよ。俺もまだまだ子供ですしねぇ……」

精神年齢は二十歳超えとるけどな。

それは言わない約束だぞ☆

「……私、お母さんのしてほしい事なら何だってする……それでお母さんが笑ってくれるなら、幸せになれるのなら」

「……フェイトちゃん……」

アニメで見てたとおり、純粋な子なんだな……。

……やっぱり、ここは俺がひと肌脱いだ方が良さげだね……。

でも、どうするか……死者を生き返らせる魔法や、魔法薬、技術何て俺にはない。

……やっぱりここは、ジュエルシードを使った方が良いかな？

サイフォジオ……アレはどんな傷でも魔力以外なら何でも治せる。

魔力も多少回復できるみたいだし……。

ジュエルシードを使って、やる……しかないか……。

でも、生き返るかどうかは分からない。もしできたとしても、最低でもジュエルシード四つか五つ……。

そして、その魔力に俺の体が耐えられるかどうかが問題。

そんな多大魔力を使えば、たちどころに俺の体に負担が掛かり、死

ぬかもしれない……。
……まだ漁らない方が良い……サイフォジオを使う計画は今は考えないでおこう。

まだほかに打つ手があるかもしれない……。

「どうしたのアニス、急に黙っちゃって？」

「あ、いえ……何でもないですよ」

うむ、少し考え事にはまり過ぎた手……。
やっぱ魔法が使えないってのは、大きな障害だなこりゃ。

あー、何か俺、まともに魔法使ってねぇやな。
どうしましょ、このままじゃアニスは使えない子って言われそうで怖いは。

「んじゃ、もう寝ましょうか。フェイトちゃん、疲れてますしね」

「うん……ありがとうアニス。それじゃあ、お休み……」

「はいな、お休みです……」

こうして……夜は更けていく……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「朝だぁぁぁぁぁぁ！！！」

「もう昼だよ！」

「なん……だと……」

どうも、何か起きたらもう昼だった、アニスたんです。
そういや……、　隣に妙な違和感が……。

「……ねぇアルフさん、これってどういう状況？」

「フェイトがアンタに抱き着いて寝ているね」

「……今昼だよね？」

「昼だよ」

「……それじゃあ二人して昼まで寝てたって事？」

「そうなるね」

「つか苦しんで何とかしてください」

「そこまで幸せそうな寝顔のフェイトを見るのは初めてだから、嫌だよ」

「なん……だと……」

「それじゃ、ごゆっくり」

そう言ってはけていくアルフ……ちょ、おい。
マジで行くのかよ！？

結局、夕方まで帰れませんでした。

のちに、フェイトはこう語る。

アニスって、柔らかくて気持ちいい、そして良い匂いがして可愛い……と……。

第四十四話　お泊りって緊張するね（後書き）

アンケートの期間は明日で締切りです！

はい、何か最後は無理やり落とした感が否めないですけど、気にしないでください

それよりも、こんなに多くのアンケート回答、ありがとうございます

計17人の方々が回答をくれました

中間報告

プレシア生存：12

見殺し：1

俺が決める：4

……これは生存ですかね？

はっきり言いますと、サイフォジオ＋ジュエルシードで生き返らせるのには無理があるとは思っています

……まぁ、もしかしたらまた魔眼のお世話になるかもしれません

そこん所、よろしくお願いします

そして、私めを心配してくれる感想も多数来ました

もうね、こんな駄目作者を心配なんて……

どうせなら……他の神作者様に感想を送ってげてください

俺なんかには持ったなさすぎますｗｗｗ

だって、涙が出ちゃう、そんな心配された事ないから……

は、はい……ブラックジョークはここまでにして

明日はプレシア亭にカチコミに行く話を書こうとか思ってます

それからあの憎きｋｙをフルボッコ……ククク……よもやこの私が、ｋｙフルボッコの話を書く事になろうとは……

さぁ、どうやって料理してやろうか……ククク……

つか三期のクロノねぇよ

何だよ、ショタの癖して俺より何かでかく高くなりやがって

しかも三期の中の人杉田さんとか、マジ俺得なんですけど

最初聞いたとき吹いたわ

全く、俺に身長寄こしやがれってんだ

はい、そんなわけで

ここまで読んでくださりありがとうございました

感想は、少し時間が掛かりますので、明日になっちゃう人もいます

ごめんなさい

返さない事は無いので、安心してください

それではまた明日とか

第四十五話　訪問、テスタロッサ家（前書き）

どうも

だいぶ回復してきた私です

いやぁ、今回はもうマジでどうしようかと展開に悩みました

そして、久々真面目に書いたよ

今までだったら動画とか見ながら書いてたのに

今日は何も見ないでももくもくと書いてました

そして、今回はこの時間です

はやっ

はい、と言う訳で、本編始まります

第四十五話　訪問、テスタロッサ家

あらすじ

フェイトが覚醒したかもしれない

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「お土産はこれでよしっと」

「甘いお菓子か……こんな物、あの人は喜ぶのかね……？」

「分かんないけど、こう言うのは気持ちだから」

「ふぅーん……」

……えぇ子や（泣）

どうも、いきなりでごめんなさい、アニスたんです。

ただ今段ボール箱の中に身を潜めて二人にばれないように隠れています。

今日はフェイトが家に一回帰る所です。
えぇ、着いて行きますとも、駄目ですか？
アンクに話したら怒られたけど、ここは引けなかったとです。

それにしても……これってストーカー？
うん、知ってるし。でも行かなきゃ話も出来んしな。

まぁ、頑張るよ。最悪、斬魄刀で軽く脅してくるわ。
へ？それはやり過ぎだ？ですよねー。

あ、もう行っちゃった……さて、魔力の残り香で座標を計算してッと……。
よし、完成した。

「待たせたなぁ！」

俺は段ボールから勢いよく出て、お決まりの台詞を吐く。
まぁ、この場には俺しか居ませんけどね。

「さて、行きますか。……リク・ラク・ラ・ラック・ライラック……」

キーを唱えるよ、札転移符は自動で魔力を放出し、そのまま光りだす。
さて、行きますか。時の園庭へ……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「よっと……」

うひゃー、こりゃ広いわ……あーらら。どうしましょこれ……。
中迷路じゃんか……俺にとってはね。

「まぁ、少しそこら辺をうろついてみますか」

少し時間かかりそうだねこりゃ。
……つか、マジでここ広いんですけど。

《お前迷子か》

「ちょい待ちクイーン。それはちょいと間違いがあるよ。俺はまだ
ここに来たばかり。だから迷子ではない」

《まぁ、良いですけども……それにしても、ちょいとプレシアの事について調べて起きましたよ》

「……いつ調べたんだよ……」

《いえ、暇なときにですけど》

……ま、まぁ……気にしたら負けか。
どうにでもなれってんだ。

《纏めて簡単に話すと、２６年前、ミッドの中央技術開発局の第３局長だったが、個人開発の次元航行エネルギー駆動炉「ヒュードラ」使用に失敗、中規模次元震を起こしてしまい、地方に異動後、辺境で行方不明になった。２３歳で結婚。２８歳で１児アリシアを授かる。その後、夫とはアリシアが２歳のときに生活のすれ違いから離婚している》

「……お前、それって……」

《はい、管理局のデータを軽くハッキングしちゃいました。テヘッ☆》

「……はぁ、お前ってデバイスは……」

頭が痛くなって来たよ……ホント。
全く、何でいきなりそんな事しだしたんか分からんわ。

「まぁ、そこまでは原作を知ってるし、大して良い情報でもないね」

《ですよねー。まぁ、原作とかが変わってなくてよかったじゃないですか。それよりも、良いんですか？行かなくて》

「あぁ、そうだね。そろそろ動こうか」

早く行かないと、フェイトが可愛そうだ。
サッサと行って、話し合いを……上手く行くかな～。

「クイーン、フェイトの魔力を探って、道順確保」

《りょーかいです。んじゃさっさと解析しちゃうんで、さっさと動いてください》

「はいはい」

もう何か、このデバイスめんどくさいなー……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～
～～～～～～～～～～

アンクサイド

《……何で行かせた？》

「アッ？唐突に何だよお前」

《あのアニスの旦那、正直言ってあの大魔導師に勝てる体力も体調もねぇぞ。できると言ったら、魔法をレジストするだけだ。それなのに、どうして行かせた？》

「……はぁ、あのなぁ……そんなもん、俺は一番分かってねぇんだよ」

《……ハァッ？》

グリードは変な声で驚く。
しょうがねぇだろう。俺だって、良く理解してないんだ……。

「どうして行っちゃ駄目なんだよ！？」

「馬鹿か！てめぇの体調暗いてめぇで分かるだろう！魔法も使えないお前で、プレシアに適うとか思ってんのか！」

「思ってない！だけど、このままフェイトを見捨てろって言うのかよ！？」

「あぁそうだ！あんな奴なんてほっておけ！お前は、今闇の書の主なんだ！管理局が現れて、それがバレたらどうなると思ってんだ！」

あの時、俺は確かにもう反対をしていた。
こいつを、もう危険な目に合わせたくないから。せめて、二期に入るまでは、平穏に暮らさせていたかった。

「知ってるさ、それ位……でも、フェイトを……助けたいんだよ！フェイトは、誰の手も掴もうとは考えていない……そう……火野映司みたいに……」

「！……だからどうした……」

「……フェイトは、絶対に掴まない……いつまでも、いつまでも、

自分の親の柵から抜け出せない……。だから、せめて……俺がフェイトの手を掴む！フェイトが掴んでくれなくても！俺が！……いや、俺とアルフがフェイトの手を掴む！」

「……馬鹿野郎が……」

こいつは、ホントに大馬鹿野郎だ……。
どうして……そこまで他人に……。

「他人じゃ、無いよ……」

「！？」

「友達、だから。フェイトは、俺の友達だから。それに、他人だったら、俺だってここまでやろうとは思わないよ。ただ、俺は我が儘なだけなんだ。手を伸ばすってのは……そんな簡単な事じゃないって事は知っている。でも、それでも……差し伸べられる手が空いてるのなら、友達の為に使うのが、筋ってもんじゃん？」

「……はぁ……分かった……」

「アンク……」

「サッサと行って来い。その代り、俺は無いもしないし、今回は手出しはしない……お前がやるたいようにやれ。だからと言って、魔法は使うなよ？」

「……うん！ありがとうアンク！」

……………。

「ホント……何で行かせたんだろうな〜……」

《ハァッ……お前もつくづく、馬鹿って事だよ……バーカ》

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「……ここか……」

角から観察なう。
ちょっち、何か……ピシパシ聞こえてくる……。
これは酷い……。

アルフも、何か壁ガンガンしてるし……。
ったく、どうしてこうも……この世界の子供は……。

「おいっすアルフさん」

「!?……あ、あんた……どうしてここに……」

「いやはや、何かフェイトちゃんが次元移動するの見えたから、気になって魔力辿って来ちゃいました。すいません……」

「今そんな事はどうでも良い!フェイトを、フェイトを助けて!!」

「……アルフさん……」

「頼む!もう、アニスにしか頼めないんだ!!だから……お願いだよぉ……」

そう言って、泣き崩れるアルフ……。
あぁ、任せとけ……その為に……。

「うん、任された!」

俺が、ここに居る！！

さて……行きますかね……。
俺はドアの前に歩き出し、一歩手前で止まる。
そして、深呼吸を何度か繰り返す……ドアを勢いよく開ける……。

さて、行きましょうか……。

「うちの友達傷つけちゃってる鬼婆が居るってのは、ここですか？」

第四十五話　訪問、テスタロッサ家（後書き）

どうも

アンケートはもう締め切りました

ありがとうございます

それでは結果発表……

ドルルルルルルルルル……。

じゃじゃん！

結果は！

……大差で……プレシア生存に決定しましたぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！

ドンドンパフパフー！

いやぁ、たくさんの回答ありがとうございました

これで、プレシアさん生存でございます

後は……アリシアか……まぁ、展開は考えています

つか、たぶんもうこれしか考え付きません

かなりのご都合主義になるかも……

まぁ、少しどんでん返しが……あったりなかったり

さて、早く書き終わりましたし

感想返さなきゃ……

ここまで読んでくださりありがとうございました

第四十六話　な、なんだってー！！？（前書き）

どうも、私です

またもや更新は速い

何か、すっげぇ話書くのが面白いです……

あぁ、何でしょうか

すっげぇ体調が良いんです、最近

もう、発作の予兆とか全然ないんです！

もう薬って良いな

そうだ、もう薬は絶対手放さないぞ！

……あ、そういや俺、昨日と今日の分の薬、飲んでなかったんだ…

……

……本編始まります

第四十六話　な、なんだってー！！？

あらすじ

アニスたんがアップを始めた様です

〜〜

「……アニ……ス……？」

「ヤフーフェイトちゃん、ちょっちお邪魔させてもらってるお」

「……誰かしら？　勝手に私の家に上がり込んでいる何て、礼儀がなってないわね」

「生憎と、自分の子供を痛めつけてる大人の家に何ぞ、礼儀も作法もあったもんじゃない故に」

「……貴女の友達かしら？」

「ごめん……なさい……着いてきちゃった……みたい……」

ふむぅ、ボロボロの体で俺を庇いますか……。
どんだけ優しんですかゴラァ！

って、何ムチ振るおうとしてんですかあんたわぁぁぁぁぁ！！

パシィン！

「！フェイトが、消えた……」

「ふぇ～、間一髪でしたねぇ」

「……えっ……？」

俺はフェイトを抱きかかえ立っている。
全く、酷い事するおばさんです事。

「何時の間にフェイトを抱えて移動したのかしら？」

「アンタに言う事なんて、何一つ無いんですけどねー」

「あ、あの……アニス……」

「ん、フェイトちゃんは少し黙っててねー」

はぁ、やっちまった。
瞬歩使っちまったよ……で、でも、魔法じゃないからセーフ何だよ！

「今のは……瞬歩かしら？実際に見るの初めてね」

「あら？瞬歩ご存じなんですか？」

「えぇ、知っているは。その歩法は、ある一族が編み出した特殊な歩法……クロイツベル一族が得意とする物よ。まさか、裏の人間が地球に居ただ何て……」

「良くご存じで、アニスたん花丸あげちゃう♪さってっと……その前に、フェイトちゃんは一端休もうか？アルフが廊下に居るから……歩ける？」

「う、ん……大丈夫……だよ……」

俺はフェイトを床におろし、手を離す。
フェイトはヨロヨロとして歩きで、何とかこの部屋から出ることが出来た。

「……さっ、これで腹を割って話すことが出来ますね。プレシアさん？」

「あら、名乗った覚えはないのだけれど？」

「貴女みたいな大魔導師を、知らないわけはないじゃないですか。大魔導師の、プレシア・テスタロッサさん？お初にお目にかかります、アニス・クロイツベルと申します。少し、お話しでもいかがですか？」

「断るわ！」

ビシャァ！！

突如、俺の上から雷が落ちてくる。
俺はそれは魔眼でレジストする。

「……ふぅ、やれやれ……これはとんだ野蛮な歓迎ですね……」

「……どうやって私の魔法を消したのかしら？」

「あら？俺との会話は嫌だと、今さっき俺にもうしたではありませんか……やれやれ、やはり大魔導師ともお方は、自己中なのでしょうか？」

「口の利き方には気を付けた方が良いわ。出ないと、私は子供だからって用容赦しないわよ？」

「勘違いされては困ります、手加減するのは貴女では無く、俺ですから……」

ビシャァ！

パキン！

おぉこわっ、また雷ですか。
当たったら、バリアジャケットを着てない俺だったら一たまりもないなこれ。

「あぁ野蛮野蛮、何たる野蛮さ。これが彼の大魔導師か……風情も、

品格も、何もあった物じゃないですね」

「裏の人間に、風情や品格などと言われる筋合いわないわ！」

「やれやれ……まぁ、いいですけ、どぉ！？」

間髪入れずに攻撃ですかぁ！？
アンタは何処のビリビリ中学生ですか！？
……あれ？何だろう、俺の魔眼が今の発言で幻想殺しに見えてきた
……でも幻想殺しよりも強力とはこれいかに……。

「少しは！話を！！聞けやゴラァァァァ！！」

「しつこい！」

「あぁ！何だ何だよ何ですかこの状況は！」

話すら聞いてもらえないこの状況……。
あー、何か……めんどくさいやな……。

「あぁ、もう……ホントに……ふザケルなぁぁぁぁ！！」

バチバチバチ！！

「なっ、ウアァア！！」

あ……やっべ……今のなしでお願いしてもよろしいでしょうか？
何か間違ってザケル出しちゃいました……何でこんなガッシュの第一話みたいな感じで呪文出たし……。
もう、これ……死んだな……。

「……くっ……このっ！グッ、ゲホッゲホッ！」

あら……プレシアさん……。
もう、体がボロボロなのに無理しちゃいけんでしょうが！
プレシアはいきなり咳き込んだ、そして、口からかすかだが血が垂れてきている。

「大丈夫ですか！？」

「ゲホッ！……あ、貴方に……心配される……筋合いは……」

「ハァッ……親子ともども……頑固かいな……ウェッ、ゲホッゲホッ！！」

やっぱ……何か俺も副作用出てきちまった！？
うぇ、服の中が何かグショグショ……きっと腹から血が出てんだろうな～。

「ウェッ！ゲホッ！ゲホッ！……ガフッ……！」

あー、やっぱ魔法何て使うんじゃなかった……。
つか、瞬歩は良いとして、何で俺、うっかりで出ちまった魔法で死にかけてんだろう……。

「ちょっ……私よりも貴方の方が酷いじゃない！」

「……ふぇっ？……ゲホッ！……」

何か……プレシアさんが駆け寄って来たんですけど……。
何これ怖い……。

「どう……して……？」

「今は喋らない方が良いわ……ごめんなさい……。少しやり過ぎちゃったわ……」

……何だ……これ……。
訳が分からない……何で急にプレシアの……性格が……。

「ゲホッ！ゲホッ！……だ、大丈夫……です……ハァ……ジオル……グッ……ガハッ！」

俺は無理やりジオルグを唱える。
荒療治だ、この際ダメージ何て気にしてられないわ！

「血が……止まっていく……」

「ハァッ……ハァッ……すいません……お騒がせしました……ケホッケホッ……」

「これは……貴方の魔法なのかしら？」

「……はい、そうなります……。それよりも、どうして俺なんかを？はっきり言って、さっきの貴女と、今の貴女とでは……」

「性格が違う……って、言いたいんでしょ？」

「……はい……」

「……貴方は、私の事を何処まで調べたのかしら？」

「……貴女が大魔導師である事と、実験中に、実の娘さんを……アリシアちゃんを亡くしている所まで……」

「……そう……だったら話は早いわね……。私は、二重人格者よ」

「……はい？」

その言葉は、俺にとってあまりにも衝撃的だった。

……今、プレシアは何て言った？

……自分の事を、二重人格者……って……。

「私は、その実験で娘を亡くした時、新たな人格が生まれちゃったのよ。それがさっきの、フェイトを傷つけていた私……」

確かに、精神的ショックにより、新たな人格が生まれることは珍し事ではない。

彼の有名な多重人格者……ビリー・ミリガンと言う人が居る。

彼は身体的虐待や、性的虐待により、新たな人格が生まれてしまった。

それと同じ原理で、人は精神的ショックや、余りにも受け入れられない出来事が起こってしまった時になど、その新たな人格が生まれやすい。

だから、プレシアさんが言ってる事は、信憑性こそは無いけど、あながち嘘とも取れない事なのだ。

「……信じられないわよね？自分が作り出した娘を、痛めつける何て……親としてあるまじき行為だわ……そんな事をしても、アリシアは帰ってこないのに……もう一人の私は、頑なにアリシアを生き返らそうと何を言っても聞かない……」

「……いえ、今のプレシアさんは、とてもお優しい方です。雰囲気で分かります、ウチの母と同じ感じがします……。信じますよ、貴女が二重人格である事を……」

「……ありがとう、アニスちゃん」

「あ、いえ……俺男何で、君付けでお願いします……」

「……はい？」

……今度はプレシアさんが固まってしまいました……。

やはり俺では、シリアス（笑）になってしまう！！

第四十六話　な、なんだってー！！？（後書き）

二重人格者

プレシアの精神的な問題で、この事は決してありえないなって思ってやってしまいました

こっちの方が、後々書きやすいだろうなって思ってやっちまいましたもしこの小説を読まれている方で、解離性同一性障害の方が居ましたらすみません

悪気も何もないんです、冒涜でもありません！

今この場を借りて、謝罪したいと思っています

すいませんでした

……さて、明日は……何を……書こうかな……

ここまで読んでくださりありがとうございました

第四十七話　じゃあ、救ってやんよ！！（前書き）

どうも

ここ最近、どうも真面目に書いてる割には、文字数が少ないあたしです

さて、今回は一体どんな話になるのやら

まぁ、頑張ります

そして、ｆａｔｅ／ｚｅｒｏのランサーがカッコ良すぎて惚れる！

それで、何か面白いキャラ考えちゃったので、三期でオリキャラとして登場させちまいたいなーなんて思ったりしちゃったりしちゃって（チラッ

当然二槍使いでございます

つかグリリバさんの声エロ過ぎｗｗｗ

リアルじゃ廃人の癖して、あの人はホント多彩

もう尊敬すら通り越して声聞くのも恐れ多いわｗｗｗ

緑川さんはもうマジすげぇ……まぁ、それでも山ちゃんには適わないんだがな

山寺さんは山寺さんで、声幅が凄すぎて……

どうやったらエヴァの加持さんの声からスティッチの声になるんだよｗｗｗ

すご過ぎ……男性声優ではこの二人が結構俺の中では存在感大きいです

何か声優談義になっちった

でも楽しいから後書きでもやろう

つう訳で、本編始まります

第四十七話　じゃあ、救ってやんよ！！

あらすじ

プレシアさんが二重人格者だと発覚……いや、原作壊れすぎやろ……

～～

「お、落ち着きましたか？」

「ご、ごめんなさいね……あまりにも信じられない事だったから……」

何とか性別証明に成功。

べ、別に、俺のナニとか見せたわけじゃないんだからね！

……普通にショウメイシマシタ……。

「それで、どうすればプレシアさんのもう一人の人格は納得してくれるんですか？」

「……忘れられし都、アルハザードに行って、アリシアを蘇らせる

ことが、もう一人の私の願い。たぶん、アリシアを蘇らせる事が、納得できることなのかもしれない……けど……」

「死人を蘇らせる事が、可能な魔法何てこの世界には何処にもありはしないですよ。アルハザードに関しても、ホントにあると決まっているわけじゃありませんし……」

「そう……なのよ……。でも、そうと分かっていてもなお、もう一人の私は止まらないわ……」

アルハザード……。
忘れ去られた都……俺も次元世界出身の人間。その話は聞いている。
アルハザードは……確かにある……だけど、それが分かるのは三期の時。
確かドゥーエ……だったかな？彼女の発言により、存在が証明された……。

「……アルハザードは……確かに存在しています」

「……確証はあるのかしら？」

「いえ、ありません……ですが……」

「それは、クロイツベル家の情報網と取っても良いのかしら？」

「……はい……！」

「ふふふ、ありがとう。でも……私はもう一人の私を、好きなようにはさせないわ」

「……プレシアさん……貴女、もしかして……死のうと、しているんですか？」

「……さぁ、どうかしらね……。でも、私はフェイトを傷つけ過ぎた……我が子を……もう一人の私が歪んだ願いで完成してしまったクローンを……私は死んだアリシアの分まで、精一杯愛した……でも、それでは彼女は満足しなかったわ……。性格も、趣味も、行動も……アリシアではないと分かった時、私が気づいた時に目の前に居たのは……傷だらけで横たわる私の愛おしい我が子……そして、親とも思えない行動、言動……そして終いには、こんなバカげた、危険な事を、私はあの子にお願いしてしまっている……」

……プレシアさん……。

何だよ、これ……優しすぎる……彼女は、純粋にフェイトを愛している……。

アリシアと同じく……分け隔てなく、愛している……。

「もう今更……私がどの面を下げて、親の顔を出来るのかしら……。あの子はもう私を見てくれない、私はもう、あの子を見ていられない……」

「そんな事……ないですよ……。フェイトちゃんはいつも、プレシアさんの事を話していました。大丈夫ですよ、事情を話せば、フェイトちゃんだってきっと……」

「でも、もう一人の私は納得しないわ。それに、事情を話したところで、私は……」

あぁもう！親子ともども頑固だなホント！
何やねん！ホンマ何やねん！！

「それに、私はもう長くは無いわ。見ていたでしょ？さっきの貴方との戦闘で、吐血していた所を……」

「はい、見ていました……」

「私はね、これは天罰だ思っているわ……もうこの病気は治せない。だからせめて、フェイトが悲しまないように……」

「……もしかして、もう一人の自分と同じことを……」

「……えぇ、もう一人の私が表に出てこない時、代わりに私がフェイトを傷つけたわ……。何ど、泣きそうになったか……何度自分を殺そうと思ったか……分からないわ、もう……」

「……」

はぁっ、ここまで聞いちゃ、この人を死なせる事なんて出来なくなったな……。

俺だって、そこまで薄情者じゃないしね。

「じゃあ……俺が救って見せます。貴女も、もう一人の貴女も……そして、フェイトちゃんも……」

「……分かっているのかしら？それは、アリシアを生き返らせるって言っているような物よ？」

「やった事はありませんが。俺が使う魔法は、他の魔導師とは少し違います。デバイスなしで魔法を行使する事だってできます」

「確かに、さっきバリアジャケットも纏ってなかったあなたの手から、電撃が放たれた位だから……」

「その魔法の中に、傷をたちどころに全快にする魔法があるんです」

「さっき貴方がみるみる回復して行った魔法かしら？」

「いえ、あれとは別の魔法です。あれは俺個人にしか使えない魔法何で。それで、その魔法とジュエルシードを何個か使って、アリシアちゃんを生き返らせます。そして、その時にプレシアさんの病気も同時に治します」

「……ホントに、そんな事が可能なのかしら？」

俺はプレシアさんの目を真っ直ぐ見……頷く。

失敗しないさ……俺はやる……例え、俺が死にかけてでもな……。

「それじゃあ、もう俺は行きます。所で、ジュエルシードは何個集まってますか？」

「三個よ、これで足りるかしら？」

あれ？何で三個なんだ？

……あぁ、そうか……確かアンクが持ってたな、もう一個……。

だが、四個で足りるか？……少し不安になって来た……。

「いえ、まだ足りないですね……五つ、五つあれば足りると思います……後二つは俺が自分で取ってきます」

「大丈夫なのかしら？さっき、あれだけ吐血と出血をしていたけれど……あれは何なのかしら？」

「……あれは……一種の呪いですよ。俺は、魔法を使うと体が呪いに蝕まれて行く、性質の悪い呪いです」

「そんな！？……じゃあ、貴方がさっき言っていたプランは出来ないじゃない！」

「大丈夫ですよ、俺はまだ死ぬ事は無いですから。それに、友達を残して死ぬなんて、サラサラありません」

「でも……」

「心配は無用です。俺は早々死にませんから……ね？」

「……ジュエルシードは……フェイトに集めさせるわ……」

「な、何いっ……！？」

プレシアさんはいきなり杖を俺に向けて来た。

……まさか……もう一人の人格が！？

「……それ位の事も出来ないくらい、私は弱ってる……我が子に頼むことしかできない私を、許して……とは言わないわ。だけど……我が子の友人を、みすみす危険な事をさせる事は出来ないわ……フェイトにはやらせているのに、どの口が言っているのか分からないけど……今の貴方より、フェイトの方が使えるわ……だから、これだけは譲ってちょうだい……」

「……やっぱり、貴女は最低だ。自己中で……馬鹿だ……それ以上、自分に罪を着せないでくださいよ……」

フェイトを心配しているのに、どうして俺なんかを気に掛けるんだよ……。

おかしいだろう……初対面なんだぜ、俺ら。

「……ハァッ、分かりましたよ、仕方ありません……ただし、影から見守る事位はさせてくださいな。それ位の権利は、俺にあるはずですよ？」

「えぇ、分かったわ。ごめんなさいね、脅すような真似をしてしまって……」

「いえいえ、お気になさらず。それでは、俺はこれで失礼します。フェイトちゃんには、俺は帰ったと伝えてください」

「分かったわ……」

「では」

俺は転移符を出して、座標を地球に固定する。さて、帰りますかねぇっと。

～～～

プレシアサイド

……不思議な子だったわ……本当に。
フェイトより小さいのに、同い年でしかも男の子……。
……それに、あの子の目……本気だったわ。

初対面の、しかも自分の子供を傷つけている私なんかを助けるために……。
そして、私だけじゃなく、フェイトも、もう一人の私も……アリシアも……。

「フェイト……良い友達を持ったわね……」

でも、クロイツベル一族の人間……。
どうして、クロイツベルの人間が、異次元世界に？

あの一族は、決して自分が居た世界から、他の次元世界に干渉はしない筈……。
あの子には、何があると言うの？
それに、魔法を使うと発動する呪いって……一体……。

コンコン……。

「！……入りなさい……」

ドアがノックされ、入って来たのはフェイトだった。
……回復した様ね……ごめんなさい……痛かったわよね。

「母さん……アニスは……？」

「……あの子なら、もう帰ったわ。私に言いたい事があっただけみたいで……それで？もう回復したのかしら？」

「はい、もう大丈夫です……」

「そう、なら早くジュエルシードを集めに戻りなさい。まだ足りないわ、たったの三個じゃ全然……分かった！」

「はい……分かりました……。あ、後……これ……」

フェイトはこっちに近づいてくると、私に何かが入っている箱を渡してくる。
何かしら、これは？

「甘い物を、お土産に買って来たんだけど……。どう、かな？」

フェイト……ホントにごめんなさい……。
こんな私に、お土産何て……。

「……ふん、そんな事は良いから、サッサとジュエルシードを集めに行きなさい！」

「……ごめんなさい……行ってきます……」

クッ……フェイト……。

ホントに……ごめんなさい……。

「……ありがとう……フェイト……」

私は小声で、フェイトにお礼を言う。

それがフェイトに聞こえていたんだろう……フェイトは驚きながら後ろを振り向く、私を見る。

「……どうしたの？早く行きなさい！」

「は、はい！」

フェイトは少し笑顔になり、すぐにこの部屋から出ていく。

……ありがとう……フェイト……。

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

～～～～～～～

「……あー、疲れた……」

地球なう。

何とか帰ってこれた……いやぁ、良かった良かった。

《まさに原作崩壊》

「いや、俺が闇の書の主になった時点でもう原作崩壊だよボケ」

もう、何かあの二人頑固過ぎてイライラするわ。

いや、俺も十分頑固ですけど、別にあそこまで酷くねぇし。

あー、これはあれだもう何か……あれだ。

何なんだー！！！

「と、とにかく……アンクにジュエルシードをもらわないと。話は先ずそれからだ」

《それにしても、プレシアさん優しかったですね。まるでマスターの母君に様でした》

「いや、天と地の差だろう……」

うちのオカンはあそこまではない……事も無かった……。
あれはあれで凄いからね……色々と……。

「ま、まぁ……頑張りますか」

《てかぶっちゃけ。マスターがさっき使うと言っていた魔法って、サイフォジオの事でしょう？》

「あ、うん。良く分かったね」

《まぁ、たちどころに傷を全快にする魔法って、それしかありませんしね》

「まぁ、そうだろうけどよ……」

《それで気になって、サイフォジオを解析してたのですが》

「うん、どうだった？」

《……ジュエルシードを使い、アリシアを生き返らせる事が出来るのは、大きく見積もっても３５％……結構無謀ですよ？》

「ありゃ、何だ、実質出来るんだ」

《まぁ、可能です。そして、後の７５％の中に、マスターがジュエルシードの魔力に耐えられない事を現しています》

まぁ、サイフォジオでも血反吐吐きそうだしね。
気力で乗り切るしかないなこれ。

《まぁ……無謀ですねぇ》

「あんまし無謀無謀言うなし。自身無くすだろうがおい」

《っはぁ、分かってないですねマスターは。これでも心配してるんですからね！べ、別に、マスターが死んじゃうのが怖いだ何て思ってないんだから！》

「何でツンデレになったし……だからそのボイスでツンデレは止めなさいって」

民安さんボイスだから、結構グッとくるやん。
まぁ、俺が死んだらはやてにでも上げるかな……って、何で俺、死ぬ前提で話してんだ！？

「ま、まぁ……今はさっさと家に戻ってジュエルシード探しの前に休息を取ろう。かなり疲れた」

《はいはいっと……。では帰りますか》

「そだねー」

ｋｙ執務官フルボッコまで……後もう少し……クックック……。

第四十七話　じゃあ、救ってやんよ！！（後書き）

どうも、プレシアさんマジ優しいっす！

書いていて鬱になりかけたわ……

そんな事より声優談義しましょ♪

若本さんは違う意味で存在感が大きいですｗｗｗ

あの人は癖のある喋り方だよね

ニニンがシノブ伝の音速丸は好きだった、そして水樹さんも出てたから俺得だった

後、水樹さんのライブ行きてぇぇぇぇぇ！！

田村さんのライブにも行きてぇぇぇぇぇぇぇ！！

でも金ないから無理だな、時間も無いし

つか、田村さんのＥｎｄｌｅｓｓ　ｓｔｏｒｙマジ良い曲

シーキューブ……あぁ、フィアたんマジかわゆす……っと、俺はロリコンでは無いッと

つか声優関係なくなって来たな

あ、そうそう、声優と言えば

白石稔が結婚したね

おめでとう、末永く爆発しろ

そしてくじらさんもおめでとうございます！

末永く幸せに！

そういや、結構遅いけど、鈴村さんと坂本さん、この二人も何か月か前に結婚したね

おめでとう、二人とも、末永く幸せに爆発しやがってください

つか、白石稔……何故かさん付けしにくい……何でだろうか？

まぁ、所詮芸人声優だしな

でも地味に歌上手いから腹立つｗｗｗ作詞も上手いしｗｗｗｗ

後は、岡村信彦さんも、とあるのアクセラさん見てすっげぇなって思ってる

あの人ホントすげぇ、喉どうなってんのか知りたいわｗｗｗ

何であんな声だせんだろう

試に家に俺だけしかいないときにアクセラさんの台詞を、アニメ本編見ながら本気で言ってみたら、数分で喉つぶしかけた……

この、カラオケで6～7時間歌い続けても喉が潰れない、デスボをしても喉が潰れない、この俺がだぞ！

いや、どうでも良いか……

でも素の状態の岡本さん、めっちゃ可愛いｗｗｗ

男性なのに、むっちゃときめいたｗｗｗ

しかもむっちゃカッコ良くて優しそうな顔してたｗｗｗ

何であんな声出来るんだろう……人間って不思議だね！

かねともさんみたいな声もある位だし……しかも素であんな声って

すげぇな人間って

んじゃ、もう何か長くなりそうなのでここで切ります

ここまで読んでくださりありがとうございました

第四十八話　ノリと殺意は計画的に（前書き）

どうも

後ろ髪がミニポニテに出来るほど髪が伸びて来た私です

だから親に、邪魔くさいから縛ってやる！

って言われて、何かポニテにされちった……

やっぱ切った方が良いのかな？

それにしても

今日が何かいつもより暖かい

不思議だなぁ……

今までだったら結構寒いのに……

不思議なもんだね

さて、本編始まります

第四十八話　ノリと殺意は計画的に

あらすじ

アニスたんが本気を出したようです

〜〜〜

「アッパーカットとは、下から突き上げるように放ちオパ、放つパンチの事で！アッパーカットとは、下から突き上げるように放つパンツの事で！ｗｗｗアッパーカットとは、下から突き上げるように放ちｗｗｗアッパーカットとは、下から突き上げるようにｈもう止めようかこれ」

《何を言ってるんですか、何を……》

「いや、噛み谷さん……じゃなかった、神谷さんの真似……」

《あのですね、これからジュエルシードの争奪戦が始まると言うのに……少しは緊張感を持ってください！》

「アッパーカットとは、下から突き上げるように放つパンチの事で、大抵は、顎を狙うよ☆」

《あぁもう駄目だこいつ》

と言う訳で、今張り込み中。
まだジュエルシードは発動してないし、なのは達も来ていない。
もしかして……俺場所間違えた？んなわきゃねぇか！

「クイーン、何だか人気が無いね……」

《まぁ、もう夕方ですしね》

「……暇なんですけど」

《もう少し辛抱せいやこのガキが》

「何故キレたしｗｗｗ」

《ｗｗｗｗ》

「《……暇だなー》」

少し早く来過ぎちまったのが悪い。
でも、暇なもんは暇なんですもの。

《ぬるぽ》

「ガッ……って、何やらすんだよクイーン……」

《クリスティーナ、もといねらーよ！》

「はいはいオカリン乙オカリン乙」

《……僕と契約して、魔法少女になってよ！》

「少女ではないが、既に魔法少年だ」

《……ネギま？》

「ｏｈ……ちっがーう、俺はあんなラッキースケベショタちゃいますから」

意外に心外なんですけど……。
あいつは既に、人ならざる者になってしまったんだよ……。
つか最近のネギま人気落ちてるな。やはり魔法世界編の終わり方が微妙だったからかな？
そしてエヴァたんの顔芸が増えたね。

後ネギは人外へ……あぁ、何であそこの世界の人間って簡単に人捨てちまうんだろう……。

《……やはりここは私の声の元となってる人のネタで……》

「……あの人、エロゲ声優だから、止めとけって……」

《……マジかよ……》

「……マジだよ……」

《……歌います！》

「止めろぉぉぉぉぉ！！」

《聴いてください、フェスティバライフ！》

「粉々にすんぞてめぇ！！」

「《……ＨＡＨＡＨＡＨＡ！》」

って、何だよこれ、もうわけわかめ。
テンションおかしいってアンタ……。

《所でマスター》

「何だ？」

《先程から握っておられるものは何でしょうか？》

「ハッ？クイーンじゃねーの？」

《私はマスターの首に掛かっております》

俺は首部分を触ってみる……。

うむ、確かにクイーンは首に掛かってるね……んじゃあ、これは一体……。

「……ってこれジュエルシードやないかーい！ＨＡＨＡＨＡ！」

《何それ、笑えない……》

「ですよねー……ってジュエルシードォォォォォォォ！？」

《何でそんなもん持ってるんですか貴方はぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！》

「どどどどどどど、どうしよう！？」

《とととととと、取り敢えず、おおおおおおおおおおおお、おちおちおち！》

「お前が一番落ち着いてないから！？」

《これでも冷静な方なんです！！嘘ですごめんなさい！おかーさーん！！》

「だから落ち着けと言うのに！お前にお母さんは居ない！しいて言うなら弟は居るけども！」

《んで、何でマスターがジュエルシード持ってるんですか？》

「いきなり冷静になるなよ！？びっくりするわ！」

ホントにこいつ……何なんだよおい。
つか、そんなの俺が一番知りたいんですけど……。

《……封印しちゃいません？》

「貴様は俺を殺す気か」

《ですよねー》

封印魔法何て物を使おうものなら、俺は死ぬから。
ジオルグよりもザケルよりも瞬歩よりも魔力使うねんぞお前。
そんなもん使っちまったら、明日のお天道様見れねぇべ。

それにしても、ジュエルシードってこんな所に落ちてたっけ？

……うーむ……不思議だ……俺って幸運Ａくらいには上がったんじゃない？

あ、むしろ逆、運なさ過ぎてジュエルシード掴んじゃった感じ。
こりゃまいったまいった、なっはははは！

「……捨てちまうか」

《君の今の言動！万死に値する！！》

「ティエリヤ乙」

《それで？それどうしましょうか？》

……うーむ、管理局には出て来られたくはないんだけど。
そうなると後々大変な事になるし～……ん～、どうしよう？

「……とりま、この後ろの木にでも着けてみようか」

《無いそれ怖い》

「……じゃあこの草の上にでも……」

＼アッカリーン／

……置いた時の効果音がおかしいんだけど……。

キラッ☆

そしてジュエルシードが光りだす音もおかしいね、うん……。
って、発動しただとぉぉぉぉぉぉ！？

「いやぁぁぁぁ！？何か大きな木になってるぅぅぅぅぅぅ！？」

《ジュエルシードが発動しました！マスター、逃げてください！》

「キャアァァァ！！」

《ってもう掴まっとるんかい！？》

ちょっ！？この木の根邪魔だし！？
ひゃっ！？ど、何処に入ってんだ！？

「ふぁっ……だ、駄目……そこ……わ……！？」

《ま、マスタァァァァァァ！？ど、どうしましょう！？マスターが木の根にあられもない姿のされているぅぅぅぅぅ！？》

簡単に言うなら、何か両手両脚にツル巻きつけられて空中で浮かされて、M字開脚的な感じにされてますね……。

「ひぅ！？ハァッ……だ、駄目なのぉ……そこに、入って……来ちゃぁ……」

《マスターが犯されてしまうぅぅぅぅぅ！？正確には侵されてしまうぅぅぅぅぅ！？》

「くっ……そ……調子に……のるはむぅ！？」

《マスターの口に木の根がぁぁぁぁぁぁぁ！？》

痛い痛い！
とげとげして痛いんだよ！入れんな！痛い痛い痛い！？
口の中切れる！切れるから！？

「うわぁ、生意気に、バリアまであるのかい……。それに、あの捕まってる子……」

「うん……何処かで見た事あるような……」

あっ、フェイトだ……。
ちょっ！？助けてぇぇぇぇ！？このままだと俺、行ってはいけない領域に行っちゃうぅぅぅぅ！！！

嫌だぁぁぁぁぁぁ！逝きたくなぁぁぁぁぁぁぁい！！

「……今までのより強いね、それに……あの子も居る……」

あっ、なのはぁぁぁぁ！
ヘルプ！ヘルプミー！！ひゃっ！？コラ！下の方にまで入ろうとすんな！

ビリッ！！

「ふむぅ！？むうぅぅ！？」

服破かれたぁぁぁぁ！？
ふざけんなぁぁぁぁ！俺のこんな絵面なんて、何の需要も無いぞぉぉぉお！？

「ブォォォォォォオ！！」

「ユーノ君逃げて！！」

ユーノの前に俺を助けろぉぉぉぉぉ！
ひゃっ！？コラ！乳首触んな！

何なんだこのジュエルシードの発動わ！？
ふざけんじゃねぇぇぇぇぇ！！

《Ｆｌｉｅｒ　ｆｉｎ》

「飛んで、レイジングハート！もっと高く！」

あ、なのは！
こっち！こっちだよぉぉぉぉ！俺はここに居るよぉぉぉぉぉぉぉぉ！？
あ……見てないや……ま、まぁ……あんなに高く飛ばれちゃ見えないよね……。

って、そうじゃない！何故ここに居るのに見えんのだ！

《マスター！この暴走体、バリアみたいなのを貼ってマスターを見えないようにしてるんです！？》

さっきフェイト見えてる言ってたやん！？

《アレは完璧に発動する前の話です。完璧に発動した今、マスターの姿は完全に消えています！》

「ふほはろぅ！？（嘘だろぉ！？）」

「行くよ、バルディッシュ……」

「行くよ、レイジングハート！」

あぁ……もう……何て言うか……。

ホントに……。

ガシィッ！！

《マスターが木の根を咬みちぎった！？》

「ざっけてんじゃ……」

「ねぇぇぇぇぇぇぇぇぞおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

バキィィィン！！

《マスターの怒りで、バリアが壊れた！？しかも木の根やツルをぶち切った！？》

シュタッ！

……あー、もう……かんっぜんに……怒っちまったぞおい！！

「ア、アニス君！？」

「アニス！？」

「「どうしてここに！？……へっ？」」

あー……何かガキどもがぎゃあぎゃあ騒いでるがよぉ……。
んな事知ったこっちゃねぇや……。

俺は破けた服を、邪魔な理由だけで破き捨てた……。
てめぇは……。

「……踏み込んじゃならねぇ所まで……踏み込んだぁ！」

殺す……殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す
殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺す！！

「殺ぉぉぉぉぉぉぉぉぉぉす！！」

俺は思いきり踏み込んで、木を殴り抜ける。

「ドラグナー・ナグル！」

《アンタは何魔法使ってんだぁぁぁぁぁ！？》

ドドドドドドド！！

はぁっ！？魔法だぁ！？

んなこたしらねぇ！！今はこの目先の糞を、ぶっ殺す！！

その時、木の根が俺に襲い掛かってくる。

「アニス君！」

「アニス、危ない！？」

「邪魔だボケがぁぁぁぁぁぁぁ！！レドルク！！」

「「えぇっ！？」」

俺は足を強化して、そのまま木の根を蹴り斬る。
んなもんじゃ……俺の怒りは収まんねぇぞぉぉぉ！！

「セカン・ナグルゥゥゥゥゥゥゥ！！」

ドドドドドドドドドドドドドドドドド！！

更に拳に術を付加する。
俺の拳に、何処まで耐えられる！この糞野郎がぁぁぁぁぁぁ！！

「サーズ・ナグルゥゥゥゥゥゥゥゥ！！」

《もう止めてぇ！？マスターの体のライフはとっくにゼロよぉぉぉぉぉぉぉ！！》

「バオウ・ザケッ《言わせねぇよ！？》ジガディラス・ウｒ《それ

も言わせねぇよ！？≫シン・クリア・セウｎ≪何さっきから最強呪文放とうとしてんだアンタはぁぁぁぁぁ！しかもシンの呪文はらめぇぇぇぇぇぇぇ！≫」

じゃあこのまま殴り続ける！

「死にさらせぇぇぇぇぇぇぇぇ！この、変態人面樹がぁぁぁぁぁぁぁぁ！！！」

「グオォォォォォォォォォォォォ！！？」

俺はそのままラッシュを決め込む。
これって！終わりだぁぁぁぁぁ！

その時……。

「ストップだ！クロノ・ハラオウンだ！」

黒いバリアジャケットを纏った一人の魔導師が颯爽と現れた。
邪魔すんじゃねぇぇぇぇ！

「ここでの戦闘はきkぶべらっ！？」

「邪魔だこのボケナス！」

俺はそれを異にも返さず殴りぬけ、気絶させる。
後、一息何だよぉぉぉぉぉぉ！！

「ヒャッハァ！変態は駆逐だぁぁぁぁぁぁぁ！！」

「ブルァァァァァァァァァァァ！！！」

キラッ☆

人面樹は、また何か意味の分からん変な効果音と共に光出す。
そして……そのまま光は徐々に落ち着いていき……。

ジュエルシードが元通りになる。
つか、最後の叫び声って、若本だったね……。

「……悪は滅びた……」

《上半身裸で、乳首丸出しで何言ってんだアンタ》

「……あ、そういや、服何かノリで破き捨てたんだった……ヘックチュ！うぇっ、寒い……」

いやぁ、ノリって怖いねぇ。
ついやっちゃったよ……つうか、さっき殴った黒い奴って……誰？

「アニスくーん！」

「アニスー！」

あ、なのはとフェイトだ……。
うぬ、何で二人して顔を赤らめてこっちに来るの？

「あっ……なのはちｙウェッ！」

ちょっ！？何で二人して俺に抱き着いてるし！？

「「前を隠さないと駄目だよアニス（君！）」」

「……あの……お願いだから離れてくれませんか？」

「と、取り敢えず、何か上に羽織る物を！？」

「あっ、これ！アニス、これ羽織って！」

渡されたのはフェイトのマント。
受けったのは、魔法のマント……。
魔法少年リリカルアニス、始まりません……。

ごめんなさいノリでやりましただからそのバールのようなものは閉まってくださいお願いします。
ま、まぁ……羽織っておこうかな……。

「あの……フェイトちゃん……ありがとう……」

「ううん、気にしなくて良いよ（あぁ、アニスの柔肌を拝めた……でも、何よ白いの……何でアニスの事知ってるんだろう……事と次第によっては……）」

「そ、それよりも！アニス君って魔導師だったんだね！？」

へっ？
……あっ……あー、やっちまったぜ……オーノー……。
何か……もうどうにでもなっちまえ……。

「アンタ、無茶し過ぎだよ！何でそんな拳がボロボロになるまで殴ってたのさ！」

「いや……あの人面樹に犯されそうになったから」

「「……今すぐそのジュエルシードを粉々に粉砕しちゃおうか……」」

ちょっ！？お二人さん！？目が！？目が座っておられまずぞ！？

「君は何て事をしたんだ！」

「キィィエエエエエ、シャベッタァアアアアアアアアア！！って何だ、ユーノ君ではないか……」

「そんな事はどうだって良い！ジュエルシードの件も、君が魔導師だったって事も今は置いといて！君がさっき殴って気絶させた人！アレは管理局員だぞ！」

……あー……。
やっぱそうなっちゃいます？

「……ま、まぁ……逃げた方が賢明だよねこれ？」

「……そう……だね……」

「管理局って……何？」

上から、俺、フェイト、なのはの順。
それよりも……。

「マジでこれ……どうしようかな……」

第四十八話　ノリと殺意は計画的に（後書き）

エロからのアニスたんぶちキレｗｗｗｗ

アニスたんが犯されかけました

口の中に根っ子とか、マジヤバス

まぁ、そんなわけで……

次の話ではアニスが倒れる確率高いね

そして、ｋｙ執務官フルボッコに出来なかった（泣）

一撃で伸しちゃうアニスたんマジ最強

そしてフェイトが真っ黒ｗｗｗ

びっくりだね……こりゃ……

いやぁ、まぁ、何が言いたいかと言うと……

とりまアニスたんが触手でぬっちょりとか、マジパネェ、顔から火が出て死ぬ所だった……

まぁ、今回は触手ではないんだけどね……

そ、それじゃあ、また次回に

ここまで読んでくださりありがとうございました

第四十九話　アニスは恥じらいが無い子（上半身裸時）（前書き）

最近ネタ切れしてるからってネタに走ってる私です

そして緊急告知デス

明日からテスト期間に入りますので、更新が……更新が……

まぁするんですけどねー

少し短編的な物になっちゃうと思います

たぶん、文字数にして……千～二千字かな

それ位にして書いて行こうと思います

今週の水曜日と、土日は朝を利用して書き上げます

火・木・金・月は短編的な何かで暇つぶしをと思います

それでは、本編始まります

第四十九話　アニスは恥じらいが無い子（上半身裸時）

あらすじ

アニスが犯されてあばばばばばばばばばばばばばば。（攻撃を受けた）

俺が犯されかけました……。（アニス代打ち）

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「……どうしようか、この管理局員……」

「……埋めちゃう？」

「証拠隠滅なの！」

「良いねぇ、私は賛成だよ！」

「君達は何を言ってるんだ!?」

何かなのは達が凄く怖いんですけど。
それにしても、上がスースーする……。

「ケホッケホッ！」

ウェッ、やべぇ……はっちゃけ過ぎたわ……。
このままだと、盛大にゲロっちまうぞおい……。

「だ、大丈夫アニス！？」

「ケフッケフッ……うん、へ、平気ですよ……すいませんフェイトちゃん」

「にゃー！必要以上にアニスちゃんにボディータッチしたら駄目だよフェイトちゃん！」

そうなのだ、さっきからフェイトは必要以上に俺に触っているのだ。
くすぐったいからやめれい。

「……ふふふ……」

「くっ……！」

そして二人の間に火花が血走る……。
はぁっ、ホントは仲良いんじゃないのお前ら。それよりも……。

「フェイトちゃん、今すぐこの場から離れた方が良いかも……」

「どうして？」

「……管理局が見てる、増援が来ない内に逃げた方が良い」

「……うん、そうだね……ありがとうアニス。アルフ、行こう」

「はいな！」

フェイトとアルフはすぐに空を飛び、この場を離脱しようとする。

「あ、待ってフェイトちゃん！まだ何でフェイトちゃんがアニス君と仲が良いのか聞いてない！」

そんなもん聞かなくてえぇわボケ。
全く……ホラ、フェイトも鼻で笑って帰っちまったぞ。
ドンマイ。さて、これで良いかな？

「どうせ見てるんでしょ？管理局の人？」

俺は空に向かって言葉を投げかける。
気づいてんだよこっちはよぉ……ったく、視姦ぶっこいてんじゃねぇぞおい。

《……良く気づきましたね？》

そして、観念したのか、管理局側がモニタを空に映し出した。
やれやれ、あんましそう言った事してると、マジめんどくさい事にするよ？

「ケホッ……まぁ、管理局がする事ですもん。サーチャー位飛ばしてるんでしょ？」

なのはは訳分からんって顔をして少し焦ってる。
おい、落ち着けし。

《いいえ、そこで伸びているクロノ執務官を介して中継をつないで

いるわ。それにしても、管理局の事を知っていると分かって、攻撃したのかしら?だとしたら、それは公務執行妨害ですよ?》

「アホが、何を言っているんですか?ここは管理外世界。貴女達管理局が管理していない関係のない世界ですよ?脅しですか?ケホッケホッ……だとしたら浅はかで滑稽で醜悪で片腹痛いですね。ゴホッゴホッ……それに、管理局員を殴った?違いますよ、これは単なる、事故ですから……」

《ふざけないで。この事を単なる事故で済ませる気ですか?それは少し、無理がありますよ?》

「ケホッ……無理を通せば通りが引っ込む、とは良く言いますけど。ゴホッ、この場合に関しては、無理ではないじゃないですか?俺は攻撃してたんですよ?それを急に俺の攻撃してる近くに来て、攻撃を中止しろ?ケフッ……馬鹿ですか?攻撃してる最中に介入したら、流れ弾の一発や二発は当たるかもしれない。その位覚悟で出て来たって事でしょ?」

《そ、それは……》

「明らかにさっき、邪魔だっ、とか言って殴ってたの……」ボソッ

「あっちに責任転嫁する気だね」ボソッ

そこ黙れ。
俺がさっき受けた恥辱を、貴様らに味あわせるぞ。

「それに、ケホッケホッ……勘違いしないで頂きたい。管理局と知って殴ったんじゃありません。頭に血が上り過ぎて、識別力は落ちていたので分からなかった。だから事故です。しかもここは管理外世界。あなた方管理局がどうこう言える所ではないですよ？少しは……ばっ……を……ゲハッ！」

ビチャッ！！

くっそが……。
我慢できなくなって……吐血……しちまったか……。

《なっ！？》

「アニス君！？」

「ゲフッ！グホッ！……カハッ！グゥッ……」

腹からも出血してきやがった……。

畜生……どうする……これ位の出血量だ……数分と持たないで出血多量で死ぬな……。
仕方ない……。

「い、いか……テメェ……ら……管理局……が。グハッ！もっと……は、早く……介入……してりゃ……俺は……こんな事にはならなかった……かも……ガフッ！」

「もう喋っちゃ駄目だよアニス君！！」

《医療班！今すぐ現地に行き、怪我人の手当てを！》

ちっ……んな……の、こっちから……願い下げだっ……つの！

「ジオ……ル……」

やっべぇ……意識が……遠のく……。
糞……グ……だけなんだ……動け口……動け舌……最後の、一仕事だ馬鹿共……。

「……グ……」

パタン！

ビチャッ！

俺は自分の血だまりの中に倒れ込む。
最後に見た光景は……なのはの泣き顔と……ユーノの驚き顔と……。
フェイトのマントが……ヒラヒラと飛んでいく……光景だった……
いやん、乳首丸見え……。

最後まで……しまらねぇや……。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

なのはサイド

「アニス君！アニス君！！」
「なのは！今の彼を動かしちゃ駄目だ！」

だって……だって！

アニス君が！アニス君が、血を吐いて倒れたのに！？

「アニス君！アニス君！！目を開けてよ！！」

《ヘイ嬢ちゃん！あんましうちのマスターを動かすんじゃねぇ！》

「……ふぇっ？」

「……もしかして、彼のデバイスか？」

《イエス、その通り！まぁマスターなら大丈夫だ、心配するな。傷はもう塞がってるから、後は目を覚ますだけだ》

目を覚ますだけって……。
こんなに血が出てるのに！！

「こんなに血が出てるのに！どうしてそんな事が！」

《いや、血はいっぱい出てるけども……。ウチのマスター、気を失う前に何か言ってたでしょ？それ魔法だから、何とか間に合ったみたいだけど。それでも貧血で倒れちまったんでさぁ》

「こんな傷を一瞬で治す魔法何て存在しない！あったとしても、それはもう……」

《まぁ、その話は後でえぇやん。何か管理局の医療班が来たみたいだしさ。それよりも、誤解といておいてな。マスター、絶対女の子って勘違いされちゃうから》

た、確かに……。

それに、さっきフェイトちゃんに借りたマントもどっかに飛んで行っちゃったから、隠す物が……。

「どうてくれー！今すぐその子を運ぶ！後ついでに、そこに転がってるクロノ執務官（無能）も運んでくれ」

「「「「ラジャー！」」」」

「ってオい！何で貴様ら全員そっちの子に行くんだ！？えぇい、貴様らロリコンだったのか！？」

「「「「野郎何か運んでも楽しくない！」」」」

「えぇい！言葉を慎め！人一人の命が掛かってんだぞ貴様ら！」

な……何なんだろう……この人達……。

そ、それにロリコンって、何？

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

アニスサイド

「う〜ん……木の根が……木の根が襲ってくる……そこは……駄目だって……う〜ん……う〜ん……アッーーーーーーーー！って……あれ？」

おはようからお休みまで、健やかな毎日を目指す、花王と、ご覧のスポンサーの提供で、リリカルアニス、お送りしません。

……前回のネタ引っ張っちゃったぜ☆

「そして、知らない天井だ……つか、夢でさっきの木のバケモノに掘られる夢見ちまった……おぉ、卑猥卑猥。そしてケツ穴に妙な違和感が……気のせいだと思いたい……」

それにしても、ここ何処だ？

……ホワイトベース？プトレマイオス？スペースコロニー？

……ガンダァァァァァァァムゥゥゥゥゥゥゥ！！
って、どうあってもここアースラですねありがとうございます。

「それにしても……やっぱデバイスを取り上げか……。後、何故まだ半裸のまま……そして少し胸がぬるっとしてるのは何故？」

心電図やる時のジェルだと俺は信じたい。
取り敢えずこの毛布で拭いとこう……。
よし、取れた……さて、探検しよっと。

「んじゃ、行っきまーす……」

俺はドアがあるであろう所に近づき、手を近づかせる。

プシュー……。

……このドアを見てくれ、こいつをどう思う？
凄く……近未来です……って、俺元は次元世界出身何だから、これ位普通だったわ。
しばらく地球暮らししてたから忘れてたよ。

「それにしても、このままの格好で大丈夫かな？」

何か着る物が無いと、アニスたん恥ずかしいのですよ。
みぃー、誰かボクに着る物をくれませんか？

「って、馬鹿な事やってねぇで行くか」

とにかく俺は歩を進める。
うーむ、こう広いと。何か……めんどくさいって感じちゃうのは俺だけなのかな？

「いやぁ、魔力だらけでなのはの魔力とか分かんねってこれ……」

いやだわ全く。
どうしてこう、こっちゃこちゃしてるんだか。どうせならシンプルな作りにすれば良いのに。
そうこう考えてる内に、何か少し拓けた場所に着いた。

……人通りが多い通路かなここ？
まぁ、行ってみるか。

「寒いっす、マジ寒いっす……へっくち！……あ、吐血の残り血か……」

口抑えたら手に着いてもうた……。
どうしようこれ……うむ、とにかく口周りの血は拭うとして……いいや、ズボンで拭いちゃえ。

「あー、何か……何で誰も通らないかなここ」

結構広い場所なのに……。
せめて通行人AかB位来いっての。
その時、近くのドアが開き、人が出てくる。うぬ？あの人何処かで……。

「すいませーん、ここ何処でしょうか？」

「ん？って、うわぁ！？き、君何やってるの！？」

おぉ、松岡さんボイス。あのめがっさとかにょろっとか言う人の中の人と一緒の人ジャマイカ。
おぉ、メタイメタイ。確か名前は……エイミィだっけ？

「あの、ここ何処でしょうか？」

「取り敢えず君は服を着ようよ！？ほ、ホラ、お姉さんの上着貸してあげるから！」

「あ、これはご丁寧に。だが断る」

「何で断っちゃうの！？」

「男が女物の上着を羽織って良い訳がない！」

「……えっ、男？……誰が？」

「私ですはい」

「……よし、良いお医者さん紹介してあげるから、取り敢えず服を着ようね？」

「はーい」

取り敢えず、後でこいつヌッコロス。
ぶっ殺すじゃない。ヌッコロスだ。

「それよりも、もう怪我は大丈夫なの？」

「あー、自分で治しましたから。それより、俺が殴っちゃった男の子、大丈夫でしょうか？」

「あー、クロノ君？……ぷっ、あっはっはっはっはっ！！」

ちょっ、何故いきなり笑い出したし。
しかも何か若干エヴァたん入ってますって。

「君って見かけによらず力あるんだね、クロノ君は……クロ……ノ……ぷっ、あっはっはっはっ！君のパンチで顔面が赤く腫れておかしな顔になってたよｗｗｗ」

あぁ、あのｋｙドンマイだな。
だが罪悪感も無ければ済まなかったと思う心も無い。ゆえに私は何も悪くない。

「それにしても、君って何歳なのかな？」

「あ、九歳です。生まれつき身長が低いので、もう伸びないんですよ」

これは嘘です。

もう何か一々説明すんのもめんどくさいのでこの設定で通る。

「へぇ、世の中には不思議な子も居るもんだね～。それじゃあ、君を艦長の所まで案内するから、行こうか」

「あ、はい」

そう言ってエイミィは俺の手を握って引っ張ってくる。
ちょっ、引っ張んなし……。

こうして、アニスたんは管理局に出会ってしまったのさ。

第四十九話　アニスは恥じらいが無い子（上半身裸時）（後書き）

男の娘アンソロジーの本が大好物な私です

男の娘ペロペロ……

作者はムッツリだって？いえいえ、ムッツリよりムッチリが好きです

主に男の娘のスパッツ姿が……

て言うのは冗談で、いや、冗談じゃないんだけど

いやぁ、テストですよ

もうどないせいっちゅうねんって話ですわ

世界史

８０点以下追試はマジ勘弁

俺のクラスメイトで、中間考査の世界史のテスト、あれから三か月経ってるのに、いまだに受からないってどういう事やねん！

事前に問題配られてんねんぞおい！もうかれこれてめぇ１０回以上追試受けてるじゃねぇか！

それで今日の追試の結果が３０点ってどういう事やねん！

んでペナルティーで、今まで７０点以下追試が７５点以下追試にナリ

今週あと二回追試受けて、もしどっちも受からなかったら８５点以下追試

一かい失敗するごとに五点追加とか……

俺の世界史の点数舐めんな！

前回のテストまだ帰って来てないから分からないけど……

だってね、その追試組が追試受からんとテスト返さないとか言って……返してくれないの……

たぶん７１～７２点くらいだと思う

だって暗記苦手なんだもん……

まぁ、頑張るさ

後は化学も追試あるしね……赤点は取らんようにしよう……

では、また明日書けたら会うね

ここまで読んでくださりありがとうございました

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0814x/

死にたがりな男の娘が転生

2011年11月22日01時55分発行